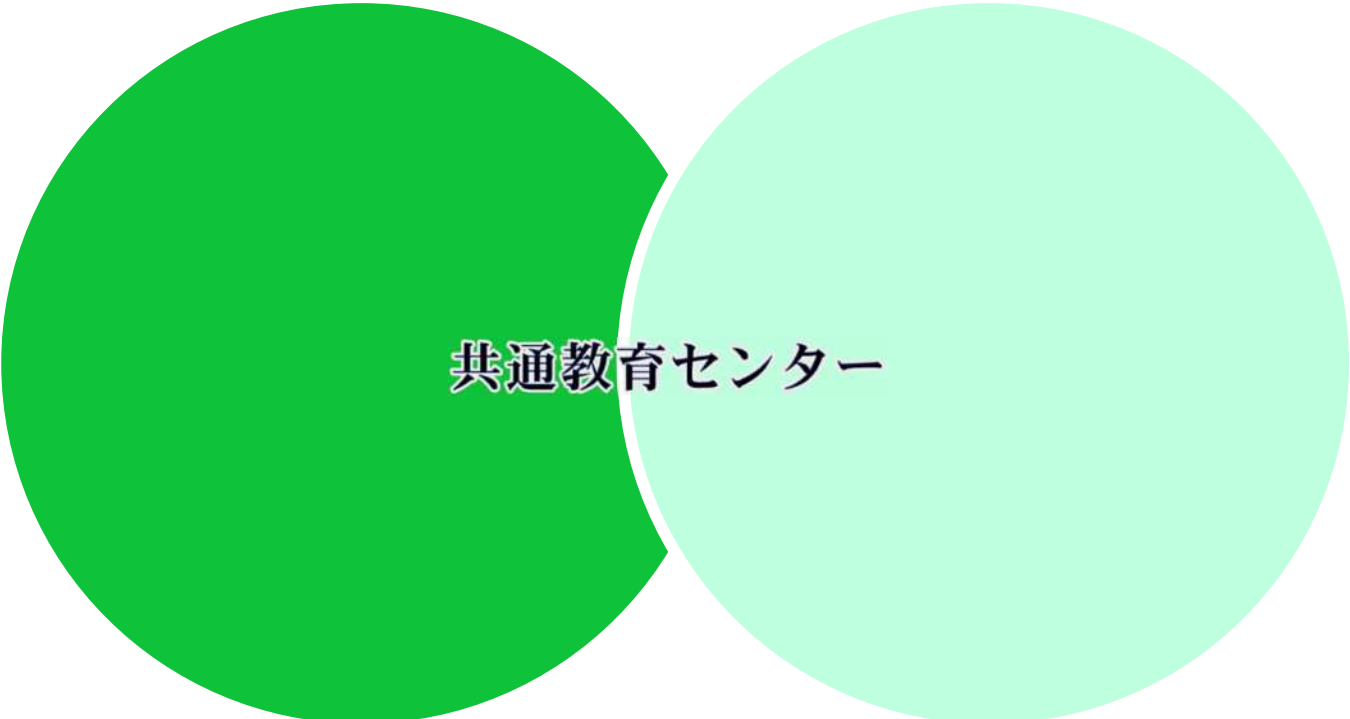


目 次

■ 共通教育センター	1
■ 法文学部、人文社会科学研究科	17
■ 教育学部、教育学研究科	33
■ 理学部	59
■ 医学部医学科	77
■ 医学部保健学科、保健学研究科	99
■ 歯学部	121
■ 工学部	129
■ 農学部	159
■ 水産学部・農林水産学研究科	171
■ 共同獣医学部、共同獣医学研究科	199
■ 理工学研究科	225
■ 医歯学総合研究科	269
■ 臨床心理学研究科	279
■ 連合農学研究科	301



共通教育センター

令和 5 年度 共通教育センターFD 活動報告書

令和 5 年度に共通教育センター（以下、共教 C）が取り組んだファカルティ・デベロップメント(以下、FD)活動とその成果をここに報告する。

年度当初に 1) 授業改善に資するアンケート、2) 個別自主研修、3) FD 講演会、4) 共通教育懇談会の 4 つの企画を提案したが、これらを計画通りに遂行することができた。加えて、令和 4 年度に行われた「大学 IR コンソーシアム学生調査」の結果分析も実施した。

1. 授業改善に資するアンケートならびに授業改善メモ

前期は 7 月 14 日から 7 月 31 日まで、後期は 1 月 18 日から 1 月 31 日にかけて、「授業改善に資するアンケート」（いわゆる「授業アンケート」）を行なった（第 1、第 3 クォーターのみの開講科目は授業最終日以降より実施）。また、今年度より高度共通教育科目を含む集中講義も通常授業の質問項目を一部変更して、授業アンケートの対象科目とした（集中講義のアンケート期間は上記とは別日程）。

アンケートの質問項目は、1) 授業時間外の学習・探求時間（通常授業は週平均の時間、集中講義は授業期間中の合計時間）、2) どの程度の学習効果が得られたか、3) 学習内容について受講生に考えさせる促しがあったか、4) 授業内容についての総合的評価、および、授業で特に良かった点・改善が求められる点の自由記述である。要するに、学生の授業履修態度や満足度、授業担当教員の授業運営についての資質を問う内容となっている。これらの一部は、優良授業実践賞（ベストティーチャー賞）推薦者を選定する際の基礎データとしても活用している。

令和 5 年度の共通教育科目全体のアンケート回答状況は前期 56.9% (59.1%、カッコ内は前年度の数値)、後期 35.2% (39.0%) であった。後期の方が例年回答率が低く、また、ここ数年連続して前後期ともに回答率の低下が見られる。回答率の高さはそのアンケートの信頼性・妥当性に関わる重要な指標の一つとなるだけに、今後何らかの対応策を講ずることが求められる。

授業改善に係る取り組みとして、昨年度初年次セミナーWG（ワーキンググループ）では以前より「初年次セミナーⅠ、Ⅱ」において使用してきた教科書を大幅に改訂し、今年度からこの改訂版を用いて授業を実施することとなった。その背景に、令和 2 年度より共教 C の教員が中心となって授業を企画するようになったという経緯がある。これにより、授業内容は大きく変わったものの教科書はそのままであったことで、使用テキストと実際の授業内容との間にずれが生じるようになった。また、テキスト共同執筆者のうち三分の二が授業を担当しなくなったという状況も生まれた。このような不一致を改善・解消するため、実際に授業の企画を担っているメンバーが執筆した新しい教科書が作られた。

新テキストとともに紙媒体のワークシートも今回新たに授業に導入された。このワークシートは新テキストの各章の内容と連動しており、前期・後期各 15 回の授業計画に対応させる形で構成されている。ワークシートを電子化して配布しなかったのは、紙媒体の方がグループワーク等の作業時に共有しやすいというメリットを考慮してのことである。

「初年次セミナーⅠ、Ⅱ」のアンケート結果は昨年度とほぼ同じであった。学習成果に関して肯定的な回答をしていたのが「初年次セミナーⅠ」では 95.9% (96.3%、カッコ内は前年度の数値)、「初年次セミナーⅡ」では 96.6% (96.5%)、授業内容についての総合的な評価が肯定的であった割合は「初年次セミナーⅠ」95.3% (95.1%)、「初年次セミナーⅡ」94.7% (94.5%) となっている。したがって、現状では二つの新教材の効果についてはまだ確たることはわからない。今後様々な観点から精査・検証していく必要がある。

例年共教 C では授業アンケートの結果を踏まえて、授業方法の分析や教育効果を上げるための工夫、授業改善に関する意見・提案等を教員が「授業改善メモ」に記入し、提出することになっている。この「授業改善メモ」は FD 委員会で取りまとめ、その内容を整理し、以下の URL で公開している。

授業改善メモまとめ URL: <https://www.kagoshima-u.ac.jp/educenter/staffmember.html>

2. 個別自主研修

「個別自主研修」は今年度からスタートした取り組みである。時間的な制約や経費上の問題等があり、FD の企画を年に何回も開催することは事実上困難な状況にある。そのため、FD に係る様々な講演会・セミナー・ワークショップ等の催しに個人で自主的に参加してもらうという FD 活動がこの個別自主研修である。

FD 委員会では桐蔭学園トランジションセンターが運用する Tulip メーリングリスト（以下、Tulip ML）を利用している。この Tulip ML が配信する多種多様なイベント情報の中から、FD 研修に適した内容であり、1）無料である、2）遠隔（ハイブリッドを含む）で実施される、3）対象としている教育機関は主に大学である、という 3 点を同時に満たす催しを FD 委員会で抽出し、manaba を通じて Excel 文書で教員へ情報が提供される。ただし、Tulip ML 以外、たとえば、学内一斉メール等で案内されるような FD 委員会が関与していない企画であっても、それが FD に関連するものと判断されれば個別自主研修の対象としている。

オンラインかつ無料のため、個々の教員が自身の都合や関心に応じて多様なテーマの企画に参加可能となる。FD がより身近になることで、FD に対する意識の更なる向上が見込まれる。そして、日々の授業の内省や振り返り、授業設計・運営能力の見直しや強化、新たな教育テクノロジーの獲得、あるいは、高等教育における最新の動向を広く深く知る手掛かりにもなり得るという点においてもこの個別自主研修は有用である。

研修参加後は所定の報告書に研修内容等を記入し、提出してもらうことになっている。
今年度 Excel に入力したイベント数は 175 件で、これを manaba 上に公開した。アクセス数は令和 5 年度末時点で 170 回、実際に自主研修を行いその報告書を提出した教員は延べ 9 名であった（内、Tulip ML の企画参加者 6 名、Tulip ML 以外 3 名）。報告書に回答していただいた中から Tulip ML のイベントに限定し、研修内容の概要を下に紹介する。一部文言を変えてあることをお断りしておく。

・セミナーでは、新学習指導要領での初等中等での英語教育の変化とそれらの変化を見越して、今大学に求められる組織単位での教育の再構築について、朝日大学の取り組み事例と合わせて学習した。

・英語の 4 技能を伸ばす教育改革の目指す姿を再認識し、その中で指導が手薄になりがちなスピーキング力の意識を問い直し、理論と実践の両面で、あるべき英語教育の姿を考えるウェブセミナーであった。

・言語生成 AI が具体的にどのような影響を与え、その上で今後教員にはどのような指導が求められるのか。

・今日使用可能な生成 AI や著作権法上の議論等について。

・ツールミンモデルを土台にした「対話型論証」を使用して生徒の思考力・判断力・表現力を育む教授方法について学んだ。「対話型論証」とは「ある問題に対して、他者と対話しながら、根拠をもって主張を組み立て、結論を導く活動」と定義づけられており、問題解決、論理的思考、批判的思考、とコミュニケーション力の育成につながっている。このロジックを可視化した「三角ロジック」の紹介があり、主張に対して事実・データから導かれた論拠や理由付けを整理することで、根拠を明確にする流れについて説明があった。

・発達障害を持っている学生を前提に話されており、学生が大学に入学する際に置かれる環境のギャップについて、また「合理的配慮」の必要性について指摘されていた。高校では教室内に身を置くだけで、環境がある程度整った中で過ごすことができるが、大学では自己決定を求められる場面が多い。また、人間関係を築き上げないことには情報や学びの道具が揃わないことがあり、自分自身で環境作りができる能力が求められる。さらに、入学時は短時間で多くの情報量に対処する能力が必要となる。このように環境が大きく変わるため、入学前に学生は大学の環境について知ることが大切だと強調されていた。

3. FD 講演会

令和 5 年 9 月 25 日(月) 13 時より学習交流プラザ 2 階において株式会社デジタルレシビ CTO（最高技術責任者）の古川渉一氏をお迎えし、「初年次教育における ChatGPT などの生成 AI 活用入門」という演題でご講演をいただいた（図 1、図 2）。Zoom 使用によるハイブリッド開催で、参加者数は 59 名（内、共教 C 専任教員 22 名）であった。



図1 講演中の古川渉一氏



図2 講演会場の様子

講演冒頭で現在の生成 AI に至るまでの AI（人工知能）の歴史が述べられた。古川氏は ChatGPT をはじめとする言語生成 AI が急激に注目を浴びる存在になった要因として、人間に引けを取らないレベルの画像を生み出す AI の登場で AI の生成物を受け入れる土壌ができたこと、一般のユーザーが自由に使えるサービスが提供されたことを挙げている。その後、まずは生成 AI の基本的な取扱い方として、自分がしたいことや求めるものを明確に言語化すること、そして、生成 AI と対話を繰り返しながら、満足のいく回答が得られるまで正直にフィードバックを伝えることが必要であると語った。

生成 AI への否定的な見方として、生成 AI に依存し主体性や自律性、論理的思考力や批判的思考力が落ちてしまうことが度々指摘されている。この点に関して古川氏は、生成 AI が出力したものには事実に基づかない情報が含まれることがよくあるため、常に生成 AI の回答を評価・分析・批判するための深い考察力・思考力が求められるとしている。また、特に初年次の学生は、与えられた問いに答えるという高校までの環境から離れ、自身で問いを見つけ課題を解決するという未知の環境の中で、これから大学でどのように学んでいけばよいのか、自分は何をすべきなのかがわからないといった悩みを抱えがちになる。このような悩みを持っている学生のために、ロジカルに考えられるような筋道を立ててあげることができるという点が生成 AI の大きな強みであるという。

学生が提出したレポートが生成 AI のみで作成されたものか否かを判断するのは現状では難しく、また、それを見抜く AI が公開されたこともあるが、現在は公開を終了しているとのことである。それから、自力で執筆したレポートが生成 AI によるものと誤って判定されることがあるため、生成 AI を使ったチェックは厳禁であるとの付言もあった。

講演のまとめとして、教員側が学生に対し生成 AI を利用する際のリテラシー（個人情報を入力しない、出力されたテキストのファクトチェックを必ず行う、生成 AI を使用した本人に責任の所在があること、既存の著作物の権利を侵害していないかを確認する等）をしっかり伝えていく必要性を説いた。また、生成 AI とともに生きる時代において、学生は生み出されたものに対し客観的に評価・フィードバックする能力、自分が今取り組んでいる問題の全体像を捉える（手段の目的化を回避する）能力、作成した結果に責任を持つ能力等のス

キルが不可欠であること、そして、今後はこれらのスキルを身につけるような教育が求められると講演を締めくくった。

その後、質疑応答・意見交換が行われ、講演会終了後は参加者からアンケートへの回答をいただいた（回答者 41 名）。アンケートに寄せられた講演会の感想・意見等をいくつか以下に紹介する。なお、記述の一部を整理・編集している場合がある旨、ご了解いただきたい。

- ・生成 AI の基礎知識を具体的に説明してもらった。実際の ChatGPT を使用したやり取りとその成果を見ることができて非常に役に立った。今後生成 AI は避けられないため、授業の目的に応じた学びについてよく考え、重視したいスキルを考察し、授業を組み立てたい。
- ・AI の現状状況や初年次教育における活用の際の留意点等、おおまかに掴むことができた。
- ・初年次教育はもちろん、それ以外でも今後必要になってくるであろう生成 AI への理解を深めることができてよかった。新たな知識を得ることができたので、ChatGPT などの具体的な AI ソフトにも触れながら、自分自身のスキルアップを図っていきたいと思った。
- ・生成 AI に関しては WEB 検索で他大学の状況など確認していたが、実際に講演を聞くことで理解が深まった。事務としてはメール文や調書作成に活用することで、かなり業務効率化に繋がるように思う。
- ・生成系 AI のことを知っている人には分かりやすかった気がするが、そもそも生成系 AI が何か分からない方には難しいレベルのように感じられた。
- ・まずは、自分自身が ChatGPT に質問をして対話してみたいと思えたことは収穫だった。授業に取り込めるようなアイデアが湧くのはそのあとだろう。要約引用や著作権を、これまで以上に意識していく必要性も感じた。

本章の最後に、質疑応答の音声は Zoom でよく聞き取れなかった等の声を数件いただいたことを付記する。音声の不具合については前回の FD 講演会においても指摘されていたため、今回は会場用と Zoom 用のマイクをそれぞれ用意して臨んだが、Zoom 用マイクの音声状態が十分ではなかったようである。次回の開催時は入念にチェックを行い、トラブルが生じないよう努めたい。

4. 共通教育懇談会

令和 5 年 12 月 21 日(木) 16:10 より 1 時間半にわたり、共通教育棟 1 号館 2 階 124 号講義室において、対面と Zoom によるハイブリッド形式で「令和 5 年度共通教育懇談会」を開催した。当日は 39 名（内、共教 C 専任教員 20 名）に参加いただいた。

今回のテーマは再来年度に迫った「2025 年度共通教育改革について」であった。令和 4 年に立ち上げられた「共通教育センター将来構想検討会議」（以下、検討会議）のメンバーを中心に、令和 7 年度から始まる新たな共通教育カリキュラムのグランドデザインについて説明が行われた。

懇談会ではまず大野 FD 委員長より令和元年度学部卒業生（平成 28 年度入学生）へのアンケートの調査結果について話題提供があった。平成 28 年度は現在の共通教育カリキュラムがスタートした年である。鹿児島大学の教育に対する意見等として、卒業生の自由記述の中に新カリキュラム始動以来今なお懸案となっている課題があること、また、改革に向けてより良いカリキュラムを構想していく上でのヒントとなるような指摘も見られることが報告された。

話題提供に引き続き、検討会議の藤田議長より 2025 年度共通教育改革に関し現行カリキュラムの見直し作業を進めている旨の報告がなされた。現在の共通教育カリキュラムに対しては、全学必修科目の単位数、授業担当者の確保、共通教育と専門教育の接続、学位の質保証等の問題がしばしば指摘されてきた。そのため、1) 科目間の連携を強化し体系的なカリキュラムを構築する、2) 共通教育と専門教育の接続・連携をより強固にする、3) 学生の多様なニーズへの対応を図る等の改善策を講ずることが喫緊の課題となっている。加えて、学習指導要領の改訂により令和 4 年度に高等学校の「情報」科目が必修化されたことで、「情報」を必修として学んできた 2025 年度入学生への対応も考慮する必要が生じてきた。

このような背景から、藤田議長よりまずカリキュラム改訂の方向性として、1) 明確で理解しやすい到達目標を設定すること、2) 自己探究を深化させ自己実現や適性の発見につなげられるよう科目選択の自由度を高めること、そして、3) 人的資源を有効活用し教員の専門性を活かすことでより質の高い教育を提供することが示された。また、これまでなかった共通教育のカリキュラムポリシーも現在検討・作成中とのことで、懇談会ではその原案が提示された。

さらに、現行の科目構成を「初年次科目群」、「学際科目群」（本稿執筆時では「学際・文理融合科目群」）、「グローバル科目群」、「自然科学科目群」、「人文・社会科学科目群」という 5 つの科目群に再編成することが紹介された。このうち「初年次」と「学際」は藤田議長、「グローバル」は検討会議の中筋委員、「自然科学」および「人文・社会科学」は伊藤委員より、それぞれ各科目群の概要について説明が行われた。加えて、ブレイジア外国語教育部門長からは、英語科目のうち特に専門教育への橋渡しとなっている「英語 IV」に関し、共教 C 英語教員と学部（農・理・工）の英語担当教員との間で「英語 IV」の改革に向けて鋭意話し合いが行われているとの情報提供があった。

各委員等からの報告の後、質疑応答が行われた。その内容の一部を以下に掲げる。

- ・主権者教育はどこで教えることを想定しているのか。

→個人的な意見であるが、学際科目群になることが考えられる。選択科目か必修科目かの詳細は今後詰めていく必要がある。

・Excel はリテラシーの方に組み込まれるのか。

→Excel はリテラシーで教えていくことになる。ただ、現高校2年生から情報科目が必須になっているが、高校の情報科目は教員確保の関係で地域差・学校差が大きいので、2025年度から一気に変えるのは難しいと考えている。

・英語のみで行う授業はどこかに組み込まれるのか。

→現行カリキュラムの「英語 IV」の見直しとあわせて、選択必修のような形で高度共通教育科目と連携をとりながら今後検討していきたいと考えている。

・実験に関して教職免許を取得する学生以外への開講が構想としてあったが、自然科学の実験は教職免許を取るための授業は部局で行い、これから開講する科目は理系文系関係なく履修できるものとして開講するのか。

→専門では施設等物理的な問題があるため、教職免許用の実験は共通教育で行いつつ、同じ時間で行うかあるいは別で行うか、本当にできるかは未定だが案として考えている。

・共通教育改革が目指す方向は良いと思うが人員の対応は可能か。高度共通教育科目をうまく活用することも考えられるのではないか。

→人的リソースも含め見直しを考えている。現行を再編成することで質を高め、全学必修科目にさかれているエフォートを下げることで、手が回っていない部分の質を高めたと考えている。高度共通教育科目とも連携を図り活用していきたい。

・今後受験生が減り総合入試が増えた場合、学生のレベルは下がる。補習教育等は共通教育でどのように考えているか。

→中等・高等接続センターと共通教育で協力しながら進めたい。中等・高等接続センターでは、AO入試や学校推薦等で共通テストを受けずに入学する学生については、入学前教育を考えている。4月以降も継続的に補習教育を行い、うまく共通教育に接続できるようなカリキュラムを検討している。人員不足についてはeラーニングを使いつつ行うことを検討している。

・数理データサイエンスについてリテラシーは全学で認定されているが、応用基礎は工学部のみで認定されている。文科省は応用基礎を本学全体に広げるよう言っているが、共通教育ではどのように考えられているか。

→リテラシーレベルは鹿児島大学単位で認定されるが、応用基礎については学部単位で認定されるもので、現在は工学部のみ認定されている。令和7年度には全学として応用基礎に認定される必要がある。情報共有しつつ、今後の課題として検討したい。

・各部局で必要な実験を新しい実験科目で行うことを考えているか。

→内容は今後の検討案件であるが、より専門的な実験については各部局で実施していただき、共通教育では日常に役立つような実験を考えていければと思っている。

5. FD 活動への教員参加実績

FD 活動報告のまとめにかえて、令和 5 年度共教 C 専任教員の FD 企画参加率を表 1 に示す。合計参加率は昨年度の 96.7%よりも下がってはいるが、93.8%という高い水準を維持しており、必須目標の 75%をクリアすることができた。

表 1 令和 5 年度専任教員の FD 参加率

合計参加率		93.8 % (専任教員 32 名中 30 名 参加)					
企画別 参加率	(全学)FD・SD合同フォーラムー ICT活用についてー	18.8	%	(専任教員	32 名中	6 名	参加)
	(全学)FD研修会ー学習成果に対 する学生自身による可視化ー	12.5	%	(専任教員	32 名中	4 名	参加)
	(全学)教員FD研修会(遠隔授業 で獲得したスキルの活用)	15.6	%	(専任教員	32 名中	5 名	参加)
	(全学)教員FD研修会ー文章生成 AIの活用に関する情報交換会ー	21.9	%	(専任教員	32 名中	7 名	参加)
	(全学)教学IR研修会ー授業アン ケートの活用ー	12.5	%	(専任教員	32 名中	4 名	参加)
	令和5年度共通教育センターFD 講演会参加者	68.8	%	(専任教員	32 名中	22 名	参加)
	令和5年度共通教育懇談会	62.5	%	(専任教員	32 名中	20 名	参加)
	共通教育センター R5前期授業改善メモ提出	50.0	%	(専任教員	32 名中	16 名	参加)
	共通教育センター 個別自主研修	28.1	%	(専任教員	32 名中	9 名	参加)
	共通教育センター優良授業実践 賞公開授業参加	3.1	%	(専任教員	32 名中	1 名	参加)

最後に、令和 5 年度 F D 委員会をサポートしていただいた大前慶和共通教育センター長、FD 委員のモニカ・ハムチュック先生、坂井美日先生、川畑和也先生、種々の FD 企画にご協力・ご参加いただいた共通教育センターの先生方にこの場を借りて深く感謝申し上げる。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和4 年度実施分）の分析について

（共通教育センター）

評価する点	【大学での学びの実態】 1. 授業を通じた学びについては、本学の 1 年生および 3 年生の両方が授業を通して最も頻繁に経験しているのは、「F.定期的に小テストやレポートが課される」であり、「ひんぱんにあった」または「ときどきあった」と回答した学生は、1 年生では 99%、3 年生では 96%を占めていた。「E.学生自身が文献や資料を調べる」についても経験していると捉えている者が多かった。また、「C.授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する」「H.学生が自分の考えや研究を発表する」「I.授業中に学生同士が議論をする」「J.授業で検討するテーマを学生が設定する」を経験する 1 年生の割合は多く、国公立大学グループ（以下、国公立大学 G）よりも高い値を示している。「初年次セミナー」などにおいて、毎回課題を課し文献や資料を調べさせ議論や発表をカリキュラムに組み込んでいることや、「大学と地域」などにおいて地域社会や日常生活に関わるテーマ講義を展開していることが反映されていると考えられる。 2. 週あたりの活動時間の内、「B.授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする時間」では、1 年生で最も多くの者が「6～10 時間」と回答している。「初年次セミナー」など、毎回課題を課し文献や資料を調べさせる科目によって、学生が授業時間外の学習に多くの時間を割いていることについては評価できる。 3. 授業内外での学習状況は、本学の 1 年生および 3 年生の両方において、「B.授業課題のために Web 上の情報を利用した」「C.インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした」と回答する者の割合が 95%以上と非常に高かった。 4. 入学後の能力の変化では、本学の 1 年生および 3 年生の両方において、「C.専門分野や学科の知識」が増えたと回答する者が最も多く、「大きく増えた」または「増えた」と回答した者の割合は 1 年生で 84%、3 年生で 93%を占めていた。また、「Q.コンピュータの操作能力」が増えたと回答する者も多く、1 年生、3 年生ともに国公立大学 G よりも高い値を示している。コロナ禍以降オンライン対応が迅速に進んだこと、manaba をはじめとする ICT 環境の提供と利活用、全学必修である共通教育科目「情報活用」をはじめデータサイエンス教育へ注力したことなどの効果を学生が実感した結果と受け止める。 5. 国公立大学 G の値と比較すると、本学の 1 年生のうち「D.批判的に考える能力」「E.異文化の人々に関する知識」「J.地域社会が直面する問題を理解する能力」「K.国民が直面する問題を理解する能力」「L.文章表現の能力」「O.プレゼンテーションの能力」が増えたと回答する者の割合が多かった。 【大学生活に対する意識】
-------	--

1. 大学への適応感に関する項目として、「大学教員の学問的な期待を理解する」、「効果的に学習する技能を習得する」、「大学が求めている水準に応じて学習する」、「時間を効果的に使う」、「他の学生との友情を深める」、また3年生においては、「大学教員と顔見知りになる」の項目も国公立大学 G より高い状況になっており、大学への適応感はかなり高いと考えられる。また、充実感に関して本学学生は、1年生、3年生ともに「大学生活が充実している」者が7割以上となり、他の国公立大学 G よりも高い値を示している。
2. 大学教育への満足度の項目では、新入生においては「共通教育あるいは教養教育の授業」、「初年次生を対象とした教育プログラム内容」、「教員と話をする機会」、「1つの授業を履修する学生数」の項目において、国公立大学 G より低い状況が続いているが、3年生になると、全ての項目が国公立大学 G より高い数値となっている。新入生の段階では十分理解できないことも、より専門的に学ぶ上級生になってから、その必要性や重要性に気がつく傾向があると考えられる。
3. 大学設備に対する満足度の項目では、1年生、3年生ともにほぼ全ての項目で、国公立大学 G より高い状況である。特に「図書館の設備」、「インターネットの使いやすさ」の項目が高く、学生にとって利用しやすく、快適な大学生活の場を提供できていると考えられる。
4. 3年生のみへの質問項目である「卒業後に備えて大学在学中に経験したいこと」の項目では、全ての項目で国公立大学 G より高い状況であり、将来に役立つ有効な経験を鹿児島大学で体験できている様子が伺える。

【英語学習の実態】

2022年度1年生の入学時と直近調査時（2022年10月）における英語力（聞く力・読む力・会話力・表現力・書く力）の熟達度について、学生は入学時から調査実施時の10月まで、全ての能力において伸びていると実感しているようだ。その中で、特に「聞く力」、「表現力」及び「書く力」の伸び率が7-8ポイントと大きい。「会話力」については3ポイントほど伸びているものの、入学時も1年生現在もB1レベルより低いと自己評価している学生が最も多い。しかし、同じく生産的な能力である「表現力」および「書く力」が大きく伸びて、国公立大学 G の平均よりやや高いことは評価できる。また、3年生（現在）の熟達度は「会話力」を除いた全スキルにおいて同じく国公立大学 G の平均よりやや高い。

※B1は英語学習者として中級レベル（習得しつつある者）を意味する。

	1年生入学時	1年生現在(10月)	3年生現在(10月)
聞く力（B1以上）	48%	56%	41%

	読む力（B1 以上）	77%	82%	69%
	会話力（B1 以上）	12%	15%	11%
	表現力（B1 以上）	63%	71%	54%
	書く力（B1 以上）	63%	70%	46%
課題と考える 点 (3 点以上)	【大学での学びの実態】 1. 授業を通じた学習経験において、「D.授業の一環でボランティア活動をする」学生が 10%以下である。これは他の国公立大学 G の数値より 10 ポイント以上低い結果である。また、「A.実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ」も国公立大学 G の数値より 10 ポイント以上低い。 2. 授業内外の学習状況では、「F.授業中に教員の考え方や意見に異議を唱えた」学生の割合が極めて低い（1 年生 7%、3 年生 8%）。 3. 「K.教職員に学習に関する相談をしたり、学内で学習支援室を利用したりした」学生の割合も低い（1 年生 13%、3 年生 20%）。 4. 授業内外での学習状況においては、1 年生の「M.大学の教職員に将来のキャリアの相談をした（卒業後の進路や職業選択など）」「N.教員に親近感を感じた」が国公立大学 G に比べ 10 ポイント以上低い。 5. 「L.単位とは関係のない教員あるいは学生による自主的な勉強会に参加した」という学生の割合は、依然水準が低い（1 年生 11%、3 年生 17%）。 6. 週あたりの活動時間では、「D.オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する」時間についても、最も多くの者が「全然ない」と回答している（1 年生 83%、3 年生 71%）。 7. 週あたりの活動時間では、「C.授業時間外に、授業に関連しない勉強をする時間」について、1 年生は「1 時間未満」と回答する者が最も多く（29%）、低水準に留まる。 8. 「G.読書をする（マンガ・雑誌は除く）」時間について、本学の学生のうち最も多くの者が「全然ない」と回答しており、その割合は 1 年生、3 年生ともに 41% を占めていた。 まず上記 1. の結果から、鹿児島大学は他の国公立大学 G に比べ、体験的学びや実践的活動が脆弱であるといえる。 2. 4. 5. 6. の結果から、鹿児島大学は他の国公立大学 G に比べ学生と教員との距離が遠いと考えられる。また、3. からは学内の学習支援も利用割合が低いことが分かる。学生ケアの向上が課題になると考えられる。 7. 8. の結果から、授業に関係しない自由な学びや読書を学生は十分に行うこと			

	ができていないと考えられる。これは昨年度の見解にもあったように、「詰め込み」型の教育であるために、毎週課題に追われ自由な学びをする時間が取りにくくなっているのではないかと思われ、懸念される状況と言えよう。本学の学生が「学び」＝「受動的なもの」と捉えてしまわないよう、主体的な学びを涵養するような改善の取り組みが必要であろう。 【大学生活に対する意識】 1. 1年生の大学への適応感の項目では、ほぼ全ての項目で国公立大学 G よりも高い状況は見られたものの、「F.大学教員と顔見知りになる」が8ポイント低かった。通常であれば、共通教育科目や専門教育科目等において、所属学部内外の教員による対面授業を受けることで関係性が築かれるが、遠隔授業においては、その恩恵を受けにくい状況であったことが考えられる。また、その他、平時であれば様々な活動においてもたらされていたであろう多様で新しい関係性の構築が、COVID-19 状況下における制限等で阻害された可能性も指摘できよう。 2. 1年生の大学設備に対する満足度の項目では、「B.実験室の設備や器具」の項目において国公立大学 G より低かった。対面授業による講義展開が少なかった影響も伺える。実験や実験設備・器具を使用した講義に関しても、上記と同様、COVID-19 感染対策を考慮しつつ更なる講義の工夫が課題となるだろう。 3. 3年生の大学設備に対する満足度の項目では、ほぼ全ての項目で国公立大学 G より高い満足度であったが、学部による満足度のばらつきが見られた。また「I.キャリアカウンセリング(就職や進路相談)」は国公立大学 G よりも低く、COVID-19 状況下における就職進路相談等についても検討していく必要があると考える。 【英語学習の実態】 1. 2022 年度上級生 (2022 年 10 月) における上級生の英語力 (聞く力・読む力・会話力・表現力・書く力) の熟達度を 1 年生(現在)と比較すると、すべて下がっている傾向が見られる。しかし、前年度に続き、本学の 3 年生は国公立大学 G の 3 年生と比べて同等または少し優れた英語スキルを有していることが分かる。 2. 「会話力」については、1 年生入学時から現在まで 3 ポイントしか伸びていないという結果である。また上級生において、「会話力」の水準が 1 年生の入学時より 1 ポイント低下している。英語カリキュラムにはスピーキングを中心としている講座は 1 年の後期に組み込まれている。しかし、より高い「会話力」を育てるためには全学生に発言の機会を与えられるよう、少人数クラスによる英語教育が必要不可欠である。 3. 2022 年度の 1 年生と上級生 (2022 年 10 月) における英語力 (聞く力・読む力・会話力・表現力・書く力) の熟達度の結果は、あくまでも自己評価によるものであ
--	--

	り、英語のレベルの正確な評価とは言えない。特に 3 年生については、学生の自己評価だけではなく、別の方法を用いて測る必要がある。
課題への具体的な対応案	【大学での学びの実態】 本学はボランティア、実習、実験、フィールドワークなど、体験的学びや実践的活動が弱い。鹿児島大学は地域に根差した国立大学として、地域貢献や、フィールドワーク、異文化交流をするのに適した環境にあるが、その利点を活かしきれていないと考えられる。たとえば地域人材育成プラットフォームなどの体験重視授業にもっと力をいれるなどの対策が考えられる。 また、本学の学生は主体的で自由な学びを十分行うことができていない。「詰め込み」型によって知識の習得と業務遂行能力を高めることも一方で必要ではあるが、昨年度も指摘されていたように、学びが受動で終わってはいけない。問いに能動的に向き合い、クリエイティブでイノベティブな人材を育成することが肝要である。これについては現在、将来構想検討会議においてカリキュラムポリシーを策定し、初年次科目の更なる充実を図るとともに新たな「学際科目群」の創設も検討されている。 【大学生活に対する意識】 令和 5 年 5 月 COVID-19 が 5 類感染症へ引き下げられたが、現在でもなおコロナ禍がもたらした影響は少なからず残っている。大学側としても学生生活へのきめ細やかな対応や配慮を継続する必要がある。 大学生活に対する意識としては、感染対策を十分にとりつつも学生同士や学生と教員間の交流方法を増やす工夫が必要であろう。対面での交流を増やす、オフィスアワーをオンラインで行うなどの対応を強化していくことが考えられる。一方で、対面を苦手とする学生にとっては、オンラインやオンデマンドの手法を用いた交流方法を活用して、その修学をサポートする手段が増えたともいえる。対面、遠隔といった多様な授業方法が実施される中で、学生の状況を把握しながら LMS を活用した学生へのサポートを引き続き実施していくことが重要であろう。 【英語学習の実態】 1. 上級生の英語力の低下について 2 年次以降の英語教育に関しては学部委ねているため、それぞれの学部で学生に必要な英語スキルを伸ばす授業を提供する必要がある。理・農・水・工の 4 つの学部では 2 年次の共通教育英語授業を必須科目にしており、英語力の維持に効果的であるが、今後全体的に英語の単位が減らされる懸念もあり、限られた授業時間の有効活用を再議論する必要がある。

	2.「会話力」の低水準及び上級生の英語力の低下について 推奨される外国語会話クラスの学生数（20人以下）と比較して、鹿児島大学における英語のクラスサイズは38～43人であり、毎回学生全員に発表の機会を与えることが難しい。しかし、共通教育センターでは学生が表現力・会話力を磨けるプログラムを複数提供している。LOL 外国語ラウンジ、グローバル・ランゲージスペースやP-SEGの海外研修を通して、英語力をレベルアップすることができる。これらのプログラムの宣伝にもっと力を入れたい。 3.英語力の熟達度の正確な測り方について 英語力の熟達度について、外部試験の導入や授業の一環として行われている英語力テスト(G-TELP)でより明確に英語レベルを定期的に測ることができる。これによって、学生も大学も英語力を可視化し、対策を講じることができる。令和4年度から、2年生で共通教育の英語授業がない学生も希望すればG-TELPを受けることが可能となったため、評価の際はその結果も合わせて分析することが望ましい。
昨年度挙げた改善・対応策による成果	【大学での学びの実態】 昨年度より継続して授業において定期的に小テストやレポートを課したり、事後学習・事前学習に取り組ませるなどしているため、1年生において1週間当たりの授業外学習時間が国公立大学Gより3ポイント高くなっており、改善がみられる。 本学の学生が「学び」を「受動的なもの」と捉えている傾向にあるなど昨年度と同様の課題が見られ、未だ改善の途上にあるといえるが、今年度は将来構想検討会議の議論が進展しており、カリキュラムの改定およびカリキュラムポリシーに基づいた「初年次科目群」、「学際科目群」などの各科目群の充実と改善の実行が待たれる。 【大学生活に対する意識】 COVID-19の影響があったものの、様々な面で改善が見られる。とりわけ1年生、3年生ともに「大学生活の充実感」において「学生生活は充実している」と回答した割合が国公立大学Gより9ポイント高くなっている。今後も感染対策等を怠ることなく、コロナ禍の中で大学生活を送ることを余儀なくされた学生へのサポートや配慮も継続していく必要がある。 【英語学習の実態】 1. 各学部で単位の組み換えなどの改革が議論され、その中で英語教育の在り方についても議論されている。学部で今後どの程度英語に力を入れるかが英語力向上の鍵となる。 2. 専任教員が一人増えたが、非常勤教員が減ったため、英語のクラスサイズには

	プラスの影響がない。そのため、興味がある学生に会話力を授業外で延ばす方法などをより体系的に指導する必要がある。 3. 教職員は LOL 外国語ラウンジ、グローバル・ランゲージスペースと P-SEG の海外研修の情報を提供し、参加を積極的に促している。
以前の結果や他の調査結果・データ等との比較を通じて明らかにになった点や気付いた点	【大学での学びの実態】 「学生自身が文献や資料を調べる」ことを 1 年生が経験したとする割合が昨年度と同じく 91%であるが、一昨年度の 86%と比べると 5 ポイント高い数値であった。91%という割合は国公立大学 G よりも 14 ポイント多い値であり、「初年次セミナー」等の初年次教育おける成果の一つととらえることができよう。 また、「鹿児島大学で伸びた知識や能力」として、1 年生がここ数年最も多く回答しているのが「コンピュータの操作能力」であり、国公立大学 G と比較すると約 10 ポイント程度高い数値を示している。 【大学生活に対する意識】 コロナ禍が始まり原則対面禁止となった 2020 年度の調査では、1 年生の「鹿児島大学での学生生活の充実度」は 58%であったが、2021 年度では 79%、2022 年度は 84%と平時の状況に戻りつつあるといえる。コロナが 5 類感染症に引き下げられた今年度の調査では昨年度よりも高い充実度が期待される。 また、3 年生のみの調査である「鹿児島大学在学中に経験したいこと」として「専門分野だけではなく幅広い知識を身につけ視野を広げる」という回答が過去数年 1 位であるが、2020 年度の 85%に対して 2021 年度には 95%へと増加し、2022 年度でも 94%と高水準を保っている。この数値は国公立大学 G に比して 10 ポイントほど高い数値である。共通教育での学びが終わり専門教育に移行してからようやく汎用的なスキルや幅広い知識・教養の大切さを実感し、その重要性を再認識するのではないと思われる。 【英語学習の実態】 昨年度は、以前と比べて「会話力」の自己評価が著しく低い結果となり、コロナ蔓延による影響が大きいと見られた。しかし、対面授業が大幅に増えた 2022 年度も「会話力」の自己評価が低い傾向が続いている。その要因を改めて究明し、対策を考える必要がある。 また、2022 年度の結果は 2021 年度のそれに非常に類似し、大きな変化が見られない。大学、教員、学生で今後伸ばしたい英語力について議論をし、目標を設定し、それに合わせてカリキュラムを再編成しない限り今後も大きな変化が期待できない。

法文学部・
人文社会科学研究科

令和 5 年度 法文学部
ファカルティ・デベロップメント活動報告書

令和 5 年度の鹿児島大学法文学部、大学院人文社会科学研究科のファカルティ・デベロップメント活動（以下、FD 活動と呼ぶ。）の取組とその成果を、ここに報告する。

第 1 章 FD 活動への取組状況

令和 5 年度の FD 活動の取り組みは、基本的には前年度の取り組みを踏襲するかたちでおこなわれた。令和 5 年度におこなった主な取り組みは以下のとおりである。

① 授業参観／視聴

→第 2 章「FD 活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

② エクセレント・レクチャラーおよびベスト・ティーチャーの選出

→第 2 章「FD 活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

③ 授業アンケート&所感と対応 自己点検・評価に係るモニタリング

→第 2 章「FD 活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

④ 教員対象 FD アンケート

→第 2 章「FD 活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

⑤ 令和 5 年度卒業生アンケート 自己点検・評価に係るレビュー

第 2 章 FD 活動の特筆すべき取り組みについて

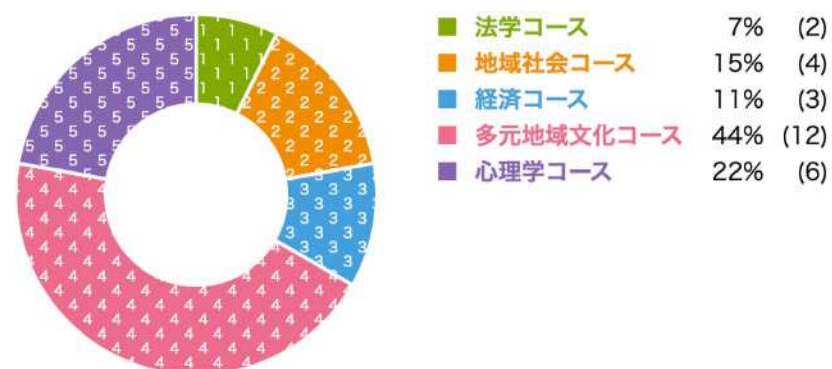
●授業参観（前期）

1. 実施状況

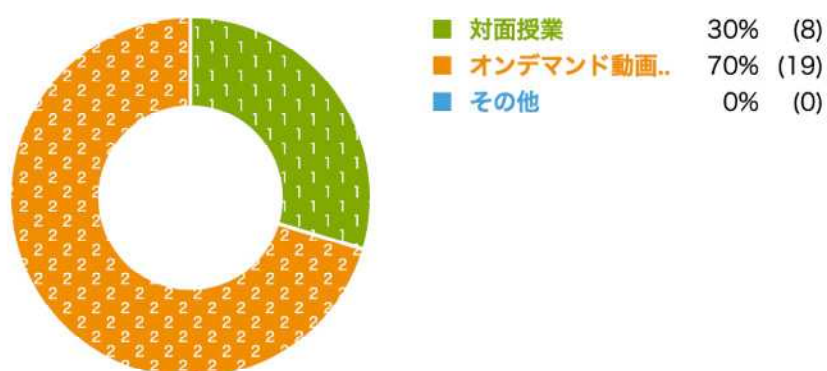
8 月 9 日から 9 月 30 日の期間でおこなった。教員には「授業参観報告フォーム」の提出を求めた。報告者数は、27 名。

2. 分析

コース別回答率



参観した授業の形式



この FD 企画の意義についての主な意見およびそのまとめ

- 授業の参観は、前期か後期かの 1 回で良いと思います。
- ・多様な形態の授業が提供されることで、自分の授業方法を見直すいい機会となった。・オンデマンド型授業も提供されていることから、他学科・コースの教員の授業を視聴するハードルが下がり、気軽に参観することができた。
- やはりこのような機会は自分を振り返る良い勉強になります。ありがとうございました。
- 今回は講義形式の授業が多かったので、可能であればもう少し演習形式の授業の選択肢を増やしていただくと助かります。
- 各コース単位で授業提供がなされているので、アドバンスコースの授業が対象になりにくいように思います。アドバンス科目委員会からも授業提供をお願いするということを検討されたらどうでしょうか。(私の方の誤認であったらすみません)。
- 種々の業務の負担が増す中、自らの授業だけでなく各種の委員会等でなかなか授業参観の時間が取れない(合わない)という状況がありますが、オンデマンドを含む公開授業をこのようにたくさん提供していただいたおかげで、授業時間の制約にとらわれずに参観することができました。ありがとうございました。
- 授業参観を通して、今後のアドバンス科目のあり方、もしくは今後の新設科目のアイデアを促すような機会もあると良いかもしれません。
- 授業参観は自分の授業を見直す良い機会になっています。

まとめ：授業の提供方法についてオンデマンド型が意外と支持されている。学部としての、あるいは個人としての授業科目の見直しに役立つという意見が散見される。総合すると、どのような授業科目を提供すべきであるかという視点からの教育の質保障に貢献する企画であると認識されている。

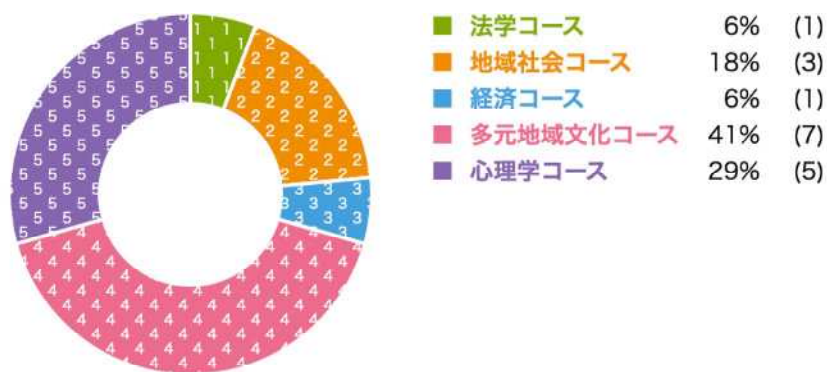
●授業参観（後期）

1. 実施状況

11 月 20 日から 1 月 13 日の期間でおこなった。教員には「授業参観報告フォーム」の提出を求めた。報告者数は、17 名。

2. 分析

コース別回答率



参観した授業の形式



このFD企画の意義についての主な意見およびそのまとめ

- 今後、オンデマンド動画の授業はあまり行われなくなる(対面が原則になる)と思いますが、授業参観に関しては授業の録画などによって授業参観が可能になるとありがたいです。
- オンデマンドの授業を含めていただいたことで参観しやすかったです。
- 近年、アクティブラーニングの手法がますます進化しているが、意識を持って学ばなければ追いつけない状況となっている。FD委員会でも対面でアクティブラーニングを学ぶ機会を作っていただければと思う。
- 今後もオンライン、オンデマンドでの参加が可能であれば、より参加しやすくなりますので、ぜひ継続して頂ければと思います。
- 自分の授業を振り返る機会になると考えています。

- なかなか時間を取ることはできないかもしれませんが、授業提供して下さった先生と参観した先生とのディスカッションの時間が取れるといいなと思います。例えば 1 コマ 90 分ですが、授業参観の回は 50 分くらいの授業として、残り 30 分から 40 分をディスカッションに充てるなど。そうすると授業内容を少し削らないといけないかもしれませんが、授業方法の向上という視点から考えると、より一層の学生の学力の質保証にもつながるのではないかと思います(つながるといいのですけれど)。
- アクティブラーニング形式で実施している演習の参観を希望します。
- 授業参観で、様々な講義を受講することができ、授業の進め方の参考になり助かります。

まとめ：依然としてオンデマンド形式の需要が高い。また、別の形態の参観を希望する声もある。総合すると、授業の質向上のためにこの形式をさらに発展させる可能性が示唆されている。

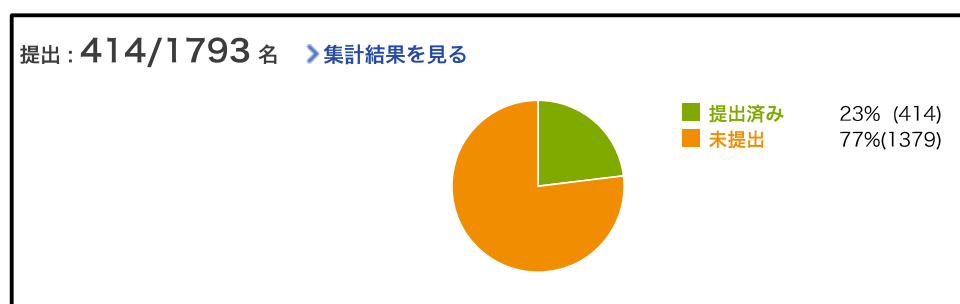
●エクセレント・レクチャラーおよびベスト・ティーチャーの選出

1. 実施状況

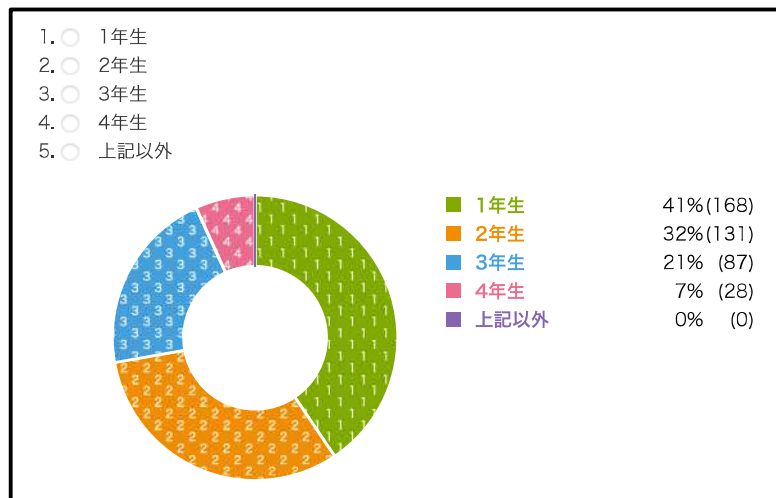
前年度と同様にエクセレント・レクチャラー 6 名からベスト・ティーチャー 1 名の選出の過程において、学生からの評価のみならず教員からの評価を加えた。

2. 分析

学生アンケート回収率



回答者の学年内訳



学生からの主な推薦理由とそのまとめ

学生との対話を重視しているから。 / 生徒が楽しいと思える授業を理解しているように感じたから。 / 講義の際、学生とのコミュニケーションを図りながら、わかりやすい講義を行っていたから / 授業の中での活動が活発で、楽しみながらも学びが深められたため。 / 人文社会総合論の授業が生徒と同じ目線で話していて分かりやすかったから。 / 授業が学生に寄り添ったもので楽しかったから。 / 非常に親身に話を聞いてくださるから。何回も質問したが全て丁寧に答えてくださったから。 / 生徒が意見を述べる機会を積極的に設け、生徒の意見に真摯に耳を傾けてくださったため、授業に積極的に参加しようという気持ちが高まったから。 / 学生に寄り添った指導スタイルで、受けていて楽しい講義であったため。 / 授業内において学生同士、学生と教授とのコミュニケーションをする機会を毎度設け、教授との距離が身近に感じられ、学生にとって受講しやすい授業づくりをしていたから。 / 4月は友達作りのために対面授業にしてくださり、その後は zoom でのグループワークや、オンデマンドでの自主的な課題の取組など、様々な方法で講義をしてくださったから。 / 学生の声に耳を傾け、学生が楽しいと感じられるような講義をしようという姿勢が好感だった。

まとめ：学生の意見を尊重する、あるいは対話を重視する工夫がなされている場合、学生からの評価が非常に高いことが見て取れる。この点を教育の質向上のための重要なエレメントとして認識すべきである。

●授業アンケート&所感と対応（前期） 自己点検・評価に係るモニタリング

1. 実施状況

8月9日から9月30日までの期間でおこなった。学生による授業アンケートに対する教員からの所感と対応である。参観者数は28名。

2. 分析

アンケート結果に対する印象



アンケート結果に基づく主な授業改善の取り組みとそのまとめ

- 好意的な評価を得た点をさらに工夫し、授業内容やスタイルの改善を図りたい。
- 学生間でグループワークを行うことが評価につながっていると思われる。基礎的知識を身につけるためのベーシックな講義とアクティブラーニングとの両立が課題である。
- 継続し点として、今後も manaba などをより一層活用して、受講生の意見・疑問をきめ細かく把握し、授業内容に反映させていくことを心掛けたいと考えている。
- 授業で議論になった教員のグループワークの参加についてだが、「教師がグループワークに参加するかどうかは、学習者にも個性があり好ましく思う人も数でない人もいると思うので早計に結論を出すべきでないと思いました。」という意見もあったので今後慎重に考えていきたい。授業ごとに学生には質問し教員参加について確認しても良いかもいれない。
- より受講生との対話を重んじる授業にしたいと思った。
- 確認テストなどをやってほしいとの要望があったので、今後考えていきたい。

- 上記のように受講者から評価されている点をより充実させる方向で進めて行きたい。
- 「もう少し学生が発言しやすい雰囲気を作る必要があった」に尽きる。
- 特にございません。
- 今後はより学生の声や意見をアンケート以外でもうまくみ取り、それをクリティカルに授業に反映させていけるように工夫したいと思う。

まとめ：学生の要望を取り入れようとする教員側の姿勢が一つのトレンドとして見て取れる。教育の質向上のための方向性を示唆している。

●授業アンケート&所感と対応（後期） 自己点検・評価に係るモニタリング

1. 実施状況

2月9日から3月25日までの期間でおこなった。学生による授業アンケートに対する教員からの所感と対応である。参観者数は35名。

2. 分析

アンケート結果に対する印象



アンケート結果に基づく主な授業改善の取り組みとそのまとめ

- 分かりやすいだけでなく、学生が自分で考えるような運営をしたい。
- 1年次には専門科目も受講できず、一方的な講義ばかりが多いことがあらためてわかった。それに抗う講義として引き続きグループワークを取り入れた講義をおこないたい。

- グループワークについて一部改善していきたい。時間配分が難しいが、発表させるだけでなく、そのまとめも時間内に出来るように検討したい。
- 学生が匿名で自由に質問しやすいライブ Q などと組み合わせることで、いまのところ高評価が続いている。学生にとって受講しやすいスタイルの変化に注目しながら微調整を続けていきたい。
- いずれにしても、受講者が積極的に参加できるような授業を目指して行きたい。

まとめ：前期と同様に学生の要望を取り入れようとする教員側の姿勢が一つのトレンドとして見て取れる。教育の質向上のための方向性を示唆している。

●教員対象 FD アンケート

1. 実施状況

令和5年度法文学部 FD 活動を評価し成果や改善点を把握する目的で 3月1日から11日の期間で実施。FD 活動全般についての意見や次年度の活動についての要望について尋ねた。参加者は21名。

2. 分析

令和4年度法文学部FD活動全般についての主な意見とそのまとめ

・現代の大学でしかできないイベント、学術的な向上と各コースの融合を狙うような学際的なイベントとその後の懇親会などができれば、孤立しがちな教員にとってもありがたいのではないかと。学生も同様に、スポーツはイヤだけど研究や最新知見には興味があるという学生は一定数いるはずである。教員の研究力の向上と学生の大学院進学も期待できるようなイベントにもなり得るはずであり、本気で研究を楽しみ、議論している姿を学生とともに共有することは、大学にしかできない FD 活動だと考える。

・この1年で、コース・専攻を超えた勉強会や研究会をやってみよう!みたいな動きが出てきているので、FD 委員会主催じゃなくとも、教員から企画の提案があれば、そのような研究会等を FD 活動の一環と位置付けてみてはどうでしょう？

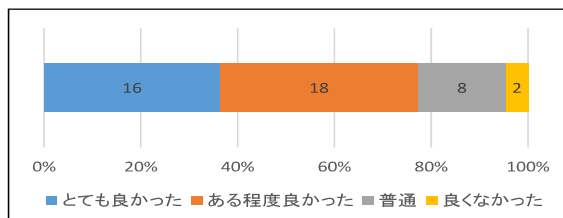
まとめ：教育の質向上のための活動は学際的な研究活動を土台とすべきであるという新しい提案がなされている。

●令和5年度卒業生アンケート 自己点検・評価に係るレビュー
調査結果

令和5年度 鹿児島大学の学修成果に関する卒業生調査（法文学部独自項目）

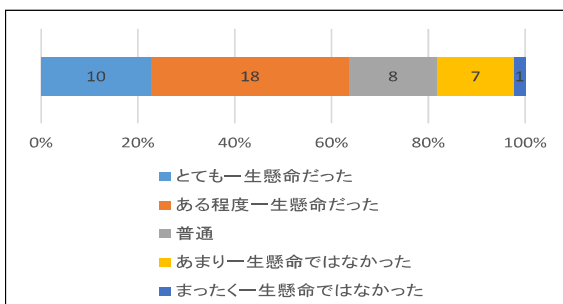
- ・ 卒業生383名のうち44名（11.5%）から回答を受領。
内訳は法政策学科（法経社会学科法学コース含む）9名、経済情報学科11名、人文学科24名。
- ・ 各質問に対する回答の集計は以下のとおり。

1. 専門教育で受けた教育はどうでしたか



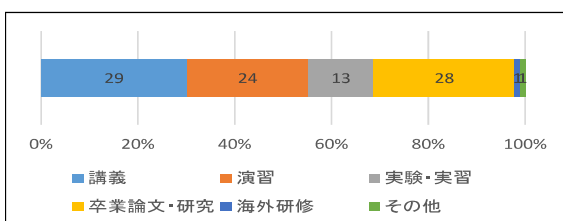
「とても良かった」「ある程度良かった」と回答した者の割合は77.3%だった。

2. 専門教育における勉強にどのくらい一生懸命に取り組みましたか



「とても一生懸命だった」「ある程度一生懸命だった」と回答した者の割合は63.6%だった。

3. 専門教育のなかで有意義だったと思うものを選択してください（複数選択可）



回答総数（96件）に対する割合は以下のとおり。

講義	…	30.2%
演習	…	25.0%
実験・実習	…	13.5%
卒業論文・研究	…	29.2%
海外研修	…	1.0%

その他（1件）は「無し」。

分析

1 回答率について

卒業生 383 名のうち 44 名が回答しました。回答率は 11.5%です。

2 問1および問2について

問1「専門教育で受けた教育はどうでしたか」については 77.3%が「とても良かった」「ある程度良かった」と回答しています。

問2「専門教育における勉強にどのくらい一生懸命に取り組みましたかについては 63.6%が「とても一生懸命だった」「ある程度一生懸命だった」と回答しています。

<分析>

提供される教育の質に関してはほぼ8割の回答者が高く評価しているのに対して、自分の学習態度を高く評価しているものは6割程度です。自分に対する評価を控えるという一般的な傾向を差し引いても、授業の質に対する評価との間にギャップが認められます。

<診断>

質の高い授業を提供する技術は高いが、学生に自主的な学習を促す工夫に改善の余地があるのではないかという視点が成り立つと思われます。

<課題>

FD委員会としては、このような結果をもとに、今後の授業改善の課題として、学生の自主的な学習を促進するような指導方法等に関する意識を共有することが重要であると思われます。

2 問3について

問3「専門教育のなかで有意義だったと思うものを選択してください(複数選択可)」講義と卒業論文・研究がほぼ30%であるのに対して、演習はほぼ25%です。実験・実習はほぼ13%です。

<分析>

実験・実習のパーセンテージが低いのは、これらの授業がもともと少ないためであると考えられます。見方によっては、授業コマ数としては圧倒的に少数であるこれらの授業が13%ほどあるという点が重要であると思われます。つまり、受動的に参加する授業よりも、主体的に参加する授業に対して「有意義」であると感じる者の割合が高いということを、この結果は示唆しています。

<診断>

問1および問2についての診断で、自主的な学習を促す工夫に改善の余地があると述べましたが、それを踏まえると、学生を主体的に授業に参加させる工夫にも改善の余地があると考えられます。

<課題>

FD委員会としては、このような結果をもとに、今後の授業改善の課題として、学生を主体的に授業に参加させるような指導方法等に関する意識を共有することが重要であると思われます。

4 問4について

問4「学部・学科による学生生活のサポートはどうでしたか」に対して「とても充実していた」「ある程度充実していた」と回答した者の割合は **36.4%**にすぎませんでした。極めて低い数値であるといえます。

<分析>

サポートが「充実していた」と回答している者が自分で情報を取りに行っているということが自由記述から読み取られます。これに対し、サポートを漫然と待っている者には各種のサポートが感じられていないのではないのでしょうか。

<診断>

この点は教務委員会、学生生活委員会、国際交流委員会、広報委員会等、複数の委員会にまたがる問題ですが、FD委員会に関していえば、次のことが指摘できます。学生からの要望があれば動くという姿勢よりも、教員の側から学生に積極的に働きかけるという姿勢が望ましいのではないかと思います。

<課題>

教員からの働きかけは過剰になると逆効果かもしれませんので、慎重に考える必要があります。FD委員会としては、問1～問3を踏まえると、学生の自主的・主体的な参加をどう促進するかという課題と共通の課題がここにもあるという視点を共有することが需要であると思われます。

5 問5について

問5「学生時代を振り返ってもっと勉強しておけば良かったと最も思うものはどれですか」に対して「幅広い教養」と回答した者が **27.3%** で、圧倒的に多数です。

<分析>

今回のアンケート対象者は2019年（令和元年）度の卒業生であり、2017年（令和29年）度の学部改組以前の旧カリキュラムの履修生である。改組後のカリキュラムには

「法文スタンダード科目」や「アドバンスト科目」等の分野横断的な科目が取り入れられている。今回の結果が専門中心の旧カリキュラムに起因するものものなのか、あるいは別の理由があるのかは、今後行われる新カリキュラムの卒業生アンケートの結果を待って慎重に検討される必要があるであろう。

<診断>

いずれにしても、「幅広い教養」が学生の大きなニーズであるということは、今回の結果から読み取ることができる。

<課題>

履修指導のあり方に「幅広い教養」をどのように取り入れるかについての問題意識をまず共有することが重要であると思われる。また、この点は学生の自主的・主体的な参加という問題と関わりがあるかもしれない。

6 まとめ

以上から浮かび上がるのは、学生の自主的・主体的な参加という点が今後FD活動の軸の一つとして検討されるべきであるという点である。

第3章 令和5年度FD活動まとめ

●令和5年度の専任教員のFD活動参加率は以下のとおりだった。

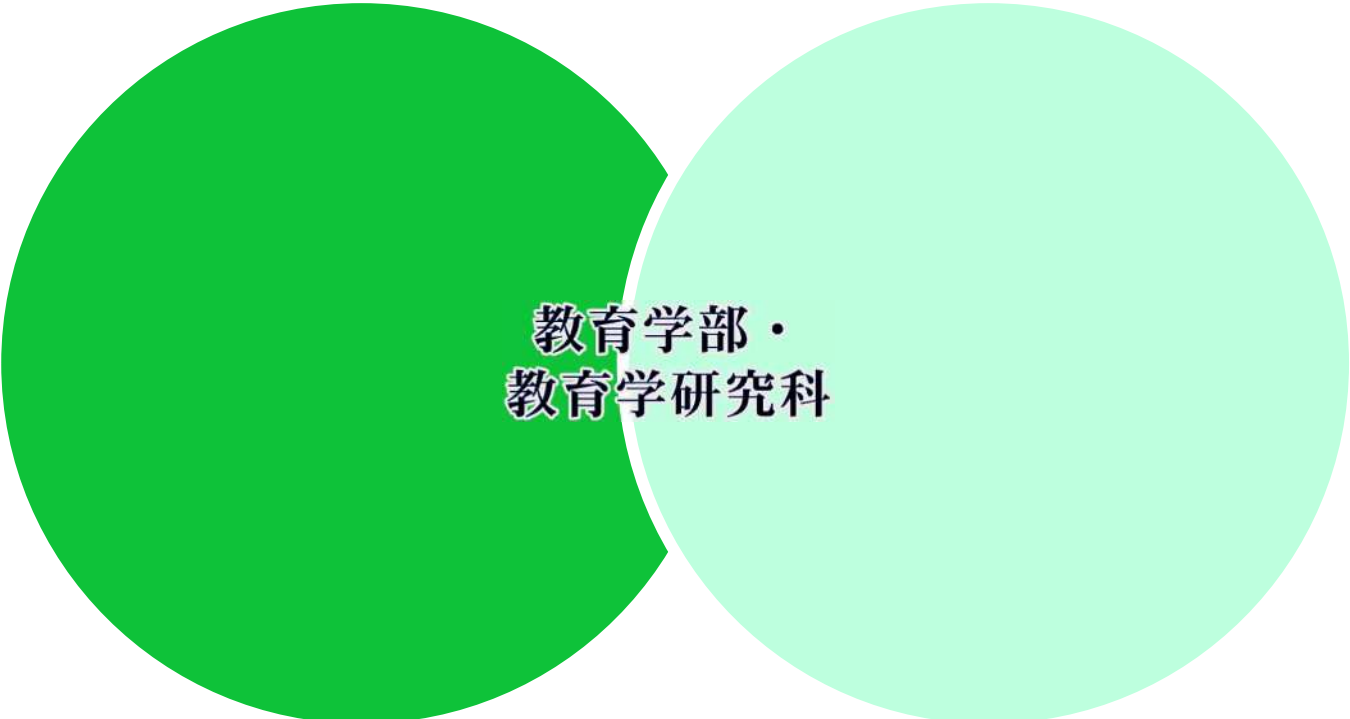
合計参加率		80.3 % (専任教員 61 名中 49 名 参加)				
企画別 参加率	授業参観(前期)	44.3 %	(専任教員	61 名中	27 名 参加)	
	授業参観(後期)	27.9 %	(専任教員	61 名中	17 名 参加)	
	授業アンケート(前期)	45.9 %	(専任教員	61 名中	28 名 参加)	
	授業アンケート(後期)	57.4 %	(専任教員	61 名中	35 名 参加)	
	教員FDアンケート	34.4 %	(専任教員	61 名中	21 名 参加)	

●大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和4年度実施分）の分析について

法文学部

評価する点	授業において「学生が自分の考えや研究を発表する」「授業中に学生同士が議論をする」という回答が【1年生】【3年生】に共通して多い。これは前年度と同様の傾向である。入学後の能力について「異文化の人々に関する知識」という回答が【1年生】【3年生】に共通して多いが、【3年生】においてはさらに「異文化の人々と協力する能力」「地域社会が直面する問題を理解する能力」という回答が増大するというパターンが確認できる。これも前年度と同様の傾向である。異文化および地域の問題への関心の広がり大学教育の一つの成果として認められる。
課題と考える点 (3点以上)	① 大学への適応感において「大学教員と顔見知りになる」が極端に低い【1年生】。ただしこれは全国的な傾向である。「効果的に学習する技能を修得する」「大学が求める水準に応じて学習する」が低い【3年生】。これは全国的な平均を下回っている。 ② 大学生活の充実感において「学生生活は充実している」と回答した割合が【1年生】においては高いのに対して、【3年生】においては相対的に低くなっている。2020年の入学当初からリモート授業を強いられた【3年生】と2022年入学の【1年生】との落差が明瞭に現れている。

	③ 大学教育への満足度において「将来の仕事と授業内容の結びつき」が低い【1年生】【3年生】。注目すべき点は「他の学生と話をする機会」「大学の中での学生同士の一体感」がいずれも低いという結果は【1年生】にほとんど見られず、【3年生】のみが顕著に低いという点である。上記②と同様の理由に起因していると考えるのが妥当であろう。
課題への具体的な対応案	上記①で示したように「効果的に学習する技能を修得する」「大学が求める水準に応じて学習する」に対するポイントが低い。この点に関しては、授業アンケートの結果を考慮しつつシラバスの見直し等で対応すべきであろう。
昨年度挙げた改善・対応策による成果	対応策：学部および大学院においては、いくつかのプロジェクト（例えば、法文学部 HP にある「活躍する卒業生・在校生」欄で活躍する現役生や OBOG のインタビュー記事を掲載し、将来の仕事と授業との関連性を紹介している。 成果：大学教育への満足度において「将来の仕事と授業内容の結びつき」が低いという調査結果は前年度とほぼ同じである。ただし、人文系の授業は将来の仕事と直結する内容が少ないことは事実であり、この質問項目で高ポイントは望めないと思われる。
以前の結果や他の調査結果・データ等との比較を通じて明らかになった点や気付いた点	上記の課題②③で触れたように、学生生活の充実あるいは人間的な交流という点において、2020 年の入学当初からリモート授業を強いられた【3年生】と 2022 年入学の【1年生】との落差が明瞭に現れている。



教育学部・
教育学研究科

はじめに

教育学部教育改善委員会委員長 上谷 順三郎

本年度の教育学部教育改善委員会の活動についてその概略を記します。なお、特筆すべき取組や改善事例については本報告書の本文に下線を施して強調しています。

授業アンケートは、対面授業中心へと変わったことによって、どのような効果があったのか、あるいはどのような影響があったのかについて、次年度も引き続き検討する必要があると思われます。それは特に、学習時間の減少傾向が見て取れるからです。アンケート回答率の向上を図ることと合わせて、各授業のシラバスの見直しやそれぞれの授業における独自の質問項目の作成などについても委員会を中心に検討していきたいと思います。

授業紹介・参観では、今年度後期より4年ぶりに授業参観を再開しました。授業紹介では、授業形態ごとに「授業準備」「授業運営」「成績評価」「授業時間外学習の支援」「その他」の回答内容を継続して行ってきましたが、今後の授業参観の実施に向けて、この4年間の取り組みを振り返り、授業評価方法の改善に生かしていきたいと思います。

教育学研究科においては、令和3年4月に募集停止となった教育実践総合専攻（修士課程）から平成29年度開設の学校教育実践高度化専攻（教職大学院）へと令和6年度から一本化されます。この間、教職大学院では定期的にFDアンケート・授業リフレクション・授業参観・教育相談day等を行い、毎月これらの活動について教員会議で情報共有しています。昨年度は教職大学院の教員がベストティーチャー賞候補として全学へ推薦されました。

学生FD委員会は、昨年度に引き続き学生交流イベント（ソフトバレー大会）を開催することができました。参加人数は178名でした（昨年は154名）。学部・学科内はもちろん他のコースの学生や後輩たちと交流する機会となったとのことで次年度への参加意欲も高まったようです。学生FDシンポジウムでは、昨年度に引き続き学部の関係委員会委員長の先生方と事務職員にご出席いただき、密度の濃い意見交換を行うことができました。また例年通り、ピアサポートとして『履修登録のすすめ』の新年度版を作成しました。

FD講演会では、「各専門分野の特質を基盤とした教育学部ならではの学習機会の提供」をテーマに掲げ、教育学部ベストティーチャー賞受賞者2名（片岡美華先生、浅野陽樹先生）の講演をもとに意見交換を行いました。知識の獲得を超えた、専門的な見識や身体化した専門性を追究した学習の提供、多様な評価方法など、教員養成に携わる教員が共有し理解し合う貴重な機会となったと思います。次年度以降のテーマや講師選定についても意見交換が行われました。

教育改善セミナーでは、本委員会の諸活動を振り返り、次年度へ引き継ぐための場を設定しました。各活動報告とその内容をめぐっての意見交換を時間いっぱい行いましたが、今回は特に学生FD委員会シンポジウム担当の学生にも報告していただき、学部長他、関係委員会委員長から現状の説明と今後の予定を話していただきました。こうして、学生FD委員会と本委員会の活動を取り上げることで次年度の活動計画や検討課題を整理することができました。

「教育の内部質保証に関する実施要項」との関連としては、自己点検・評価のために、「学生FD委員会シンポジウム」と「教育改善セミナー」を軸として、学生と教職員の意見交換の場を設け、その内容を本報告書の関連箇所に記載し、次年度の課題として整理しています。

以上、概略を紹介しました。具体的なデータや事例については各章をご覧ください。

目 次

1 章	授業アンケート回答の分析	
1	アンケートの実施方法	1
2	実施状況	2
3	結果	2
2 章	授業紹介・授業参観報告	
1	授業紹介・授業参観の実施について	4
2	授業紹介の実施状況	4
3	授業紹介における記述	4
4	授業参観の実施状況	7
5	授業参観における記述	7
6	総括	7
3 章	学生 FD 委員会の活動	
1	学生 FD 委員会の活動概要	8
2	活動と振り返り	8
3	今年度の成果と今後の課題	11
4 章	教育学部 FD 講演会	12
5 章	教育改善セミナー	
1	開催の趣旨	16
2	セミナーの概要	16
6 章	令和 5 年度専任教員の FD 参加率	20
7 章	大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和 4 年度実施分）の分析について	21

1章 授業アンケート回答の分析

1. アンケート実施方法

令和5年度前後期の授業アンケートを以下の要領で実施した。

- 実施時期：前期 令和5年7月10日（月） ～ 8月9日（水）
後期 令和6年1月17日（水） ～ 2月9日（金）
- 実施科目：事前調査で各教員が開講する授業科目から1つ以上を選択。回答がなかった場合は、委員会で1科目を指定した。
- 実施手段：manabaによるオンライン回答
- 質問項目：Q1 ～ Q11の11項目。Q1およびQ11以外は4件法（1. そう思う, 2. だいたいそう思う, 3. あまりそう思わない, 4. そう思わない）による回答。
Q1 【学習時間】この授業に関して、あなたは毎週平均してどのくらい学習をしましたか。予習、復習課題、掲示板を読むなど、すべてを合わせた時間で回答してください。
Q2 【主体性】あなたはこの授業に主体的に取り組むことができましたか。
Q3 【理解度】あなたはこの授業の内容を十分に理解することができましたか。
Q4 【シラバス内容】この授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか。
Q5 【シラバス目標】シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか。
Q6 【説明】教員の説明は分かりやすかったですか。
Q7 【興味関心】この授業は、あなたの興味・関心を高めるものでしたか。
Q8 【資料】資料（板書、スライド、講義動画、配布資料等）は授業の理解を助けるものでしたか。
Q9 【質問】この授業は質問がしやすい雰囲気でしたか（メールやmanaba上での質問等を含む）。
Q10 【満足度】この授業は全般的にみて満足するものでしたか。
Q11 【自由記述】この授業の良かった点や感想等を自由に書いて下さい。

前後期の平均スコアを表1に示す。

表1 令和5年度授業アンケートの平均スコア

	前期	後期		前期	後期
Q2	1.5	1.5	Q7	1.4	1.4
Q3	1.6	1.7	Q8	1.4	1.4
Q4	1.4	1.4	Q9	1.6	1.5
Q5	1.6	1.6	Q10	1.4	1.4
Q6	1.4	1.4			

- フィードバック:担当教員によるアンケート結果についての振り返りをmanabaで公開した。

2. 実施状況

令和5年度の授業アンケートと教員によるフィードバックの実施状況を表2に示す。授業アンケートの回答率は、令和4年度と比べて数値が悪化している。また、アンケート回答率は、100%に近い授業もあれば、ほとんど回答者のいない授業もある。授業アンケートを行う際に、授業中にアンケートがあることを学生に周知したり、授業中にアンケートに解答する時間を設けたりするなどの工夫が必要であろう。

フィードバック率も、今年度は令和4年度と比較して、若干数値が改善している。ただ、フィードバックの目的や、どのような内容を書くべきかわからない、という意見もあるので、今後はフィードバックの意義なども含めて教員に周知することが必要であると考えられる。

表2 授業アンケートとフィードバックの実施状況

	R5 後期	R5 前期	R4 後期	R4 前期
実施科目数	72	75	79	78
履修登録者数	3301	3015	2969	3164
回答者数	1408	1334	1349	1574
回答率	43%	44%	45%	50%
フィードバック数	28	32	30	29
実施率	39%	43%	38%	37.1%

3. 結果

授業アンケートの Q1(学習時間)については、授業時間外での学習時間を1. 5時間以上、2. 4から5時間程度、3. 3から4時間程度、4. 2から3時間程度、5. 1時間から2時間程度、6. 1時間以下、により回答してもらった。前年度からの平均スコアの推移を表3に示す。

前年に引き続き、学習時間が減少傾向にあることが見て取れる。Q1の学習時間には、掲示板やmanabaを見る時間も含むので、ほとんどの授業が対面授業になった結果、課題や予習復習以外の時間が減少した結果だと考えられる。しかし現状では、授業時間外での学習時間を十分に確保できているとは言い難い。また、アンケート回答率と並び、この項目は授業によって回答結果の差が大きい項目である。授業の内容によってはあまり気にする必要がない場合もあると思われるが、担当教員が各授業に必要な学習時間を明確にし、その実現を助けるような工夫が求められるだろう。

表3 Q1【学習時間】の平均スコアの推移

	R5 後期	R5 前期	R4 後期	R4 前期
Q1	5.0	4.9	4.9	4.9

その他の質問項目について、前年度と比較したものを表4に示す。前年度と比較して、Q4のシラバスに沿った授業だったかどうかに関する項目が前年に比較して数値が悪化しており、自由記述欄にもシラバスと異なる授業に戸惑っている旨の記述が例年に比べて多かった。シラバスシステムの変更により、シラバスの修正がうまくできなかった影響ではないかと考えられる。その他の項目に関しては、前年度と比べて特筆すべき変化は見られなかった。

表 4 Q2 ～ Q10 平均スコアの推移

	R5 後期	R5 前期	R4 後期	R4 前期
Q2	1.5	1.5	1.5	1.5
Q3	1.7	1.6	1.6	1.6
Q4	1.4	1.4	1.3	1.3
Q5	1.6	1.6	1.6	1.7
Q6	1.4	1.4	1.4	1.4
Q7	1.4	1.4	1.4	1.4
Q8	1.4	1.4	1.4	1.4
Q9	1.5	1.6	1.5	1.5
Q10	1.4	1.4	1.4	1.4

2章 授業紹介・授業参観報告

1. 授業紹介・授業参観の実施について

(1) 授業紹介・授業参観の目的と枠組み

本学部教育改善委員会では、例年「教員相互による授業参観」を実施してきた。また授業紹介とは、教育学部専任・特任教員が自分の担当する教育学部開講の授業科目から、各教員が自身の担当科目1科目を選択し、「授業準備」「授業運営」「成績評価」「授業時間外学習の支援」について、実施方法・工夫・課題等の記入及び提出を求めるものである。

(2) 授業紹介の実施

教授会での周知を図った後、前期7月28日（金）～8月23日（水）の期間実施した。

2. 授業紹介の実施状況

本年度前期教育学部教員からの報告件数は、10件である。出された報告書に基づき、本年度前期に実施した授業紹介について報告する。

3. 授業紹介における記述

本年度は殆ど対面授業であった。各授業の工夫した点などについて、前期回答の一部を抜粋し紹介する。

(1) 授業準備

授業担当者の工夫・授業アンケートの活用、manabaによる資料の事前提供等

- ・事前にテキスト資料に加え画像資料や授業内容に関連するオプッションの話題、ウェブサイト等も準備・活用した。
- ・教員志望学生が漢文学及び日本文学への理解を深められるように、今学期授業を組み立てたり、受講生の興味に応じて見学先を選定した。
- ・受講学生が分かり易いように過去の実施例を映像等で紹介したり、先輩学生が後輩受講者のサポート等で協力したり、小中等両課程の学生が理解可能なように講義内容を精選した。受講生の中に公開授業者も多かったので、機器は使用せず対面授業を行った。
- ・本授業では学習指導案に関する課題を課しているが、昨年度アンケート意見に基づき提出サイクルを見直し、授業計画全体を修正した。manabaのニュースを用い、毎回授業形態（対面、遠隔）アナウンスと課題（小テスト及びレポート）を紹介した。
- ・授業資料はコースコンテンツと紙媒体両方で準備した。毎回授業のスライドを作成し、授業前までにmanabaで公開した。

(2) 授業運営

- ・前回授業内容を確認したり、気軽に意見交流もしやすい環境を作った。
- ・教材研究と学習指導案作成や模擬授業の実施・協議と関連付けることにより実践力育成を目指した。受講生が提出した学習指導案は添削し、改善事項をフィードバックした。
- ・次回授業で扱う内容について課題を設定し、ミニレポートを作成させた。

- ・授業内容と関係ある雑談で受講生との距離を縮めたり、各回授業のファシリテート学生に授業企画・運営・ふりかえりを担当させ、授業サポートと介入の役割を担わせた。
- ・授業初回到授業内容と中学校学習指導要領、シラバス、毎回授業時に学習指導要領に対応する課題を提示し、次週までに提出させている。
- ・すべて対面で授業し、機器は使用せず全て板書で講義した。また実習を多く取り入れたり、受講人数よりも少し広めの教室を確保し、毎回質問用紙を配布して授業終了時に質問を出させ、次の授業初めに提出された全ての質問に回答した。

(3) 成績評価

① manaba の活用

- ・小テストを 40%評価、確認試験を 60%評価とし、小テストは manaba の自動採点システムを用いた。
- ・授業で扱ったことから学期末課題を manaba で出題し、その記述内容により評価した。

② 評価方法の工夫

- ・レポート提出の形式をとり、基本的書式や文献引用のルールは厳格に守らせたが、書く内容に関しては授業時の解釈と異なる解釈でも構わないことをいつも伝えた。
- ・複数回のレポート(学中指導要領の作成)によって成績を評価した。
- ・期末レポートを課し、講義全体から学生が理解した内容を確認しながら評価した。
- ・全授業回数の 3 分の 1 を超えて欠席する者は評価対象から除いている。出席店はなく、期日内に提出された課題(合計 30 点)と確認テスト(70 点)の合計と授業に取り組む姿勢(manaba の閲覧状態も含む)を総合して成績を評価している。なお感染症罹患や実習参加等の理由により止むを得ず欠席する者に対しては代替措置を講じて、評価に不平等が生じないようにしている。
- ・輪番制で担当する授業のデザインと自分たちが実施した授業のリフレクションの深さ・15 回の演習各回の論考内容を記憶するミニポーとフォリオを成績評価の対象とし、担当授業当日の授業の巧拙や成否は成績評価の対象とはしなかった。
- ・講義前半の授業内容と後半の授業内容に分けて確認テストを行い、成績を評価する予定であった。講義前半の授業内容に関する確認テストは実施できたが、講義後半の授業内容に関する確認テストは台風の影響で実施できなかったため、レポートに変更して成績を評価した。

(4) 授業時間外学習の支援

支援の工夫

- ・授業前に manaba のコンテンツに課題史料を載せ、授業後は授業内容に即した小テストやレポートを課題として与えることで授業の予習と復習を促した。
- ・テキストに関連した他の小説や詩、映像作品展・歴史的イベントや各国の社会事情に関わる資料の紹介をし、普段から海外への関心を向けられるよう様々な情報を提供した。
- ・授業運営や成績評価でも報告したように、この授業では教材研究や学習指導案の作成が中心になったため、学習指導案作成の参考とするように学習指導要領解説の関連する頁を配

布資料に明記し、教材研究の際には学校で使用されている教科書と対応させながら、解説の記述の意味を理解できるように配慮し、関連する理論も極力取り上げた。

- ・より深い教材研究ができるように、教材によっては複数の教科書のコピーを配布し、比較検討できるようにした。
- ・各種工具書、参考書について案内したほか、国語科資料室に関連図書をまとめた一角を準備した。
- ・毎回の授業で提示する到達目標に対応する課題を出している。毎回の manaba のコースニュースでは、スライドと関係資料に加えて、教科書として指定している「二訂版ニュースページ地学図表」の対応頁を示しているので、受講生はこれらを参考にして課題に取り組むことができ、更に初回に配布する参考図書等に目を通すことによって内容の理解を深めることができる。
- ・学生自身が自分たちの 90 分の学習をデザインし、実際にファシリテートする授業のため、各回輪番制で担当となる学生の希望に応じて平均 1.5 時間、最大 5 時間程度の打ち合わせを授業準備として時間外に行った。その打ち合わせの際に、学生たち自身で理解を深めることができるよう追加の資料や教材を精選し、必要に応じて担当学生に紹介し、自分たちにその使用の有無を選択してもらった。その結果、学生たちは平均 6 時間、多い方で 20 時間ほどの自信が担当する授業の時間の学習に取り組んだ。
- ・学生が班ごとにおこなう模擬授業では、早い段階で教員と相談する時間を設けるなどして、授業時間外でどのような準備をすればよいかイメージが湧くよう支援をおこなった。
- ・オフィスアワーを設定した。また教育学部学生については、manaba を使って連絡をした。

(5) 今後の課題

- ・演習の開設を模範解答や動画等で行ったり、講義終了後 manaba に提示した講義ノートを毎回ダウンロードして復習するように促した。

(6) その他

- ・本年度の授業では、授業アンケートの結果を踏まえパワーポイントを利用した。今後パワーポイント内容の充実や改善を図りたい。
- ・本年度は、ハイブリッド寄りの対面形式で行った。対面のほうが学生とのコミュニケーションがとりやすい。
- ・学習指導要領に記載されている内容に加え、その背景も取り扱っている。
- ・受講生が授業中入ることができる教室の中で、動かしやすい個別机とイスが整備されている教室の数が限られており、できる限り学習環境のデザインに担当学生らが自由に・多様にこだわるができるよう・教室を 2 教室確保した。
- ・ある意味特殊な内容を取り扱った授業内容であったために、また受講生の中に公開授業社会人の方が多かったので、説明は極力丁寧にした。授業資料は毎回準備したが、その内容説明については授業資料を読むことを避け、授業資料の内容を整理・要約し、背景説明を入れて分かり易い説明になるように極力注意した。

4. 授業参観の実施状況

後期授業参観は、2024 年 1 月 22 日(月)～2 月 2 日(金)の期間に行われ、授業参観報告書の提出期限は 2 月 8 日(木)であった。授業参観報告書を提出した教員は、4 人であった。出された報告書に基づき、本年度後期の授業参観につき報告する。

5. 授業参観における記述

(1) 授業運営

- ・授業最初にレジメと関係資料が配布され、その後パワーポイントを使い、双方向授業が行われた、最新の裁判例や鹿児島市の動向を挙げ、わかりやすく解説がされていた、課題曲が、受講生の技量に合わせて与えられ、課題曲を練習し、最終評価を受ける授業であった。
- ・他学科学生も履修し、苦慮していた。授業担当者は、一人一人に声かけ、アドバイス、激励し、改善すべき点を丁寧に指導していた。授業担当者は、同一授業中異なるレベルの受講生の力量や課題点を正確に把握し、迅速かつ適切に指導していた。
- ・学生に平仮名点画一覧表を示して、各平仮名を平仮名点画十要素(とめ、はね、はらい、よこ、たて、ななめ、てん、おれ、まがり、むすび)に分類させて、学生の平仮名に対する理解を深めさせていた、平仮名点画十要素を 2、3、4 種類含む字を示した上で小学生に点画種類数の多い平仮名を学ばせるために、点画数種類の多い平仮名を組み合わせで 2、3、4 字教材を作る課題が出された。授業終了時出席カードを提出させ、出席確認と質問を拾っていた。

(2) 成績評価

- ・課題曲が、予め受講生の技能に合わせて数段階レベルで与えられ、与えられた課題曲を練習し最終評価を受ける授業であった。事前に受講生に今期の成績評価について説明され、伝えられ、納得して帰るのが印象的であった。
- ・確認試験時、普段の小テスト(10 回)未受験分追試日時について分かり易く周知されていた。

(3) 今後の課題

- ・手書き計算方式が PC やタブレット、キーボード入力に変わる可能性やその影響、授業受講生の変化、高校までの電卓使用の影響、社会や学習指導要領変化による代数・幾何の位置づけ変化、その結果代数学への興味・関心や学力変化、算数数学教育と代数学との関係、本授業(線型代数学Ⅱ)教科書と線型代数学Ⅰ教科書との関係等。

(4) その他

- ・授業開始前の学生着席、90 分の確認試験解答時間中、解答用紙・計算用紙の必要枚数使用、静かに集中した解答への取り組み。

6. 総括

今年度前期授業紹介、後期授業参観を実施した。授業紹介・授業参観何れも教員の授業方法改善の上で大きな役割を果たし、後期授業参観を実施できた意義は大きい。報告書には、授業運営方法や成績評価、課題等が記載され、今後授業参観継続への手ごたえを感じさせた。

3章 学生FD委員会の活動

1. 学生FD委員会の活動概要

学生FD委員会は、本学部の授業や教育の改善を目的としてFD活動を担う学生主体の組織であり、26名の学生委員から構成されている。FD委員会の具体的な活動としては、全国学生FDサミットへの参加や学部シンポジウムの企画・実施、学生交流イベントの運営、履修支援等のピアサポート活動などを行っている。

今年度のFD委員会は、前年度同様に全国学生FDサミットが開催されなかったため参加することは叶わなかったが、学部シンポジウム・学生交流イベントの開催、ピアサポート活動の一環として新入生への配布を予定している『履修登録のすすめ』を作成することができた。

2. 活動と振り返り

(1) 学生交流イベント

近年、新型コロナウイルスの影響により学生生活に制限がかけられ、人と人との交流の機会が少なくなってしまう状況があった。そこで、学年や学科を超えた学部内での交流の場を設けることによって、学生間で近況や悩み等を共有し、つながりを深め、よりよい学生生活を送ることができるようにすることを目的とし、学生交流イベント「教育学部ソフトバレーボール大会」を企画・実施した。11月23日(木・祝)10時から開催し、参加者数は178名となった。大会では、同学年や学科内だけではなく、他学年や他学科を応援する姿も見られ、参加者からは「学科、学部内で新たな交流が生まれた」「他コースの学生や後輩たちと交流できた」などの声が寄せられた。また、来年度のイベント活動にも参加したいという声も多数寄せられた。今年度は、参加賞や景品を新たに設けたため、参加者の満足度や学生生活の向上に一層つなげることができた。



(2) F Dシンポジウム

2024年1月23日(火)16時10分より教育学部第二講義棟講義室Bにて、学生F D委員会シンポジウム班主催のF D委員会シンポジウムを開催した。「充実した大学生活のために ―コロナ禍を経て見えてきた問題―」というテーマのもと、コロナ禍を経て見えてきた問題と学生が今後どのようにそれらと向き合っていくかを考える機会となった。シンポジウムを開催するにあたり、学生が大学生活や実習等でどのような難しさ、困難さを抱えているかを



把握するため、事前に教育学部の在学学生を対象としてアンケート調査を実施した。F Dシンポジウム当日は、アンケート結果の報告と、その得られた結果をもとに、教育学部関係委員会委員長の先生方をはじめとした学部教職員と学生がグループディスカッションを行い、活発な意見交換を行った。以下はアンケート結果の抜粋である。

【2023年度学生F D委員会アンケートについての報告】

回答者：159名（1年生60名、2年生46名、3年生37名、4年生16名）

2-1 履修について困っていることはありますか。

・ある 57.9% ・ない 42.1%

2-2 あると回答した方にお聞きます。困っていることとは、どのようなことですか。

・履修したい科目が被っていて、必要単位を取ることができない 46.2% ・単位をすべて取りきることができるかが分からない 43% ・人数制限科目が多く、単位を取ることができない 43% ・何を履修すればいいのかが分からない 38.7% ・人数制限科目に応募した記録が残らない 5.4%

（上記5つはアンケート作成側で項目を用意。その他自由記述あり）

3-1 学部内施設の授業外の利用頻度はどのくらいですか。（ALP、理系棟、文系棟、講義室、体育館、音美棟、学食等）

・ほぼ毎日 51.6% ・週に2.3回程度 34.6% ・週に1回 11.3% ・全く利用しない 2.5%

3-2 学部内の施設利用時に困っていることはありますか。

・ある 31.4% ・ない 68.6%

3-3 あると回答した方にお聞きます。具体的にどのようなことに困っているかを教えてください。

多かった意見

Wi-Fiの接続について／個別ブースや個人デスクの設置について／エデュカの営業時間の延長／学食メニューの固定化／コンセンートを増やしてほしい

4-1 これまで、実習等で困ったこと（不満な点）はありましたか。

・ある 29.6% ・ない 70.4%

4-2 あると回答した方にお聞きします。どのようなことに困りましたか(不満を持ちましたか)。

多かった意見

交通費の負担について／実習先の選択について

5-1 学科内または学部内（学科同士など）の交流は必要だと思いますか。

・はい 96.2% ・いいえ 3.8%

5-2 それはなぜですか（具体的に記述をお願いします）。

多かった意見

〈必要なし〉 必要性を感じない

〈必要あり〉 情報交換ができる／助け合うことができる／協働や連携の関係ができる／異なる視点を得ることができる／友人が増える

5-3 学科内の交流について、あなたの学科では何か取り組みがなされていますか。（定期のお菓子パーティーや旅行等）

・ある 39.6% ・ない 60.4%

5-4 あると回答した方にお聞きします。どのような取り組みがなされていますか。

挙げられた回答

忘年会／レクリエーション／社会科運動会や交流パーティー、忘年会など／ゼミ合宿／ご飯会／新歓、打ち上げなど／球技練習／お菓子パーティー・飲み会・旅行・ソフトバレー交流会／定期で昼食会が開催されている／旅行、遊び等／バーベキュー／学科分けがおわってからの交流会／たこ焼き／夏に教授や学部長を交えた食事会

5-5 その取り組みによってどのような効果があると感じていますか。

・多くの人が仲の深まりを実感

5-6 学部内の交流（学科を超えた交流）について、あなたの学科、または本学では何か取り組みがなされていますか。

・ある 27.7% ・ない 72.3%

5-7 あると回答した方にお聞きします。どのような取り組みがされていますか。

・学生FD主催のバレーボール大会 等

5-8 その取り組みによってどのような効果があると感じていますか。

・交流の深まり、広がりを実感

【当日のディスカッションで出された意見】

①履修

教育学部は教員免許を取る関係から単位の取得が複雑なため、視覚的にわかりやすい表などで示してほしい／学科毎にカリキュラム担当の先生がおり、相談できることを学生に周知してほしい／人数制限のある科目を取りやすくしてほしい／教育課程をどこでも見られるようにしてほしい（冊子だけでなくPDFも）／これまでの修得単位が卒業要件の単位にどれくらい満たされているかをネットで確認できるようにしてほしい

②施設利用

Wi-Fi 環境を整備してほしい／理系棟以外にも個別で学習できるスペースをつくってほしい／第二講義棟を学生が使用できることについて周知してほしい／生協の営業時間の延長してほしい

③教育実習

参加観察実習生が先輩の授業を見る機会をつくってほしい／実習日誌の文量とオリエンテーションの頻度を検討してほしい／実習校配属に関して出身校の人への配慮をしてほしい／実習校によって交通費の負担があることへの配慮をしてほしい

④学科内・学科同士の交流

大学施設の空き教室などを活用し、各学科の学生が交流できる場所があるとよい／期末テストの終わりのや年末などのタイミングで学生が交流できるイベントを開催する

また、2024年2月21日（水）に開催された教育改善セミナーにおいては、学生FD委員会からシンポジウム班リーダーの学生委員が出席し、FDシンポジウムでディスカッションされた内容について発表した。セミナーでは、FDシンポジウムにおいて検討された課題について、回答をいただく機会ともなった。

（3）ピアサポート

昨年度に作成した新入生対象の履修支援冊子『履修登録のすすめ』を、次年度の教育課程に合わせて改訂した。また、前年度の内容を引き継ぎ、新入生だけではなく2年生以上も相談できる窓口を、学生が気軽にアクセスできるLINEアプリを使って開設し、各学科のFD委員が実習や履修に関する質問を受け付けられるような体制を継続した。

3. 今年度の成果と今後の課題

今年度は、コロナ禍以前の状態で概ね活動を実施することができた。11月の学生交流イベント・ソフトバレーボール大会では、教育学部の多くの学生が参加し、学科や学年を超えた人とのつながりを実感するイベントとなり、次年度も開催を期待する声が数多く寄せられた。また、1月のFDシンポジウムでは、事前に学部学生へ実施したアンケート結果を基に「履修」「教育実習」「施設利用」などの視点を設け、学生と教職員がグループディスカッションを行い、活発な議論が交わされた。

最後になるが、学生FD委員会の認知度は在学生の中でも高くないため、今後は学生FD委員会がどのような活動を行っているのか、在学生や教職員、大学全体へ広報し一層推進していくことが今後の課題になっていくのだろう。



4章 教育学部FD講演会

2023年9月27日にFD講演会を開催した。概要は以下の通りである。

テーマ：「各専門分野の特質を基盤とした教育学部ならではの学習機会の提供」

講演者：鹿児島大学 教育学部 片岡美華（障害児教育）

鹿児島大学 教育学部 浅野陽樹（技術教育）

ファシリテーター：鹿児島大学 教育学部 高谷哲也

開催日時：2023年9月27日（水）14時30分～16時00分

会場：教育学部第1講義棟101教室

本講演会は、2名の教育学部教員の講演をもとに、「各専門分野の特質を基盤とした教育学部ならではの学習機会の提供」をテーマに、各専門分野において大切にされている学生の学習機会について知り合い、教育学部ならではの学習機会の提供について共に考える機会として開催した。

片岡先生の講演では、自身の講義内で特別支援教育について初めて学ぶ学生が有しているイメージや動機の実態について紹介があり、学生に学んでもらいたいと考えていることと、そのために具体的に行っている授業内の工夫について紹介がなされた。その中で、「4年という限りある期間で教えられることは何だろうか」という問いのもと、自身が実践上重視しているものとして「調べる力」「活用力」「アレンジ力」が提示された。そこでは、「教える私自身も、4年間

ではちょっと厳しいな難しいなと感じています」との率直な実感が語られ、「わからないことは必ず出てくる。そのときに調べられること。学んだ事をとりあえずやってみる活用力というものが大事だと思っている」との思いが紹介された。そして、「できれば応用したり、習ったことを別の子にアレンジしたりする力も発展的につけたいなあとは思っているんですけども、その活用方法というのがすごく難しいんじゃないかなと思っています。」と実感が語られた。

その後、担当授業と実習の関係について紹介があり、障害の早期発見に繋がる点や専門性の点からも重要だと考えていることとして、しっかりと子どもの見取りができるようになることが目指されていることが語られた。また、授業での工夫については、ユニバーサルデザイン教育について具体的に取りあげているため、UDフォントの利用、複数回での評価実施、課題提出の期限の緩やかな設定など、自身の授業でも実際に実践していることが紹介された。それらは、様々な学生の実態やニーズに応じることが可能となる授業デザインとしての具体的な工夫であった。講演後半では、担当科目ごとに具体的にどのような実践が行われているかが続いて紹介された。

片岡先生からは、自身の工夫や実践の中で、学生の変化が具体的に確認されることが自分自身にとっても楽しいと語られた。そしてまとめでは、今回の講演をきっかけに、自分の授業で何に気をつけて授業をしているかを改めて振り返ったところ、「多面的・多角的に考えるための仕掛け」をつくることと、「五感を通した学び」とまとめられると表現された。相手の立場にたって考える

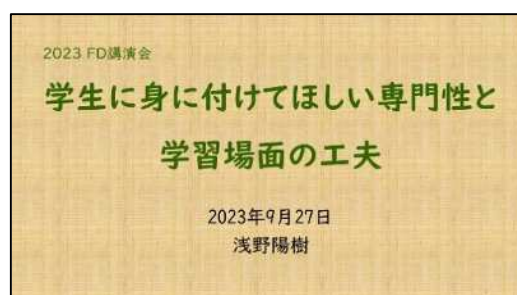


ことは難しいと思うため、あえてそのような状況を仕掛けており、ロールプレイや模擬授業、疑似体験等を通して、学生自身が自ら課題を見いだしていくことを目指していると説明された。

質疑応答交流では、講演内で使用された用語やUI フォントについての確認の質問があり、応答がなされた。また、模擬授業の際に、子どもや保護者が言いそうにはないことを学生が言ってしまうなど、担っている役割になりきれないケースがあると考えられるが、どのような工夫をされているかについてやりとりがなされ、基礎的な知識の獲得を経た後に履修できるようにしていたり、なりきれなくてもまずやってみて気づいていたり、他の実習経験等も経て演じられるようになっていたりする機会にしていることが紹介された。



浅野先生の講演では、学生に身に付けてほしい専門性と目指す学生の姿、そのための学習機会の提供方法、講義の評価について紹介がなされた。身に付けてほしい専門性については、理論とその活用力について具体的な説明がなされた。そこでは、理論を学んでから活用するまでに時間がある際に両者がつながらない問題がみられることが説明され、理論として学ぶ事と、活用する機会との接続を重視していることが紹介された。また、「自ら学ぼうとするマインド」を身につけてもらいたいという思いがあることも語られた。



知識・理解については、「必要感～何を、なぜ学ぶのか～」が得られることを重視しており、学生に対して様々な事象を紹介するなどして実現を目指していることが紹介された。また、「全体像を見渡す」ことの重要性も説明され、学ぶ内容がストーリー性も含めて整理されたA3判の学習内容の構造図が紹介された。

学び方としては、知識・理解の側面についてはまず自身が教え、その理解度を学生同士で確認し、応用問題に取り組んでみるという授業展開をとっていることが紹介された。知識・理解については、学生自身でもできるため、manabaのドリル問題を準備するなど、自分でできることはできる限り講義外で取り組んでもらえるよう工夫がなされている。それは学生にとっては定着の機会ともなっており、教員側では各学生の定着の度合いを確認する機会にもなっていることが説明された。

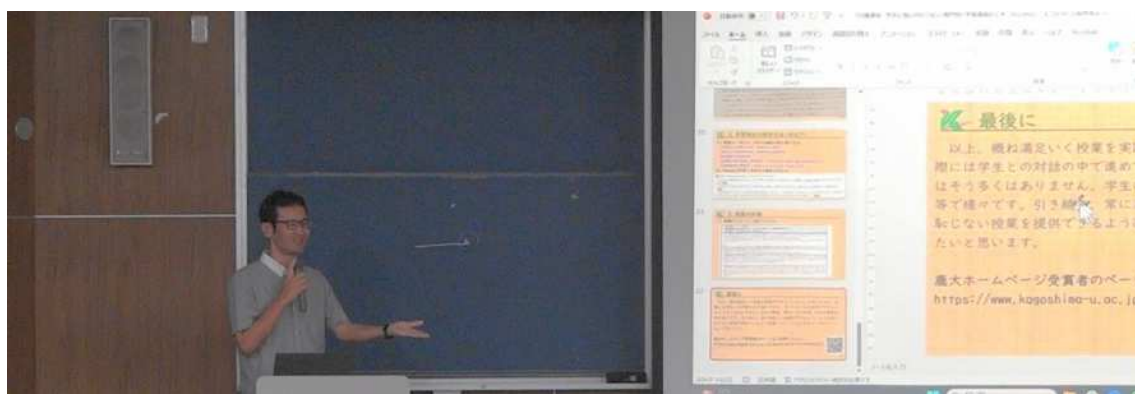
また、理解の確認の手立てとしては、教員が説明した内容を学生同士で説明しあう機会が設定されており、そのうえで、知識の活用機会として、知識を活用する問題を学生同士で考えたり、

実際に栽培などの実践に取り組んだりすることが行われていることが紹介された。

講義の評価については、授業アンケートから、「授業内容を説明するだけでなく、問いを投げかけて考えさせることも行っていたので、より理解力を高めることができた」「自分の生活の中で行動が変わっています」といった記述が自由記述から確認されていることが紹介された。そしてそれが自身の励みにもなっていることが語られた。試験については、すぐに確認してもらいたいため、試験直後に解答例を配付していることと、活用問題は学生にとって難しい実態があることが紹介された。

加えて、受講生の行動等を分析的に見て考察することに取り組んでいることが紹介され、それを受講生にフィードバックしたり、附属小学校・田上小学校での公開研究会や他の大学教員との共同や学習を通して自分が変容したことや思ったこと、学んだことなども学生に紹介したりすることで、学生にとって学びが自分事になっていくことも紹介された。また、学生に自らの学びを振り返り成長を自覚してもらえる機会の提供も行われている。その中では、講義の学びの中での自身の経験について、どのような感情を味わったかという観点での振り返りも学生に行ってもらっており、それを自分の学びの深まりに繋げていってもらっていることなどが具体例として紹介された。

質疑応答交流では、追究されている身体性を通した学びへの共感、教員自身が学んだ事や実感した事も学生に紹介していることの意義、担当科目が扱う範囲の広さ等に関するコメントが寄せられた。また、学生が自身の学びのプロセスを文字化していくことについて、そのプロセスが授業にどのように活きたと考えられているかについて質問がなされた。それに対しては、ポートフォリオ的に学びの記録を文字化して残していくと、それをもとに学生が振り返ったり他者と交流したりすることで自分を見つめ、自分の行ったことの分析や意味づけにつながる事が実感されているとの回答がなされた。また、学生自身の学び方がどのように変化していったと実感されているかについての質問に対しては、その実感は難しいが、自分の分析をしていくと学生の目が変わっていくことは授業者として実感されていると回答された。



講演会の最後には、今回の2名の教員の授業実践上のこだわりや工夫に共通して見いだされたこととして、ファシリテーターが次の3点を整理して提示した。1点目に、将来教員になる学生を対象にしている中で、知識の獲得に留まらない学習の提供が重視されていることである。特に、獲得した専門知と実践をどのように結びつけていくかという点については、単なる実践での理論の活用という意味ではなく、専門的な見識としての獲得や身体化した専門性という意味で追究がなされていた。2点目に、担当している科目の15回の授業ではカバーしきれない「身につけても

らいたい専門性」に対して、どのように軽重をつけて何を優先して 15 コマの中で実現・具体化しようとしているかが紹介されたことである。そこには各担当教員独自のこだわりがあり、それが卓越した授業実践に結実しているという点で、カリキュラムの標準化が進む現状ではあるが、それが尊重されることの重要性が改めて確認された。3 点目に、評価の方法が多様に工夫されていることである。我々が学生に求めていることが多岐にわたっているとすれば、その評価の方法も多様である必要があるとの見解が得られた。

本 FD 講演会を通して、改めて各教員の授業実践上のこだわりや具体的な実践内容を交流しあう機会の重要性が実感された。目的養成としての教員養成を担う中で、そこに携わる様々な専門性を有した教員が、それぞれ何を軸として実践の開発に取り組んでおり、そこに教員養成に対するどのような思いがあるのかを教員間で互いに知り合い理解し合うことは、教員志望学生にとって価値のある学習機会を学部としてどのように提供していくかを具体的に考えていく前提として、不可欠な機会であると考えられる。

5章 教育改善セミナー

1. 開催の趣旨

教育学部教育改善委員会の令和5年度の活動を振り返り、教育学部における教育改善状況を確認するとともに、今年度における委員会の取り組みの成果と次年度以降に解決すべき課題を整理することを目的として開催しました。

なお、セミナーにおける各報告についての詳細は、本報告書内の担当委員による報告を参照していただきたいと思います。

また今回は、教育学部学生FD委員会シンポジウム（令和6年1月23日開催）の報告をシンポジウム担当の学生委員に行っていただき、学部長をはじめ、関係する学部委員会委員長からの回答を踏まえた意見交換をすることができました。

2. セミナーの概要

【日時】 2024（令和6年）2月21日（水）10:30-12:00

【会場】 教育学部第1講義棟101教室

【次第】

- ・開会の挨拶（上谷順三郎：教育改善委員会委員長・司会）
- ・学部長挨拶（有倉巳幸）
- ・授業アンケート、授業紹介・参観について（有家雄介）
- ・学生FD委員会シンポジウムについて（新田佑夏：教育学領域3年）
- ・FD講演会について（高谷哲也）
- ・各種アンケートについて（上谷順三郎）
- ・教師教育開発センターと教育学部の連携について（有倉巳幸）
- ・セミナーのまとめ（土田理：教育学部附属教育実践総合センター長）

（1）学部長挨拶（有倉巳幸）

本セミナー開催の意義として、次の2つを挙げていらっしゃいました。

一つは、ふだんの学部の授業が、受講する学生たちの将来の学校教員としての「授業づくり」の参考となるという点に注目して協議する場を設けること。二つは、学部と大学院の教員が、学生・院生たちにどんな学校教員になって欲しいのかをイメージすることとそのイメージを共有しながら教育改善に取り組むこと、そしてこのことを学部だけでなく全学の教職教育に拡充すること。

（2）授業アンケートについて（有家雄介）

有家先生には台湾からオンラインで参加していただきました。

アンケート結果の経年変化において、1（学習時間）が減少していること、9（質問のしやすさ）が向上していること、が指摘されましたが、その原因としては対面授業が増えたことが理由の一つとして考えられるとのことでした。

またアンケートの回答率が減少傾向にある点については、授業中に回答時間を設けることや回

答率の高い学部や教員の取り組みを参考にしたいとのことでした。

なお、学生からの意見として、特に新入生は本アンケート自体になじみがないようだということ、学習時間については多めに回答している場合があること、各授業の内容に沿った質問を用意して欲しいこと、などが紹介されました。

（３） 学生FD委員会シンポジウムについて（新田佑夏）

学生生活の質の改善・向上に役立てるために、学部生 834 名へのアンケートを行い、159 名から回答を得たそうです。以下、その要望とセミナーにおける質疑の内容を抜粋して紹介します。

① 履修について

- ・必修の科目については事前に登録してあるといい。
- ・履修方法や単位取得状況などがわかりやすいように表にしてあるといい。
(新年度から小専科目の履修方法が変わることについて松井教務委員長より説明がありました。)

② 施設利用について

- ・文系棟や生協の wifi 環境を整えてほしい。コンセントを増やしてほしい。
(学長裁量経費として要望を提出している旨、学部長から説明がありました。)
- ・理系棟以外にも学習スペースをもっと設けてほしい。

③ 教育実習について

- ・オリエンテーションで先輩の話を聞きたい。
(実習先の選択については昨年度から学生たちの希望を優先しているとの回答が日吉教育実習指導委員長からありました。)

（４） FD 講演会について（高谷哲也）

ベストティーチャー賞受賞のお二人の先生にご講演いただいた FD 講演会でしたが、その報告は高谷先生が本報告書内に書いていらっしゃいます。

片岡美華先生（障害児教育）が挙げていらっしゃる 4 年間に教えるべき 3 つの力—「調べる力」「活用力」「アレンジ力」—や学生が子どもの見取りができるようにすることという目標の話、そして講演の機会が自身の授業観（「多面的・多角的に考えるための仕掛け」をつくること、「五感を通した学び」）を振り返ることになったというお話が特に印象に残りました。

浅野陽樹先生（技術教育）についての報告では、浅野先生が理論として学ぶ事と活用する機会との接続を重視しているということ、「自ら学ぼうとするマインド」を身につけてもらいたいとの思いを語っていらっしゃったということ、そして授業の全体像をつかむための構造図を示していらっしゃるということが特に印象に残っています。

ファシリテーターの高谷先生が最後に整理された 3 点は以下の通りです。

- ・将来教員になる学生を対象としている中で、知識の獲得に留まらない学習の提供が重視されている。
- ・15 回の授業でカバーしきれない「身につけてもらいたい専門性」に対して、どのように軽重をつけて実現し具体化しようとしているかが紹介されていた。
- ・評価の方法が多様に工夫されている。

（５） 各種アンケートについて（上谷順三郎）

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和 4 年度実施分）の分析について、授業・学生生活に

関するアンケート（教育学部令和5年度前期）と関連づけて報告しました。前者については本報告書の末尾に掲載します。詳しくはそちらをご覧ください。

ここでは、複数のアンケート結果をもとに総合的に考察すべきこと、学生FD委員会シンポジウムや教育改善セミナーを通して本委員会の取り組みについての成果や課題を学生・教員で共有していくこと、回答率を向上させること、を次年度への課題として特に記しておきます。

（6） 教師教育開発センターと教育学部との連携について（有倉巳幸）

教師教育開発センターが令和6年度に設置されるにあたり、当センター長となる有倉先生から資料をもとに説明がありました（資料参照）。特に教育学部においては附属教育実践総合センターとの関係をもとに全学の教職教育の機能強化・拡充の方向性が示されました。

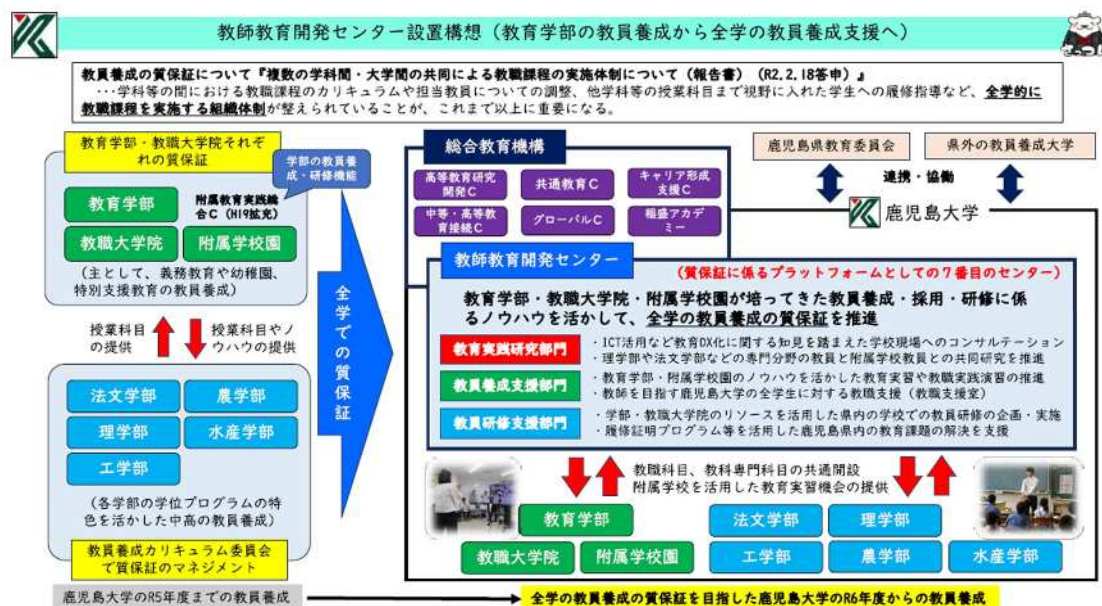
なお、教育学部学生にとっての新センターのメリットや学部教育のレベルアップなどについても視野に入れて新センターの具体化を図るべきことなどが質疑において指摘されました。

当日配付の資料を（7）のあとに掲載します。

（7） セミナーのまとめ（土田理）

土田先生からは、学部生・院生、学部教員、学校教員、社会のそれぞれが思い描く教員像・学校像にずれがあるのではないかとのご指摘がありました。また教育学部として取り組むべきこととして、5年先、10年先を見据えたプロジェクトを設けること、FD講演会などに教員関係者以外のマスコミ、行政、民間の方を講師として招くこと、などが提案されました。

(6) の資料



6章 令和5年度専任教員のFD参加率

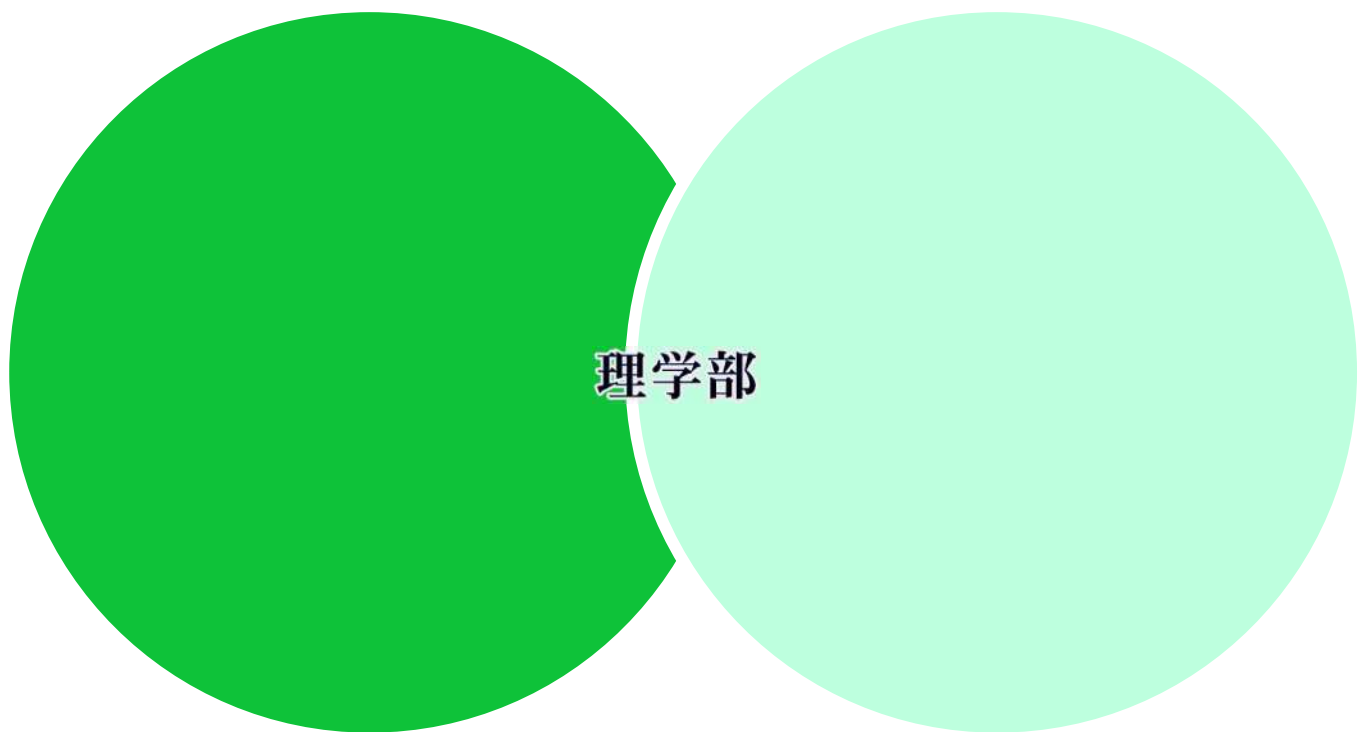
合計参加率		100 % (専任教員 78 名中 78 名 参加)
企画別 参加率	前期授業アンケート	90 % (専任教員 78 名中 73 名 参加)
	後期授業アンケート	90 % (専任教員 78 名中 70 名 参加)
	前後期授業紹介	18 % (専任教員 78 名中 14 名 参加)
	教育学部 FD 講演会	32 % (専任教員 78 名中 25 名 参加)
	学生 FD 委員会 FD シンポジウム	15 % (専任教員 78 名中 12 名 参加)
	教育改善セミナー	27 % (専任教員 78 名中 21 名 参加)
備考 授業アンケート前期は学部授業なし 5 名、後期は学部授業なし 8 名ということで実質 100%です。		
FD 講演会には、他に、事務職員4名の参加があった。学生 FD 委員会シンポジウムには、他に、事務職員1名の参加があった。 教育改善セミナーには、教員 21 名の他に、事務職員5名、他部局教員3名の参加があった。		

7章 大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和4年度実施分）の分析について

（ 教育 ） 学部

評価する点	1. 1年生調査及び3年生調査 「2. 大学での学びの実績（4）入学後の能力の変化」において、「L. 文章表現の能力」が3年連続で高数値を示しており、学校教育で求められている「思考力、判断力、表現力等」の育成に大きく関わる能力として望ましい状況であり、学士教育としても引き続き重視していきたい。 2. 1年生調査 （1）「3. 英語運用能力の熟達度（3）入学時、1年生、3年生の英語運用能力熟達度の比較」において、1年生ではいずれの能力も入学時よりレベルが上がっており、大学での英語学習に一定効果が認められる。 （2）「5. 大学生活に対する意識（3）大学教育に対する満足度」において、教育学部1年生では「J. 多様な考え方を認め合う雰囲気」が70%（全体56%）と高い点が評価できる。この状況を卒業時まで維持できるよう、教員側も工夫していくことが重要である。 3. 3年生調査 「2. 大学での学びの実態（1）授業を通じた学習経験」において、「E. 学生自身が文献や資料を調べる」「H. 学生が自分の考えや研究を発表する」「I. 授業中に学生同士が議論をする」の項目において高い回答をしている点は、大学での学びに求められる学生自身による学習経験が提供できていると評価できる。特に「I. 授業中に学生同士が議論をする」は3年連続で高い数値を示しており、対話的な学びや協働的な学びなど、学校教育で求められている授業づくりが教育学部の授業においても具現化されている例として引き続き注目していきたい。
課題と考える点 （3点以上）	課題①3年生の「2. 大学での学びの実態（1）授業を通じた学習経験」において、「L. 取りたい授業を履修できなかった」が高い数値を示している。また同じく3年生の「5. 大学生活に対する意識（3）大学教育に対する満足度」において、「C. 授業の全体的な質」が全学で最も低い数値を示している。 課題②「2. 大学での学びの実態（3）週あたりの活動時間」において、「D. オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する」時間が少ない。 課題③3年生の「5. 大学生活に対する意識（4）大学設備に対する満足度」において、「実験室の整備や器具」「コンピュータの設備や施設」がどちらも3年連続で低い数値を示している。 課題④本アンケート回答率が1年生、3年生のどちらにおいても低い。 課題⑤「3. 英語運用能力の習熟度」について、外国語（英語）教育の効果を測る上でその運用能力にのみ焦点を当てている。 課題⑥本調査分析の報告において、課題と考える点を3点以上挙げる事が条件となっている。

課題への 具体的な対応案	①昨年度より数値的には改善されているが、その実態の分析とカリキュラム改革が求められる。今年度は、1月に開催される学生FDシンポジウム並びに2月の教育改善セミナーにおいて、学生・教員両方による意見交換を行い、次年度へ向けた具体的な改善策を用意する予定である。 ②他方、「5. 大学生活に対する意識（1）大学への適応度」では「E. 大学教員と顔見知りになる」の数値が高く、オフィスアワーよりも充実した関係性が構築されている可能性があり、今後はその具体的な内容に着目し、より充実した関係を目指していきたい。 ③アンケート結果をどのように受け止め、どのように対応していくのかについて、①に記した学生FDシンポジウムや教育改善セミナーを通して検討し、次年度以降への改善につなげたい。 ④このことは調査結果の考察にも影響を与えかねない。本学部と他学部とアンケート調査の実態を比較・分析するとともに、回答率の高い学部における工夫点を参考とした改善を図る必要がある。 ⑤外国語（英語）教育担当者及び学生を対象に、教育の効果として測るべき点について調査・検討し、より全体としてその教育的効果を測ることのできる調査にしてほしい。 ⑥調査研究として考えた場合、3点以上挙げることが条件とされる点に研究倫理上の問題があると考ええる。ご検討願いたい。
昨年度挙げた 改善・対応策 による成果	昨年課題として掲げていた項目、「取りたい授業を履修登録できなかった」や「授業全体の質」について、数値的には改善傾向にあるが、抜本的な改革が必要であろう。年度内に学生からの意見聴取、学生と教員との意見交換を行い（学生FDシンポジウム、教育改善セミナー）、具体的な改善策とその計画を立てていきたい。
以前の結果や他の 調査結果・データ 等との比較を通じ て明らかになった 点や気付いた点	以前との比較については上記参照。



令和5年度理学部FD活動報告書

はじめに

令和5年度に理学部において実施したFD活動の概要について報告する。

令和5年度には5回の理学部FD委員会を開催した。令和5年5月8日に第1回（オンライン会議）を開催し、前年度後期および通年科目の成績分布を確認し、卒業生アンケート調査の実施について議論した。同年6月1日～7日に第2回（メール会議）を開催し、FD講演会およびその他の企画について意見を求めた。同年7月10日に第3回（オンライン会議）を開催し、FD講演会の企画内容を決定し、基礎教育科目・基礎専門科目担当者懇談会の開催を報告した。同年11月24日に第4回（オンライン会議）を開催し、令和5年度前期科目の成績分布を確認した。令和6年3月29日に第5回（オンライン会議）を開催し、ベストティーチャー賞候補者について、および次年度のFD活動計画について議論した。また、毎回、全学のFD委員会の議事について報告した。

令和5年度には、授業評価アンケート、理学部FD講演会、授業公開・授業参観、ベストティーチャー賞の表彰と参観の4企画とその他の活動を実施した。ここでは、1. 学生による授業評価アンケート、2. FD講演会、3. FD活動への参加状況、4. その他のFD委員会関係の取組について報告する。これらの活動の実施にあたっては、理学部のほぼすべての教職員にご協力いただき、各プログラムのFD委員および理学系学生係には、企画、実施、本報告書作成にいたるまで、多大なご助言とご助力をいただいた。心より感謝申し上げます。

令和5年度鹿児島大学理学部ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 宮本 旬子（全学FD委員会委員）

令和5年度鹿児島大学理学部FD委員会

委員長 宮本 旬子（全学FD委員会委員）
委員 吉田 拓真（数理情報科学プログラム）
委員 秦 重史（物理・宇宙プログラム）
委員 神長 暁子（化学プログラム）
委員 池永 隆徳（生物学プログラム）
委員 北村 有迅（地球科学プログラム）
事務担当 久永 祥宏（理学系事務課学生係長）

1. 学生による授業評価アンケート

(1) 授業評価アンケート

理学部における授業評価アンケートの目的は、学生による授業評価を通じて授業担当の各教員が自らの授業の改善の手がかりを得ることと、その活動を通して履修プログラムのカリキュラムなど種々の教育システムの改善につなげることである。学生の興味や関心、学修への意欲や志向は年々変化するが、個性が重視される現代においては学生の多様性が増大し、教員の経験や感性のみに基づいて教育内容の改善や教育技量の向上を効率的に行うことが難しくなっている。担当科目の受講生の率直な声に担当教員が耳を傾け、個々の授業や履修プログラムのカリキュラムの教育効果を上げることによって改善を重ね、さらに充実した理学教育へ発展させることが期待されている。

令和5年度もmanabaを利用した授業アンケートを実施した。教育支援サービスmanabaを使ったアンケート項目は14あり、設問1～3は授業のわかりやすさ、4～6は授業運営、7～10は授業成果、11～13は授業の難易度と進捗についてとなっており、14は自由記入欄である。具体的には次のような内容となっている。

設問 1 先生の説明は、あなたにとってわかりやすかったですか。

1. わかりやすかった 2. わりとわかりやすかった 3. ややわかりにくかった 4. わかりにくかった

設問 2 先生の声は聞き取りやすかったですか。

1. 聞き取りやすかった 2. わりと聞き取りやすかった 3. あまり聞き取りやすくなかった 4. 聞き取りやすくなかった

設問 3 総合的に見て、この授業はわかりやすかったですか。

1. わかりやすかった 2. わりとわかりやすかった 3. ややわかりにくかった 4. わかりにくかった

設問 4 シラバス(講義要項)に即した内容の授業が行われていたと思いますか。

1. そう思う 2. わりとそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない

設問 5 授業の開始時間、終了時間は守られていたと思いますか。

1. そう思う 2. わりとそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない

設問 6 総合的に見て、この授業の運営はどうでしたか。

1. よかった 2. わりとよかった 3. あまりよくなかった 4. よくなかった

設問 7 あなたは講義中に熱心に受講したと思いますか。

1. そう思う 2. わりとそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない

設問 8 受講の結果、新しい知識を得ることができましたか。

1. できた 2. わりとできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

設問 9 受講の結果、新しいものの見方や考え方を得ることができましたか。

1. できた 2. わりとできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

設問 10 この授業へのあなた自身の取り組み、この授業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうですか。

1. よかった 2. わりとよかった 3. あまりよくなかった 4. よくなかった

設問 11 授業の難易度はあなたにとって適切でしたか。

1. 適切であった 2. わりと適切であった 3. あまり適切ではなかった 4. 適切ではなかった

設問 12 授業の進み方のペースは、あなたにとって適切でしたか。

1. 適切であった 2. わりと適切であった 3. あまり適切ではなかった 4. 適切ではなかった

設問 13 総合的に見て、授業の難易度と進度は適切でしたか。

1. 適切であった 2. わりと適切であった 3. あまり適切ではなかった 4. 適切ではなかった

設問 14 その他、この授業について思うことがあれば、自由に書いてください。

令和元年度以降、一部の不定期実施科目と集中講義を除いて、教職専門科目と非常勤講師の担当科目を含む、ほぼすべての科目を対象とし、前期末と後期末に2週間程度の期間を設けてアンケート調査を実施してきた。各教員は各期末に実施するアンケートを参照し、次年度の授業にむけた改善をしていくことになる。しかし、それでは当該年度の受講生は改善の実感が得られない。そこで、担当教員による様式を使った各期の半ばにおいてもアンケートの実施ができるようにしてきた。ただし、授業の形態上、中間期アンケートをとることが難しい科目もあるので、実施については任意としている。アンケートとは別に、授業に対する質問やリクエストなどの自由記載欄を設けた小テストやミニッツペーパーによる意見聴取を実施している教員もいる。受講期間中に意見や要望を担当教員に汲みとってもらうことができ、授業に反映されたという実感があれば、受講生の満足度の向上に貢献するし、教員側としても、その年度のその教室の受講生の状況に即した授業を展開することができ、教育効果がいっそう高まると考えられる。しかし、これもすべての科目に適している方法とは限らないので、実施の有無は各授業担当教員の判断によることとしている。

理学部では平成13年度より授業評価アンケートを実施している。現在、各教員はmanaba上に保存されている複数年の担当授業のアンケート結果を参照しつつ自己分析を行うことが可能である。プログラムによってはベストティーチャー賞候補者選出のた

めの参考資料としてアンケート集計結果を利用することもできる。理学部としても必要に応じて学部・学科・プログラムのカリキュラム改善のための基礎データとして活用できる状態にある。ただし、集計結果を教員の個人評価のための資料として利用しないこととしている。これは、授業改善以外の目的にアンケートを転用することは授業改善に関しては逆効果であるという専門家の意見とも一致しており、今後もこの方針は堅持する。

令和元年度から令和5年度までの期末授業アンケート回答状況を表1に示した。

表1. 期末授業アンケート回答状況（令和元年度～令和5年度）

令和5年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	115	119	234
延べ受講人数（人）	5623	5361	10984
延べ回答総数（人）	1427	1098	2525
回答率（％）	25.4	20.5	23.0
令和4年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	114	107	221
延べ受講人数（人）	5095	5123	10218
延べ回答総数（人）	1820	1197	3017
回答率（％）	35.7	23.4	29.5
令和3年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	100	110	210
延べ受講人数（人）	4935	4875	9810
延べ回答総数（人）	1808	1590	3398
回答率（％）	36.6	32.6	34.6
令和2年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	102	116	218
延べ受講人数（人）	5230	5279	10509
延べ回答総数（人）	2171	1746	3917
回答率（％）	41.5	33.1	37.3
令和元年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	186	192	234
延べ受講人数（人）	6818	7485	14303
延べ回答総数（人）	1014	1651	2665
回答率（％）	25.4	20.5	23.0

令和5年度の前期におけるアンケート回答率は25.4%、後期における回答率は20.5%で、前期と後期を合わせて23.0%の回答率となった。平成30年度に紙媒体によるアンケートからWebアンケートへと変更になった際に回答率低下が危惧されていたようで、令和元年度には18.6%という低い数値であった。しかし、令和2年度には37.3%、令和3年度には34.6%、令和4年度には29.5%と、3割前後の数値になった。これには二つの要因が考えられる。一つは、4学科を1学科5プログラムに改組し、令和2年度入学生から1年次には理学部共

通科目の基礎教育科目や基礎専門科目を履修するようになったため、全体の開設科目数が減少したことである。結果的に、1科目あたりの受講者数が増加し、授業時間中にアンケートへの回答時間を設けることで効率的に回答を促すことができた例もあるようだ。もう一つは、この期間にパンデミック対策として遠隔授業が推奨されていたことである。昨年度の報告書では、遠隔授業が増加した結果、回答率が低下してきたのではないかと指摘されていた。しかし、令和5年度の状況も考慮すると、むしろ、多数の学生が多数の講義型科目についてWEBを使った遠隔での受講を余儀なくされた結果、その延長上でWEB経由のアンケートに回答していたことも考えられる。あるいはオンラインでのアンケート以外に、授業に関する要望や質問を担当教員へ伝える手段が乏しかったため、回答率が高めに推移した可能性も考えられる。

令和5年度のアンケート回収率は23%と、前年度より6.5ポイント低下した。令和5年度5月8日に新型コロナウイルス感染症は5類感染症に位置づけられ、遠隔形式から対面形式への授業への切り替えが急速に進んだ。学生の視座に立つと、メールやmanaba上での個別指導に加えて、対面授業や面談など教員との直接的なコミュニケーション手段が再び得られるようになったことで、あえてアンケートによって意見表明する意義が薄れたのかもしれない。

令和4年度と5年度の授業評価アンケートの設問のうち、まとめの項目に関する回答状況を表2に示した。

表2 設問3, 6, 10, 13の回答状況（令和4年度～令和5年度）

令和5年度		前期（回答数：1427人）				後期（回答数：1098人）			
設問		1	2	3	4	1	2	3	4
1.3	回答数（人）	645	507	185	90	559	384	105	50
	回答割合（%）	45.2	35.5	13.0	6.3	50.9	35.0	9.6	4.6
1.6	回答数（人）	867	445	78	37	705	318	42	33
	回答割合（%）	60.8	31.2	5.5	2.6	64.2	29.0	3.8	3.0
1.10	回答数（人）	728	555	107	37	578	432	66	22
	回答割合（%）	51.0	38.9	7.5	2.6	52.6	39.3	6.0	2.0
1.13	回答数（人）	697	528	137	65	559	426	71	42
	回答割合（%）	48.8	37.0	9.6	4.6	50.9	38.8	6.5	3.8

令和4年度		前期（回答数：1820人）				後期（回答数：1197人）			
設問		1	2	3	4	1	2	3	4
1.3	回答数（人）	833	712	213	62	580	453	114	50
	回答割合（%）	45.8	39.1	11.7	3.4	48.5	37.8	9.5	4.2
1.6	回答数（人）	1124	567	103	26	739	386	42	30
	回答割合（%）	61.8	31.2	5.7	1.4	61.7	32.2	3.5	2.5
1.10	回答数（人）	908	731	158	23	559	546	76	16
	回答割合（%）	49.9	40.2	6.7	1.3	46.7	45.6	6.3	1.3
1.13	回答数（人）	842	766	170	42	608	474	82	33
	回答割合（%）	46.3	42.1	9.3	2.3	50.8	39.6	6.9	2.8

表2の設問1.3, 1.6, 1.10, 1.13は、上述した設問のうち、「設問3 総合的に見て、

この授業はわかりやすかったですか」，「設問 6 総合的に見て、この授業の運営はどうでしたか」，「設問 10 この授業へのあなた自身の取り組み、この授業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうですか」，「設問 13 総合的に見て、授業の難易度と進度は適切でしたか」にそれぞれ対応している。回答の選択肢には「1」から「4」の4段階があり、「1」が最も高い評価、「4」が最も低い評価となっている。令和5年度の調査では、これらの4つの設問に対して回答「1」と「2」を合わせて80%以上の数値が出ており、回答「4」を選んだ学生は6.3%以下であった。回答した学生の大多数は、理学部の授業に概ね満足していると判断できる。

ここで、授業のわかりやすさに関する設問 3 に注目する。昨年度の報告書によると、設問 3 に対して否定的な回答である「3」と「4」を合わせた率は、パンデミック期間に入る前の令和元年度には前期 19.1%，後期 20.2%，令和2年度には前期 18.2%，後期 10.9%，令和3年度には前期 15.7%，後期 12.7%，令和4年度には前期 15.1%，後期 13.7%であった。その後、令和4年度には前期 15.1%，後期 13.7%，令和5年度には前期 19.3%，後期 14.2%と推移した。遠隔授業が多かった期間のほうが、わかりにくいと感じた学生の率がやや低い傾向がみられ、多数の科目を対面形式に戻した令和5年度の前期には、一時的とはいえパンデミック前の水準に戻ってしまった。多数の遠隔授業が実施されていた期間、リアルタイム形式の遠隔授業を自宅の個室など学生が好みの場所で視聴できたり、オンデマンド形式の遠隔授業では、わかりにくかった箇所を何度も繰り返し視聴したりできるなど、個々の学生の状況や理解度に応じた授講方法をとることが容易であった結果、それなりの教育効果をあげることができたのではないかと考える。令和5年度の前期は、遠隔形式から対面形式へ移行しつつあった時期にあたり、両方の形式が併用されていた科目もあり、教員側にも受講生側にも若干のとまどいがあったかもしれない。後期には、否定的な回答が14.2%に減ったので、再開した対面形式での授業に適応した学生が増えたと推測される。教員側も、令和2年度～令和4年度の間に授業に取り入れたWEBを介した教授法も駆使しながら、対面授業を実施していると考えられる。授業のわかりやすさは、教育効果の本質であり、今後の推移を注視していきたい。

授業運営に関する設問 6 に対して肯定的な回答である「1」と「2」を合わせた率は、令和元年度には前期 91.6%，後期 92.1%，令和2年度には前期 89.5%，後期 92.5%，令和3年度は前期 91.6%，後期 94.8%，令和4年度には前期 93.0%，後期 93.9%，そして、令和5年度には92.0%，後期 93.2%で、概ね高水準を維持してきている。また、学生の自己評価に関する設問番号 10 に対して回答「1」と「2」を合わせた率は、令和元年度には前期 85.7%、後期 86.6%，令和2年度には前期 88.8%，後期 90.3%令和3年度は前期 88.9%，後期 91.6%，令和4年度には前期 90.1%，後期 92.3%，そして、令和5年度には前期 89.9%，

後期 91.9%で、やはり高水準を維持してきた。大部分の学生が授業運営について大きな不満を感じておらず、自己評価も高いことが見て取れる。特に、以前は教室において紙媒体を使って実施されていた小テストやミニツツペーパーを使った出席確認に代わり、令和2年度から主にmanabaなどを使った小テストやレポート提出が推奨された。当初は課題量が多すぎるとか、インターネットの接続環境の不具合があり対応しきれないなどという学生からの声もあったようだが、その後、適正な状態に落ち着いた感があった。前期よりも後期の方がわずかに高い数値となっているのは、回答率が良い1年生が後期に大学生活への適応が進むことと関連があるかもしれない。

授業の難易度や進度に関する設問13について否定的な回答である「3」と「4」を合わせた率は、令和元年度には前期14.2%、後期14.4%、令和2年度は前期12.8%、後期9.4%、令和3年度は前期12.5%、後期8.9%、令和4年度は前期11.5%、後期9.7%、そして令和5年度は前期14.2%、後期10.3%であった。難しいと感じることは、設問3でわかりにくいと感じることと連動していると思われる。なお、授業の進度については、速いと感じる学生と遅いと感じる学生の両方が不適切だったと回答する可能性があるかもしれない。

(2) 教員による授業アンケート自己分析

理学部では、令和2年度以降、授業アンケートの回答結果を担当教員自身がmanaba上の集計結果を確認し、自己分析と今後の対応を検討し、指定された様式で学生係へ提出することとしている。表3は令和2年度から5年度までの提出状況を示している。

表3 「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の提出状況

	令和2年度			令和3年度			令和4年度			令和5年度		
	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
提出科目数	29	34	63	39	53	92	32	43	75	41	37	78
提出教員数	19	16	35	23	33	56	26	29	55	26	21	47

提出教員数は令和2年度には35名であったが、翌年以降、56名、55名、47名と、8割以上の教員が提出している。提出科目数については、令和3年度に92科目と突出して多かったが、令和4年度に「授業アンケートの自己分析と今後の対応」に記載する内容を見直したことによる影響か、令和4年度には75科目、令和5年度には78科目とやや減少した。

遠隔授業はもとより対面授業においても、受講生の授業に対する評価を担当教員が多角的に把握することは難しい。十分ではないにしても、授業アンケートは学生が感じたままを担当教員が知ることができる手段であり、教員自身が気づかなかった自分の授業の長所や改善点を客観的に検討する材料になりうる。自由記入欄に肯定的な意見があれば、次の

授業への意欲が高まるし、否定的な意見についても、授業自体の問題点だけでなく、意見を出すに至った背景も検討することによって、広範な教育スキルを向上させることに繋がると考えられる。

一般に、アンケート調査においては、対象物に対して特に満足感も不満感も感じていない中間層の回答モチベーションが最初に低下していくと言われている。授業評価アンケートにおいて、自由記入欄に入力された少数意見に目を向けることは担当教員にとって非常に重要なことであるが、一部の受講生の回答が担当教員の授業改善に大きな影響を与えることは必ずしも良い結果につながるとは限らない。また、教員側にとっては匿名のアンケートなので、各意見への直接的なフィードバックはできない。課題は少なくないが、今後も、授業時間中に回答時間を設けたり、中間期のアンケート実施を促したりするなど、回答率や当該年度の受講生の満足度を上げる努力をしていきたい。また、授業アンケートの自己分析については、FD 活動の中で最も教員一人一人の教育力の向上に直結する作業であるので、高い参加率を維持していきたいと考える。

2. FD 講演会

(1) 理工学研究科・理学部・工学部合同 FD 講演会

令和5年度は、工学系委員が世話役となって、令和5年10月18日13時00分～14時00分に理工系総合研究棟 2 階のプレゼンテーションルームにおいて実施された。オンラインによる同時配信もおこなわれ、理学系教員38名が参加した。詳細は、本報告書の理工学研究科の該当項目を参照いただきたい。

(2) 理学部FD講演会

令和5年度の理学部FD講演会については、前年度にたてた計画では講演会を開催することになっていたが適任者が見つからず、7月開催の第3回理学部FD委員会において審議の結果、理学部内で討論会を行うことになった。新型コロナウイルス感染症が5類に移行した後、パンデミック下における研究活動の制限や授業の遠隔化が学生にどのような影響をもたらしたかについて理学部教員間でしばしば話題になっていた。そこで、討論会のテーマを「コロナ下～withコロナにおける学生の変化」とした。

まず、8月に理学部内の教職員に対してWEBによる無記名事前アンケートを実施した結果、22名の教員から回答があった。また、数理情報科学、物理・宇宙、化学、生物学、地球科学のFD委員による5プログラム内での聴き取り、および学生係等の職員からの聴き取りにより、具体的な所見や意見が得られた。9月20日開催の理学部教授会後の15時30分～16時30分にリアルタイムオンラインにより、FD企画パネルディスカッションを実施し、理学部教員

50名が参加した。教務委員会副委員長と学生係長にコメンテーターを、全体の総括を教務担当副院長に依頼し、5プログラムのFD委員がパネラーをFD委員会委員長が司会を務め、学生係等が配信等の作業を担当した。

パネルディスカッションの冒頭で、司会のFD委員長が事前アンケート結果の説明をおこなった。まず、コロナ下（令和2年度～4年度）の学生の変化について複数回答を求めたところ、問題が生じた事柄は「授業の実施 13、学生との意思疎通 13、研究指導 12、実験や実習の実施 8、学生の学修や研究の意欲 8、学生に係る人間関係や言動 4、学生からの要望やクレーム 3、平成31年度以前と変わらない 4、その他 2」（数字は票数、以下同じ）という結果になった。これらの問題が解決した時期は「令和2年度～4年度 5、令和5年度 8、未解決 3、その他 2、該当しない 4」となった。次に、withコロナとされる令和5年度の4月または5月8日以降において、「コロナ前やコロナ下と授業のやり方や内容を変えた 9、コロナ前やコロナ下と研究指導のやり方や内容を変えた 7、コロナ前の状況に戻った 6、コロナ前やコロナ下と実験・実習のやり方や内容を変えた 5、変化なし 3、その他 3」となった。また、対面授業や研究指導におけるさまざまな制限があったことで得られた事柄として、リモートワーク、動画編集、manaba、zoomの使い方の習熟、遠隔授業、コンテンツ作成のスキル向上を挙げた教員が多かった。これらのスキルは授業の配信だけでなく、学生との情報共有や個別指導、学内外の会議、学会活動、研究室のミーティングにも有用で、授業準備や提出物の取扱の負担軽減や、学内分掌のような各種業務の効率化にも役立つとした意見もあった。さらに、教えることの意味や教員の存在意義を再考し、授業計画の見直しの機会になったという回答もあった。

次にパネラーから各プログラムの教員や自身の見解や関心事について発言があった。ここでは類似した内容の意見を編集して順不同で記しておく。見解としては「友達ができにくく学生の連帯感が薄い」「遠隔授業により低学年で身につけるべき基礎分野の理解が不十分ではないか」「意欲の低下が激しい」「できる学生とそうでない学生の差が際立つ」「コロナ下のネガティブな影響は能動的でない一部の学生に強く出ている」「全体に話していると聞き流され、個人に話すと他の学生が聞いていない」「遠隔授業では学生の反応が捉えにくい」「学生が研究室に来る頻度が減った」「代替措置を求めやすくなり休みの学生に寛大な対応をせざるをえない」などがあった。関心事としては、「学生の変化はコロナの影響なのか、理学部改組の影響なのか」「令和2年入生の状況確認とフォロー」「リアルタイム配信の方法論」「メタバース空間での講義」「オンライン試験の方法」「次の感染拡大時の対応」「対面授業に適した学生と遠隔授業に適した学生への対応」「遠隔授業と対面授業の利点を生かした授業のあり方」などが挙げられた。

事務系からの聴き取り結果として「入学時の写真撮影ができず、顔と名前が一致しない」「教室の場所を把握できていない」「対面が苦手で、遠隔が良い学生もいた」「当初は教員のためのオンライン講義の準備が大変だった」「学生とすれ違う際は挨拶を心がけ、元気のない学生には声かけを行う等気配りに努めている」「一人暮らしの学生が教職員に気軽に話ができる雰囲気づくりは大切」「大学側から提供した情報を把握できていない学生が以前よりも多い」「学生同士の関係が希薄になり情報共有する機会が減ったのではないか」という回答があったことが学生係長より紹介された。教務委員会副委員長からは、パンデミック自体がカリキュラムへ影響したわけではないが、授業や研究指導への影響は大きかったと推測されること、教務担当副学部長からは、今後の学生の状況を注視していく必要があるという言及があった。パネラーやオンライン参加の教員からは、改組の影響と区別して考察すべきであること、対面授業再開後もパンデミック下で得られたスキルを生かすことが重要であること、多様な学生の存在に留意すべきことなども重要であるなどの発言があった。最後に、理学部長から、短時間ではあったが活発な意見交換ができたとのコメントがあった。

3. FD活動への参加状況

令和4年度～5年度の専任教員のFD活動参加率を表4に示した。

表4. 理学部専任教員のFD参加率

令和5年度	
合計参加率	89.3%(専任教員56名中50名参加)
画別参加	
理学部FD講演会	80.4%(専任教員56名中45名参加)
理工合同FD講演会	67.9%(専任教員56名中38名参加)
授業計画改善	58.9%(専任教員56名中33名参加)
授業公開・授業参観	8.9%(専任教員56名中 5名参加)
全学FD講演会等	28.3%(専任教員56名中13名参加)
基礎教育科目・基礎専門科目担当者懇談会	25.0%(専任教員56名中14名参加)
令和4年度	
合計参加率	93.1%(専任教員58名中54名参加)
画別参加	
理学部FD講演会	17.2%(専任教員58名中10名参加)
理工合同FD講演会	63.8%(専任教員58名中37名参加)
授業計画改善	63.8%(専任教員58名中37名参加)
授業公開・授業参観	10.3%(専任教員58名中 6名参加)
教学IRセミナー	5.2%(専任教員58名中 3名参加)
基礎教育科目・基礎専門科目担当者懇談会	44.8%(専任教員58名中26名参加)

合計参加率について、令和2年度は88%、令和3年度は95%、令和4年度は93.1%、そして令和5年度は89.3%であった。理学部FD講演会の参加率は、令和3年度には77.6%であった。

令和4年度には、17.2%と低かったが、令和5年度には80.4%という高率に回復した。理工合同のFD講演会については前年度並みの67.9%の参加率であった。

授業計画改善書である「授業アンケート自己分析と今後の対応」の提出については、令和2年度には40.0%、令和3年度には65.5%、令和4年度には63.8%であったが、令和5年度は58.9%と5.1ポイント低下した。本稿の表3を見ると、提出された科目数は増加しているが、提出した教員数が減少したことがわかる。改善すべき点が見当たらない科目について「該当なし」あるいは「問題なし」として提出いただくことにも意味があると考え、次年度にはその点も含めて説明を行い、提出者の数を100%に近づける努力をしていくことが必要だと考える。

授業公開・授業参観については、令和2年度には1名、令和3年度も1名、令和4年度は6名で、令和5年度は5名で、低い数字で推移している。令和4年度から、あらかじめ録画したオンデマンド授業の視聴についても公開と参観の対象とした。このことにより参観しやすくなっているのだが、その利便性について周知が不足していた。今後とも5プログラムにおいてベストティーチャーとして推薦された教員などにオンデマンド形式で参観可能なビデオを作成いただき、新たな公開授業を理学部教員に対して視聴方法を周知して、参観を促していきたい。自分の専門とは異なる分野の教員による授業は、良質の教養番組を視聴するようで興味深く、想定外のヒントを得られる貴重な機会でもあるので、理学部教員に対して、折にふれて視聴方法を周知し、参観を促していきたい。

全学企画による講演会の参加率は、この数年5%前後で推移していたが、令和5年度は28.3%に上昇した。例年に比べて、開催回数が多かったこと、生成系AIへの対応など急速に関心が高まった話題などをタイムリーに取り上げたこと、基本的にオンライン開催であり、後日のビデオ視聴も可能としていただいた企画もあったことにより、参加者数が前年度の4倍超となったと考えられる。

理学部基礎教育科目・基礎専門科目の担当者懇談会については、令和4年度に26名と、専任教員の44.8%の参加があったが、令和5年度については14名と、25%の参加率となった。詳細は、次項「4. その他のFD委員会関係の取組」において扱う。

4. その他のFD委員会関係の取組み

(1) 理学部基礎教育科目・基礎専門科目担当者懇談会

令和5年9月5日14時30分～15時30分に、理学部大会議室において、理学部基礎教育科目・基礎専門科目 担当者懇談会を開催した。基礎教育科目や基礎専門科目に属する科目群は、令和2年度の理学部改組の際に重要な取組として位置付けられている。例えば、1年次の前期には選択必修の基礎教育科目として「数学概論」「物理学概論」「化学概論」「生物学

概論」「地学概論」が開講され、このうち3科目の単位取得が卒業要件となっている。また、1年次の後期には、選択必修の基礎専門科目として「線形代数学基礎」「微分積分学基礎」「力学基礎」「物理数学基礎」「無機化学基礎・物理化学基礎」「有機化学基礎・生化学基礎」「分子・細部生物学基礎」「多様性生物学基礎」「地形学」が開講され、4科目8単位の取得が卒業要件となっている。令和3年度に理学部執行部の主導で、これらの科目を担当する教員の懇談会を実施し、5プログラムの枠を超えて問題点を発掘し共有することができた。これらの科目群は、改組後の理学部教育において重要な位置を占めるため、さらに教育効果の高いものとするために、令和4年度には、時間外学習やアクティブラーニングなどの話題も含めて、FD委員会が主体となって懇談会を継続開催することになり、成績評価の分布状況や3年生の単位取得状況、時間外学習の効果や課題を中心に意見交換した。令和5年度には、オムニバス科目代表者のみが出席したケースもあり、参加者数は令和4年度を下回った。しかし、事前に分担教員から意見聴取していた代表者も多く、成績評価の分布状況や3年生の単位取得状況を中心に熱心な意見交換が行われた。その結果、成績分布については特に問題はなく、パンデミック下における遠隔授業も含めて、令和5年度に改組の完成年度を迎える新カリキュラムが、概ね軌道に乗ったことを確認した。なお、令和6年度からキャップ制に変更が加えられることによって、教員免許等の資格取得や再履修科目の単位取得への影響を危惧する声が聞かれた。また、授業の前後に設定している時間外学習時間の効果や運用についても意見交換が行われた。

(2) 成績評価の分布の確認と授業改善計画書様式

理学部では、内部質保証システムを構成する一つの要素として、自己点検評価や授業改善に活用するため、成績評価の分布に関する情報を組織的に確認している。年に2回、全教員へ直前の期に関する成績評価分布表を配布し、各プログラムにおいて確認する。各プログラムのFD委員は学生係へ確認結果を報告し、理学部FD委員会において確認した後、理学部代議員会および教授会において報告することとしている。また、令和3年度に授業計画改善書に相当する「授業アンケートの自己分析と今後の対応」に、成績評価の分布を確認したかどうかを記入する欄を追加した。これにより、それぞれの科目の成績分布について、担当教員自身が確認していることを把握できるようになった。令和4年度には、この「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の様式を見直し、授業参観の有無についての記入欄を設け、提出を依頼する際に添付する記入例についても具体的に示すこととした。昨年度の報告書では、様式や記入例の見直しによって、教員の授業改善に対する取組がより具体的に見えるようになったとされ、一定の効果が認められたので、令和5年度には様式の変更をせず、現在の様式の使用を続けることとした。

(3) 授業公開・授業参観のオンデマンドでの実施

令和4年度に、授業公開・授業参観にオンデマンド形式を新たに取り入れた。具体的には、理学部ベストティーチャー賞の受賞歴のある教員などから授業の動画ファイルを提供してもらい、理学部広報委員会の協力を得てYouTubeで学部内限定の公開体制を整えた。それにより前年度まで1名にとどまっていた参加者が6名に増えた。令和4年度には授業参観実施報告書の様式も改め、参観した教員から授業を公開した教員へのコメントが届けられるようにした。令和5年度には1名の減少があったが、YouTubeによる公開と授業参観実施報告書の様式については効果的な方法であると判断し、今後も継続していくこととした。

(4) ベストティーチャー賞の選考と推薦

令和3年度には「鹿児島大学ベストティーチャー賞実施要項」の一部改正があり、理学部と理工学研究科理学系を合わせた「カテゴリー4」の教員の中から受賞候補者を選考することになった。また、複数の教員で授業を担当している科目もあることから、複数の教員からなるチームも選考の対象とできるようになり、令和4年度には、地球科学プログラムを担当する3名の教員チームを理学部ベストティーチャー賞として選考し、鹿児島大学ベストティーチャー最優秀賞を受賞した。令和5年度は数理情報科学プログラムの教員1名を理学部ベストティーチャー賞として選考し、鹿児島大学ベストティーチャー賞受賞候補者として推薦した。

(5) 各種アンケート調査

全学のFD委員会からの情報を参照すると、令和4年12月1日～令和5年1月20日に学部2年生と最終学年生に対して令和4年度全国学生調査が実施され、理学部2年生の8.2%、4年生の7.8%が回答している。また、授業・学生生活に関するアンケートが令和6年1月29日～2月16日に学部生および大学院生に対して実施され、前期においては、理学部生27.8%にあたる223名、後期においては14.8%にあたる118名から回答が得られている。

5 特筆すべき取組や改善事例

改組の完成年度を過ぎ、科目の統廃合や新規開講などのカリキュラムの具体的な見直しを開始できた。例えば、昨年度に改善対象として挙げた「理学とキャリアを考える」や概論科目などのオムニバス科目の担当者の調整や授業内容の改善が進んでいる。

FD企画のうち、令和4年度に授業公開・参観にオンデマンド授業を取り入れ、授業計画改善書「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の様式に授業参観の有無についての記入

欄を設けた結果、参観数の極端な低下を防ぐことができた。また、理学部FD講演会について、事前アンケートをおこなって関心を高め、教授会開催日にパネルディスカッション形式で実施するという取組をおこなった結果、参加率を大幅に回復させることができた。

昨年度、開催を検討しながら学生との懇談会は実現できなかった。理学部には大括り入試により入学し2年進級時に所属プログラムを決める1年生のクラスがあり、理学部FD委員長が進路相談を担当している。そこで、令和6年1月30日に進級説明会をかねた対面での懇談会を開き、希望プログラムの調査と合わせて意見や要望を受け付けた。一部の学生の意見を受けて、学生係と連携して翌年度の新入生オリエンテーション用配布資料の改善を実施した。

おわりに

令和5年度には、学生からの授業アンケート回収率にやや低下がみられた。定量的モニタリングの精度を維持し教育改善に繋げるためにも、回答しやすい環境づくりに努めたい。全学的に75%を超えることが求められている専任教員のFD参加率については、前年度と比べて大幅に低下することなく、一部は回復に転じた。授業評価アンケートの実施が中間期も含めて年4回、自己分析結果の提出の機会が2回あり、近年は理学部FD講演会、理工学研究科・理学部・工学部合同FD講演会が1回ずつ開催され、オンデマンド授業参観を含めると、教員がFD活動へ参加できる機会は増えている。参加率100%が目標であるが、まずは90%超の参加率の維持を目標に、関心を持ちやすく参加しやすい企画をたてる必要がある。むしろ、FD活動の目的は参加率の上昇や維持ではなく、教育力の向上にある。理学部FD委員会としては、次年度においても、負担感が少なく効果的なFD活動のあり方を模索していきたいと考えている。

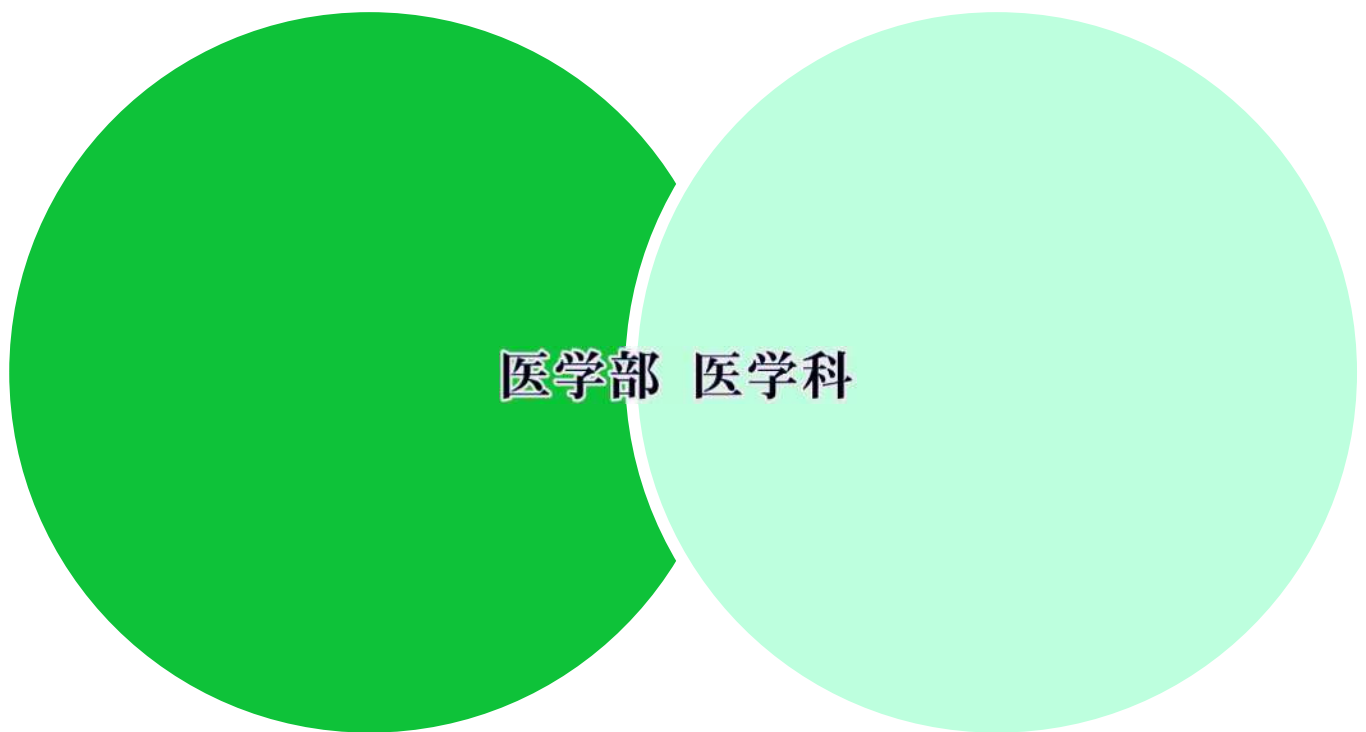
最後に、大学 IR コンソーシアム・アンケート令和4年度実施分の結果について、分析・評価した。課題として挙げた点など、概略をまとめた表を次ページ以降に掲載し、令和5年度理学部FD活動報告とする。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果(令和4 年度実施分)の分析について

(理) 学部

評価する点	1 年生について・・(1) 8 割が卒業後の進路の展望を有し、学習状況は概ね良好である。(2)入学後に異文化理解や数理的能力が向上したとする率が高い。(3)大学への適応度、充実感、満足度は概ね良好である。 3 年生について・・(1)9 割が卒業後の進路の展望を有している。(2)9 割が入学後に専門分野や学科の知識向上を自覚し、数理的能力が向上した学生も高水準を維持している。(3)大学への適応度、充実感は概ね良好である。
課題と考える点 (3 点以上)	1 年生について・・(1) 実験など学生が体験的に学ぶ機会が少ない。(2) 8 割が教員と面談の機会がなく、教員と顔見知りになったとする率が低い。(3)学生同士の一体感が乏しい。 3 年生について・・(1)授業内容と日常生活や将来の仕事との関連の理解に困難を感じている。(2)異文化の人々と協力する能力、外国語の運用能力、グローバルな問題の理解が向上したとする率が低い。(3)学生同士の一体感が乏しい。
課題への 具体的な対応案	1 年生について・・教務委員会等と緊密に連絡しつつ、(1)時間割の制約上、実験実習の新規開講は難しいが、カリキュラムや授業の工夫に関して検討を続ける。(2) 学部のオリエンテーションにおいて教員との面談のアポイントメントの取り方や連絡方法について、より具体的に説明を行う。(3) 遠隔授業から対面授業へ戻すことができたので、理学部開講科目で設けている時間外学習時間などに学生同士のコミュニケーションの機会を増やすことにより、一体感の醸成を図る。 3 年生について・・教務委員会等と緊密に連絡しつつ、(1)各種資格に関する説明会や関連科目において、理学部の教育・研究の概要と社会との関連性の理解を深める内容となるように工夫する。(2)全学レベルでの海外実習や留学に関する情報提供に努める。(3) 遠隔授業から対面授業へ戻すことができたので、理学部開講科目で設けている時間外学習時間や実験実習科目において学生同士のコミュニケーションの機会を増やすことにより、一体感の醸成を図る。
昨年度挙げた 改善・対応策 による成果	令和 2 年度の学部改組において 1 年生向け「基礎教育科目」や 2 年生以上向けに専門外の分野も学べる「基礎専門科目」を整備し、担当教員の懇談会を実施した。基礎知識や勉学意欲が異なる学生に対応するための課題を共有し、活発な意見交換により有益な提案が得られた。FD 委員会の企画として、コロナ下における学生の変化に関するパネルディスカッションを開催し、多数の教員の参加により、学生の状況や要因の多様性に関する情報共有と今後の対応への多くの提案がなされた。また、年度末に大括り入学の 1 年生との懇談会を企画した。これらの成果を参考にしつつ、令和 5 年度で改組の完成年度を迎えたことと、教員の新規採用等が進み始めたことを背景として、教務委員会等において、科目の統廃合や新規開講などのカリキュラムの具体的な見直しを開始できた。例えば、昨年度に改善対象として挙げた「理学とキャリアを考える」や概論科目などのオムニバス科目の担当者の調整や授業内容の改善が進んでいる。

以前の結果や他の調査結果・データ等との比較を通じて明らかに なった点や気付いた点	1年生、3年生ともに、前回、授業や実験に出る時間が20時間以上と答えた学生、教員と面談したことがある学生、アルバイトや部活動をする学生が少なかったが、今回も同様の傾向がみられた。これらが、感染症対策のための遠隔授業化に起因するのであれば、今後は増加に転じる可能性がある。また、読書をしない学生の率が高止まりしているが、マスメディアによると全国的な傾向とのことである。いずれも今後の推移を注視する必要がある。
---	--



令和5年度医学部医学科 FD 活動報告

1. はじめに

医学部医学科では、1)『学生による授業評価アンケートの実施と、アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集』、2)『卒業生アンケートの実施』、3)『学内講師による医学教育講演会及び研修会』、4)『学外講師による医学教育講演会及び研修会』を実施した。上記4つの活動計画に基づき、「専任教員のうち75%以上のFD活動参加」の達成を目標に定め、令和5年度のFD活動を行ったので報告する。

2-1. 学生による授業評価アンケート

本学科では全授業科目（実習を含む）を対象とした学生による授業評価アンケートを平成23年度から実施しており、令和5年度も同様に実施した。まず1年生から4年生までの専門教育科目48科目（1科目の中で複数回アンケートを行っている科目あり、選択科目・臨床実習を除く）については、授業最終回に回答時間を設けてもらい、アンケートを実施した。

授業評価アンケートの実施方法について、昨年度のFD委員会医学科部会において検討し、集計の効率化を図る観点からも、manaba上での実施によるwebアンケートとすることとなっており、今年度がwebアンケート2年目となっている。

1年生から4年生までのアンケートは、学生の学習の実態とカリキュラム、教員の指導方法について具体的な改善点を明らかにするために実施し、学生自身の学習に対する自己評価（4項目）、科目について（8項目）、講師の指導について（5項目）、全体評価（1項目）の各項目について5段階の評定尺度で回答し、さらに自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。

なお、結果は医学教務係が速やかに集計した後、結果及び自由記述内容を科目責任者とコースコーディネーターを通じ各教員に報告した。

次に4年次の1月から開始する臨床実習では、実習開始前のオリエンテーション時にアンケートの目的や内容、実施方法を説明した後、それぞれの臨床実習ユニット（診療科をグループに分けたもの）での実習について、実習終了時に授業評価アンケートを実施した。また、6年生の選択実習では、6年次OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）終了時にアンケートを実施した。

5年生から6年生までのアンケートは自身の学習に対する評価（6項目）、実習計画・実施について（5項目）、指導について（1項目）、全体評価（1項目）の各項目について3～11段階での評定尺度における回答を集計し、自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。

2-2. アンケート結果

全てのアンケート結果は医学部 FD 委員会医学科部会、医学部教務委員会医学科部会、医学科会議にそれぞれ報告した。以下にアンケート結果の概要を記載する。

1 年生から 4 年生までの専門教育科目全 51 科目から計 2,057 件（平均 40 件／科目）、臨床実習では前期（4 年次の 1 月から 5 年次の 7 月上旬）136 件、後期（7 月中旬から翌 1 月）121 件の計 257 件（平均 32 件／臨床実習 8 ユニット）、6 年生の選択実習では 202 件の回答が得られた。昨年度と比較して、実習の回答率は大きく減少しており、1～4 年生のアンケートに関しても、3 割近く回答率を落としている。紙ベースから web 回答方式へ移行し、当初行っていた、授業後の呼びかけなどが徹底できなくなっていることが原因と考えられる。これについては、来年度の課題として、授業最終回で時間を作る等回答率を上げる工夫を考え、改善していくこと予定である。

アンケートの自身の学習に対する評価という項目について、1 年生から 4 年生までの専門教育科目（【別表 1】参照）においては、令和 4 年度の評価平均が 3.99～4.13 であったのに対し、令和 5 年度は 3.99～4.23 となっている。5 年生の臨床実習（【別表 2】参照）では令和 4 年度の評価平均が 4.42～4.63 であったのに対し、令和 5 年度は 4.40～4.63、6 年生の選択実習（【別表 3】参照）では令和 4 年度の評価平均が 4.18～4.78 であったのに対し、令和 5 年度は 4.38～4.80 となっていて増加している。低学年、主に 1 年生のうちは、まだ高校までの「受動的学習」から大学における「能動的学習」への意識の変革が進まず、自主的な学習が十分に行われているとは言えない状況ではあるが、学年が進むにつれて自主的な学習に対する意識の向上が見受けられる。

なお、臨床実習では、学生を診療の課題解決の場に参加させる「診療参加型実習」の実践が求められている中、学生の回答における診療参加型の割合は、臨床実習では令和 4 年度が 41.5%に対して令和 5 年度は 48.4%と増加した。

これまでは新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、多くの診療科が見学・講義型の実習を実施したことにより、「診療参加型」の割合が少なかったが、今年度はこれまでの新型コロナウイルス感染症対策のノウハウが蓄積し、可能な範囲で診療参加型実習を実施できたことにより、「診療参加型」の割合が増加したと考えられる。

また講師や指導医の指導については、昨年度と比較し同等以上の評価を得られ、教育関連の FD が指導に役立っていることが改善事例として挙げられる。

【別表1】授業評価アンケート集計結果(1年生～4年生)								
自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	該当なし	評価平均	SD
積極的に学習した(質問・予習・復習)	0.9	3.1	11.0	53.5	31.5		4.11	0.75
教科書や参考文献で広く、深く学習した	1.0	5.6	15.4	49.6	28.4		3.99	0.82
原理の理解や臨床への応用を考えながら学習した	0.8	2.3	11.3	50.8	33.3		4.15	0.74
グループ学習ではグループのために貢献した	0.3	0.5	5.0	35.4	28.6	30.1	4.23	0.68
科目について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	該当なし	評価平均	SD
シラバスには必要な情報がわかりやすく記載されていた	0.9	3.0	16.7	57.7	21.7		3.96	0.72
学習内容は有用である	1.1	1.4	7.4	50.2	39.9		4.26	0.70
効果的な学習方法が用いられた	2.2	2.7	12.0	54.0	29.1		4.05	0.78
他の授業との関連や発展がよく理解できた	1.8	2.8	11.5	53.3	30.5		4.08	0.77
科目の教育目標に沿った評価(範囲、内容、レベル)だった	2.2	3.1	9.0	55.8	30.0		4.08	0.76
学習した領域への興味、関心が高まった	2.3	2.8	10.3	51.3	33.4		4.11	0.80
難易度は	1 難しい	2	3 適切	4	5 易しい	該当なし	評価平均	SD
	10.0	23.1	63.2	3.0	0.7		2.61	0.64
時間数は	1 長い	2	3 適切	4	5 短い	該当なし	評価平均	SD
	4.3	8.3	72.5	11.1	3.9		2.98	0.58
講師の指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	該当なし	評価平均	SD
講義・実習等はよく準備されていた	1.2	2.4	10.6	53.5	32.3		4.13	0.74
理解を促すための工夫がされていた	1.6	2.7	12.0	52.3	31.4		4.09	0.77
質問を促し、積極的に質問に応じてくれた	0.9	2.4	15.0	48.0	33.7		4.11	0.76
学習領域の講師として適切であった	1.4	2.3	9.6	49.6	37.1		4.19	0.75
授業を担当した複数の講師は連携して効率的に指導した	1.7	3.1	11.0	44.2	30.9	9.1	4.09	0.80
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	該当なし	評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	2.3	3.1	13.0	50.9	30.7		4.05	0.80

【別表2】臨床実習アンケート集計結果(5年生)								
自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った		評価平均	SD
積極的に実習した	0.0%	0.8%	1.7%	45.9%	51.7%		4.48	0.55
実習に関連する項目を自主学習した	0.0%	0.0%	1.9%	48.2%	49.9%		4.48	0.55
診療のルールに従って行動した	0.0%	0.0%	3.2%	35.5%	61.3%		4.58	0.55
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.0%	0.0%	2.8%	31.5%	65.8%		4.63	0.53
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.0%	0.8%	4.7%	47.9%	46.6%		4.40	0.64
実習計画・実施について							平均	SD
主な実習方法は								
診療参加型							48.4%	1.80
模擬診療型							27.6%	1.62
見学・講義							47.8%	1.68
指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.0%	0.9%	5.6%	40.5%	53.0%		4.46	0.59
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
この実習を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.0%	0.4%	7.6%	38.7%	53.3%		4.45	0.61

【別表3】選択実習アンケート集計結果(6年生)								
自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った		評価平均	SD
積極的に実習した	0.0%	0.7%	8.0%	43.1%	48.2%		4.39	0.66
実習に関連する項目を自主学習した	0.0%	0.7%	4.4%	38.0%	56.9%		4.51	0.62
診療のルールに従って行動した	0.0%	0.0%	0.0%	38.0%	62.0%		4.62	0.49
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.0%	0.0%	5.8%	8.8%	85.4%		4.80	0.53
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.0%	1.5%	11.7%	34.3%	52.6%		4.38	0.75
実習計画・実施について							平均	SD
主な実習方法は								
診療参加型							40.1%	2.79
模擬診療型							22.1%	2.41
見学・講義							49.1%	2.83
指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	1.5%	0.0%	1.5%	32.8%	64.2%		4.58	0.67
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
この実習を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.7%	0.0%	2.9%	30.7%	65.7%		4.61	0.62

2－3．アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集

以前から授業（実習）評価アンケートの結果を各担当教員にフィードバックしていたが、平成 28 年度からそのアンケート結果等に対する各担当教員からの意見収集を開始している。

実施方法については、授業（実習）評価アンケート結果とともに意見収集のための様式をメールで送付し、各科目の責任者及びコースコーディネーターが担当教員の意見を取りまとめた上で、様式に記入し、学務課医学教務係に提出するという形で行った。

様式については、授業評価アンケート集計結果にみられる学生の要望・傾向等の分析及び評価について、学生の要望・傾向等に対する授業科目への反映について、その他（授業評価アンケートに対するご意見など）という 3 項目を用意し、それぞれに対する意見を記入してもらった。

意見収集の結果として、28 科目延べ 45 名の教員から回答が得られた。昨年に引き続き、学生の意見等を今後の授業に反映させる必要があるという意見が大多数であり、PDCA サイクルの活性化という当初の目的が十分に達成されたと考えられる。教員からの意見を踏まえ、必要とされる教育的素養について議論を行い、それらを改善できるような FD 研修会の開催を今後も継続して検討していく予定である。

3. 卒業生アンケートの実施

医学科では教育内容やカリキュラム等の現状分析並びに改善を目的として、平成 28 年度から卒後 3 年目と 10 年目の卒業生に対してアンケート調査を実施している。実施方法は、卒業時点で学務 web システムに登録されていたメールアドレスに回答をお願いする通知を送信して依頼した。

また、回答率を上げるための取り組みとして、各世代の連絡が取れる方に連絡し、その方に学年全体へ周知依頼する。さらに大学病院の診療科長へ卒業生の名簿を送付し、診療科で把握している卒業生がいる場合はアンケートへの回答を依頼するなど行った。

今回、卒後 3 年目と 10 年目の卒業生 207 名にメールを送信し、48 件が送信不可となったため送信できたのは 159 名分。そのうち 51 名から回答を得られた。その結果、昨年同様に初期臨床研修開始時に医学英語に関する能力が不足していたとの回答が得られた。また、卒業生アンケートについては今後も継続して実施していく予定である。

実施日程	送付数	回答数		回答率
令和 5 年 5 月	159 名	合計	内訳	32.0 %
		51 名	3 年目 40 件	
			10 年目 11 件	

(以下WEBアンケートURL)

<https://forms.gle/NGbjdGVjiJkX8jWi7>

4. 学内講師による医学教育講演会及び研修会

4-1 『医学科新任教員 FD 研修会』

日 時：令和 5 年 11 月 15 日（水）15：00～16：45

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：共通教育棟 5 階 503 講義室

講 師：大脇 哲洋（医学部長）

中村 雅之（医学部教務委員会医学科部会長）

岡本 康裕（FD 委員会医学科部会長）

横尾 英孝（医歯学教育開発センター長）

対象者：医学部医学科の教職員

参加者：12 名

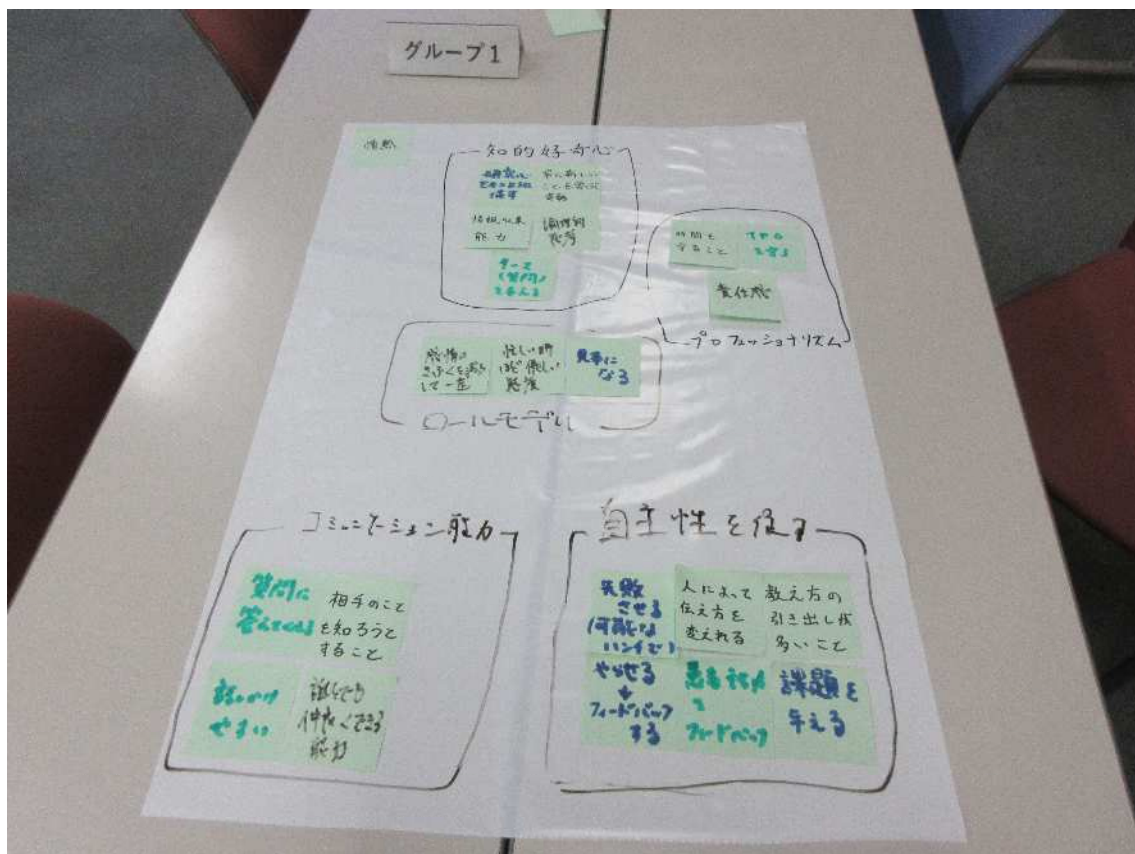
目 標：鹿児島大学医学部医学科の教育目標、教育理念、カリキュラムを理解し、本学の教員として求められる教育への関わり、責務を認識する。

総 評：令和 4 年度 1 月以降・令和 5 年度に医学科教員として採用された教員を対象に教育理念やカリキュラム、鹿児島大学の医学教育の特色と課題について講話をおこなった。また、グループワークを実施し、自由に意見交換することで、上記目標の達成に大変有意義であった。



教員に求められる振る舞いや行動、資質について

(横尾教授による KJ 法を使ったグループワーク)



4-2 FD 講演会「どう対処する？OSCE 公的化後の診療参加型臨床実習

～正統的周辺参加を意識したアプローチ～

日 時：令和5年12月19日（火）16:00～17:00

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：基礎講義実習棟1階 第1講義室

Zoom によるオンライン講演

講 師：横尾 英孝（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 医歯学教育開発センター 教授）

対象者：鹿児島大学医学部医学科の全教員

参加者：57名

- 目 標：
- ・診療参加型臨床実習推進の背景を説明できる
 - ・正統的周辺参加に基づく効果的な診療参加型臨床実習の指導法を理解し説明できる
 - ・自診療科の診療参加型臨床実習を推進させる新たな取り組みを計画・実践できる

総 評：臨床実習で学生指導に携わる教員を中心に、臨床参加型臨床実習を推進する背景を理解し、限られた資源や時間を有効に使い、戦略的かつ効果的な学生教育を実施するためのご講演をいただいた。また、当日参加できなかった方には、録画動画をオンラインで配信した。



4-3『入学試験面接評価者講習会』

日 時：令和 5 年 12 月 20 日（水）13：30～15：00

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会、医学部入試委員会医学科部会

会 場：鶴陵会館 中・小ホール

講 師：大脇 哲洋 （医学部長）

岡本 康裕 （FD委員会医学科部会長）

浅川 明弘 （入試委員会医学科部会長）

横尾 英孝 （医歯学教育開発センター長）

対象者：医学科入学試験面接担当予定教員

参加者：4 名

目 標：本学科のアドミッションポリシーに基づく評価基準に従った公平で信頼性の高い面接評価を行いながら、受験生の能力を引き出す方法について、講義やグループワークで習得する。

総 評：面接評価者にとって面接の進め方や評価基準の標準化がより重要となる一方で、面接質問事項は多様化が求められている。今回の講習会は、医師としての適正のある受験生の資質・能力を明らかにするためにはどのように質問の工夫を行えばよいか等の、ルーブリックを検討するディスカッション形式の講習会を行った。次年度以降も講習会を継続して実施していくことが望ましい。



4-4『ベストティーチャー賞受賞者による講演会』

日 時：令和6年1月24日（水）13：30～15：00

主 催：医学部FD委員会医学科部会

会 場：Zoomによるオンライン講演

講 師：大岡 唯祐 准教授（微生物学分野）

武藤 充 講師（周産母子センター）

中畑 新吾 教授（HTLV-1／ATL 病態制御学分野分野）

垣花 泰之 教授（救急・集中治療医学分野）

対象者：鹿児島大学医学部医学科の全教員

参加者：25名

目 標：授業・実習における具体的な工夫内容や進め方について、知識を習得し、教育内容・方法の改善に資する。

総 評：令和4年度医学部医学科ベストティーチャー最優秀賞、優秀賞の受賞者である4名の先生方に、授業・実習等で実践している工夫等これまでの取り組みをご紹介いただき、臨床参加型実習における効果的な指導方法を学んだ。アクティブラーニングの推進や今後の講義内容等を考えるうえで大変有意義であった。授業の質の向上に資するためにも、本講演会は継続して実施していきたい。

4-5 『チューター養成講習会』

日 時：令和 6 年 3 月 26 日（火）16：00～17：00

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会・医歯学教育開発センター

会 場：Zoom によるオンライン講演

講師：横尾 英孝 教授（医歯学教育開発センター長）

対象者：鹿児島大学医学部医学科の全教員

参加者：25 名

目 標：本講習会ではチューターとなる教員が効果的な学習とは何かという学習の基本とチュートリアルを進め方を理解し、学生の学習支援と評価方法を修得すること。

総 評：学生の学習支援と評価方法を修得し、効果的な学習をするための重要なポイントを理解することができ、効果的な講習会だった。

チュートリアル教育で修得できること

- 概念化、構造化され問題解決に応用できる知識や原理、病態とその活用、臨床推論
- 臨床医としての態度や判断
- 学習の技能(課題や学習項目の発見・設定、課題解決の方法、グループ学習の仕方等)
- 良好な対人技能(コミュニケーション、討議等)
- 自己主導型学習(学生自身が学習のイニシアチブを取る)

5 学外講師による医学教育講演会及び研修会

5-1 FD 講演会「学修者評価について」

—診療参加型臨床実習における形成的評価や学生の問題行動への対応を中心に—

日 時：令和5年9月7日（木）14：30～15：30

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：共通教育棟1階 保健学科会議室

Zoom によるオンライン講演

講 師：伊藤 彰一（千葉大学大学院医学研究院医学教育学 教授）

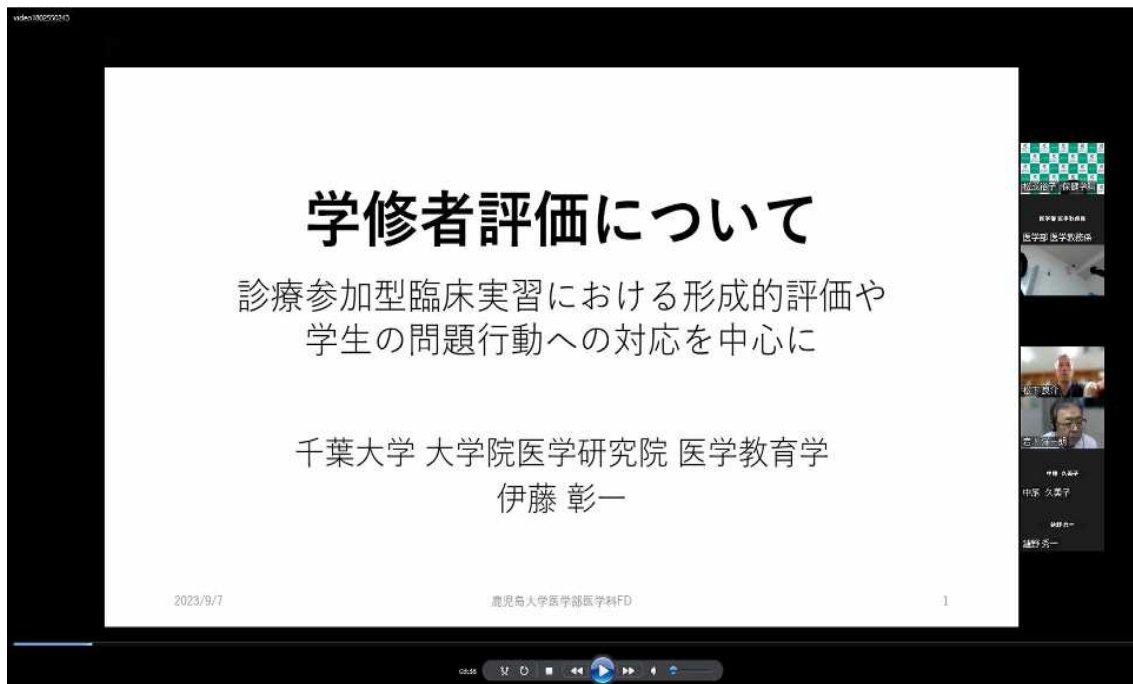
対象者：鹿児島大学医学部医学科の全教員

参加者：40名

目 標：・診療参加型臨床実習における形成的評価の充実を図るため、千葉大学の現状も含め、講演いただく。

・（一社）医学教育評価機構による2巡目受審を令和6年度に控え、外部の医学教育専門家として伊藤教授を招聘し、本学の医学教育プログラムの評価を実施するとともに、千葉大学における取組みについて紹介いただき、理解を深める

総 評：学修者評価について、学修評価の方法や学生の問題行動に対しての対応など幅広く知見を得ることができる講演をしていただいた。当日参加できなかった方には、録画動画をオンラインで配信した。



5-2 FD 講演会『子育て研究者のライフ・ワーク・バランス』

日 時：令和 5 年 12 月 22 日（金）16：20～17：05

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：Zoom によるオンライン講演

講 師：山吉 麻子 教授（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科機能性分子化学）

対象者：鹿児島大学医学部医学科の全教員、医学科 2 年生

参加者：9 名（医学科 2 年生は含まず）

目 標：「子育て研究者のライフ・ワーク・バランス」というタイトルをもとに、産休中の科研費についてや長崎大学生命医科学域のライフ・ワーク・バランス推進委員長としての取り組みについて紹介いただき、質疑応答やフリーディスカッションを行う。

総 評：産休中の科研費についてや長崎大学生命医科学域のライフ・ワーク・バランス推進委員長としての取り組みについて、「子育て研究者のライフ・ワーク・バランス」というタイトルをもとにご講演いただいた。学生からも数多く質問があり、有意義な講演となった。

6. 自己点検・評価について

令和3年度に実施した大学 IR コンソーシアム学生調査の結果、「授業をつまらなく感じた」、という項目が「ときどきした」、「ひんぱんにした」の合計で1年生が70%を、2年生で50%を超えていることが判明した。

「学生を飽きさせない工夫」として、アクティブラーニングの推進に取り組むこととし、①ベストティーチャー賞を受賞した教員による講演会や②新任教員 FD 研修会、③チューター養成講習会等の医学科の特筆すべき取り組みを行い、効果的な学習とは何かという学習の基本とチュートリアルを進め方を理解し、学生の学習支援と評価方法を修得することを目指した。

① 実施報告書

4-1 『医学科新任教員 FD 研修会』

日時：令和5年11月15日（水）15:00～16:45

主催：医学部 FD 委員会医学科部会

会場：共通教育棟5階 503講義室

講師：大脇 哲洋（医学部長）

中村 雅之（医学部教務委員会医学科部会長）

岡本 康裕（FD 委員会医学科部会長）

横尾 英孝（医学教育開発センター長）

対象者：医学部医学科の教職員

参加者：12名

目標：鹿児島大学医学部医学科の教育目標、教育理念、カリキュラムを理解し、本学の教員として求められる教育への関わり、責務を認識する。

総評：令和4年度1月以降・令和5年度に医学科教員として採用された教員を対象に教育理念やカリキュラム、鹿児島大学の医学教育の特色と課題について講話をおこなった。また、グループワークを実施し、自由に意見交換することで、上記目標の達成に大変有意義であった。



②.実施報告書

4-4『ベストティーチャー賞受賞者による講演会』

日 時：令和6年1月24日（水）13：30～15：00

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：Zoom によるオンライン講演

講 師：大岡 唯祐 准教授（微生物学分野）

武藤 充 講師（周産母子センター）

中畑 新吾 教授（HTLV-1/ATL 病態制御学分野）

垣花 泰之 教授（救急・集中治療医学分野）

対象者：鹿児島大学医学部医学科の全教員

参加者：25 名

目 標：授業・実習における具体的な工夫内容や進め方について、知識を習得し、教育内容・方法の改善に資する。

総 評：令和4年度医学部医学科ベストティーチャー最優秀賞、優秀賞の受賞者である4名の先生方に、授業・実習等で実践している工夫等これまでの取り組みをご紹介いただき、臨床参加型実習における効果的な指導方法を学んだ。アクティブラーニングの推進や今後の講義内容等を考えるうえで大変有意義であった。授業の質の向上に資するためにも、本講演会は継続して実施していきたい。

③実施報告書

4-5『チューター養成講習会』

日 時：令和6年3月26日（火）16：00～17：00

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会・医歯学教育開発センター

会 場：Zoom によるオンライン講演

講 師：横尾 英孝 教授（医歯学教育開発センター長）

対象者：鹿児島大学医学部医学科の全教員

参加者：25 名

目 標：本講習会ではチューターとなる教員が効果的な学習とは何かという学習の基本とチュートリアルを進め方を理解し、学生の学習支援と評価方法を修得すること。

総 評：学生の学習支援と評価方法を修得し、効果的な学習をするための重要なポイントを理解することができ、効果的な講習会だった。

チュートリアル教育で修得できること

- 概念化、構造化され問題解決に応用できる知識や原理、病態とその活用、臨床推論
- 臨床医としての態度や判断
- 学習の技能（課題や学習項目の発見・設定、課題解決の方法、グループ学習の仕方等）
- 良好な対人技能（コミュニケーション、討議等）
- 自己主導型学習（学生自身が学習のイニシアチブを取る）

6. おわりに

令和 5 は前述の 4 つの活動計画に基づいて本学科の FD 活動を行ったが、最終的な専任教員の参加率は 75.5% (医学科所属教員数 143 人中 108 人参加) となり、目標に定めた「専任教員のうち 75%以上の FD 活動参加」は達成された。

「医学教育や診療参加型実習についての学外講師による講演会」についても、今年度は千葉大学の伊藤先生、長崎大学の山吉先生をお招きして実施した。

また医歯学教育開発センターの横尾先生による、臨床実習に関する講習、チューター教員養成講座等幅広く講演いただき、FD 活動が活性化した。

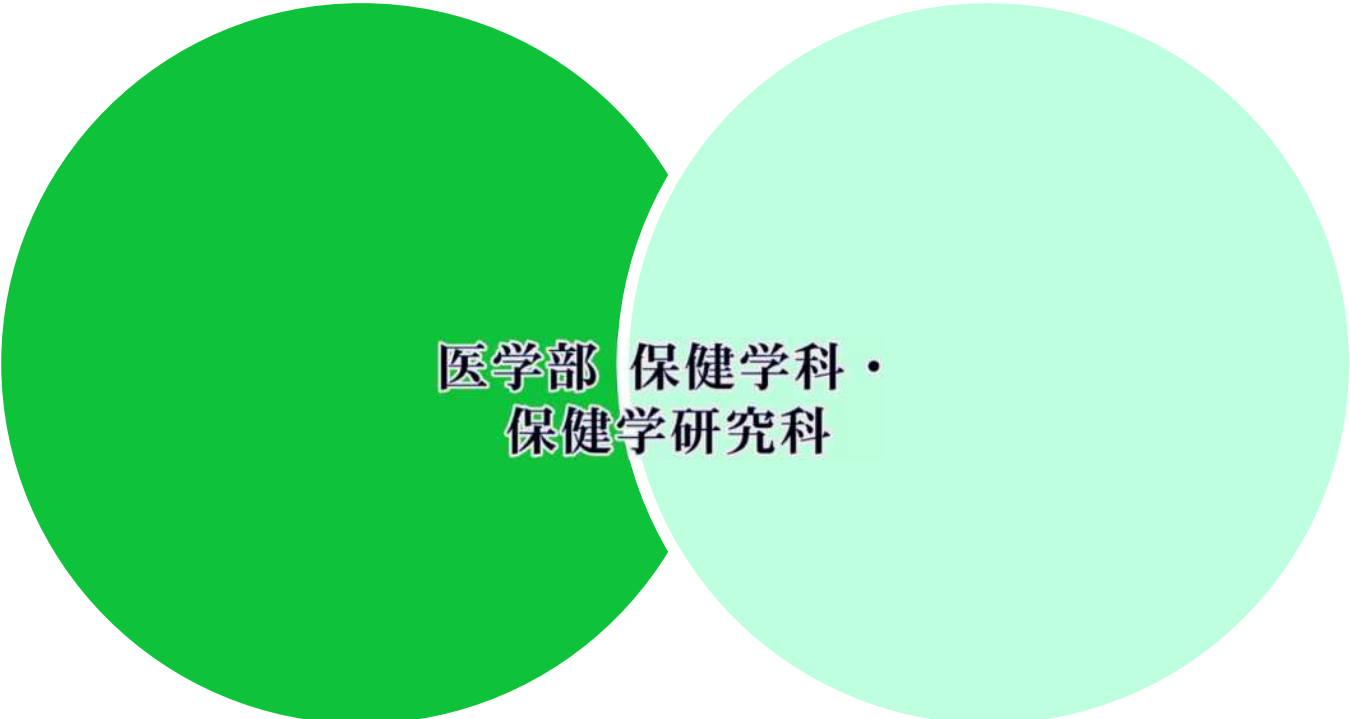
最後に、大学 IR コンソーシアム・アンケートの令和 4 年度実施分の結果について、令和 3 年度実施分と比較して分析・評価を行った。評価する点や課題として挙げた点など、簡単にまとめた表を次ページ以降に示し、令和 5 年度医学部医学科 FD 活動報告を終了する。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和4年度実施分）の分析について

評価する点	・ 昨年同様、英語能力が高い水準にあり、その中でも書く力・会話力の熟練度が高い。 ・ 3年生の「授業中に学生同士が議論をする」が90%、1年生の「学生が自分の考えや研究を発表する」が92%と高く、学生主体の教育を実現できている。
課題と考える点 （3点以上）	・ 3年生の「教員が提出物に添削やコメントをつけて返却する」の項目が35%と、全体の63%に比べて大きく下回っている。 ・ 「授業の進め方に学生の意見が取り入れられる」の項目が、1・3年生の両方で全体と比べて10ポイント以上低い。 ・ 1年生の「授業中に居眠りをした」の項目が63%に上っていて全体で最高だった。
課題への 具体的な対応案	・ 学生1人ずつへの対応は厳しいため、マナバ等で全体に対して、総括等のコメントや、多かった誤答への添削例などを掲載できるようにする。 ・ 授業アンケートを実施しているため、出された意見等をFD委員会で照会する。 ・ 「学生を飽きさせない工夫」として、動きのあるスライドの作成やアクティブラーニング等の授業の組み立て方を検討する。
昨年度挙げた 改善・対応策 による成果	・ （課題）3年生の「授業に遅刻した」の項目が33%と、1年生の12%と比較して高くなっており、鹿児島大学全体でも最も高い。 （具体的な対応案）遅刻が多いことについては、各科目担当者に周知し、1限目の出欠の確認を早めにするなど科目ごとに工夫をすることが望まれる。 （進捗状況） 今年度大きく改善され、3年生5%、1年生10%となっており、鹿児島大学全体と比べて低く、3年生は最も低い結果となった。 ・ （課題）「授業の進め方に学生の意見が取り入れられる」の項目が、1・3年生の両方で全体と比べて10ポイント以上低い。 （具体的な対応案）授業の進め方に学生の意見を取り入れる点については、授業評価アンケートのフィードバックを通じて改善を図る。また、教務委員会の学生委員の意見を積極的に取り入れるとともに、FD委員会への学生参加をめざす。 （進捗状況）

	教務委員会への学生の出席率が低く、FD 委員会への学生参加が実現できていない ・（課題） 3 年生では「将来のキャリアの相談」の項目が 7%と低く、「大学教員と顔見知りになる」の項目も 25%と全体で最低であることから、学生と教員のコミュニケーションの在り方に課題がある。 （具体的な対応案）学生と教員のコミュニケーションについては、指導教員と学生の関係だけでなく、自主研究でのつながりを継続するなど幅広い交流を図る。また講義では manaba の個別指導（コレクション）の利用をさらに促す。 （進捗状況） 以前より manaba の個別指導（コレクション）の利用は活発になってきているが、項目の割合は全体で最低であり、結果に繋がっていない。 ・ 3 年生の「教員が提出物に添削やコメントをつけて返却する」の項目が 30%と、全体の 62%に比べて大きく下回っている。 （具体的な対応案）医学科では学年数が 120 人前後と多く、すべてのレポート等にコメントを付けることは難しいが、何らかのフィードバック方法を工夫する必要がある。 （進捗状況） 今年度も課題となっているが、学生数が多く添削物すべてに添削やコメントを付けるのは困難な状況である。 ・（課題）「授業時間外に、授業に関連しない勉強をする」時間が 1 時間未満の学生が、1 年生 52%、3 年生 50%、「読書をする（マンガ・雑誌は除く）」時間が 1 時間未満の学生が、1 年生 63%、3 年生 67%を占めており、大学生としての幅広い知識の習得が不十分である。 （具体的な対応案）授業に関連しない勉強や読書の時間が少ない点については、講義や実習のコマ数が過剰になっていないか、レポートなどの課題が必要以上に負担になっていないかを検証する必要がある。また、教員から学生に授業以外の勉強や読書を促すことも必要と考える。 （進捗状況） 「読書をする（マンガ・雑誌は除く）」に関しては 3 年生の 1 時間未満の割合が全体で最低であったため、多少の改善が読み取れる。「読書をする（マンガ・雑誌は
--	---

	除く)」に関しては改善につながっていない。
以前の結果や他の調査結果・データ等との比較を通じて明らかになった点や気付いた点	・英語運用能力については他学部と比べて熟達度が高くなっている。 ・英語圏への渡航経験者が、他学部と比べて高い割合となっている。



医学部 保健学科・
保健学研究科

2023(R5)年度 医学部保健学科・保健学研究科 FD 活動報告

医学部保健学科 FD 活動

はじめに

2023(R5)年度 医学部FD委員会保健学科部会の活動として以下を報告する。

【報告内容】

1. 学生による授業評価アンケート及び学生アンケート結果に対する教員のフィードバックアンケート
2. FD講演会・研修会の実施
 - 1) 保健学科・保健学研究科における学生への相談対応に関する講演会
 - 2) 保健学科におけるシミュレーション教育推進のためのワークショップ
 - 3) 学外講師による保健学教育講演会または研修会（理学療法学専攻）
 - 4) 学外講師による保健学教育講演会または研修会（作業療法学専攻）
3. ベストティーチャー賞推薦のための学生アンケート・各専攻ベストティーチャー賞の選考
4. 前年度のベストティーチャー賞受賞教員による授業参観の実施
5. FD活動への教員参加状況
6. 教育の内部質保証に関する自己点検・評価(モニタリング)

1. 学生による授業評価及び学生アンケート結果に対する教員のフィードバックアンケート

1) 方法

全ての授業科目を対象として、学生による授業評価を実施した。学生による授業評価は各授業の最終講義後に学生に周知し、manaba で回答を得た。アンケート結果は、学務課で取りまとめることとし、回答学生が教員には特定されないことを十分に周知したうえで実施した。授業評価のアンケート項目以下の通りである(表 1)。

なお、今年度の授業評価アンケート及び教員へのフィードバックに関する特筆すべき取り組みとして、ポスト・ウイズコロナとなり対面授業となったことに伴い、質問項目を変更し、次年度以降の成果につながるように工夫を図った。

2) 授業評価アンケートの回収状況

＜令和4年度＞ 注(今年度とアンケート内容が異なる)

・前期授業:授業評価アンケート回収率:44%(全科目平均)

教員フィードバックアンケートの科目回収率:29%

・後期授業:授業評価アンケート回収率:29%(全科目平均)

教員フィードバックアンケートの科目回収率:22%

<令和5年度>

・前期授業:授業評価アンケート回収率:46%(全科目平均)

教員フィードバックアンケートの科目回収率:47%(前後期共通)

・後期授業:授業評価アンケート回収率:47%(全科目平均)

教員フィードバックアンケートの科目回収率:47%(前後期共通)

表 1. 令和 5 年度授業評価アンケート質問項目

質問内容	5	4	3	2	1
出席状況は良好だった.	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
授業に意欲的に取り組む努力をした.	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
授業の予習あるいは復習をした.	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
シラバスには必要な情報がわかりやすく明確に記載されていた.	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
シラバスに沿ったふさわしい内容であった.	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
講義または実習の内容はわかりやすく、よく理解できた.	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
講義または実習の配布資料やスライドは見やすかった.	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
講義または実習は一方的な知識の伝達だけでなく、双方向（アクティブ・ラーニングの導入など）に行われた.	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
教員は質問を促し、積極的に質問等に応じてくれた.	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない
シラバスに記載されていた学習目標を達成できた.	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない

3) 学生による授業評価アンケートの結果

前期開講科目と後期開講科目全 183 科目からアンケートを回収し、アンケートの各質問項目について評価点(1～5)の平均値を求めた(表2). なお、点数が高いほど評価が良いことを示す.

表 2. 令和 5 年度授業評価アンケート結果(全科目の平均点)

質問項目	令和 5 年度 (前期)	令和 5 年度 (後期)
	平均	平均
出席状況は良好だった.	4. 87	4. 81
授業に意欲的に取り組む努力をした.	4. 57	4. 56
授業の予習あるいは復習をした.	4. 02	4. 06
シラバスには必要な情報がわかりやすく明確に記載されていた.	4. 33	4. 35
シラバスに沿ったふさわしい内容であった.	4. 41	4. 42

講義または実習の内容はわかりやすく、よく理解できた。	4. 36	4. 40
講義または実習の配布資料やスライドは見やすかった。	4. 31	4. 34
講義または実習は一方的な知識の伝達だけでなく、双方向（アクティブ・ラーニングの導入など）に行われた。	4. 29	4. 18
教員は質問を促し、積極的に質問等に応じてくれた。	4. 32	4. 25
シラバスに記載されていた学習目標を達成できた。	4. 36	4. 37

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

4) 結果の解釈

① 学生自身の自己評価

今年度より全面的に対面授業が開始されたことを踏まえ、今年度の授業評価アンケート内容を見直し、かつ講義・実習を含め全ての開講科目で実施した。その結果、全ての質問項目の平均点が「4」を超えていた。このことから、保健学科で開講されている授業科目に関して、学生の取り組みが概ね良好であり、授業の質は担保されていると考えられた。改善点を挙げるなら「授業の予習あるいは復習をした」の得点が他の質問項目より前期・後期ともに少し低いことがわかる。予習・復習に関しては、学生の取り組みのみでは改善が望めないもので、引き続き、教員の授業への工夫が必要になると思われる。

今年度からアンケート内容を見直したので、次年度以降の経過を見る必要があると思われる。

5) 学生授業評価アンケート集計結果の教員へのフィードバックに対する授業担当教員からの意見

教員フィードバックアンケートの科目回収率は、前年度に比べて47%と改善していた。今年度より教員へのフィードバックに関する質問項目を次年度以降に成果を反映出来るように、「今年度の授業は、改善されていきましたか」、「令和5年度前期・後期授業評価アンケート結果の総括、今後の改善点などご記入ください」と変更した。その結果、特筆すべき点は、教員の55%が「おおむね改善できた」と評価していたことである。一方、改善点に関する教員からのコメントでは、学生の授業評価と同じように「予習・復習」に関して工夫が必要であるとするコメントがあった。また「学生を交えたアクティブラーニングを工夫する必要がある」とするコメントも複数件認められた。

現在、中期目標の一環として、カリキュラムアセスメントが行われており、この活動により、学生の意見を反映した授業の改善に繋がることを期待する。

3. FD 講演会・研修会の実施

1) 企画名：保健学科・保健学研究科における学生への相談対応に関する講演会

・演題名：大学生のメンタルヘルスとその支援 ～発達障害概念を基礎におきつつ～

・講師：岡山県精神科医療センター 院長

来住 由樹 先生

・日時：2023年12月6日（火）16:00～17:30

・開催方法：遠隔講演（Zoom）

・参加者：保健学科教員 37名／45名（82.2%）

保健学科・保健学研究科 FD講演会

【日時】2023年12月6日(水) 16:00~17:30

【方法】Zoom ミーティング ID: 965 6238 4278
パスコード : 660834

【申込】事前申し込み不要

【演題】大学生のメンタルヘルスとその支援
～発達障害概念を基礎におきつつ～

【講師】岡山県精神科医療センター
院長 来住 由樹 先生

【共催】学生生活委員会

座長
学科長・研究科長 赤崎 安昭 先生
オープニングリマークス
FD委員会委員長 窪田 正大 先生
クロージングリマークス
学生生活委員会委員長
山下 亜矢子 先生

保健学科・保健学研究科の学生は、ここ数年、コロナ禍そしてポストコロナ禍となりストレスや不安を抱えて学生生活を送っていることがわかった(学生との意見交換会より)。また、学生生活に不適應を起こし順調な学生生活を送ることが困難となっている学生も少ないながらもいる。本学科では、そのような学生対応に関しては、担任教員や学生生活委員および精神科医が対応している。近年は、その対応も多様化し、解決するまでに時間を要することもあるので、教員の学生対応のスキルアップは必至である。

そこで今回、特筆すべき取り組みとして、大学生のメンタルヘルスとその支援に関して、特に発達障害の概念を基礎おきながら、岡山県精神科医療センター 院長の来住由樹先生にご講演頂いた。

ご講演では、大学生のメンタルヘルスとその支援に必要な発達障害の基本事項として、1. 発達障害の正しい理解、2. 発達障害の人を受け入れる、3. 発達障害の人の家族を気遣い支える、4. 地域でサポートする ことを意識する、5. 発達の道筋・見通しをもって伴走する、という5つの観点を中心にケース報告などを含め、具体的かつ丁寧に説明して頂いた。

講演終了後の教員からのアンケートでは、「発達特性にあわせた関わりについて改めて考える機会となった。」、「特性のある学生への対応ではなかなか特性の理解が得られず、これまで、本人の甘えや怠惰だと捉えられていた点があった。今回の講演で具体的な対応方法(スモールステップで指導を重ねていく等)などが重要であることがわかった。」など意見が寄せられ、今後の学生教育・支援に有意義な講演であった。

2) 保健学科におけるシミュレーション教育推進のためのワークショップ

- ・演題名：教材「シナリオ」「ふりかえ朗」を活用したシミュレーション演習の方法について
- ・講師：放送大学大学院 文化科学研究科 生活健康科学 教授 / 名古屋大学 名誉教授
山内 豊明 先生
- ・日時：令和5年8月7日(月) 16:30~18:00
- ・開催方法：Zoom
- ・参加者：保健学科教員 31 名

保健学科は、令和5年度、文部科学省「ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業」に採択され、「シミュレータ SCENARIO」、「スキルスアルバムふりかえ朗」などを購入し、シミュレーション教育を推進している。これらの機器の活用や運用を高めるためにワークショップを開催した。

「シミュレータ SCENARIO」や「スキルスアルバムふりかえ朗」の開発者でシミュレーション教育の第一人者である名古屋大学名誉教授の山内豊明教授に、シミュレーション教育をどのように実施すべきか、また、課題や対応などについて、わかりやすくご講演頂いた。学生の臨床判断能力および医療技術(タスク)の向上に役立つ講演内容であった。

また、前回および本講演の知識を基に、看護学専攻では、シミュレーション室のシミュレータを自由に用いて、OSCEに向けた繰り返しの練習が出来るようにしている。その後、9月には、看護学専攻において、臨地実習開始前に OSCE を実施し、学生の臨床技術を高めたうえで、臨地実習に入ることができた。教育展開やケア実践において有用な機会となった。

保健学科・保健学研究科 FD委員会主催講演会

【日時】令和5年8月7日(月) 16:30~18:00

【方法】zoom

<https://zoom.us/j/99263248817?pwd=Qv9Yems1WiAvRDd3ci9BaFF0QXBjUT09>
ミーティングID: 992 6324 8817
パスコード: 972690

【申込】事前申し込み不要

【演題】教材「シナリオ」「ふりかえ朗」を活用した
シミュレーション演習の方法について

【講師】山内 豊明 先生

名古屋大学 名誉教授
放送大学大学院文化科学研究科生活健康科学 教授

座長
松成 裕子
オープニングリマークス
副医学部長 八代 利香
クロージングリマークス
看護学専攻FD委員 沖 利通



3) 学外講師による保健学教育講演会または研修会（理学療法学専攻）

・演題名:臨床実習指導者1名での複数学生指導体制による実習指導の実践例

・講師:大渡 昭彦 先生

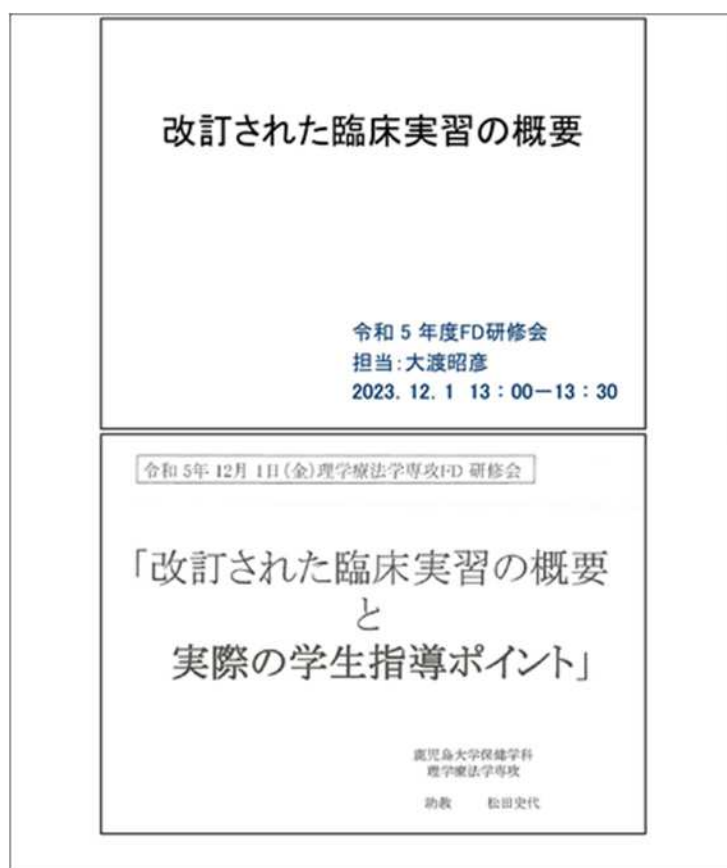
鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻

松田 史代 先生

鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻

- ・日時:令和5年12月1日(金)13:00～14:30
- ・開催形式・場所:桜ヶ丘共通教育棟1階保健学科会議室およびWeb形式(Zoom)のハイブリッド開催
- ・共催:鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻
- ・参加者:臨床実習指導者(34名)および学内教員(24名)の計58名

理学療法学専攻では学外の医療施設での理学療法評価実習、総合臨床実習Ⅰ・Ⅱが実施されている。日本理学療法協会は、実習生がチームの一員として実際の臨床に部分的に参加する診療参加型臨床実習の形式で、1名の指導者が複数名(通常2名)の実習生を指導することを推奨している。鹿児島県理学療法士協会の臨床実習指導者研修会の講師を担当している当専攻の2名を講師とし、教員と臨床実習指導者を対象に、臨床実習の変遷と臨床実習指導のあり方について講演していただいた。実際に指導者が複数名の学生を指導している実習施設は15%程度と低いものの、学生の相互学習の促進が図られることが示された。また、学生のペアリングに苦慮していることなども踏まえ、実施するうえでの留意点についても示された。多くの学外の臨床実習指導者の参加もあり、学内教員との意見交換も行われ、学内外で連携した学生指導の質の向上を図るうえでも有意義な研修会であった。



4) 学外講師による保健学教育講演会または研修会 (作業療法学専攻)

- ・演題名:作業療法の魅力を伝える講演会
「作業療法士の臨床教育とキャリア形成」
- ・講師:岸和田リハビリテーション病院 リハビリテーション部
作業療法士 平山 幸一郎先生
- ・日時:令和6年2月13日(月)14:40～16:10

- ・開催形式・場所：対面実施・共通教育棟 インテリジェント講義室
- ・参加者：保健学科教員 13 名および学生 28 名

作業療法学専攻では、例年「作業療法の魅力を伝える講演会」として本専攻，あるいは保健学科の前身である医療技術短期大学部を卒業し，地域で活躍している作業療法士に作業療法の魅力を伝える講演会を実施している。

現在，作業療法士は医療，福祉，行政，教育，研究など様々な領域で幅広く活躍している。今回，医療現場で働き，研究活動にも熱心に取り組んでいる講師に臨床場面での作業療法士のあり方や研究の視点，作業療法士としての 5 年後・10 年後・20 年後のキャリア形成について具体的に講演していただいた。学生にとって臨床実習など近々の目標だけでなく，将来作業療法士として働くイメージができたのではないかと考える。また，教員にとっても作業療法士として働くキャリア形成も念頭に入れた学内教育に際して，とても参考になった。

講演終了後には，学生や教員から多くの質問が出され，講師より丁寧な説明が行われ，学生，教員双方ともに有意義な研修会となった。



3. ベストティーチャー賞推薦のための学生アンケート

令和4年度医学部保健学科でのベストティーチャー賞を選出するにあたり，以下の要領で保健学科所属の 1～4 学年の全学生を対象としたアンケートを実施した。

<2023(R5)年度 保健学科ベストティーチャー賞候補者に関するアンケートの要領>

- ・対象:2023 年 12 月現在で保健学科に在籍している 1～4 年生

・実施期間:2024 年 1 月 26 日 (金) ～2024 年 2 月 27 日 (月)

・アンケート内容

過去 1 年間を振り返って、自分にとって最も有意義であった授業科目とその担当教員(授業を実施した教員)を 1 つのみ挙げてください。候補の選出にあたっては、以下に示す 5 つの観点を参考にしてください。また、その授業および教員に関して、5 つの観点を 1～5 点(5 点が最も良い)で評価してください。有意義であったと感じた理由やベストティーチャーとしての推薦理由を記載してください。

①回答者の在籍している専攻

②有意義であった授業科目と担当教員(授業を実施した教員)

③②で選んだ授業と教員に関して、以下の観点から 1～5 点(5 点が最も良い)で評価してください。

③-1. 授業の実施方法(教材等の分かりやすさ、理解度の確認など)

③-2. 授業への教員の熱意(授業の準備状況、配布資料の工夫など)

③-3. 能動的学習の促進(アクティブ・ラーニングの活用、学生自身による思考の促進など)

③-4. 授業時間以外の学習支援(自己学習の促進、宿題・レポートなどへの取組など)

③-5. 学習目標の達成(内容の理解度、目標の達成度、講義に対する満足度など)

④②で選んだ授業と教員に関して、有意義と感じた点およびベストティーチャーとしての推薦メッセージがあれば、ご記入ください

＜アンケート結果の回収概要＞

・回答期間:2024 年 1 月 6 日 (金) ～2024 年 1 月 26 日 (木)

・対象:学科在籍中の 1～4 年生 481 名

(看護学専攻 322 名, 理学療法学専攻 78 名, 作業療法学専攻 81 名)

・回答数:看護学専攻 172 名(53.4%), 理学療法学専攻 37 名(47.4%), 作業療法学専攻 39 名(48.1%)

＜アンケート結果の活用＞

学生アンケートからの推薦者リストを FD 委員会で供覧し、各専攻におけるベストティーチャー賞候補者を選考するうえでの資料とした。また、学生アンケートからベストティーチャー賞として推薦のあった科目、学生からの推薦コメントは、被推薦教員にフィードバックした。

なお、FD委員会保健学科部会でベストティーチャー賞候補者推薦を審議した際に選考基準の見直しが必要であるという意見があり、次年度以降の検討事項とした。

＜2023 年度ベストティーチャー賞＞

各専攻 1 名の教員をベストティーチャーに選出し、4 月開催の教授会で表彰した。また、そのうちの教員 1 名を医学部保健学科から全学のベストティーチャー賞候補者として推薦した。

4. 授業参観の実施

今年度は、2022 年度に本学のベストティーチャー賞を受賞した教員の担当科目から推薦を依頼した。その結果、2023 年度鹿児島大学ベストティーチャー賞最優秀賞を受賞された根路銘安仁教授の授業科目において授業参観を実施し、この点は保健学科・保健学研究科において特筆する点となった。授業参観後には、報告書の提出を求め、講義のわかりやすかった点や工夫していると感じた点などの意見を聴取した。

表 2023(R5)年度 授業参観実施科目

科目名	授業参観人数
解剖生理学 II	14 名

5. FD 活動への教員参加状況の把握

今年度の FD 講演会・研修会の参加状況を表に示した。

合計参加率		100 %	(専任教員 45 名中 45 名 参加)
企画別 参加率	FD 講演会：シミュレーション教育推進（看護）	68.9 %	(専任教員 45 名中 31 名 参加)
	FD 講演会：改訂された臨床実習（理学）	53.3 %	(専任教員 45 名中 24 名 参加)
	FD 講演会：学生への相談対応（3 専攻）	82.2 %	(専任教員 45 名中 37 名 参加)
	保健学科授業参観（3 専攻）	44.4 %	(専任教員 45 名中 20 名 参加)
	FD 講演会：ダイバーシティ時代の学びづくり	48.9 %	(専任教員 45 名中 22 名 参加)
	FD 講演会：臨床教育とキャリア形成（作業）	28.9 %	(専任教員 45 名中 13 名 参加)

2023(R5)年度の医学部保健学科における FD 活動への参加率は2年連続 100%となり, FD 講演会・研修会関心度の高さは特筆すべき点となっている。

6. 教育の内部質保証に関する自己点検・評価(モニタリング)

○卒業時アンケートの実施を通し, 卒業時の学生の学習成果に対する認識の把握状況について, 高等教育研究開発センターが「2022 年度鹿児島大学卒業予定者アンケート」を実施した。その中で保健学科に関する状況を抜粋し下記に示した。

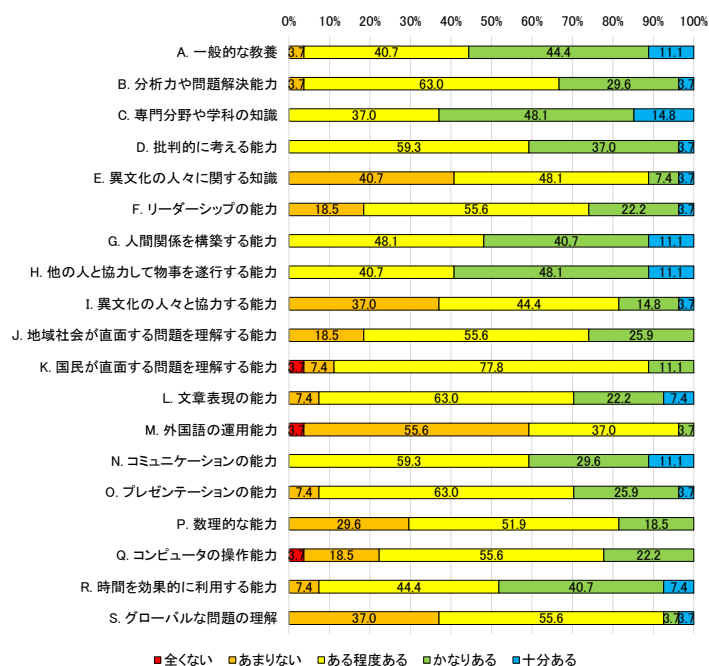
また, 大学院に関しては, 保健学研究科独自にアンケートを実施し, その内容を P12 から P15 に示した。

実施概要（学部アンケート）

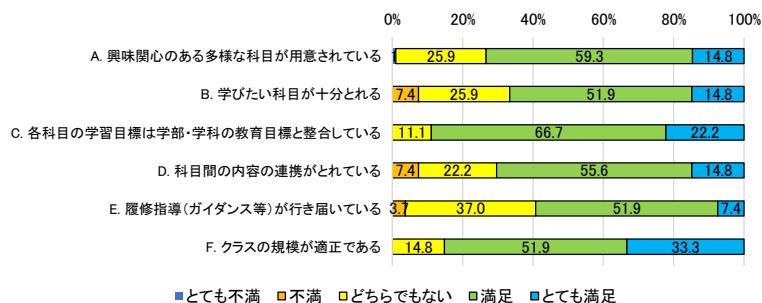
- (1) 実施期間：2023 年 2 月 20 日～3 月 31 日
- (2) 調査対象者：2022 年度（2023 年 3 月）保健学科卒業予定者 27 名（22.1%）
- (3) 調査項目：卒業時点の能力水準（問 1），カリキュラムに対する満足度（問 2），教育内容に対する満足度（問 3），授業経験における学びの獲得度（問 4），大学生活における経験の役立ち度（問 5），大学生活を乗りきる原動力（問 6）

【結果】

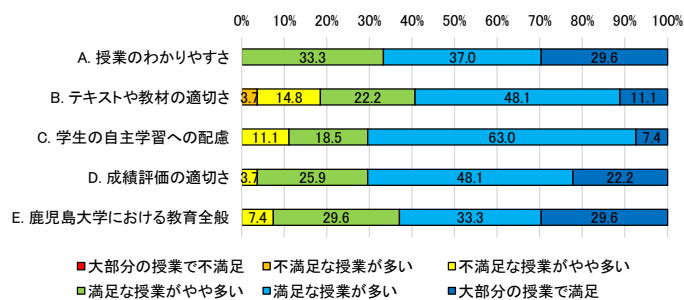
問1 あなたは現在、次の能力や知識をどの程度持っているか。



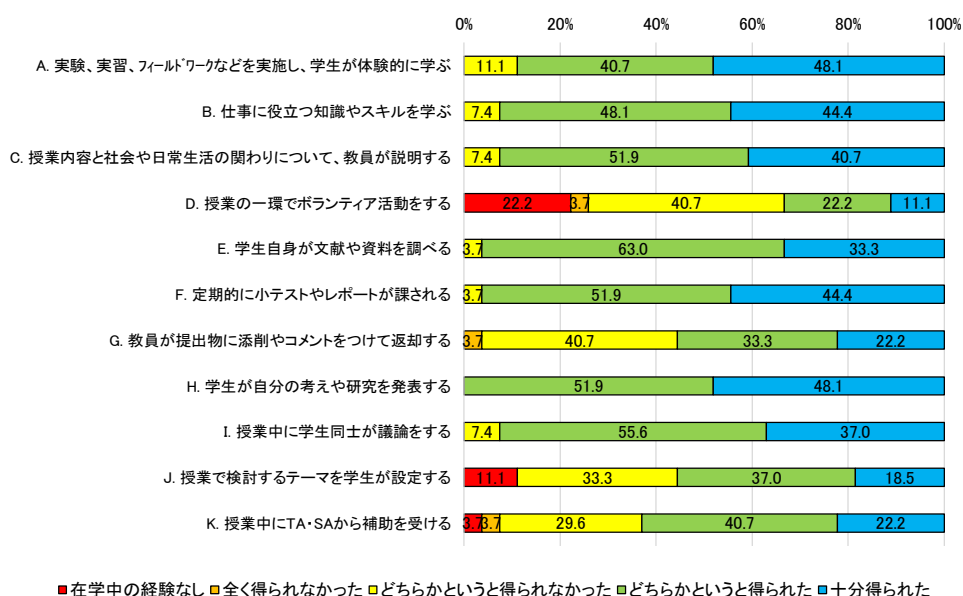
問2 本学のカリキュラムに対して、総じてどれくらい満足しているか。



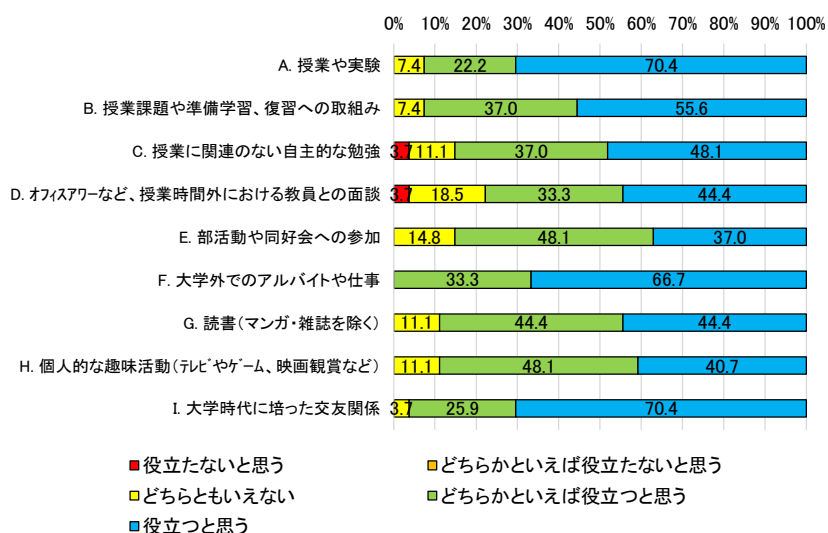
問3 本学の教育内容に対して、総じてどれくらい満足しているか。



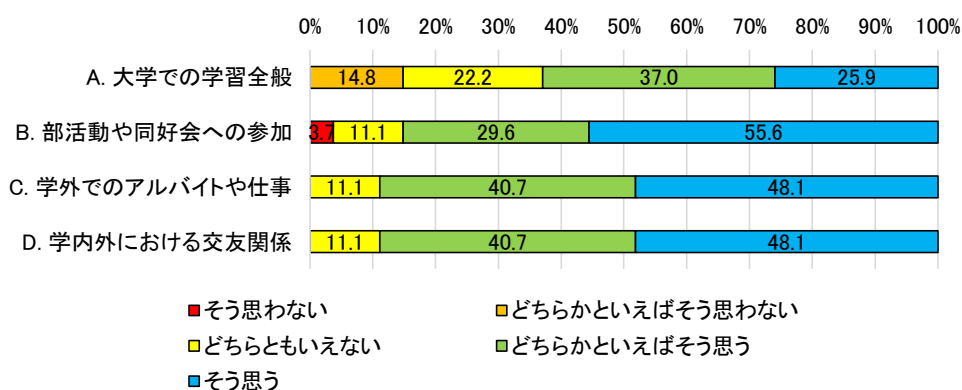
問4 あなたは次のような授業経験を通して、十分な学びが得られたか。



問5 大学生活での活動や経験は、今後のあなたの成長にどれくらい役立つと思うか。



問6 以下の活動は、コロナ流行下での学生生活を乗りきる原動力にどの程度なったか。



終わりに

2023（令和 5）年度において、ポスト・ウィズコロナ禍になりFD活動を実施し、全ての期企画を実施することができた。

教育に関しては、前期・後期の授業を全面的に対面授業で実施し、大学教育の質の担保に努めた。また、学内演習や学外実習は、感染対策に細心の注意を払いながら実施してきた。その結果、学生からの授業評価アンケートの結果は、概ね良好であった。

また、FD講演会・研修会を4回実施し、特に今年度は、学生指導や各専攻の教育効果を改善する企画が実施された。なお、教員の参加状況は、昨年に引き続き100%であり、教員の関心も高く、かつ教員のニーズに添った企画であったと評価している。

さらに、ベストティーチャー賞の選考と前年度受賞教員による授業参観を実施し、教員の教育に関するスキルアップを目指した。

最後に今年度は、新たに「教育の内部質保証に関する自己点検・評価（モニタリング）」をまとめた。その中で卒業時アンケートを実施し、卒業時の学生の学習成果に対する認識を把握した。その結果、在学中の保健学科の学習状況について、多くの学生が満足している点は特筆すべきことである。

次年度のFD活動も今年度と同様な内容を計画している。引き続き、FD活動を通して、学生教育の充実と教員の教育・研究能力の向上を図りたい。

保健学研究科FD活動

はじめに

令和5年度FD委員会保健学研究科部会の活動として修了学生における修学達成度などに関するアンケートを実施した。

1. 修了学生における修学達成度などに関するアンケート

＜令和4年度 保健学研究科 博士前期課程修了者へのアンケートの要領＞

対象：保健学研究科博士前期課程に在籍しており、令和6年3月に修了を予定している者28名

実施期間：令和6年3月7日（木）～3月15日（金）

アンケート内容

●満足度を5点が最も満足度が高いとして、1～5点で評定してください。

- ① 大学院での講義内容や講義方法について
- ② 研究指導について
- ③ 事務手続きや書類に関して

*①～③のそれぞれについて、選択理由や意見をご記入ください。

●達成度を5点が最も達成度が高いとして、1～5点で評価してください。

④ 自身の達成度について

⑤ 努力度を5点が最も努力度が高いとして、1～5点で評価してください。

⑥ 在学中に最も学びになったことについて、教えてください(自由記載)。

●博士前期課程を卒業(修了)するにあたり、以下についての自己評価をお教えてください。

⑦ 保健学に関する優れた専門的知識と技術を獲得できた。

⑧ 地域の保健・医療において高度専門職業人として果たすべき役割を実践する能力を獲得できた。

⑨ 研究を行うための基礎的な能力を獲得できた。

*⑦～⑨について、「不可」もしくは「無」の場合、その理由をお教えてください。

●博士前期課程を卒業(修了)するにあたり、カリキュラムに対しての評価をお教えてください。

⑩ 豊かな人間性と広い視野を獲得できるように大学院全学横断的教育プログラムや、博士前期課程共通科目によって専門領域以外の様々な人々と共に学べるように編成されていた。

⑪ 専門領域における基礎的な能力を補強し、専門的学習を促進するために領域共通科目が配置されていた。

⑫ 高度専門職業人としての優れた知識・技術を修得し、様々な地域における保健医療に関する課題を解決するための研究力、教育力を獲得できるように専門科目(特論・特別演習・特別研究)が配置されていた。

⑬ 他専門領域を理解し、協働できるようになるために、他領域の専門科目を修得できるように編成されていた。

*⑩～⑬について、「編成(配置)されていたが活用できなかった」もしくは「編成(配置)されておらず活用できなかった」と回答の場合、その理由をお教えてください。

●本学の大学院への進学について

⑭ 本学の大学院への進学を周りの人に勧めたいと思いますか

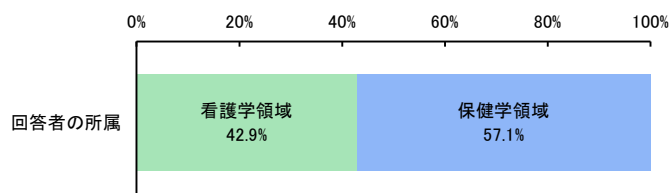
⑮ 調査結果を報告することに同意していただけますか。

<アンケート結果>

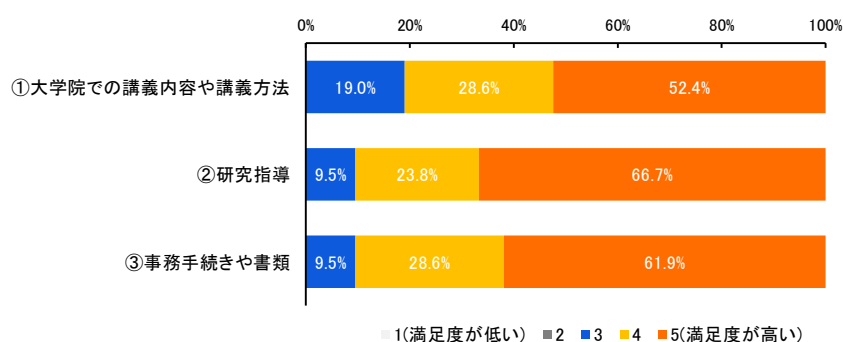
回答数:修了予定者 28 名のうち 21 名 (75.0%)から回答を得た。

回答の内訳は以下のとおりであった。

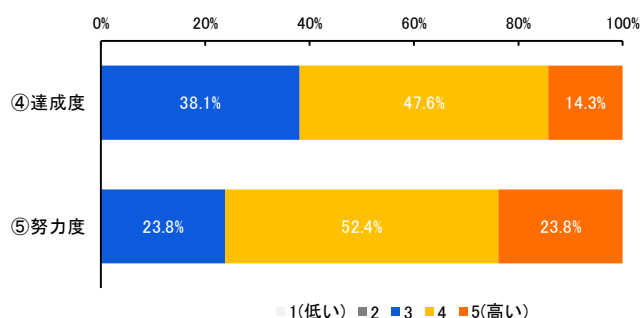
● 回答者内訳



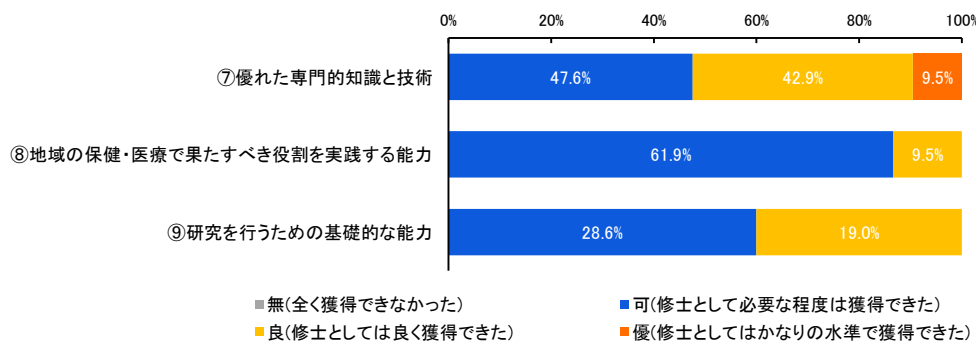
● 満足度を5点が最も満足度が高いとして、1～5点で評価してください。



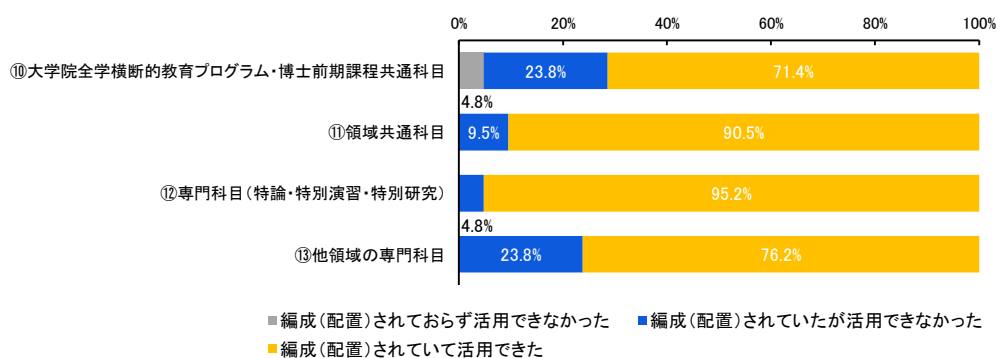
● 達成度を5点が最も達成度が高いとして、1～5点で評価してください。



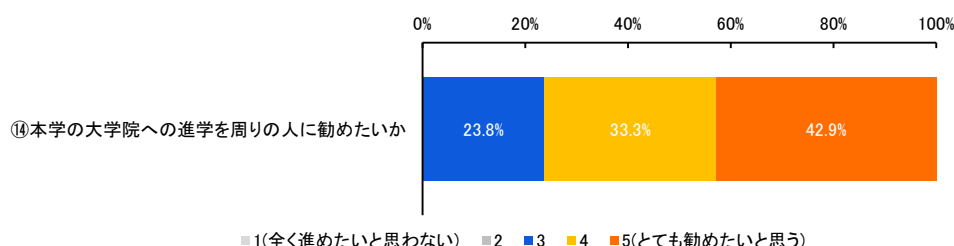
● 博士前期課程を卒業(修了)するにあたり、以下についての自己評価をお教えてください。



● 博士前期課程を卒業(修了)するにあたり、カリキュラムに対しての評価をお教えてください。



● 本学の大学院への進学について



終わりに

上記のアンケート結果を踏まえ、特筆すべき点を以下のようにまとめた。

講義内容については 81.0%, 研究指導については 90.5%が 4 もしくは 5 と回答しており、講義や研究指導の質に対する満足度の高さがうかがわれた。この結果は、カリキュラムに対する評価の高さと関連すると考えられた。また、社会人の大学院生からは、遠隔授業で行われる講義が多かったため、通学の時間を勉学や研究の時間に充てることができて良かったとする声も多かった。

ディプロマポリシーの 3 項目のうち、「保健学に関する優れた専門的知識と技術を獲得できた」、「地域の保健・医療において、高度専門職業人として果たすべき役割を実践する能力を獲得できた」、「研究を行うための基礎的な能力を獲得できた」については、回答者 21 名全員が可(修士として必要な程度は獲得できた)以上の自己評価であり、良好な結果であった。これらの結果を背景として「本学の大学院への進学を周りの人に勧めたいと思いますか」は 4 が 33.3%, 5 が 42.9%であり、今後の大学院生の入学に繋がる高い評価であった。

令和 8 年度からの保健師課程の大学院化および保健学研究科全体の改革について検討を進めている。今後も保健学研究科において、学生自身の達成度を高める教育体制の充実を図るとともに、ディプロマポリシーに準じた学修成果をアセスメントし、改善すべき点は早急に改善するといった FD 活動を推進する必要がある。

(文責 令和 5 年度医学部 FD 委員会保健学科部会長 窪田 正大)

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和4 年度実施分）の分析について

（医学部・保健学科）学部

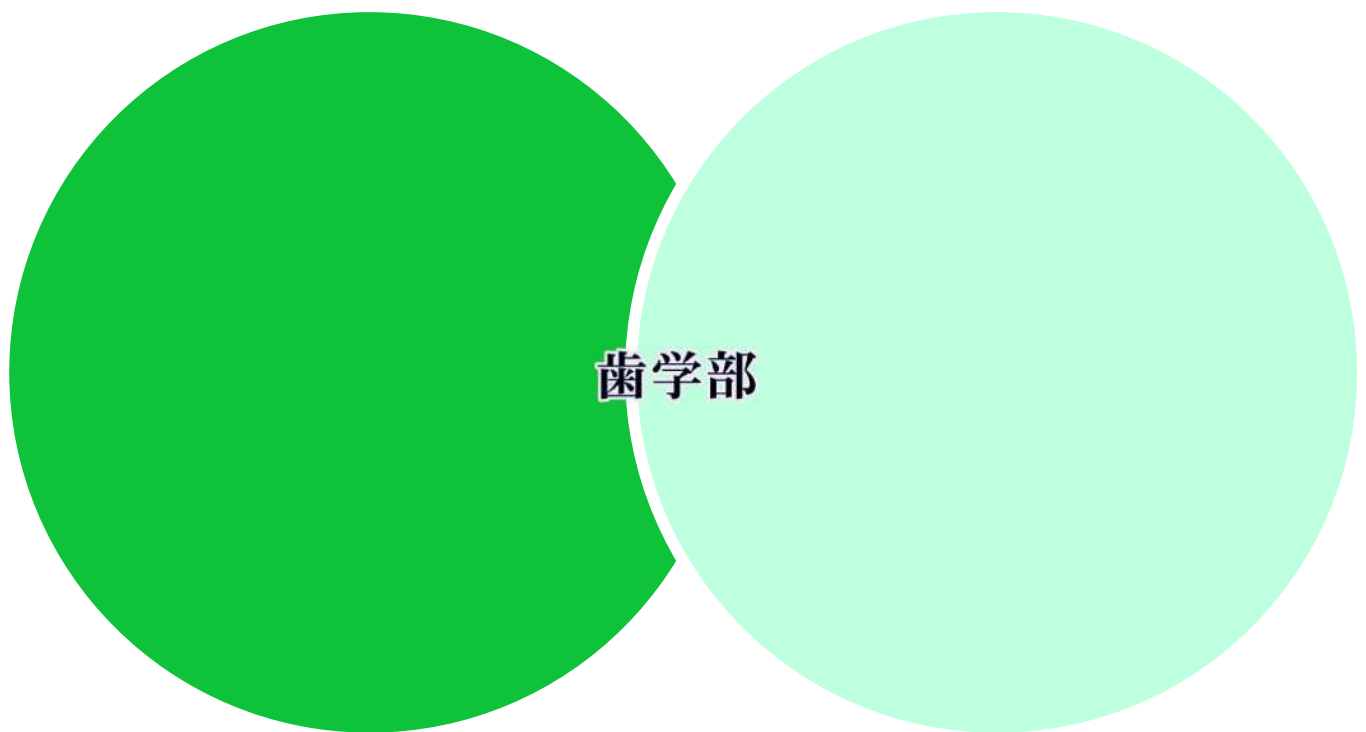
評価する点	1 年生調査 ・アンケート回答率が①90.8%，②88.3%と全学で最も高い回答率であった。 ＜知見に対する解釈＞ 一斉メールでの依頼および3 専攻合同の講義でアンケートへの回答を呼びかけた結果と考える。 ・「2. 大学での学び実態」：「授業を通じた学習経験」において「仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」が国立大学G，全学平均より高い 86%であった。また，「入学後の能力の変化」の中で「専門分野や学科の知識」が 94%，「異文化の人々に関する知識」が 85%と国立大学G，全学平均より高い結果であった。 ＜知見に対する解釈＞ 本学 1 年生は，一般的な教養知識の習得に加え，将来の専門職を見据えた教育を行っていることが専門性の高い教育と評価されていると考える。また，国際的な視点に立った教育も評価を受けていると推察する。 ・「5. 大学生活に対する意識」：「大学生活の充実感」において「大学生活は充実している」が国立大学G（75%），全学平均（84%）より高い 88%であった。また，「大学教育への満足度」において「E. 将来の仕事と授業内容の結びつき」が 67%と高かった。さらに，「(5) 学部卒業後の予定進路」について「就職する」と 64%決めていることがわかった。 ＜知見に対する解釈＞ 本学 1 年生は，入学後の生活に満足しており，授業内容と将来の仕事の結びつきが多くの学生が理解し，また，その結果が専門職として就職することにも繋がっていると思われる。 上級生（3 年）調査 ・「2. 大学での学び実態」：「授業を通じた学習経験」において「A. 実験，実習，フィールドワークなどを実施し，学生が体験的に学ぶ」（91%），「B. 仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」（96%），「C. 授業内容と社会や日常生活のかかわりについて，教員が説明する」（89%）と国立大学G，全学平均より高い結果であった。 ＜知見に対する解釈＞ カリキュラムにおいて実習・演習を多く取り入れ，また，講義でもアクティブラーニングが実践されていること反映されたと推察する。 ・「入学後の能力の変化」の中で「G. 人間関係を構築する能力」（81%），「H. 他の人と協力して物事を遂行する能力」（86%），「N. コミュニケーションの能力」（73%），「O. プレゼンテーションの能力」（79%）国立大学G，全学平均より高い結果であった。
-------	--

	<知見に対する解釈> 講義や演習でグループワークを取り入れており、また、学外実習では患者への対応や多職種連携によるチーム医療に基づいた学修の成果と考える。 ・「5. 大学生活に対する意識」：「大学生活の充実感」において「大学生活は充実している」が国立大学G（71%）、全学平均（80%）より高い92%であった。また、また、「大学教育への満足度」において、特に「E. 将来の仕事と授業内容の結びつき」（88%）と「H. 他の学生と話をする機会」（81%）と80%を超えていた。さらに「(5) 学部卒業後の予定進路」について「就職する」と69%決めていることがわかった。 <知見に対する解釈> 看護師、理学療法士、作業療法士それぞれ専門職に対しての専門教育を行っている結果、大学生活が充実していると考え。また、学生も将来を見据えて熱心に学習に取り組んでいる結果であると推察する。
課題と考える点 (3点以上)	1 年生調査 ①「2. 大学での学び実態」：「授業内外の学習状況」において「J. 授業中に居眠りをした」が62%と高かった。 <知見に対する解釈> 「G. 授業を欠席」（21%）、「H. 授業に遅刻」（12%）は、国立大学G、全学平均より低かった。一方「I. 授業がつまらなく感じた」（70%）であることから、出席をしているが、授業内容の興味を持てず居眠りしている状況が推測される。 ②「2. 大学での学び実態」：「D. オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する」が「全然ない」が91%と国立大学G、全学平均より高かった。 <知見に対する解釈> 1年生は、桜ヶ丘キャンパスへの登校が週1～2回と限られていることが影響していると思われる。 ③「5. 大学生活に対する意識」：「大学設備に対する満足度」に関して「C. コンピュータの施設や設備」（44%）と国立大学G（50%）、全学平均（59%）より満足度が低かった。 <知見に対する解釈> 桜ヶ丘キャンパスでの施設や設備に関することであれば本学の担当部局・教員へ現在の状況を確認する必要があると考える。 上級生（3年生）調査 ①「I 調査概要」におけるアンケートの「4. 回答者数および回答率」が①47.5%、②40.7%と学生数の過半数に達していない。 <知見に対する解釈> 保健学科教務係よりメールでアンケート回答依頼を行った。また、各専攻のFD委員より依頼も行った。一方、専攻によっては、アンケート回答時期中に病院実習があったため、毎日の実習後のレポート作成などで非常に忙しく、アンケート

	に答える余裕がなかったことが影響したと考える。回答率が50%を切っている ので、回答率の低さが他のアンケート内容の結果とその解釈にも影響が出ると思 われる。 ②「2. 大学での学び実態」:「授業内外の学習状況」において1年生と同様に「J. 授業中に居眠りをした」が61%と高かった。 <知見に対する解釈> 「G. 授業を欠席」(18%),「H. 授業に遅刻」(14%),「I. 授業がつまらなく 感じた」(50%)は、国立大学G, 全学平均より低かった。出席はしており授業内 容の興味に関わらず、居眠りしている状況が推測される。 ③「5. 大学生活に対する意識」:「大学設備に対する満足度」に関して「C. コン ピュータの施設や設備」(42%)と国立大学G(45%), 全学平均(57%)より満 足度が低かった。 <知見に対する解釈> 桜ヶ丘キャンパスでの施設や設備に関することであれば本学の担当部局・教員へ 現在の状況を確認する必要があると考える。
課題への 具体的な対応案	1 年生調査 ①学生が居眠りしないように、授業でのアクティブラーニングを取り入れるなど の学生参加型の授業形態の工夫を行う必要がある。また、授業のはじめに、その 講義の目的や学生の達成度を示し、講義の最後に達成度の確認を図る工夫なども 必要である。さらに、睡眠不足が原因である学生には、睡眠時間が確保できるよ うに生活習慣の見直しを指導する必要がある。 ②各専攻では、複数担任制をとっている。よって1年生が桜ヶ丘キャンパスに登 校する日は、担任を通して学生が教員と面談する時間を積極的に設けるように教 員に働きかける。 ③「コンピュータの施設や設備」の満足度が決して高くなかった。大学の施設や 設備に関しては、FD委員会だけでは解決が困難である。よって、まずは、桜ヶ 丘キャンパスでの施設や設備に関することであれば本学の担当部局・教員へ現在 の状況を確認する必要があると考える。 上級生（3年生）調査 ①1年生に比べて3年生の回答率が低いことを専攻教員で共有し、病院実習期間 でも専攻教員や担任を通してアンケートに回答するように積極的に学生に声掛け をする必要がある。また、アンケート回答の締切り再検討する必要があるかもしれ ない。 ②1年生と同様に、学生が居眠りしないように授業でのアクティブラーニングを 取り入れるなどの学生参加型の授業形態の工夫を行う必要がある。また、授業の はじめに、その講義の目的や学生の達成度を示し、講義の最後に達成度の確認を 図る工夫なども必要である。さらに、睡眠不足が原因である学生には、睡眠時間 が確保できるように生活習慣の見直しを指導する必要がある。

	③3年生も1年生と同様に「コンピュータの施設や設備」の満足度が決して高くなかった。大学の施設や設備に関しては、FD委員会だけでは解決が困難である。よって、まずは、桜ヶ丘キャンパスでの施設や設備に関することであれば本学の担当部局・教員へ現在の状況を確認する必要があると考える。
昨年度挙げた改善・対応策による成果	1年生 ①「授業中に居眠りをした」が62%と高かった。 改善・対応策：教員がアクティブラーニングを取り入れるなど、授業中に居眠りしない工夫を行う対応策をあげた。 成果：今年度は、12月にベストティーチャー賞を受賞した教員による授業参観を実施し、参観後のアンケートを行った（今後、アンケート内容に分析を行う）。 ②授業を通じた学習経験で「取りたい授業を履修登録できなかった」が72%と高かった。 改善・対応策：看護学専攻では、新カリキュラムが導入し、共通教育科目の単位数の変更を図った。また、共通教育科目の履修申請にあたって、教員による説明を実施する対応策をあげた。 成果：入学式後の学科・専攻別オリエンテーションで共通教育科目の履修申請にあたっての教員による説明を丁寧を実施した結果「取りたい授業を履修登録できなかった」が55%まで低下した。 ③「オフィスアワーなど、授業時間以外に教員と面談する時間」が「全くない」と回答した学生が94%と高かった。 改善・対応策：本アンケート結果を教員で共有し、1年生が桜ヶ丘キャンパスに登校する日は、オフィスアワー以外にも研究室に居るように努め、学生が教員と面談する時間を積極的に設けるように教員に働きかけるという対応策をあげた。 成果：入学時に各専攻で担任制をと取っていることを周知したが、桜ヶ丘キャンパスに登校する日が2日ということもあり、十分な成果が出ていない（91%までの軽微な低下に留まる）。 3年生 1年生と同様、学習内外での学習状況で「授業中に居眠りをした」が57%と高かった。 改善・対応策：教員がアクティブラーニングを取り入れるなど、授業中に居眠りしない工夫を行う対応策をあげた。 成果：今年度は、12月にベストティーチャー賞を受賞した教員による授業参観を実施し、参観後のアンケートを行った（今後、アンケート内容に分析を行う）。 ②アンケート回答率が、1年生と比較して3年生は、低かった。 改善・対応策：回答率が低いことを所属教員で共有し、3年生が病院実習期間でもアンケートに回答するように積極的に学生に声掛けをする。 成果：アンケート回答期間中に学務課より複数回メール配信し、アンケートに答えてもらうように促した。また、FD担当教員または授業担当教員に依頼し、講

	義が終わる際の時間にアンケート回答時間を設けた。その結果、全学平均値は、超えたが、決して高くない。 ③大学設備に対する満足度で「図書館の設備」と回答したものが43%低かった。 改善・対応策・成果：桜ヶ丘キャンパスの図書館の改修工事が終了して新しくなり、学習環境も整備され、桜ヶ丘キャンパスの図書館への満足度は改善した。
以前の結果や他の調査結果・データ等との比較を通じて明らかになった点や気付いた点	2022 年度後期 授業・学生生活に関するアンケート結果報告書との比較 ・2022 年度後期は、授業形態において対面授業が増えてきたので今年度と類似した状況であると思われるので比較の対照とした。ただし、アンケート回答率が本調査よりもかなり低い。 ・学生生活に関するアンケート調査の「将来の不安に関して」は、全学3年生において「将来の目標や卒業後の進路」について不安を感じている学生が40.3%と多いことがわかる。 I R コンソーシアムアンケート調査結果では、本学の3年生は、ライセンス学部であることから明確に「就職する」と決めている割合が69%と高いことがわかった。 ・学生生活に関するアンケート調査においての「(9) 相談できる教職員の数」が全学1年生において「1人もいない」が40.1%と他の学年より高い一方、学年進行にあたり割合が減少し、かつ複数の教員と相談できていることがわかる。 I R コンソーシアムアンケート調査結果では、本学1年生において「2. 大学での学び実態」:「D. オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する」が「全然ない」が91%と国立大学G、全学平均より高かった。 1年生は、全学的に共通教育科目中心であるため特定の教員との関係性が低いことがわかる。一方、学年進行に伴い専門教育に移行すると複数の教員と相談できるようになっていることがわかった。 ・学生生活に関するアンケート調査において対面授業・遠隔授業の中で「(3) 授業を受ける上で困ったこと」において全学年の共通の回答として「一方的に講義されることが多い」「集中力が続かない」といった意見が最も多かった。 I R コンソーシアムアンケート調査結果では、本学1年生・3年生において「2. 大学での学び実態」:「授業内外の学習状況」において「J. 授業中に居眠りをした」が高かった。一方「G. 授業を欠席」、「H. 授業に遅刻」は、国立大学G、全学平均より低いことがわかった。 今後は、学生が居眠りしないように、授業でのアクティブラーニングを取り入れるなどの学生参加型の授業形態の工夫を行う必要がある。また、授業のはじめに、その講義の目的や学生の達成度を示し、講義の最後に達成度の確認を図る工夫なども必要である。さらに、睡眠不足が原因である学生には、睡眠時間が確保できるように生活習慣の見直しを指導する必要もある。



歯学部 FD 活動報告

1. はじめに

鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針において、「FD とは、大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組を指す」と定義されている。歯学部ファカルティ・ディベロップメント委員会では、教育改善に直結する事項に加え、大規模災害における歯科救援活動、科学研究費獲得向上のポイント、共用試験歯学系 CBT 作問などの教育が関係する幅広い事項について、他の委員会等と連携協力しながら講演会等を企画・実施し、「教員の資質の向上、その他教育改善」を目指してきた。

令和5年度は、これまでのFD活動を踏まえ、5回のFD講演会などを企画・実施した。本学では、年間の合計参加率（FD活動に少なくとも一度は参加した専任教員数の割合）が75%以上となるよう各部局に求めているが、歯学部の令和5年度の参加率は84.4%（全教員128名中108名参加）であり、目標値を上回った。FD活動の効果は参加率のみで評価できないが、本学の教育理念を実現するために、有効かつ企画可能なFD活動の実施と参加率の向上が重要であると考えられる。

令和5年度の主な歯学部FD活動は、次のとおりである。

- (1) 第1回FD講演会（CBTの作問に関するFD講演会）の開催
- (2) 第2回FD講演会（歯科医師国家試験合格率向上のためのFD研修会）の開催
- (3) 第3回FD講演会（教育の質向上に関わる外部資金獲得の方略と研究倫理）の開催
- (4) 第4回FD講演会（ベストライター賞受賞者による学部学生の臨床実習指導に関するFD講演会）の開催
- (5) 第5回FD講演会（歯学教育モデル・コア・カリキュラム令和4年度改訂版周知シンポジウム）の開催
- (6) 学生による授業評価の実施
- (7) 教員相互による授業参観・授業評価の実施
- (8) 歯学部ベストティーチャー賞の選考

2. 令和5年度歯学部「ファカルティ・ディベロップメント委員会」（以下、歯学部FD委員会）委員

委員長：中田匡宣（口腔微生物学分野 教授）

委員：菊地聖史（歯科生体材料学分野 教授）

田松裕一（解剖法歯学分野 教授）

西谷佳浩（歯科保存学分野 教授）

笹平智則（分子口腔病理学分野 教授）

田中達朗（顎顔面放射線学分野 教授）

所掌事務：学務課歯学教務係

3. 令和5年度歯学部FD委員会開催状況

- (1) 第1回歯学部FD委員会（令和5年4月25日（火）Web開催）

議題：

1. FD 講演会（企画1）について
2. R5 授業評価アンケート内容について

報告：

1. R5 教員授業参観アンケート結果報告
2. R5 学生授業評価アンケート結果報告
3. ベストティーチャー賞（カテゴリー7）推薦結果報告

(2) 第2回歯学部FD委員会（令和5年5月8日（月）～令和5年5月12日（金）メール会議）

議題：

1. 卒業生・修了生調査の実施について

(3) 第3回歯学部FD委員会（令和5年6月21日（水）～令和5年6月23日（金）メール会議）

議題：

1. 授業参観の依頼文と授業公開・授業参観レポートについて

(4) 第4回歯学部FD委員会（令和5年11月7日（木）Web開催）

議題：

1. 歯学部ベストティーチャー賞実施要綱について（継続審議）
2. 令和5年度後期科目授業評価アンケートについて

報告：

1. 大学IRコンソーシアム学生調査2023の実施について
2. 令和5年度鹿児島大学ベストティーチャー賞の選考結果について
3. 令和5年度FD講演会の参加状況と今後の開催予定について
4. 令和5年度前期科目授業評価アンケートの結果について
5. 令和5年度第1回ファカルティ・ディベロップメント委員会（4/26）
6. 令和5年度第2回ファカルティ・ディベロップメント委員会（5/24）
7. 令和5年度第3回ファカルティ・ディベロップメント委員会（6/28）
8. 令和5年度第4回ファカルティ・ディベロップメント委員会（7/26）
9. 令和5年度第5回ファカルティ・ディベロップメント委員会（9/27）
10. 令和5年度第6回ファカルティ・ディベロップメント委員会（10/25）

(5) 第5回歯学部FD委員会（令和6年1月25日（火）Web開催）

議題：

1. 大学IRコンソーシアム学生調査結果（令和4年度実施分）の分析結果について
2. 歯学部ベストティーチャー賞の選定と鹿児島大学ベストティーチャー賞の推薦について

報告：

1. 令和5年度第4回FD講演会の開催について

2. 令和5年度の歯学部FD経費執行状況について

(6) 第6回歯学部FD委員会（令和6年3月26日（火）Web開催）

議題：

1. 令和6年度活動計画書について
2. 令和5年度活動報告書について

報告：

1. 令和5年度全学第7回FD委員会について（11/22）
2. 令和5年度全学第8回FD委員会について（1/24）
3. 令和5年度全学第9回FD委員会について（2/28）
4. 令和5年度FD講演会アンケート結果について

4. 令和5年度歯学部FD活動の概要

(1) 第1回歯学部FD講演会

講師：田口則宏 教授(歯科医学教育実践学分野)、南弘之 教授(咬合機能補綴学分野)、
松本祐子 助教(歯科総合診療部)、岩下洋一朗 助教(歯科医学教育実践学分野)、
川島雄介 講師(顎顔面放射線学分野)、

演題：CBTの作問に関するFD講演会

日時：令和5年5月17日（火）17:00～18:30

場所：第4講義室及び収録動画のオンデマンド配信

対象者：歯学部教員

参加者：90名（うち、オンデマンド配信視聴による参加者12名）

概要：CBTに関して、作問体制、作成にあたっての注意点、要求される視覚素材の要件、放射線画像利用の手続き方法、およびPCセキュリティーの必要性についてご講演いただいた。
後日、欠席者と希望者を対象として、収録動画のオンデマンド配信を実施した。また、参加者に対し、事後アンケートを実施した。

成果：第117回歯科医師国家試験（令和6年1月実施）の鹿児島大学歯学部における合格率（新卒）は全国29校中4位（国公立大学12校中2位）であった。前年度の3位（同12校中1位）と比較すると、良好な合格率（新卒）は維持されているといえる。合格率は様々な要因に影響されるため、合格率を維持できた要因を特定できないが、本講演会が多少なりとも貢献した可能性はある。

(2) 第2回歯学部FD講演会

講師：歯学部学修支援部会長 後藤哲哉 教授、歯学部教育委員長 田松裕一 教授
歯学部入試諮問委員会委員 齋藤充 教授

演題：歯科医師国家試験合格率向上のためのFD研修会

日時：令和5年6月27日（火）17:00～18:30

場所：第4講義室及び収録動画のオンデマンド配信

対象者：歯学部教員

参加者：81名（うち、オンデマンド配信視聴による参加者1名）

概要：歯科医師国家試験の弱点領域を分析するとともに、令和5年版歯科医師国家試験出題基準等を確認し、改善策や対応策の検討内容についてご講演いただいた。後日、欠席者と希望者を対象として、収録動画のオンデマンド配信を実施した。また、参加者に対し、事後アンケートを実施した。

成果：第117回歯科医師国家試験（令和6年1月実施）の鹿児島大学歯学部における合格率（新卒）は全国29校中4位（国公立大学12校中2位）であった。前年度の3位（同12校中1位）と比較すると、良好な合格率（新卒）は維持されているといえる。合格率は様々な要因に影響されるため、合格率を維持できた要因を特定できないが、本講演会が多少なりとも貢献した可能性はある。

(3) 第3回歯学部 FD 講演会

講師：理学部長 小山佳一 教授、歯学部長 西村正宏 教授

演題：教育の質向上に関わる外部資金獲得の方略と研究倫理

日時：令和5年7月11日（火）16:30～18:00

場所：歯学部第4講義室及び収録動画のオンデマンド配信

対象者：歯学部教員

参加者：55名（うち、オンデマンド配信視聴による参加者0名）

概要：本学部の科学研究費の獲得件数や獲得金額は、他の国立大学歯学部と比較して、多くないため、科学研究費を精力的に獲得されてきた小山佳一先生に大型研究費獲得の利点、審査における評定要素等、不採択時の審査結果開示表の読み取り方、研究計画調書の作成等についてご講演いただいた。また、科研費の採択状況、本学の研究支援事業、科学研究費を除く外部研究資金について西村正宏教授から説明された。後日、欠席者及び希望者を対象として、収録動画のオンデマンド配信を実施した。また、参加者に対し、事後アンケートを実施した。

成果：医学域歯学系について、令和5年度の新規採択課題は19件、交付予定額（直接経費）は87,200千円であったが、令和6年度の新規採択件数は27件、金額は104,300千円であり、件数・金額共に増加した。

(4) 第4回歯学部 FD 講演会

講師：令和3-4年度ベストライター受賞者

成人系歯科センター 義歯インプラント科 末廣史雄 講師

口腔顎顔面センター 口腔顎顔面外科 吉村卓也 助教

演題：ベストライター賞受賞者による学部学生の臨床実習指導に関するFD講演会

日時：令和6年2月15日（木）17:00～18:00

場所：Web（Zoom）及び収録動画のオンデマンド配信

対象者：歯学部教員

参加者：51名（うち、オンデマンド配信視聴による参加者3名）

概要：臨床実習終了直後の学生に対するアンケートに基づきベストライターに選出された臨床実習担当教員2名にご講演いただき、指導のノウハウの共有を図った。後日、欠席者及び希望者を対象として、収録動画のオンデマンド配信を実施した。また、参加者に対し、事後アンケートを実施した。

成果：成果の検証は難しいが、次年度以降も学生による授業評価や教員相互による授業参観・授業評価等によりPDCAサイクルを継続する予定である。

(5) 第5回歯学部 FD 講演会

講師：田口則宏 教授（歯科医学教育実践学分野）、他7名

演題：歯学教育モデル・コア・カリキュラム令和4年度改訂版周知シンポジウム

日時：令和6年3月13日（水）～31日（日）

場所：収録動画のオンデマンド配信

対象者：歯学部教員

参加者：参加者20名（3月22日現在）

概要：一般社団法人日本歯科医学教育学会が主催したシンポジウムの視聴を FD 講演会の代わりとした。令和4年度に改訂された歯学教育モデル・コア・カリキュラムについて、改訂の概要、学習目標改訂の要点、参加型臨床実習実施ガイドラインの概要等が説明された。

成果：成果の検証は難しいが、今後の共用試験等の結果を踏まえた検証が必要である。

(6) 学生による授業評価

令和5年度も歯学部 FD 委員会から教員に対し「学生による授業評価」の実施を依頼した。そして、授業評価の結果を歯学部教育委員会から教員に還元し、授業改善につなげることを図った。具体的には、科目毎の授業評価アンケートを授業最終回に manaba を利用して実施した。評価項目（アンケートの質問事項）は、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い令和2年度に加えられた「配布資料による学習（manaba に資料のみ掲載等）」、「オンデマンド動画配信」、「リアルタイム配信（Zoom 等）」を含む全23項目である。授業担当者には、アンケートを実施した翌年度に当該科目及びすべての科目の評価項目別平均や自由記述欄のコメントが匿名化されて伝えられる。評価を受けた授業担当者は、「授業改善シート」の項目毎にアンケート結果に対する感想と今後の改善点を記入し、歯学部教育委員会へ提出することが求められている。令和5年度では、同年度に開講された授業についてアンケートを実施するとともに、令和4年度に実施したアンケートの結果に対して担当教員に授業改善シートの提出を依頼した。なお、アンケート結果（自由記述欄を除く）は、学内専用ウェブサイトに掲載されている。

授業評価アンケートの結果に基づいた授業改善シートの作成は、各教員が自分の授業を振り返り、授業改善の PDCA サイクルにつなげる良い機会である。歯学部教育委員会は、シラバス作成依頼時に科目内容の積極的な改善を呼びかけている。また、PDCA サイクルを充実させるため、平成31年度からシラバスに変更履歴を記載する欄を設け、改善点の記載を促している。集積された授業評価結果・授業改善シートの活用や組織的な PDCA サイクルの構築については、学生による

授業評価の限界や各科目の特性を踏まえた上での継続的な検討が必要である。

(7) 教員相互による授業参観・授業評価の実施

教員の授業公開・授業参観は新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより令和2年度から令和3年度前期まで中止を余儀なくされた。ワクチン接種や講義室・実習室の環境整備の状況などに鑑みて、令和3年度の後期から再開した。令和5年度では、令和4年度と同様に各歯系分野から推薦された1名の参観者に、歯学部で開講されている授業の中から希望する授業（自身が所属する分野以外）の参観と manaba のアンケート機能を利用した参観レポートの提出を求めた。授業担当教員に同レポートを還元するとともに、授業改善シートの歯学部教育委員会への提出を依頼する予定である。学生による評価とは異なる視点での評価を基にする授業改善が期待される。集積された授業評価結果・授業改善シートの活用や組織的な PDCA サイクルの構築については、学生の授業評価の場合と同様に継続的な検討が必要である。

(8) 歯学部ベストティーチャー賞の選考

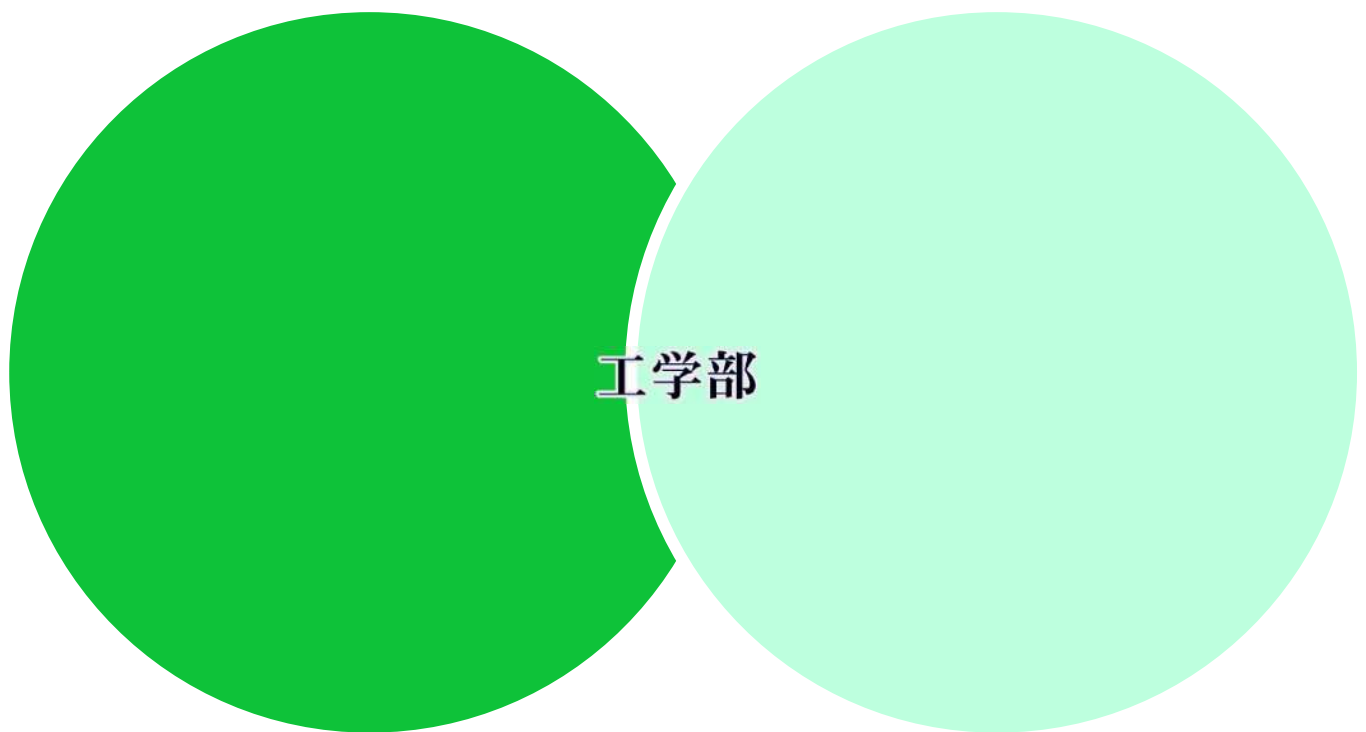
平成30年度に「鹿児島大学ベストティーチャー賞」表彰制度が制定され、歯学部で「歯学部ベストティーチャー賞」の選考が行われるようになった。同賞の選考は、「ベストティーチャー賞選定のための教員授業評価実施要綱」に基づき実施される。具体的には、2年次生から4年生次生の学生に対してアンケートを実施し、アンケート結果を基に選考している。選考基準は「授業方法や学びへの工夫がなされているか(技法)」、「教育に対する姿勢や取り組みが優れているか(熱意)」、「授業を受けることによってその科目に対する関心が深まったか(理解)」の3項目である。各学生が教員1名を選び、各学年で得票率の最も高い教員に「歯学部ベストティーチャー賞」を授与している。さらに、「歯学部ベストティーチャー賞」受賞者の中から最も得票率の高い者1名を「鹿児島大学ベストティーチャー賞」の候補者として歯学部から推薦している。また、令和2年度から、選考カテゴリーが大学院[医歯学総合研究科(歯学系)]と同一になり、歯学部FD委員会と研究科FD委員会(歯系)で協議の上、推薦する1名を決定している。令和5年度でも同様に歯学部ベストティーチャー賞と鹿児島大学ベストティーチャー賞の受賞者を決定した。

5. 特筆すべき事項と改善例

FD活動の重要性和歯学部教員の煩忙に鑑み、FD講演会等の開催回数を5回に留め、開催時間を固定せず、柔軟に変更した。また、FD講演会当日に参加できなかった人に対して、オンデマンド視聴で対応した。さらに、昨年度までの事後アンケートで研究費獲得に関するFD講演会の要望が多かったため、科学研究費獲得に関する講演会を開催した。本講演会は教育の改善に直結するものではないが、教育と研究は密接に関連し、安定した研究環境の構築は教育改善につながることから、企画・実施した。事前に歯学部の科学研究費獲得状況と対応策を講師の小山先生と協議した上で講演内容を決定した。事後アンケートによると、講演内容は概ね好評であり、採択率等は上昇したことから、一定の効果があったと考えられる。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和4年度実施分）の分析（歯学部）

評価する点	1. 1年生と3年生の7割を超える学生が、入学後に人間関係を構築する能力やコミュニケーション能力などが向上したと回答した。 2. 将来の展望を持ち、何をすべきかを把握していると回答した学生の割合が高かった（1年生、77%; 3年生、89%）。 3. 学生生活が充実していると回答した学生の割合が高かった（1年生、77%; 3年生、94%）。 4. 3年生において、88%の学生が専門教育の授業の質に満足している。また、94%の学生が将来の仕事と授業内容の結びつきに満足している。 5. 3年生において、62%の学生が教員に親近感を感じている。
課題と考える点 （3点以上）	1. 特に3年生において、学部卒業後の進路に大学院進学を予定する学生の割合が低かった（1年生、21%; 3年生、6%）。 2. 特に3年生において、授業時間外に授業に関連しない勉強を全くしない学生の割合（43%）が高かった。 3. 特に3年生において、健康・保険サービス、レクリエーション施設、キャリアカウンセリングに関する満足度が低かった。
課題への 具体的な対応案	1. 上記の1.～3.に関して、学生との意見交換会、面談、研究に関する実習の際に、大学院進学に関する説明を心懸けるとともに、学生生活や設備に関する要望や問題点等について継続して聴取していく。
昨年度挙げた 改善・対応策の 進捗状況	1. 学生との意見交換会やクラス担任による学生面談を行い、学生生活や設備に関する要望や問題点等について聴取した。その際に得られた内容を全分野で共有し、教育活動等で活用している。
2019年度以前 （コロナ禍前） と比較して、気 づいた点 ※ただし、必須 事項ではない。	全学の授業は依然としてオンラインで行われており、歯学部と他学部の間で教員と学生が対面で接する機会は少ない。



令和5年度 鹿児島大学工学部FD委員会活動報告書

はじめに

工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会（以下、FD委員会）は、個々の教員の教育改善の試みを支援するとともに、各学科（プログラム）の教育および学部教育全体の質を向上させるための活動を継続的に実施している。

工学部では全7プログラムのうち5プログラムが日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定プログラムであり、他の2プログラムも JABEE に準拠した教育を行っている。これまで継続的に実施してきた授業アンケートによる授業改善などのFD活動は、JABEE の求める教育改善のためのPDCA サイクルに取り込まれた形で実施されている。

本報告書は令和5年度の工学部FD委員会活動報告である。各プログラムのFD委員と学生係職員が協力して作成した。評価アンケートのデータ処理等は事務支援室職員に作業していただいた。これらさまざまな協力に感謝を申し上げる。本報告書を読んでいただき、FD委員会自体の改善のために委員会活動に関する忌憚のない意見をお寄せいただければ幸いである。

令和5年度鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 二井 晋

令和5年度 鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長 二井 晋（工学部副学部長，第1号委員）
委員 中尾 光博（機械工学プログラム，第2号委員）
委員 渡邊 俊夫（電気電子工学プログラム，第2号委員）
委員 小山 雄資（建築学プログラム，第2号委員）
委員 二井 晋（化学工学プログラム，第2号委員）
委員 齋田 倫範（海洋土木工学プログラム，第2号委員）
委員 鹿嶋 雅之（情報・生体工学プログラム，第2号委員）
委員 高梨 啓和（化学生命工学プログラム，第2号委員）
委員 永松 巖（理工学研究科等事務部長，第4号委員）

事務 梅田 公貴（理工学研究科等研究科・工学系学務課学生係長）
事務 門田 郁美（理工学研究科等研究科・工学系学務課学生係）

第1章 令和5年度の鹿児島大学工学部のFD活動

工学部FD委員会の任務は、(a)本学部で実施するFDに関すること、(b)本学部で実施する教育課程および教育活動に関する自己点検・評価に関すること、(c)それに基づく教育の改善および質的向上に関すること、(d)本学FD委員会から付託された事項に関することなどを審議し、実施することである。この任務に基づき、令和5年度の工学部のFD活動は、本FD委員会が主体となって、(1)授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成、(2)授業公開と授業参観の実施、(3)FD講演会の実施、(4)学外FD研修会への学部教員の派遣、(5)授業評価アンケートの分析、(6)報告書の作成の6つの活動を行った。また、本FD委員会では、本学における教育の内部質保証に関する推進要項に基づき、以下の2点のモニタリング項目について自己点検・評価を行うとともに、さらなる改善のための方策等についても議論した。

- ・卒業時学生からの意見聴取の結果による学生の学習成果に対する認識の把握
- ・授業の内容および方法の改善を図るためのFDの組織的な実施とその成果の把握

第2章 工学部FD講演会および鹿児島大学FDワークショップ

2.1 第1回工学部FD講演会

令和5年度の第1回工学部FD講演会は、令和5年9月20日(水)15時から16時まで工学部教授会を一時中断して対面で行った。講師はプレゼンテーションルーム(理工系総合研究棟2階)において講演を行った。講師は令和4年度の工学部エクセレント・レクチャラー受賞者である以下の先生方である。

講師(所属プログラム)

福原 稔 教授・大高 武士准教授(機械工学) 平山 斉 助教(電気電子工学)

水田 敬 准教授(化学工学) 橋本 雅仁 教授(化学生命工学)

松元 隆博 教授(情報・生体工学) 増留 麻紀子 助教(建築学)

(受賞者である長山 昭夫 准教授(海洋土木工学)は都合により欠席)

本講演会への工学部教員の参加者数は78名で参加率は79.6%であった。

2.2 学外FD研修

令和5年12月9日に職業能力開発総合大学校(小平市)で開催された日本教育工学会研究会に機械工学プログラムの中尾光博准教授が参加した。

「生成AIを取り入れたPBLの授業設計と実践」は、生成AIを活用することで、プログラミングを伴うPBLがどの程度の時間で実践可能となるか、プログラミング未経験者でも取り組むことができるかを検証し、生成AIが解決策の創出においても有効かについて考察することを目的としている。この実践は、授業中に生成AIへの質問の仕方について、プログラミング経験者から助言が受けられる環境であれば、学習者の中にプログラミング未経験者がいても実施可能であり、生成AIは解決策の創出に対して、Web検索や協働学習以上に有用で効率的であることが示唆されている。また、生成AIを取り入れたPBLにおける教員の役割が変化し得ることも示唆されている。一方でプログラムを完成させられたとして、それが本当に生徒自身のアイデアや力なのか、AIの

力なのかどのように判別するのか、といった慎重な意見が会場からあがっていた。

「文章生成 AI を活用した児童の自由記述からの指導・助言生成の試み」は、小学校児童の自由記述文の ChatGPT による評価が教師の指導・助言の参考となり、教師の負担軽減と教育の質の向上の両方を達成できる評価支援システムとなりうるかを検証することを目的としている。即時評価システムは構築できているものの、出力結果が実用に耐えうるものではなく、今後の改善が必要であるとしている。なお、自治体で ChatGPT そのものが使用禁止であったため実証実験は実施できず、模擬実験を行っていたとのことである。同意が得られた児童に回数制限で利用させてみたところ、文章のレベルがあがる傾向がみられたという興味深い結果が報告された。一方、AI を利用しすぎると教師自身の能力向上の機会が奪われてしまうのではないかと、という懸念の声が会場よりあがっていた。

「プログラミングの反転授業における学生の ChatGPT の利用について」は、反転型のプログラミングの授業において大学生に ChatGPT を利用させ、アンケート結果を報告している。その結果、プログラミングの授業では ChatGPT がインターネット検索をかなりの部分で代替できることや、人間のサポートの補佐として十分に有用であることなどが示唆されている。他にも活発な質疑が行われ、以下のような回答があった。

- ・予習段階では ChatGPT に対する評価がわかれ、総合的にインターネット検索と同等。
- ・小テストのように、聞く内容が明確な場合には学生目線で使いやすいが、何を質問していいかわからない場合は使いづらく、挫折してインターネット検索を使った学生がいる。
- ・TA などの方が、効果は上であった。ただし、ChatGPT の使用によって総合的に理解度は向上していた。これは TA の手が足りていないこと、質問しづらい際のサポートになっていることを示唆している。
- ・自由にさせると演習でいきなり ChatGPT に聞いて解決してしまう学生が現れる。そうなった学生の多くは自分で学習する気力がなくなってしまった。そのため、一旦は自分で解かせるべきであると思われる。
- ・聞けば答えが返ってくるので、自分の頭で考えなくなる場合がある点には注意が必要。
- ・課題の達成度は上がるが、イコール理解度の向上ではないことには注意が必要。
- ・親和性の高い学生と低い学生が現れる。親和性の高い学生は、そもそも ChatGPT がなくてもできた可能性があり、その点には注意が必要。

「高等学校数学科における ICT 機器を利用した授業に対する学習者の認識についての調査」は、高等学校の数学の授業における ICT 機器導入の与える学習者の認識について調査し、その結果を報告している。今回の調査では ICT 機器の利用が説明場面や共有場면을より効率的にすることはみてとれた。また、コンピュータの利用と学習成果との間に因果的必然性はないこと、ICT 機器を利用したからといって授業がより面白くなることはなく、どちらも変わらないという意見がほとんどであったことを報告している。また、ICT 教育の導入は一見感覚的な理解を助けるようにみえるが、体感・実感をショートカットすることが理解の妨げとなるのではないかと、という懸念の声が会場よりあがっていた。

今回の学外研修への参加によって、生成 AI やコンピュータを教育へ導入することによる教育の効率化や質の向上が盛んに検討されていること、またその現状について知ることが出来た。今後の

発展次第では強力な教育ツールとなりうるため、今後の動向に注視していきたい。

第3章 学生による授業評価とそれを生かした授業

3. 1 学部授業評価アンケート分析結果

3. 1. 1 学部平均値の推移とその分析結果

図 3.1.1(1)に、講義・演習科目の授業評価アンケート結果の工学部全体の平均値に関して、平成 30～令和 5 年度までの 6 年分の授業評価の推移を示す。平均値は、科目数で重みづけて求めた値である。令和 2 年度より、講義・演習科目に関するアンケートの質問項目に④授業の難易度が追加されている。直近 6 年分の推移より、ほとんどの項目で顕著な改善傾向にあることが分かる。令和 5 年度も前年度に比べて若干低いか横ばいである。⑩予習・復習に関しては、依然として他の質問項目よりも低く低下傾向にある。授業時間外学習が不足しないよう、レポート課題の内容などについて改善を講じる必要がある。⑫教員の対応についても、ほとんど変化は認められないが他の項目に比べやや低いことから改善が望まれる。しかし、ハイブリッド講義などに対応するための時間やその他の業務が肥大化していることもあり、教員が疲弊しない配慮も必要である。

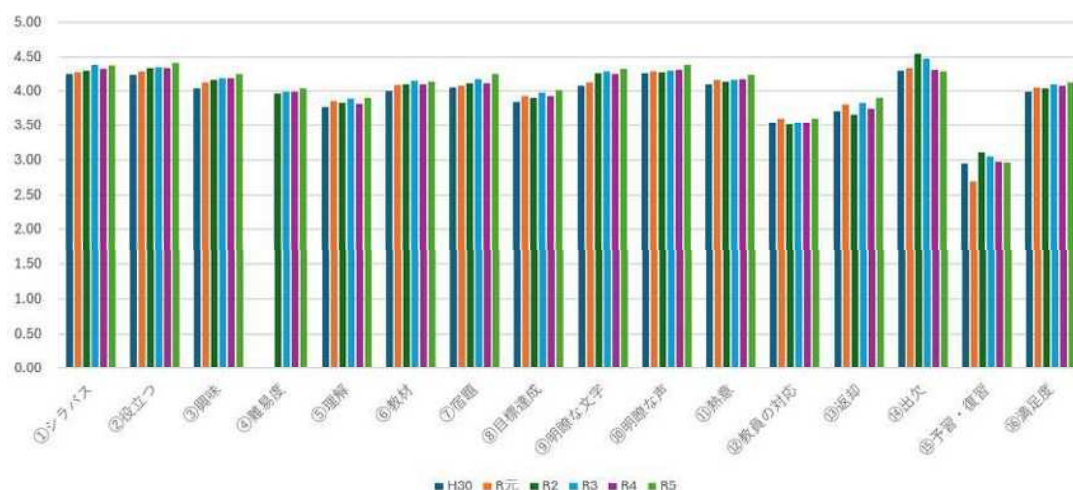


図 3.1.1(1) 講義・演習科目の結果（工学部全体の平均）（平成 30～令和 5 年度）

次に、平成 30～令和 5 年度の実験系科目に関する授業評価アンケート結果を図 3.1.1(2)に示す。令和 2 年度はコロナ禍のため、実験科目の多くが遠隔やオンデマンド授業により実施されたため、この年度は特に低い値となった。令和 3 年度以降は本来の対面での実験が実施されたこともあり、評価結果もコロナ禍以前に戻りつつある。令和 5 年度の評価結果では、③実験装置、④実験時間、⑫TA などの評価が下がっている。一方で⑥教材、⑯満足度については微増となっており、⑬予習の項目については、これまで改善されてきたが、令和 5 年度は前年度よりも低くなっている。これらについては今後検討し改善していく必要がある。

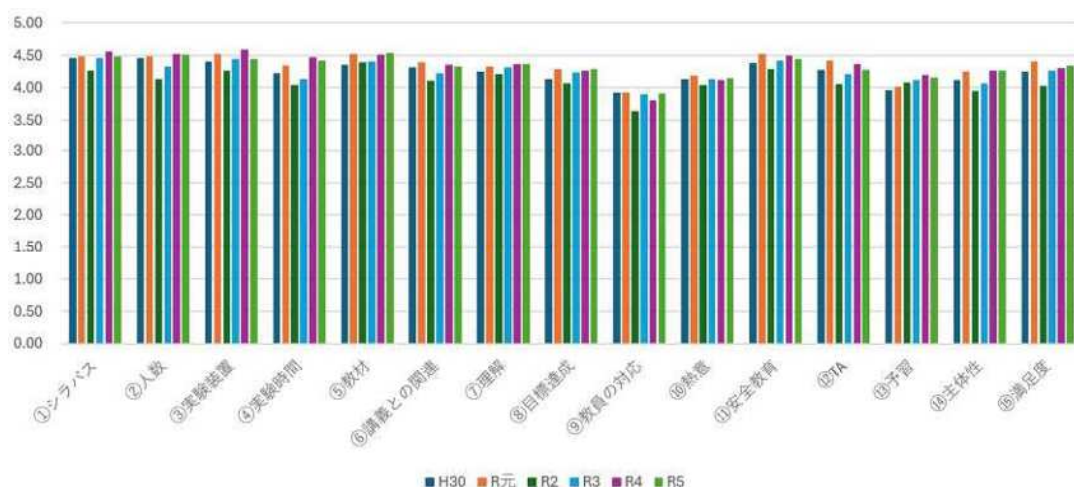


図 3. 1. 1 (2) 実験系科目の結果（工学部全体の平均）（平成 30～令和 5 年度）

3. 1. 2 機械工学 PG の推移とその分析結果

図 3. 1. 2 には、機械工学 PG の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの評価結果を示す。図 3. 1. 2 は、前期および後期（あわせて 1 年間）に開講された科目に対する各アンケート項目の評点の平均点について、平成 30 年度から令和 5 年度（6 年間）までの推移を示している。評点は、「そう思う：5」、「どちらかと言えばそう思う：4」、「どちらとも言えない：3」、「どちらかと言えばそう思わない：2」、「そうは思わない：1」の 5 段階評価である。また、「④難易度」は、令和 2 年度から追加された項目である。

図 3. 1. 2 から、大多数の項目は評点 4 前後で推移するとともに増加傾向にあり、各教員による継続的な授業改善の効果であると考えられる。このなかで、「⑫教員の対応」、「⑬返却」、および「⑮予習・復習」が、比較的評点が低い項目として挙げられる。「⑫教員の対応」は、引き続きオフィスアワーの周知徹底および有効活用など、学生が教員に質問しやすい環境づくりが必要と考えられる。「⑬返却」は、学習管理システム（manaba）を効果的に活用するなどして対応する必要があると考えられる。「⑮予習・復習」は、例年もっとも評点が低い項目であるが、小テスト実施、レポートの内容・回数の再検討等、学生が率先して予習・復習を行うようなさらなる取り組みが必要と思われる。「⑭出欠」は昨年度より低下しているが、これは原則対面授業になった影響であると考えられる。今後も授業評価アンケートの推移を確認しながら、授業改善を継続することが重要である。

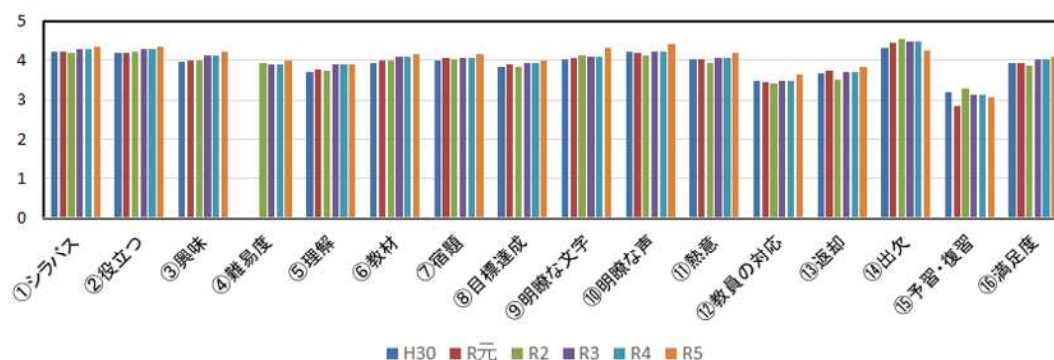


図 3.1.2 機械工学 PG の講義科目の授業評価アンケート結果の推移（平成 30～令和 5 年度）

3. 1. 3 電気電子工学 PG の推移とその分析結果

図 3.1.3(1)および図 3.1.3(2)に、電気電子工学科(PG)の過去 6 年分（平成 30 年度から令和 5 年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。図 3.1.3(1)が講義科目を、図 3.1.3(2)が実験科目を示している。講義科目に関しては、③興味について高い評価を維持し、①シラバス、②役立つ、⑤理解、⑥教材等、⑦宿題等、⑧目標達成、⑨明瞭な文字、⑩明瞭な声、⑪熱意、⑬返却、⑯満足度の 11 項目で上昇傾向が見られている。これは教員の授業改善への尽力によるものである。一方、⑫教員の対応については上昇傾向にはあるが、平均 4.0 を下回る評点にとどまっており、改善への努力が望まれる。また、⑮予習・復習については一昨年度からの減少傾向には歯止めが掛かったものの、十分とは言えない。引き続き、学生の自主的な学習を習慣付けるような指導をしっかりとっていく必要がある。令和 2 年度から設問が追加された④難易度については、昨年度とほぼ同じであり、学力の低下によるものか、今後の注視が必要である。また、⑭出欠については、一昨年度と昨年度に比べてわずかに減少が見られた。ほとんどの授業が対面形式に戻ったことの影響が考えられる。実験科目については、すべての項目において平均 4.0 を越える高い評点が得られており、全体として上昇傾向にある。引き続き高い評価が得られるように継続的な改善が期待される。

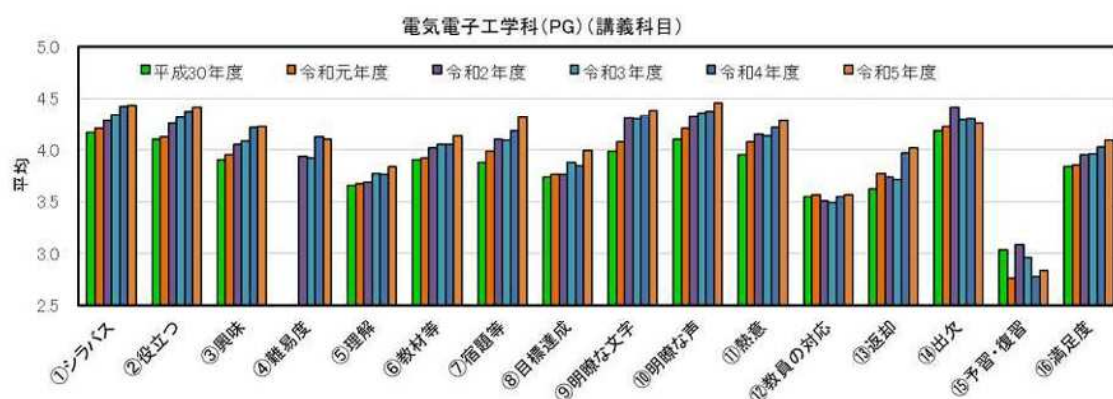


図 3.1.3(1) 電気電子工学科(PG)の講義科目のアンケート結果の推移（平成 30～令和 5 年度）

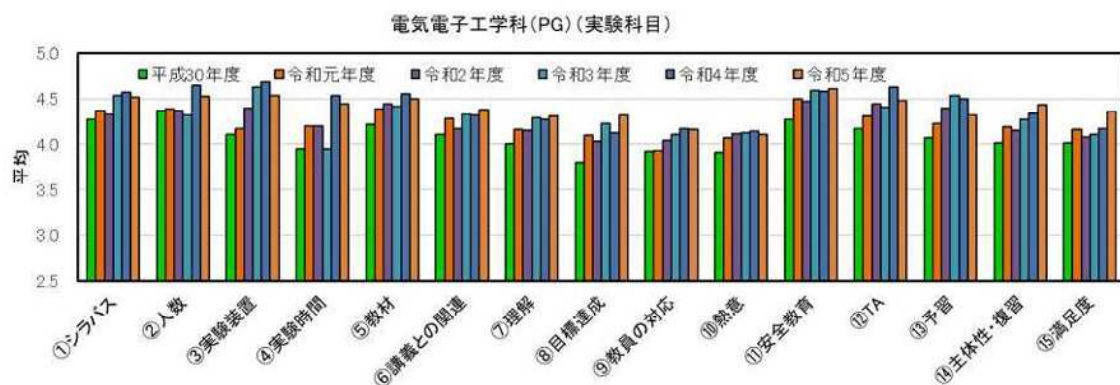


図 3.1.3(2) 電気電子工学科(PG)の実験科目のアンケート結果の推移 (平成 30～令和 5 年度)

3. 1. 4 建築学科の推移とその分析結果

建築学科では建築設計演習の科目が全学年にあり、その形態は講義とも実験とも異なるが、アンケートはこれらを講義科目と位置づけて実施している。実験科目は 1 科目のみであるため、ここでは前年度までと同様に、講義科目を対象として分析することとする。

図 3.1.4 は、過去 6 年間の年度ごとの結果 (前期および後期の科目数で重みづけした平均値) を示している。ほとんどの項目が改善の傾向にあり、評点は 4 以上の高い水準で推移している。そのなかで⑫教員の対応、⑬返却、⑮予習・復習は相対的に低い。これらの項目は標準偏差が大きい傾向もみられ、科目ごとの特性が出ている。たとえば設計演習で課される課題の負担がその他の科目に比べて高いことがこれまでも指摘されており、カリキュラム全体をみて工夫や連携による調整・改善が求められている。今年度から 2・3 年生の設計演習をスタジオ制とする変革があったことから、今後のアンケート結果の動向を注視したい。

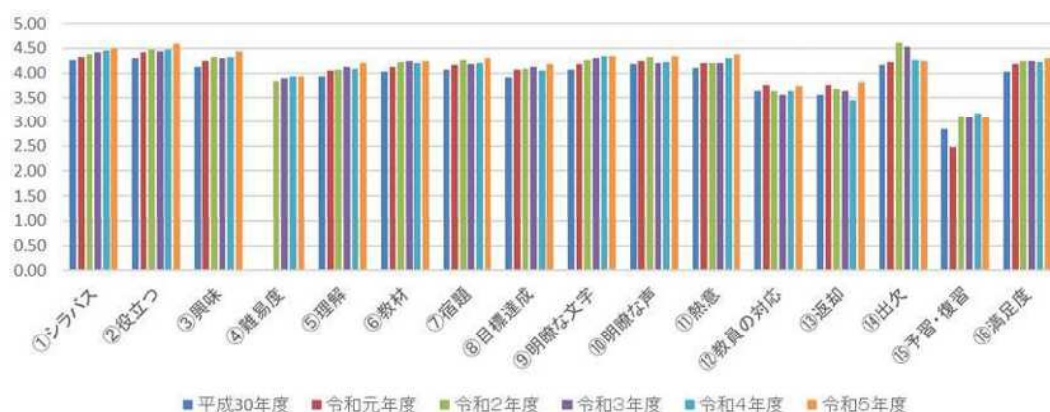


図 3.1.4 建築学科の講義科目の授業評価アンケート結果の推移 (平成 30～令和 5 年度)

3. 1. 5 化学工学 PG の推移とその分析結果

最近6年間（平成30年～令和5年度）の講義科目の授業評価アンケート結果を図3.1.5(1)に示す。ほぼすべての項目であきらかに上昇傾向が見られ、これは継続的なFD活動の成果によるものと考えられる。「⑮予習・復習」の項目は令和1年に底を打ち令和3年まで上昇していたが、この2年間は低下した。遠隔講義による教材のオンデマンド化で予復習がしやすかったのに対して対面講義となり緩みが出ていると考えられる。ただし、令和5年度で比較してもこの項目は他学科の平均値2.94に対して2.78とかなり低く、今後のさらなる工夫が必要である。

実験科目のアンケート結果を図3.1.5(2)に示す。年度によるばらつきも大きいように思えるが、対面指導が難しい時期もあり、実験科目としての学生の受け取り方にも変化があったと思われる。令和5年の結果は多くの項目でこれまでよりも低下し、特に興味と満足度が低く、その理由としてレポート返却の項目が低かったと読み取れる。令和2年度後期からは実験科目の実施体制を変更した。従来は研究室毎に実験テーマを用意して受講学生はグループで順番に各研究室のテーマについて実験を行っていた。変更後は学生実験担当の教員を決め、その指導のもとで実験を実施するようにした。PG会議や実験委員会にて改善をはかる必要がある。

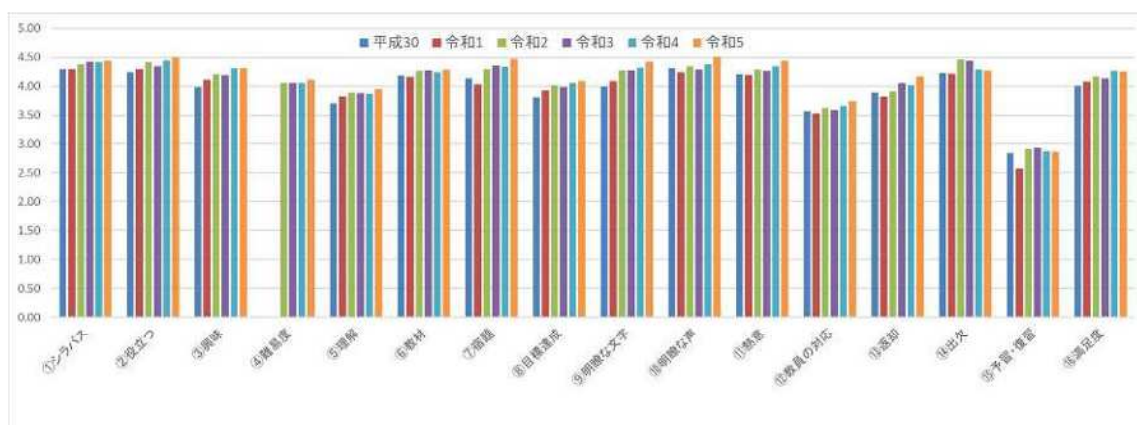


図3.1.5(1) 化学工学 PG における講義科目の授業評価アンケート結果の推移（平成30～令和5年度）

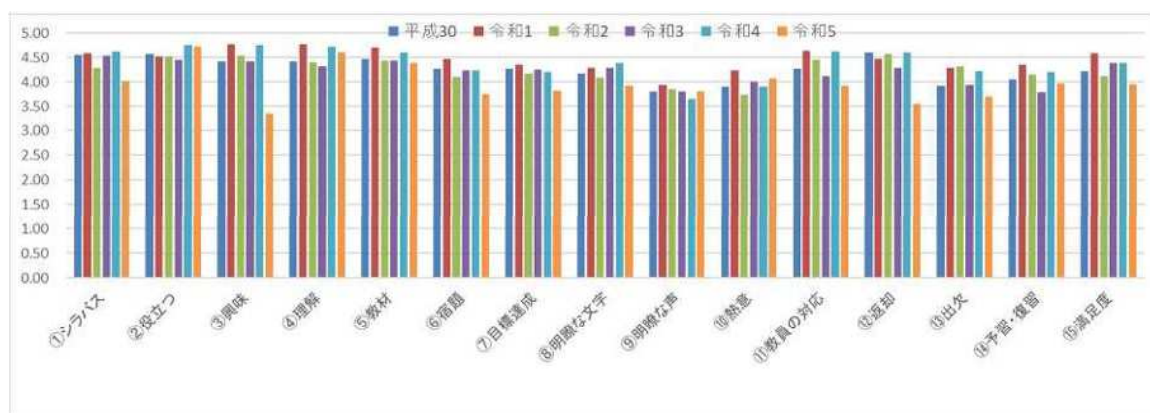


図3.1.5(2) 化学工学 PG における実験科目の授業評価アンケート結果の推移（平成30～令和5年度）

3. 1. 6 海洋土木工学 PG の推移とその分析結果

図 3.1.6(1)は、本 PG において、平成 30～令和 5 年度の 6 年間に実施した講義・演習科目の授業評価アンケートの結果を示す。本 PG における令和 5 年度の評価は、令和 4 年度に比して低下している評価項目があるものの、「④難易度」を除く 15 項目中 13 項目で評点 4 以上となっている。さらに、「⑫教員の対応」、「⑭出欠」、「⑮予習・復習」を除く項目において工学部の平均値を上回っており、各教員による継続的な授業改善によって、全体的には高い評点が維持されていると考えられる。評価の低かった「⑫教員の対応」については、manaba などを活用した効率的・効果的な対応策を検討しながら、改善する必要がある。本プログラムにおける「⑮予習・復習」の評価は 2.92 ポイントであり、1 コマ (90 分) の授業に対する予習と復習の時間 (レポート作成時間を含む) が 1～2 時間以下であることを意味している。一方で、「⑦宿題」の評価は 4.25 ポイントであり、予習と復習の時間は少ないものの、レポート内容は授業の理解に役立っているとも判断できる。しかし、学生の予習と復習に対する姿勢は十分であるとは言えず、レポート内容を見直すなどの改善が必要である。

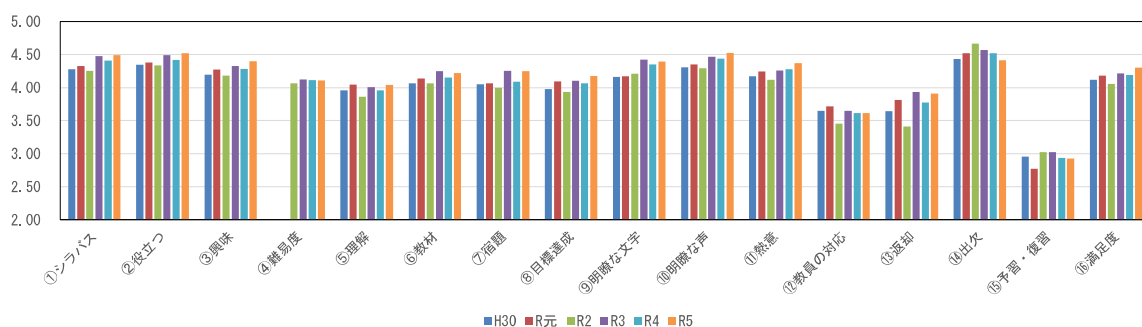


図 3.1.6(1) 海洋土木工学 PG の講義・演習科目の授業評価アンケート結果の推移 (平成 30～令和 5 年度)

図 3.1.6(2)は、本プログラムにおいて、平成 30～令和 5 年度の 6 年間に実施した実験科目の授業評価アンケートの結果を示す。令和 2 年度はコロナ禍のため、実験科目の多くが遠隔やオンデマンド授業により十分に実施出来なかったため、この年度は特に低い値となっている。令和 3 年度以降は対面形式による実験の実施が可能となったものの、3 密回避や一部のコマを遠隔形式で実施せざるを得ないなどの制約もあった。そのため、単純に比較し難い面もあるが、令和 4 年度以降は基本的に対面による実験が実施可能となったことで、各項目で概ね 4 ポイントかそれ以上の評価を得ている。令和 5 年度についても、前年度と同様にコロナ禍以前と同程度かそれ以上の高い評点が得られている。この結果は実験講義における対面実施の重要性を再認識させるものであり、この水準を維持した教育を継続して実施することが重要である。

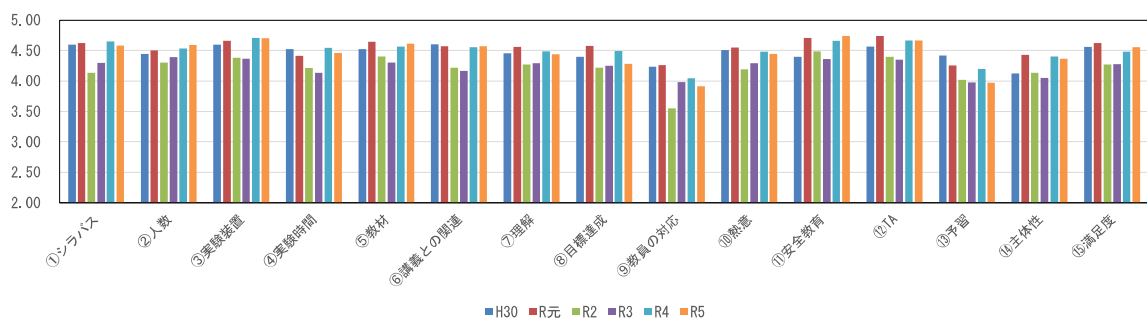


図 3.1.6(2) 海洋土木工学 PG の実験科目の授業評価アンケート結果の推移
(平成 30～令和 5 年度)

3. 1. 7 情報・生体工学 PG の推移とその分析結果

平成 21 年の改組により情報工学科・生体工学科生体電子工学コースが統合され、情報生体システム工学科となり、その後令和 2 年度の改組により、先進工学科情報・生体工学プログラムとなった。今年度から 1～4 年生の全学年で情報・生体工学プログラムのシラバスに基づき教育を行っている。

FD 授業評価アンケートは、平成 21～令和 5 年度の 14 年間収集されており、これらのデータから経年変化の分析（平成 30 年度～令和 5 年度）と今年度の工学部平均値との比較分析を行うこととする。講義系科目に関するアンケートの質問項目は、①シラバスの内容と実際の授業との一貫性、②授業の今後の有用性、③授業の興味深さ、④授業の難易度（令和 2 年度以降）、⑤授業の理解度、⑥教材等の適切性、⑦レポート等の理解への効果度、⑧授業目標の達成感、⑨文字の明瞭性、⑩声の明瞭さ、⑪教員の熱意度、⑫質問等に対する教員の対応度、⑬レポート等の評価への満足度、⑭出席回数、⑮予習・復習の時間数、⑯総合的満足度であった。講義系科目の集計結果を図 3.1.7(1)に示す。

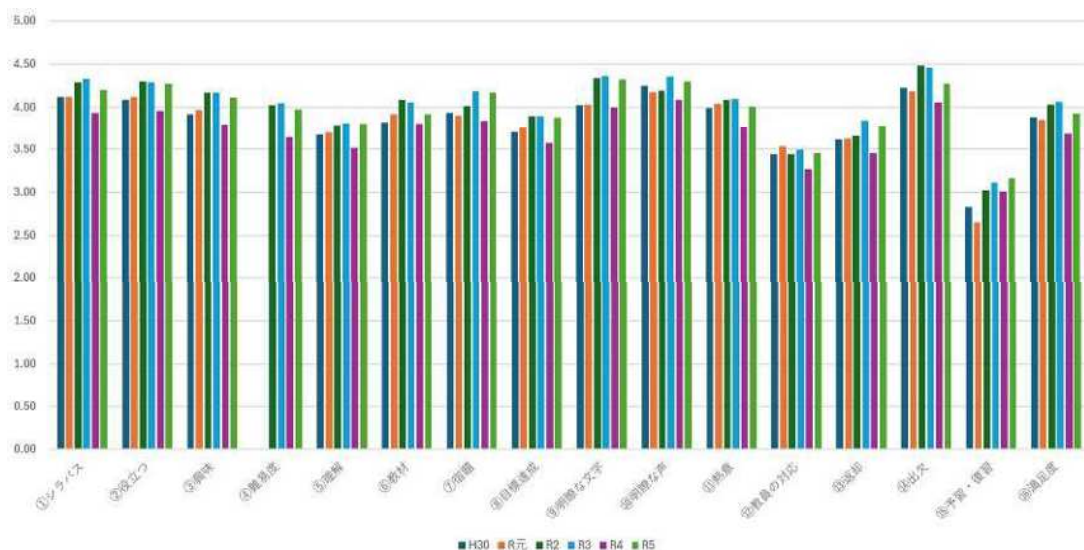


図 3.1.7(1) 情報・生体工学プログラムの講義科目授業評価アンケート結果の推移（平成 30 年度～令和 5 年度）

コロナ禍前の令和元年度は、ほぼ全ての講義が対面で実施され、コロナ禍が始まった令和2年度から2年間は一部の講義を除き、多くの講義がZoomによるリアルタイム型又は、動画配信によるオンデマンド型のオンライン講義で実施された。令和4年度は科目によって、対面形式、オンライン形式、及び対面とオンラインのハイブリッド形式が混在した形で実施された。特にコロナ禍の鎮静化により対面講義が増えた令和4年度は講義形態が複雑化した影響もあってか、ほぼ全ての項目で評価値が下がった。令和5年度では全ての項目において、評価値が改善されている。新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことから、対面での講義対面での講義の割合がコロナ禍以前に戻ったことも一因として考えられる。

実験系科目の質問項目は、①シラバスの内容と実際の実験との一致性、②実験グループの人数の適切さ、③実験装置の適切さ、④実験時間の適切さ、⑤教材の理解への貢献、⑥講義との関連、⑦理解度、⑧目標達成、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑪安全教育の実施、⑫TAの熱意、⑬予習の度合い、⑭主体的に実験に取り組めたか、⑮総合的満足度であった。実験系科目の集計結果を図3.1.7(2)に示す。令和5年度は情報・生体工学実験I、IIを令和4年度と同様にオンラインと対面のハイブリッドで実施し、情報生体工学実験IIIについては対面で実施した。授業評価アンケートの全項目で改善が見られた。これは対面での実施に戻ったことが大きく影響していると考えられる。

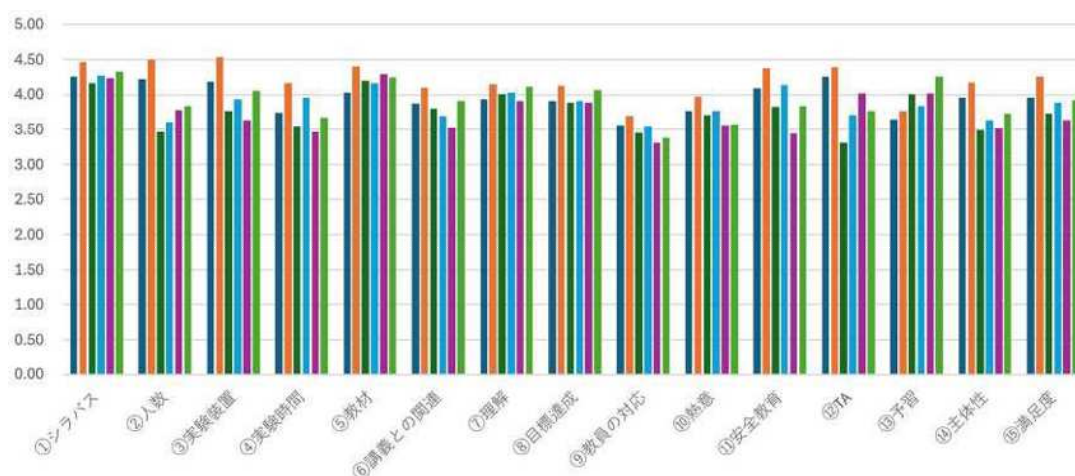


図 3.1.7(2) 情報・生体工学プログラムの実験科目授業評価アンケート結果の推移（平成30年度～令和5年度）

以上のように、講義系科目及び実験科目のアンケート結果の推移及び分析から、情報・生体工学プログラムの授業は、アンケート点数の評価としては今年度も昨年度と同様に、教員及びTAの努力により十分な水準を保っていることがわかった。

3. 1. 8 化学生命工学 PG の推移とその分析結果

2023 年度の集計結果を、2019～2022 年度分と合わせて図 3.1.8(1)に示す。2020 年度より、項目④難易度という項目が追加された。2019 年度は新型コロナウイルスのパンデミック前の期間を含むので、2020 年度以降について考察する。今年度は、ほぼすべての項目で低下傾向が認められた。このうち⑤理解が低下した原因を考察すると、項目の関連性から考えて、④難易度が上昇して次第に⑭出欠と⑮予習・復習が低下しているように見える。一方、各講義の授業参観報告書および授業計画改善書を見ると、2020 年度以降、講義の内容を高難易度化したとの記述は確認できない。正確には、学年進行の影響などを詳細に検討する必要があるが、学生の資質や学習に対する姿勢などの変化が影響している可能性が考えられる。2023 年度に限って考えれば、授業に出席しなくなったのは、コロナ禍が明けて対面での講義が始まったためにオンラインで出席できなくなったことが一因の可能性はある。同様に、通学に時間が割かれたために予習・復習の時間が減少した可能性がある。しかし、同様の傾向は 2022 年度にもみられていることから、単にコロナ禍が明けて対面での講義が始まったことが⑭出欠と⑮予習・復習が低下した理由とは考え難い。注意深く経過を観察する必要があるだろう。

経年変化ではなく全体の値に着目すると、⑮予習・復習を除いて 3.5-4.5 にあり、概ね良好と判断できる。一方で、項目ごとに学部平均値に対する化学生命工学プログラムの平均値の比を求めると 0.93～1.02 となり、1 を超えたのは④難易度と⑯出席だけであった。とくに低かったのは⑤理解、⑧目標達成の 0.93、⑨明瞭な文字、⑩明瞭な声の 0.94 であった。⑨明瞭な文字、⑩明瞭な声については教員の更なる努力が求められるが、空調設備の騒音の影響、プロジェクターの輝度不足の影響なども考慮すべきであろう。また、教室の前方が空席にもかかわらず後方に着座した学生を前方に着座するような指導が必要であろう。

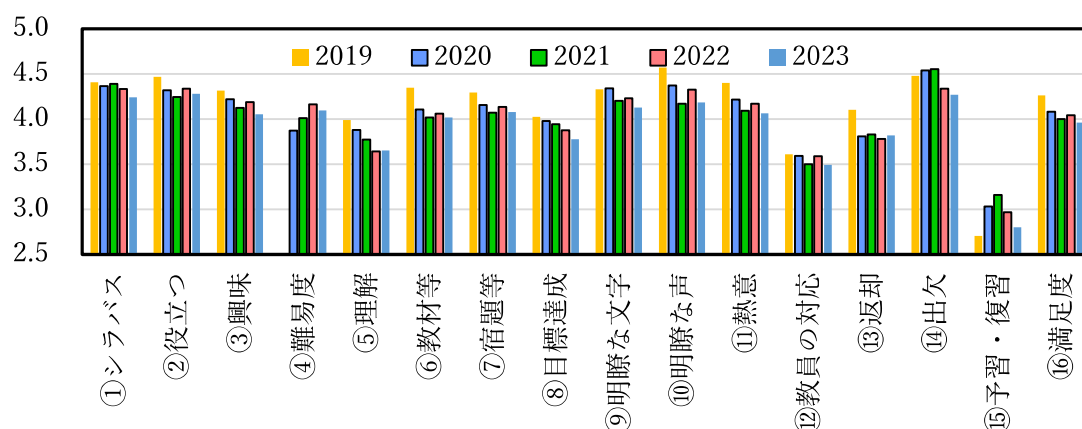


図 3.1.8(1) 化学生命工学 PG における授業評価アンケート結果の推移

3. 2 授業計画改善書の各 PG の活用状況

3. 2. 1 機械工学 PG の活用状況

FD委員が収集した各教員による授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともにPGの教育評価委員会が整理して分析を行っている。PGの教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「教育評価委員会報告書」としてまとめている。この報告書は、JABEE活動の一環としても活用されている。授業計画改善書は電子ファイルで保管され、全教員が必要に応じて閲覧できる。また、教育評価委員会報告書も電子ファイルで保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教員に公開されている。

3. 2. 2 電気電子工学 PG の活用状況

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート結果（評点とそのレーダーチャート、および自由記述）と共にプログラム事務室および会議室の JABEE 用保管庫にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主にプログラム FD 委員会において授業改善に取り組むための資料として用いるほか、JABEE 活動の一環としても活用している。

3. 2. 3 建築学科の活用状況

教員は、授業評価アンケートの集計結果に基づいて授業計画改善書を作成し、次年度以降の授業に反映させることとなっている。授業アンケートの評点は全科目について学科会議で確認するとともに、問題点を共有することとしている。本学科では、平成 19 年度より授業満足度の評点と授業担当時間を用いて、教員の教育貢献度を評価するシステムを導入している。また、エクセレント・レクチャラーの選出においても、授業評価アンケートの結果を参考資料として用いている。

3. 2. 4 化学工学 PG の活用状況

化学工学 PG では、前期末および後期末に教員間ネットワークを開催し、成績評価の分布や授業改善計画書および次期の開講科目のシラバスの確認を実施している。シラバス、授業改善計画書、試験問題および講義資料等は科目毎にファイルボックスに収納して専用の部屋に保管しており、プログラム教員がいつでも閲覧できる仕組みが整備されている。カリキュラムについては、カリキュラム WG で年に数回の検討・精査を実施している。今後もこのような継続的な取り組みにより、評価の再確認と改善を図っていく。

3. 2. 5 海洋土木工学 PG の活用状況

工学部 FD 委員会が学生に対して実施する専門科目の授業アンケートの結果に基づき、各教員は、シラバスに記載した評価基準との整合性を自己評価した上で、FD 委員が所属するプログラム教育システム評価委員会に授業計画改善書を提出している。提出された評価資料に基づき、プログラム教育システム評価委員会では成績評価分布や受講生の合格率などの分析を行い、その結果をプログラム会議で報告している。プログラム教育システム評価委員会で成績評価の偏りなどに問題点が発見された場合には、担当教員に成績評価法の詳細な説明を求め、プログラム会議において成績評価法に問題が無いかを審議している。このように、授業計画改善書を活用した教育の点検および改善を継続的に実施している。

3. 2. 6 情報・生体工学 PG の活用状況

情報・生体工学プログラムでは旧情報生体システム工学科の平成 22 年度以降、授業計画改善書をプログラム事務室で保管し、全ての教員が閲覧可能な状態で管理を行っている。各教員による授業改善への取り組みおよび結果を教員全員で共有することで、学科全体の教育内容の継続的な改善に貢献している。また、プログラムとしての JABEE 申請は行わないことにし、その代わり学科内で組織している教科グループ WG において、半期に 1 度、全開講科目について担当教員による報告と振り返りを実施し、科目の内容の見直しなどの検討の際に、資料として活用している。また、授業評価アンケートの評価結果を、エクセレント・レクチャラー賞受賞候補推薦の資料として用いている。

3. 2. 7 化学生命工学 PG の活用状況

授業計画改善書は応用化学工学科応用化学コースの時代から引き続き同一の理念の下で活用を図っている。すなわち、授業計画改善書を、卒業生アンケート集計結果、授業参観報告書およびそれに対する回答書等とともに、各教員が分析、評価し、必要に応じて互いに連携する科目の担当教員グループで作るカリキュラム小委員会において、十分な教育効果が達成されているかどうか討論されている。検討した結果や問題に対する対策はプログラム内の教育プログラム改善検討委員会において報告され、全体カリキュラムとの整合性も考慮しつつ、最も効率の良い方法で運用できるよう検討され、必要な改善がなされている。このように、授業計画改善書等の F D 活動書類を資料として、教員間で協力・連携そして切磋琢磨するシステムが構築され、その中で授業内容・方法の改善もなされている。

第 4 章 PG における FD と JABEE への取り組み

4. 1 JABEE 認定プログラムを実施している学科 (PG) での取り組み

4. 1. 1 機械工学 PG

機械工学科 (PG) は、平成 16 年度に JABEE 認定の審査を受審した。ここで評価 W の指摘を受けていた評価項目に対しては、平成 18 年度の JABEE 中間審査において全て改善している。平成 21 年度実施の JABEE 認定継続審査では、評価 C を受けた項目が 10 箇所あったが、評価 W 以下の評価を受けた項目は無く、6 年間の JABEE 認定継続が認められた。平成 27 年度実施の JABEE 認定継続審査では、評価 C を受けた項目が 11 箇所あったが、評価 W 以下の評価を受けた項目は無く、さらに 6 年間の JABEE 認定継続が認められた。令和 3 年度に再び JABEE 認定継続審査を受審予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により令和 4 年度秋に延期された。

本 PG は、平成 22 年度から広範囲にわたる機械工学領域の教育・研究を、生産工学、エネルギー工学、機械システム工学の 3 つのコース（分野）で分担実施している。各コース（分野）は、複数の研究室により構成され、それぞれのコース（分野）にコース長（分野長）をおいている。この 3 名のコース長（分野長）と副専攻長（副 PG 長）から組織される「専攻教育委員会」において、学科の教育プログラムを点検していたが、平成 25 年度からその役割は「コース長（分野長）会議」に移管された。この「コース長（分野長）会議」での議論と各教員への提案・指摘をもとに、学科 (PG) の教育環境のさらなる改善と実施体制の強化が図られている。さらに学科 (PG) 内には、教務

委員会委員，FD 委員会委員，JABEE 委員会委員等からなる教育の現状を分析する委員会としての「教育評価委員会」と，JABEE 認定のための審査資料作成を行う「JABEE ワーキンググループ」がある。

令和 4 年度は，JABEE 認定継続審査を受審するための審査項目や評価項目の確認などを行い，審査資料の作成を行った。令和 4 年度秋に受審し，令和 5 年 4 月 1 日から 6 年間の JABEE 認定継続が認められた。さらに，「JABEE ワーキンググループ」では，4 年生の卒業時における JABEE 修了判定の評価を行った。平成 27 年度より，1 年生から 4 年生まで成績の自己点検として「学習・教育達成目標（教育目標）の達成度の自己点検」を続けている。また，卒業論文発表時に複数教員による発表評価を「卒業論文発表評価表」により実施しており，評価結果をすべての発表学生にフィードバックしている。令和 5 年度も，これらの委員会・ワーキンググループによって，教育の改善に関する実質的・継続的な活動を実施している。

4. 1. 2 電気電子工学 PG

電気電子工学 PG では，令和 4 年度分の JABEE 継続審査を令和 5 年度に受審し，6 年間の継続認定が認められた。プログラム FD 委員会では，今年度，計 3 回の委員会を開催したほか，プログラム会議や電子メールでの議論，各種アンケートの実施などにより，プログラムの教育改善に取り組んだ。プログラム FD 委員会を含むプログラムの教育改善活動は，以下の通りである。

- (1) シラバスの点検：専門教育科目の全シラバスを点検し，シラバスの整備を行っている。
- (2) 授業評価アンケート結果等を活用した授業改善：プログラム FD 委員会において，各科目の成績評価と授業評価アンケート結果，授業計画改善書等をもとに授業の検証を行い，プログラム会議に報告している。
- (3) 新入生アンケートと追跡アンケートの実施：入学時とその 1 年後にアンケートを行い，学生の実態を把握し，改善のための資料としている。
- (4) 学生定期面談の実施：各期末に指導教員による学生定期面談を実施し，指導・助言する体制を整えている。
- (5) 教員間連絡ネットワークの構築：基礎教育科目および各分野（電子物性デバイス工学，電気エネルギー工学，通信システム工学）の専門教育科目で科目間連携会議を開催し，その結果をプログラム FD 委員会で議論している。
- (6) 社会からの要望調査の実施：卒業生と教員でカリキュラムに関する外部連携会議を開催し，教育改善に役立てている。また，卒業生に対するアンケートを実施し，改善のための資料としている。

4. 1. 3 建築学科

建築学科では，平成 29 年度に JABEE の継続審査を受審し，6 年間の継続認定が認められた。令和 5 年度は令和 6 年度に予定している認定継続審査に向けて自己点検を実施した。JABEE 関連の取組を中心とした，建築学科における FD 活動は以下のとおりである。

- (1) JABEE 基準 1(1)に関係する社会の要求への配慮に関して，幅広い年代の卒業生を対象に建築学科の教育プログラムに関するアンケートを実施し，教育プログラムに対する社会の要求を確認した。また若手中堅技術者に相当する設計系 OB・OG と在学生との懇談会を開催し，その内容を学科会議で報告・共有することを通じて，ディプロマポリシーに定める「技術者像」

との整合を再確認した。

- (2) JABEE 基準 1(2)に関して、学習・教育到達目標の能力の設定において国際基準との対応を確認するために、UNESCO-UIA 建築教育憲章が求める要件と本プログラムの学習・教育到達目標との対応を整理し、要件を満たしていることを確認した。
- (3) JABEE 基準 3(5)に関して、卒業論文と卒業設計の両科目を通してプログラムの学習・教育到達目標の達成度を総合的に評価し、修了生が知識・能力観点の内容を獲得していることを点検・確認するよう改善した。これに関連して、卒業論文の達成度評価について、1) 指導教員による評価、2) 卒業論文発表会での複数の教員による確認、3) 学科の全教員による論文の審査、という多段階での評価プロセスを明確化した。
- (4) JABEE 基準 4 に関して、教育点検の仕組み自体の機能点検を強化するために、建築学科教育改善委員会の組織に卒業生および一級建築士の資格を持つ技術者らを加えた。
- (5) 2・3 年次生が受講する建築設計 I～IV の構成と内容について、カリキュラム全体との整合性や設計演習としての階梯性を踏まえつつ、各教員の得意分野を活かして演習のテーマや設計の方法論等を明確化しやすいスタジオ制に刷新した。

4. 1. 4 海洋土木工学 PG

海洋土木工学 PG では、平成 16 年度に JABEE 認定を受けた教育プログラムを提供している。教育プログラムに関する情報は、本プログラムのホームページを通じて広く公開されており、学習・教育到達目標と JABEE 基準との対応、各学習・教育到達目標の学習保証時間（目標時間）、学習・教育到達目標を達成するための授業課題の流れ、各科目の学習保証時間などの情報を閲覧することが可能である。その後も、本教育プログラムが育てようとする技術者像、学習・教育到達目標、教育カリキュラムなどに関して、技術士の資格を有する技術者を外部評価委員とする外部評価を定期的に受け、継続した教育改善を実施している。また、令和 4 年度には、JABEE 認定継続審査の実地審査を受審した。

本教育プログラムでは、教育改善の一環として次のような手順を確立している。授業担当教員は、工学部 FD 委員会が実施している授業評価アンケートの集計結果を基に、『授業計画改善書』を作成することが義務付けられている。授業担当教員は、「シラバスに記載された授業計画に沿って授業が行われたか」、「シラバスに記載された成績評価基準に沿って成績評価が行われたか」、「シラバスに記載された受講学生が達成すべき目標の教育達成度」、「科目に割り当てられた学習・教育目標は達成できたか」といった視点から、専門科目の学習・教育目標の達成度を自己評価し、その評価結果を『授業計画改善書』に反映させた上で、プログラム教育システム評価委員会に提出している。その際、授業評価アンケートを通して、学生の要望も反映される仕組みとなっている。提出された資料に基づき、FD 委員を含むプログラム教育システム評価委員会において、受講生の合格率や成績評価分布などの分析結果、および各科目の成績評価方法について点検し、その結果をプログラム会議で報告することになっている。また、これらの結果より、教育上の問題点等が認められる場合には、プログラム内の各委員会で議論し、改善計画を策定している。さらに、プログラム内で点検された結果については、工学 FD 委員会に報告され、最終的に工学部 HP で公開される。

以上の手続きによって、教育活動を点検する仕組み自体を点検する機能を実現している。その他にも、教育活動に関する評価として、授業評価アンケートの結果に基づいて、教育貢献賞の候補者を選定している。また、FD講演会等の活動や工学部FD報告書の取りまとめ内容も、教育活動の質的向上を図る仕組みとして活用している。令和5年度においても、上記の仕組みが着実に実行され、本教育プログラムの教育の点検がなされている。

4. 1. 5 化学生命工学 PG

化学生命工学科の前身である応用化学工学科応用化学コースが、平成18年度の審査によりJABEE認定を受け、平成29年度に認定継続審査を受審し、6年間の追加認定を受けた。JABEEに関する情報は当プログラムのホームページを通じて広く公開されており、学習・教育目標とJABEE基準との対応、学習・教育目標を達成するための授業課題の流れ、授業時間などの情報を閲覧することが可能になっている。また、教育改善のためのアンケート調査が、化学工学プログラムおよび同窓会との共催による講演会開催の際に既卒業・修了生を対象に1回、年度末に新卒業・修了生を対象に1回、計2回継続的に実施され、結果はプログラム会議およびプログラムホームページを通じて情報共有、公表されている。アンケート項目中の共同利用施設に対する評価結果はプログラム長名で各施設長等へ送付され、改善等の一助としてもらうとともに、プログラムと施設等との連絡網の構築を図っている。さらに、自己採点シート（全学基盤ループリック）を活用し、学生自らが自己点検を行い継続して改善する仕組みを導入している。新入生については初年度に重点的なケアが必要であるとの考えから、後期が開始される時期に全学生の面談を担任教員が行い、単位の取得状況、サークル活動やアルバイトと勉学との両立状況、進路の検討状況についてインタビューを実施、指導している。同様に、成績不調者に対しても、インタビューを実施している。これらのインタビューでは、報告の書式を学科独自に作成し、重要なインタビュー項目が欠落しないように工夫している。さらに、インタビューの結果を書面として保管し、必要に応じて、当該学生の過去のインタビュー結果を参照しながらインタビューを実施できるようにしている。これらの活動は平成26年度に工学部で新入生に対して導入されたアドバイザー制度・学生相談員制度に先んじて行ってきたものであり、これらの新制度発足後もそれらと矛盾の無いように自己採点シート（全学基盤ループリック）等を継続的に運用している。令和5年度は、コロナ禍が落ち着いたので、これまでのノウハウも活用して、学生相談員の協力のもとWEB上でのリモート会議ツールや電子メールなどを活用して、学生の指導を行った。また、授業公開・参観についても積極的に取り組んでいる。各教員が年間1科目は必ず授業を公開し、どの科目に誰が参観するかを予め定め、全教員が必ず1回は他の教員の授業を参観を受ける仕組みを導入している。また、今年度は、コロナ禍明けに伴って講義の在り方（各講義を遠隔講義で行うのが効果的か、対面講義の方が効果的か）の見直しを各講義担当者が行い、より教育効果が高いと期待される講義形態を模索した。また、令和2年度に試行的に行われた成績評価分布等の確認を今年度も継続して実施し、単位の認定状況に問題がないことを確認した。

以上のような取り組みを継続的に実施しているが、更なる改善を目指しプログラム内に教育プログラム改善検討委員会を設置して検討を重ねており、PDCAサイクルを構築している。

4. 2 JABEE を受審していない PG (学科) での取り組み

4. 2. 1 化学工学 PG

本 PG では平成 16 年度より継続してきた JABEE 認定を平成 26 年度に終了し、これに代わる取り組みとして、平成 26 年度入学生より公益社団法人化学工学会の認定資格である「化学工学技士（基礎）」の取得を意識したカリキュラムを実施し、本学を試験会場とした団体受験も実施している。合格率アップに向けて補習内容の見直しや講義内容の修正などの対策も継続して実施している。令和 5 年度の受験者は 47 名（学部学生は 43 名）で、合格者は 29 名（学部学生は 25 名）であり合格率は 62 % であった。

PG の F D 活動においては、学期末および学期中間に行われる学生授業アンケートやその結果に対する授業改善計画書の作成、FD 講演会への参加などに取り組んでいる。さらに、本 PG 教職員は、原則として前期末および後期末に開催される教員間ネットワークに参加している。教員間ネットワークは開講期の直前に開催されるもので、各教員がどのような講義を行うのかシラバスを公開して教員間の相互理解を深めている。また、令和 2 年度からは成績評価の分布についての点検も追加した。シラバス、授業改善計画書、試験問題および講義資料等は科目毎にファイルボックスに収納して専用の部屋に保管しており、プログラム教員がいつでも閲覧できる仕組みが整備されている。

将来のカリキュラムについては年に数回のカリキュラム検討ワーキングを開催し、PG としてどの科目をどの順番で開講するか、担当者などについて綿密に検討を行い、新入生に配布される履修要項の更新を毎年度行っている。

学生は毎期ごとに個人の学習達成目標の到達度を再確認・自己評価させる意味で、ポートフォリオを作成している。なお、ポートフォリオを印刷できるコーナーを学科図書文献室に設置している。学部 1, 2 年生には年 2 回、全教員が面談員となり定期個別指導（学生面談）をチーフアドバイザーの教員が企画し実施することで、学修指導ならびに生活指導を行い学生と教員との間のコミュニケーションをとっている。3 年生は後期の研究室仮配属後に研究室で面談を実施しているほか、4 年生には卒業研究の従事記録を記録させている。また、学生相談員による相談会を実施し、学修、生活について気軽に相談できる機会を設けている。

4. 2. 2 情報・生体工学 PG

情報・生体工学 PG は、平成 21 年度に情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合されて情報生体システム工学科へと改組され、令和 2 年度から先進工学科情報・生体工学プログラムにした。今年度から 1～4 年生の全学年で情報・生体工学プログラムのシラバスで教育を受けている。

情報・生体工学プログラムは、JABEE への申請は行わないことに決定し、その代わりにプログラム内の教科グループ WG を組織し、開講科目とカリキュラムの改善に取り組んでいる。情報・生体工学プログラムでは、教育企画委員会と、FD 推進委員会により、学科の教育改善などの F D 活動を担っている。FD 推進委員会の下には、教科グループ WG（情報基礎科目、ソフトウェア科目、工学基礎・教養科目、語学科目、実験科目）が設置されており、前期と後期の終わりに全教員による科目ワーキングを開催し、各科目の履修状況、単位取得状況、講義内容、成績評価基準など

を報告し、学科の教育内容についての評価・検討を行っている。ここ数年、学生の数学の学力低下が懸念されており、工学基礎・教養科目 WG では、数学に関する授業の内容を科目間で調整している。また、ソフトウェア科目 WG でも同様に、プログラミング言語に関する講義や演習の内容を検討し、科目間での調整を行っており、昨年度は開講期の変更を決定した。さらに、実験科目 WG では、昨年度末の計算機システムの導入に伴い、実験機器の更新や内容の見直しを検討している。情報・生体工学プログラムでは、授業計画改善書を教員間で互いに閲覧し、各教科グループ WG で積極的に活用できるように学科事務室に保管・管理している。また、1 年生には、高校における数学・理科の詳細な履修状況、志望動機、進路希望などを調査する新入生アンケートを実施して、学生への指導の参考にするとともに、カリキュラム改善に役立てている。

第 5 章 GPA 制度の現状と学習成果

5. 1 年間 GPA の推移

平成 28 (2016) 年度に共通教育改革が行われた。初年次教育プログラムが設定され、「初年次セミナーI」、「初年次セミナーII」が開講された。また、グローバル教育プログラムとして、「英語」の他、「異文化理解」が新設された。さらに、これまで基礎教育科目として共通教育で開講されて

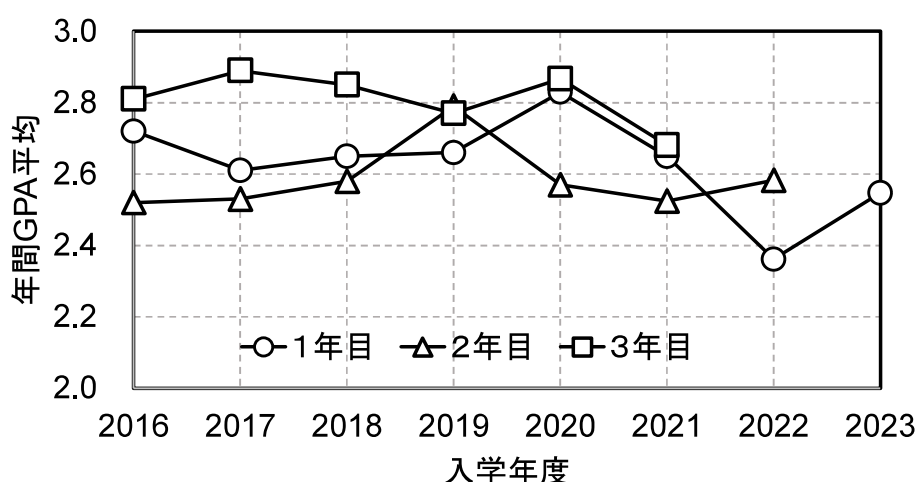


図 5.1 入学年度による年間 GPA 平均の推移

いた数学および物理科目は、共通教育では開講せず工学部で専門教育の一環として位置づけられた。そこで、本項では平成 28 (2016) 年度入学生以降の年間 GPA 平均の推移について報告する。図 5.1 に、平成 28 (2016) 年入学年度～令和 5 (2023) 年入学年度の年間 GPA 平均を示す。入手データの都合上、年間 GPA 平均は GPA が 1.5 以上の学生の平均値を用いて算出している

この 8 年間の 1 年目の年間 GPA 平均は、2.36～2.83 であった。共通教育改革の初年次は 2.72 であったが、それ以降の 3 年間は 2.6 台に低下していた。ところが、令和 2 (2020) 年度は 2.83 と値が急上昇した。これは工学部の改組に伴い工学系概論科目の「工学概論」と分野融合科目の「工学分野実験・演習」(工学系共通クラスの学生のみ履修)の新設科目が開講されたこと、コロナ禍のために遠隔授業が実施されたために自宅から出られず、勉強する時間が増えたことが年間 GPA

平均上昇の要因として考えられる。しかし、令和3（2021）年度は2.65、令和4（2022）年度は2.36と急に減少した。これは、A評価の割合を約20%とするように成績評価基準が変更されたことが要因の一つとして考えられる。また、学生側が遠隔授業に慣れたことで、遠隔授業のさぼり方を見出したとことが他の要因として推測できる。減少傾向にあった年間GPA平均は令和5（2023）年度は2.55と急に上昇し、コロナ禍以前の水準に近い水準となった。これは原則対面授業となったことが要因として考えられる。

この7年間の2年目の年間GPA平均は2.52～2.79であった。従来2年目は大学生活に慣れて勉強意欲が希薄になるため1年目に比べて年間GPA平均は低下してきたのだが、平成31（2019）年度入学生の2年目は1年目を0.13ポイント上回った。これもコロナ禍のために遠隔授業が実施され外出できず勉強時間が増えたこと、教員も学生も不慣れな遠隔授業に慎重に対処したことなどが原因であると考えられる。さらに令和4（2022）年度入学生の2年目は1年目を0.22ポイント上回った。これは原則対面授業となったことで学生のモチベーションが上がったことや、学習への強制力がはたらいたことが要因として考えられる。

また、平成28（2016）年度入学生から令和元（2019）年度入学生まで2年目の年間GPA平均は年々上昇してきており、教員のFD活動が功を奏してきたとも考えることができる。しかし、2年目の年間GPA平均は、1年目の年間GPA平均同様に令和2（2020）年度入学生は2.57、令和3（2021）年度入学生は2.52と急に減少した。一方、令和4（2022）年度入学生では2.58となり、コロナ禍以前の水準に戻っている。これらの原因も1年目の年間GPA平均の推移の原因と同様に、成績評価基準の変更や原則対面授業となったことが大きな要因と予想される。

4年目は取得単位数が少ないため、比較は行っていない。

5. 2 年間修得単位数の推移

図5.2には、年間修得単位数の平均値を年度ごとに比較した結果を示す。データが欠落している年度があるが、過去のデータに令和5（2023）年3月のデータを追加して示している。すなわち、令和5（2023）年度における在学1年目の1～2期生、在学2年目の3～4期生、在学3年目の5～6期生が、令和5（2023）年度に修得した単位数の平均値を追加したものである。ただし、確定GPAが1.5未満の学生のデータは除いている。

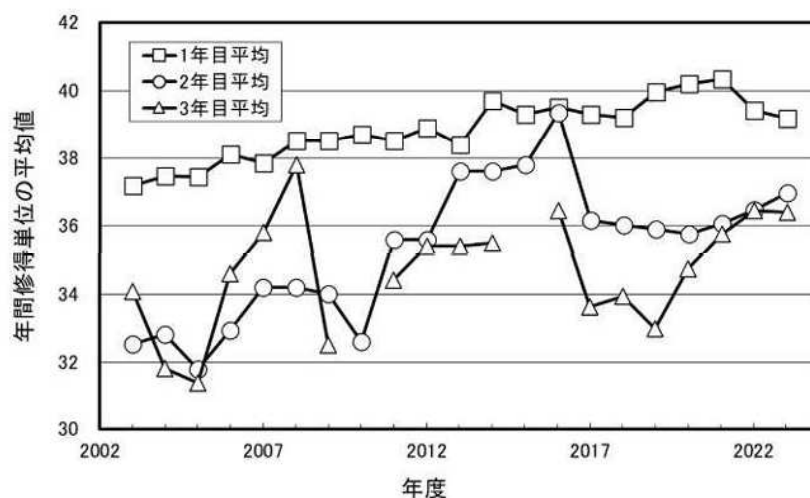


図 5.2 年間修得単位数の平均値

在学1年目の1～2期生が修得した単位数は、途中多少の増減はあるが、統計を取り始めてからおおむね微増の傾向のように見られる。令和2（2020）年度及び令和3（2021）年度では40を超えており、学生にとって高校の延長と捉えられる共通教育科目や基礎的な専門科目が主であるため、好成績であると考えられる。ただし、令和4（2022）年度と令和5（2023）年度は前年度に比べて減少が続いており、これが入学生の学力低下によるものかどうか、今後の注視が必要である。一方、在学2年目の3～4期生及び在学3年目の5～6期生が修得した単位数は、年度によって大きく変動しているが、いずれの年度も在学1年目の1～2期生と比較すると低い。平成15（2003）年度から令和5（2023）年度の平均が在学1年目の1～2期生で38.8であるのに対し、在学2年目の3～4期生は35.3、在学3年目の5～6期生は34.7と学年が上がるごとに低下している。在学2年目以降は高度な専門科目が入ってくるとともに、レポート等の課題も多くなり、学生の息切れが懸念される。また、入学前のイメージと実際の工学部で学ぶ内容の乖離から、学習意欲の低下、もしくは単位修得の動機付けの低下に繋がっている可能性がある。令和2（2020）年度より、多くの科目で遠隔授業が導入された。これによって、学生の理解度が低下して単位修得状況にも影響が出ることが懸念されたが、令和3（2021）年度は、前年度と比較して単位修得数が微増した。これは、学生及び教職員がオンデマンド・リアルタイム配信授業や学習管理システム（manaba）を使った授業スタイルに慣れて、プラスの要因として作用したのではないかと考えられる。令和3（2021）年度以降は、在学2年目の3～4期生の修得単位数が継続して増加している。これまで懸念されていた在学2年目における学習への動機づけや意欲の低下等が多少改善されているのかもしれない。いずれにしても在学2年目は基礎教育から専門教育へと移行し始める重要な時期であることから、今後も注視していくことが必要である。

5. 3 卒業者数と卒業延期者数の割合の推移

図5.3 には、卒業者数と卒業延期者数の合計に対する卒業者数の占める割合を示す。平成14（2002）年度から、令和5（2023）年度までの経年変化を示している。

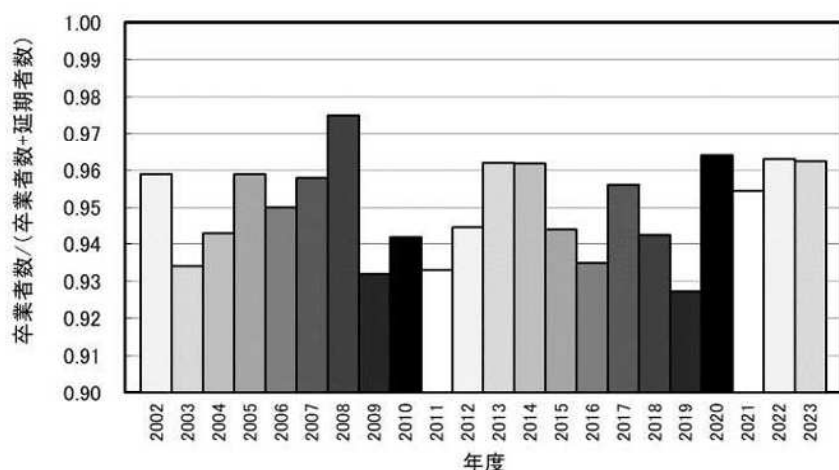


図5.3 卒業者数と卒業延期者数の合計に対する卒業者数の占める割合の経年変化

統計を取り始めた平成14（2002）年度以降、この割合は概ね0.92～0.98 の間で推移している。平成21（2009）年度～平成24（2012）年度の割合が低い、これはリーマンショックに伴う景気低迷の影響によると推察される。その後、平成25（2013）年度及び平成26（2014）年度に割合は0.96 強に回復したが、平成27（2015）年度及び平成28（2016）年度には再び0.94 前後まで低下した。これは、平成27（2015）年度に選考解禁が8月1日に後ろ倒しになったことが大きな原因と考えられる。前年度までの4月選考開始からスケジュールが大きく変更され、期間短縮により学生の就職実績に影響を与えたものと考察する。平成28（2016）年度には、面接解禁が6月1日に2箇月前倒しとなったが、卒業者数の割合に好転は見られなかった。平成29（2017）年度には、一転して割合が上昇した。この背景として、株価が上昇傾向など景気高揚感と、労働者人口減による企業の求人数が増加したことなどが考えられる。しかし、平成30（2018）年度から2年連続で割合が低下し、令和元（2019）年度は約0.93 にまで至った。前年度まで容易に就職できたことから、勉学をおろそかにしたため卒業者数が低下したと分析する。令和2（2020）年度から始まったコロナ禍により、景気の急激な低下によって卒業者数の割合もさらに低下すると思われたが、予想に反して0.96 と増加した。これは、オンラインによる説明会や面接の形態が増加し、就職活動にかかる経済的負担が軽減されたため、これまで経済的理由によりエントリーする企業数を絞っていた学生が多くの企業へチャレンジすることができたことが考えられる。また、自宅待機期間中に希望する企業の研究に多くの時間を割くことが可能であったなど、ポジティブな要因として働いたと考察する。令和3（2021）年度は0.95 に微減したが、令和4（2022）年度以降は0.96 で推移している。2024年卒の大卒求人倍率はコロナ禍前の水準に戻ったとされるが、一方では昨今の世界情勢もあり景気の動向は見通しにくい。コロナ禍を通じて定着したオンラインを活用し

た就職活動に対する適切な指導・支援が必要である。

5. 4 学習成果と質の向上

昨年度に引き続き、これまで蓄積されてきた講義・演習科目の授業評価アンケートから、学生の学習の質と関連があると考えられる「⑤理解」、「⑧学習目標の達成」、「⑬予習・復習」及び「⑯満足度」の4項目に着目し、これらと GPA の科目平均値の関係を調べ、学習成果と質の向上に関して検討する。

5. 4. 1 学習成果と質の向上の経年変化

平成 16 (2004) 年度～令和 5 (2023) 年度における、講義・演習科目の授業評価アンケートのうち、「⑤理解」、「⑧目標達成」、「⑬予習・復習」及び「⑯満足度」の4項目の各評価の工学部平均値と、GP の科目毎の平均値 (科目 GPA) の工学部平均値の推移を図 5. 4. 1 に示す。

「⑤理解」、「⑧目標達成」、「⑯満足度」の評価の工学部平均値は、令和 4 (2022) 年度よりわずかに増加して 4.0 付近を推移しており、高い水準を維持している。また、これらの3項目は変化傾向が類似しており、学生は、理解度に応じて達成感及び満足感を得ると考えられる。「⑬予習・復習」は、平成 17 (2005) 年度～平成 23 (2011) 年度では緩やかな増加傾向、その後は平成 29 (2017) 年度までほぼ横ばいであったが、以降は大きく変動している。この変動はアンケートの実施方法を manaba システムに変更した後に見られ、遠隔授業が導入された令和元 (2019) 年度に大きく低下した。manaba システムの変更による回答率の変化や授業実施形態の変化に影響があると考えられる。

科目 GPA と、「⑧目標達成」及び「⑯満足度」の2項目の評価の工学部平均値を比較すると、平成 21 (2009) 年度から令和 4 (2022) 年度を除いて、変化傾向が類似している。受講生の達成感と満足度が得られるような授業を心掛けることが、学生の成績 (GPA) の向上につながるということが読み取れる。一方、平成 30 年 (2018 年) より予習・復習時間が大きく変動しているにもかかわらず、科目 GPA への大きな影響は見られない。令和 2 年 (2020 年) から科目 GPA が低下傾向にあり、これには入試倍率低下による学生の学力低下の影響も考えられる。

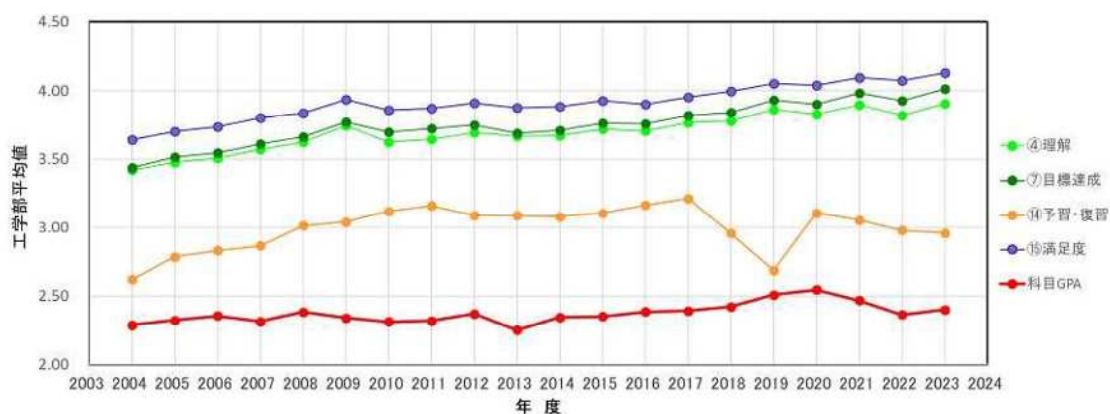


図 5. 4. 1 授業評価アンケートのうちの4項目の評価及び科目 GPA の工学部平均値の推移

5. 4. 2 令和5年度の学習成果と質の向上

令和5（2023）年度の前期および後期の科目 GPA と授業評価アンケート4項目の科目平均の相関関係を図5.4.2(1)，図5.4.2(2)に示す。相関値より「⑤理解」，「⑧学習目標の達成」，「⑯満足度」には弱い相関があると考えられ，この相関から，アンケート評点の科目平均が高くなるにつれ，科目 GPA も高まる傾向がある。一方，「⑭予習・復習の時間」については，ばらつきが大きく科目 GPA との相関は無かった。近年の報告書でも指摘されているように，授業時間外学習が少なくても良い成績が取れる状況や授業時間外学習に多大な時間を割いても良い成績が取れない状況は，改善策を講じる必要がある。各 PG で状況を確認する必要があると思われる。

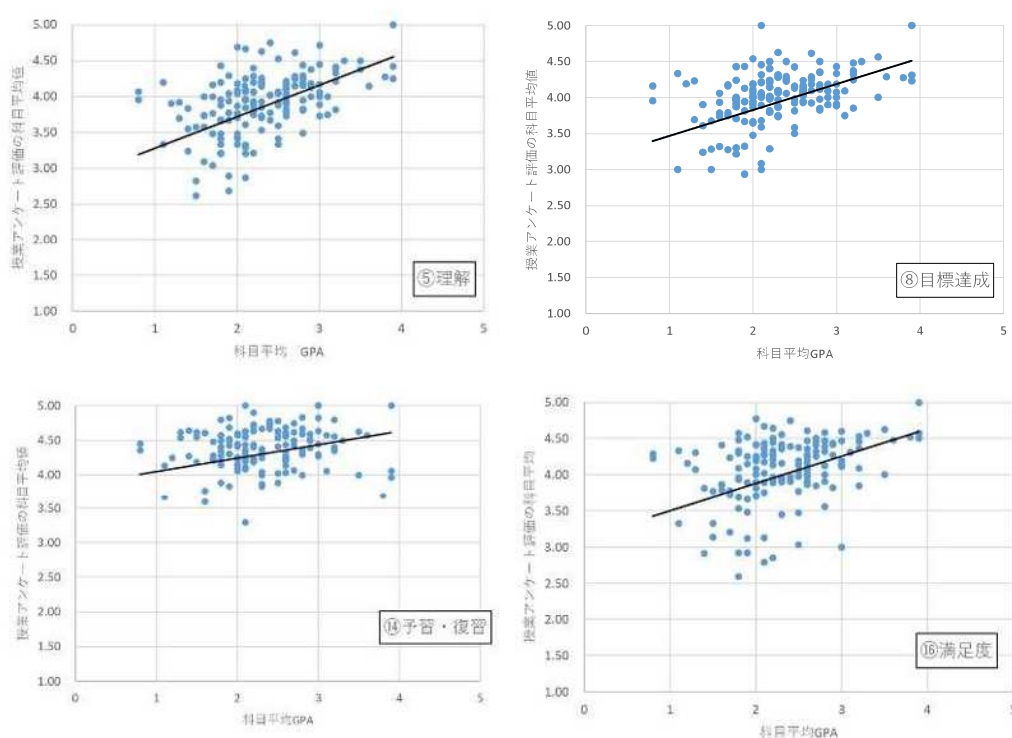


図 5.4.2(1) 令和5年度前期の科目 GPA と授業評価アンケートの科目平均の相関

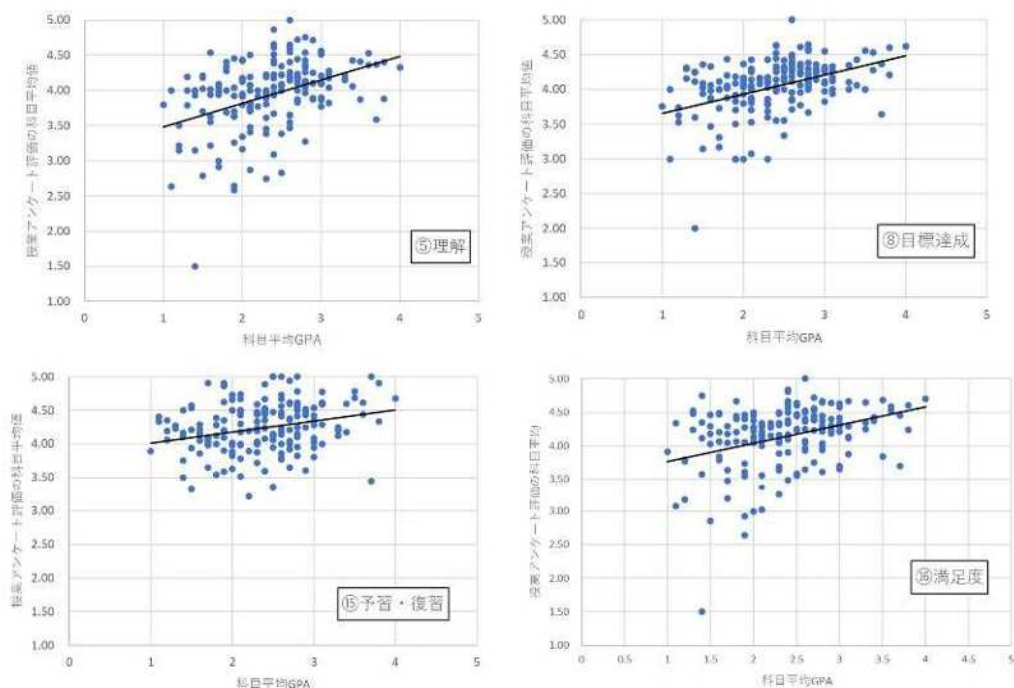


図 5. 4. 2(2) 令和 5 年度後期の科目 GPA と授業評価アンケートの科目平均の相関

第 6 章 特筆すべき取り組みや改善事例

前年度から引き続き、今年度の前・後期の授業科目に対して成績評価が厳格かつ客観的に評価しているかどうかの点検を実施するとともに、各教員が作成する授業計画改善書に該当科目の成績評価分布（各評価の人数）を記載した。各プログラムの FD 委員がプログラム教員から提出された授業計画改善書をまとめ、成績評価分布一覧表に基づいて、各プログラムにおいて授業評価の点検を実施した。さらにその結果は工学部 FD 委員会にて確認し、教授会で報告した。この取組は今後も継続して実施する予定である。

令和 4 年度に教育内容・方法の改善の実施事例や成果を明確に把握することをねらい、授業計画改善書の様式に「前年度の授業計画改善書に沿って実施した改善内容と成果」と「前年度の改善書に沿った授業実施に対する自己評価」の記入欄を追加した。これにより、教員個人での教育に関する PDCA サイクルが強化された。

第 7 章 令和 5 年度の工学部 F D 活動の総括と今後の F D 活動

7. 1 令和 5 年度の工学部 F D 活動の総括

令和 5 年度第 1 回工学部 FD 委員会において、冒頭で述べた 6 つの FD 活動を継続して遂行することが決定され、すべての活動が実施された。授業への COVID の影響がなくなったことから令和 5 年度は対面授業の数も元に戻り、授業評価アンケートの各項目の評点は向上した。予習・復習

の項目の評点の低下傾向は若干緩んだが、全体的な低下傾向にあるため改善策の検討が必要である。一方、実験科目では前年度に続き、ほとんどの項目で向上が見られた。より平常時に近い状況で実施されたことと、予習の項目の継続的な改善から十分な授業時間外学習が確保されたことによるものと思われる。

毎年度、各部局において全専任教員の 75% 以上が FD 活動に参加することが求められている。令和 5 年度に工学部主催および学内で実施された FD 関連の企画への参加状況を表 7. 1 に示す。

いずれかの活動に参加した教員は 98 名中 96 名で、FD 活動への参加率は 98.0 % と高い値を維持している。今後も活発な FD 活動により、工学部の教育が充実することを期待する。

表 7.1 令和 5 年度専任教員の FD 活動参加の状況

合計参加率		98.0 % (専任教員 98 名中 96 名 参加)				
企画別 参加率	工学部FD講演会	79.6 %	(専任教員	98 名中	78 名 参加)	
	理学部・工学部合同FD講演会	87.8 %	(専任教員	98 名中	86 名 参加)	
	教員FD研修会(9月開催)	1.0 %	(専任教員	98 名中	1 名 参加)	
	教員FD研修会(10月開催)	4.1 %	(専任教員	98 名中	4 名 参加)	
	前期授業計画改善書	53.1 %	(専任教員	98 名中	52 名 参加)	
	後期授業計画改善書	44.9 %	(専任教員	98 名中	44 名 参加)	
	前期授業参観報告書	10.2 %	(専任教員	98 名中	10 名 参加)	
	後期授業参観報告書	8.2 %	(専任教員	98 名中	8 名 参加)	

7. 2 今後のFD活動

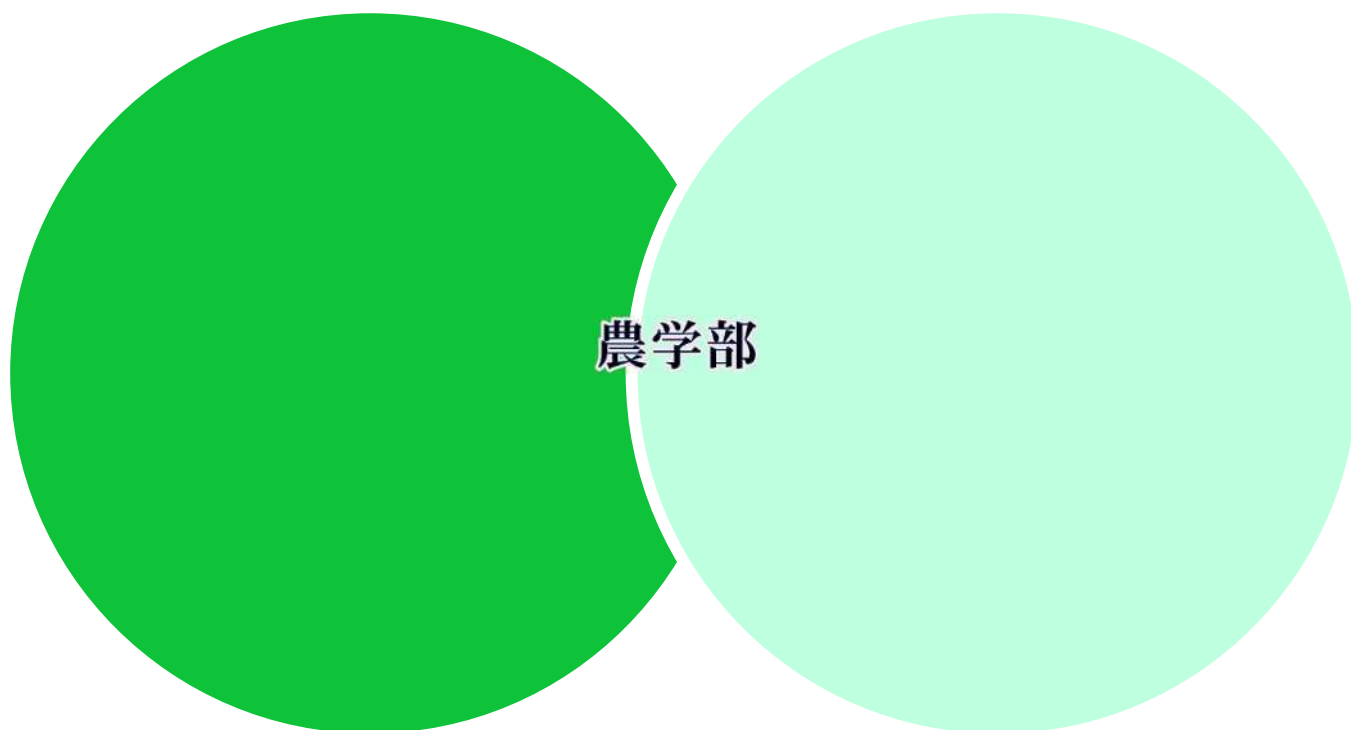
工学部は平成 16 年度から授業アンケートを行い、その結果を受けて各教員が授業改善のための計画を策定しながら、分かりやすい授業の実施を目指してきた。10 年間のトレンドで見ると改善はされているが、この数年は変化がなくなっていることや、各科目単位でみるとアンケートの評価には大きな分布が存在する。また、予習や復習などの自宅学習の時間は依然低いままである。このことはまだ改善の余地が残されていることを示している。平成 28 年度から工学部ではエクセレント・レクチャラー表彰制度が実施された。毎年度、表彰された教員による FD 講演会を実施しており、これを参考に授業の質の向上と、その結果として学生の講義の理解度が深まり、授業に対する満足度も向上することが期待される。

工学部は令和 2 年度の新入生より改組された組織による教育が始まり、令和 5 年度は改組の完成年度となる。この改組の特色の一つに、数理・データサイエンス基礎力の強化を図る科目の充実があり、令和 4 年度に「数理・データサイエンス基礎」が初めて開講された。一方、工学部は、令和 3 年度に数理・データサイエンス・AI 教育に関する特定分野校に選定され、令和 4 年度には応用基礎レベル校にも認定されており、この分野の教育の充実化が進んでいる。これまでの FD 活動を継続するとともに、改組に伴う改善すべき点も見出し、改善策を検討する必要がある。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和 4 年度実施分）の分析について

評価する点	【1 年生】 授業を通じた学習経験において、「TA・SA から補助を受ける」の項目の数値は 54%で、大学平均の 39%よりも 10 ポイント以上高い。TA によるサポート体制が 1 年生に対して十分機能している。 授業時間外に教員と面談する時間が全然ないとの回答が、大学全体では 83%に対して工学部では 68%と低く、1 時間未満であるとの回答が 23%と他学部よりも大きい。1 年生担当の教員による学生とのコンタクト増進への努力の結果と考えられる。 【3 年生】 授業を通じた学習経験において、「TA・SA から補助を受ける」の項目の数値は 86%で、大学平均の 54%よりもかなり高い。TA 制度は特に実験科目で良く機能している。 授業内外の学習状況において、「授業中教員の考えに異議を唱えた」の項目の数値は 12%で、大学平均の 8%よりも高い。受け身の姿勢でないことは大いに評価できる。 入学後の能力の変化として「数理的な能力」の向上を挙げた学生が 71%と大学平均の 46%よりもかなり高く、専門教育の効果が出ている。
課題と考える点 (3 点以上)	【1 年生】 授業内外の学習状況において、「教員に親近感を感じた」の項目の数値は 18%で、大学平均の 24%よりも低い。教員と接する機会はあるものの、親近感にはつながらないようである。 大学への適応感について、「大学教員と顔見知りになる」の項目の数値は 17%で大学全体の 26%と比べてかなり低い。これは学生が教員と親密な交流をしたいという願望の裏返しと考えられる。 【3 年生】 大学教育への満足度について、「日常生活と授業内容との関連」の項目が 46%と大学平均の 51%よりも低い。卒業研究を始める前で、専門の基礎的知識を得る段階にあり、教育内容と社会とのつながりが見えにくい学年である。
課題への 具体的な対応案	1 年生を対象とする工学部の専門講義は、大人数クラスであり、教員と学生との対面でのコンタクトを強めることが難しいが、manaba での個別対応を呼びかけるなどして、学生が教員とのつながりを感じられるように FD 委員を通じて呼びかける。 3 年次までの専門基礎教育について、講義の中で社会とのつながりを意識して伝えるように、教員に呼びかける。この点は工学部のエクセレントレクチャラーによる講演でも繰り返し伝えられており、例年の講演会での FD 委員長コメントとして教員に呼びかけを行う。

昨年度挙げた改善・対応策による成果	【1年生】 授業を通じた学習経験における「提出物に添削物やコメントをつけて返却する」「授業中に学生同士が議論する」の項目の数値が低いことを、各プログラムFD委員を通じて全教員に周知したが、改善幅は小さかった。 大学教育への満足度における「授業の全体的な質」の項目の数値が低いことを教員に周知したが、改善は見られなかった。 【3年生】 「大学教員と顔見知りになる」について、アドバイザー制度で充実を図り、改善が見られた。 大学教育への満足度における「授業の全体的な質」の項目の数値が低いことを教員に周知した結果、大学平均に近づき改善が見られた。
以前の結果や他の調査結果・データ等との比較を通じて明らかになった点や気付いた点	「大学生活の充実感」の数値に着目し、この数値の2019年度～2022年度の変遷は以下ようになった。 1年生：81% (2019) → 59% (2020) → 72% (2021) → 83% (2022) 3年生：85% (2019) → 76% (2020) → 85% (2021) → 77% (2021) 1年生はコロナ禍からの順調な回復と向上が見られる一方で3年生には高止まり、コロナ禍の影響をそれほど受けていなかった。



令和5年度 農学部 FD 活動報告書

令和5年度の農学部FD委員会は、委員長を含む教員5名と教務係長で構成され、教務系の支援を得て運営された。委員会は、メール会議を主体として行われた。

今年度の農学部FD委員会が担当・実施した事項としては、授業評価アンケート、前期と後期に設定されたFD月間(授業参観)、12月に実施されたFD講習会「農学キャリア教育」、3月に実施された第6回農学部ベストティーチャー賞の選考(報告会は翌年度4月に実施)が挙げられる。

農学部委員名簿

委員長 中村 正幸 (食料生命科学科)

副委員長 豊 智行 (農業生産科学科)

委員 高山 耕二 (農業生産科学科)

委員 肥山 浩樹 (農林環境科学科)

委員 二神 泰基 (食料生命科学科)

事務担当者 濱崎 利幸 (学務課長)

事務担当者 神宮司浩二 (教務係長)

1. 農学部FD委員会による実施事項(特筆すべき取り組みは下線で示した)

・授業参観:オンデマンド型やオンライン型、ハイブリッド型など、授業形態をアナウンスした上で授業参観者を募集した。本年度は20名(31.7%)の教員が参加した。R5年度の参加率が低かった理由については後述する。

・FD講習会:農学部FD講習会は、7月19日(水)に、農学キャリア教育のキャリアマップ運用に関する講習会を本学部でキャリア教育について中心的に動いておられる伊藤祐二先生に実施していただいた。参加者(専任教員)は、51名で、81%の参加率であった。農学部では、令和6年度から改組に伴い、教育プログラムを一新し、キャリア教育に力を入れている。講習会では、学生のキャリアプランをどのように進めていくか、農学DXの観点からも話があり、大変有意義なものとなった。

・ベストティーチャー賞:授業参観や授業評価アンケートを利用し、選考を実施した結果、令和5年度のベストティーチャー賞には、坂巻祥孝先生を候補者として推薦することに決定した。

2. 令和5年度農学部授業参観・授業公開

授業参観・授業公開は、農学部では「FD月間」として授業アンケートと共に農学部におけるFD活動の基幹として位置付けている。これまでは、農学部独自に運用していたシラバスシステムを利用し、参観の予約と報告書作成を行っていたが、令和5年度から、システムが廃止になったことから、それに変わる予約システムの構築が急務であった。しかし今回は間に合わず、代替方法としてgoogleスプレッドシートによる予約を行った。開講される全科目の授業形態をアナウンスした上で実施した結果、授業参観の参観者は20名で専任教員63名中31.7%の低い参加率となった。教員が、これまでの旧システムに慣れ

ていたこともあり、スプレッドシートでの運用が徹底されなかったことが原因である。今後、新たなシステムの構築、あるいは実施形態も含めて再考し、参加率を上げていく必要がある。

授業参観関連日程

(前期)

6 月 3 日(土)～ 6 月 30 日(金):授業参観予約

6 月 5 日(月)～ 6 月 30 日(金):授業公開(農学部 FD 月間)

6 月 5 日(月)～ 7 月 7 日(金):授業参観報告書作成・提出

(後期)

11 月 4 日(土)～ 11 月 30 日(木):授業参観予約

11 月 6 日(月)～ 11 月 30 日(木):授業公開(農学部 FD 月間)

11 月 6 日(月)～ 12 月 8 日(金):授業参観報告書作成・提出

3. 授業評価アンケートの分析

令和 5 年度の授業評価アンケートの全体(非常勤を含む)の回答率は、38.2%となり、令和 4 年度の回答率 38.3%と同水準であった。また、ベストティーチャー賞の対象としている回答率 50%以上の割合は、令和 4 年度は 41.7%であったのに対し、令和 5 年度は 36.0%となり、低下していた。学科ごとの回答率を令和 4 年と 5 年で比較すると(非常勤を含まない)、農業生産学科と食料生命科学科では、僅かではあるものの微増していたが、農林環境科学科では大きく低下していた(表 1)。農林環境科学科は例年低い傾向にあり、本学科所属教員に対し(令和年 6 度から多くが環境共生科学プログラム担当)、学科(プログラム)FD 委員と共に回答率を上げる取り組みが必要である。また、186 ある全科目で見ると、最低回答率が 3.5%で、最高回答率は 100%であった。これも例年のことであるが、特に、実習や実験での回答率が低い傾向にあった。アンケートは、下記に示した 16 項目で実施した。全教員(全科目)の解析結果は、図 1 に示した。授業を行う上で特に重要である項目 7～14 で、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した合計の割合が、いずれも 90%以上と高く、肯定的な評価となっていた(図 1 の赤バーと緑バー)。今回、学生からのコメントの中に、ある教員の講義に対し、かなり憤慨しているコメントがあった。担当教員に講義内容について詳しく尋ねたところ、説明不足が招いたことであると判明した。誤解を与えないよう、科学的根拠を基に丁寧に説明をするよう担当教員には伝えた。

表 1 学科毎における授業評価アンケートの回答率と前年との比較

	令和 4 年度 回答率(%)	令和 5 年度 回答率(%)	回 答 率 推 移 (倍)
農業生産科学科	43.1	45.4	1.05
食料生命科学科	48.8	50.6	1.04
農林環境科学科	32.3	24.0	0.74

■アンケート項目

1. この授業の出席状況を教えてください。
 1. 全て出席 2. 1回欠席 3. 2回欠席 4. 3回以上欠席
2. この授業に関連のある参考書、論文、雑誌などを読みましたか。
 1. はい 2. いいえ
3. この授業について、1コマあたり、どの程度予習や復習をしましたか。(レポート作成を含む)
 1. 90分以上 2. 60～90分 3. 60分未満 4. しなかった
4. この授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。
 1. そう思う 2. どちらかというと思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない
5. この授業内容の水準はどうでしたか。
 1. 高かった 2. 妥当だった 3. 少し低かった 4. かなり低かった
6. この授業の分量はどうでしたか。
 1. 多かった 2. 妥当だった 3. やや少なかった 4. 少なかった
7. この授業は知力や学力の向上に役立ちましたか。
 1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
8. この授業は将来役立つと思いますか。
 1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない
9. この授業の学習目標は達成できたと思いますか。
 1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
10. この授業は総合的にみて満足できるものでしたか。
 1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
11. この授業はシラバスに沿って進められましたか。
 1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
12. 板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか。
 1. そう思う 2. 大体そう思う 3. あまりそう思わない 4. 全くそう思わない
13. 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思いましたか。
 1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
14. 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。
 1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない
15. 講義・演習中やオフィスアワー等で教員に質問をしましたか。

1. 質問した 2. 質問しなかった
16. 質問に対する教員の対応に満足しましたか。
 1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない
 4. そう思わない

自由記述

この授業についての意見・要望・感想などを自由に書いてください。

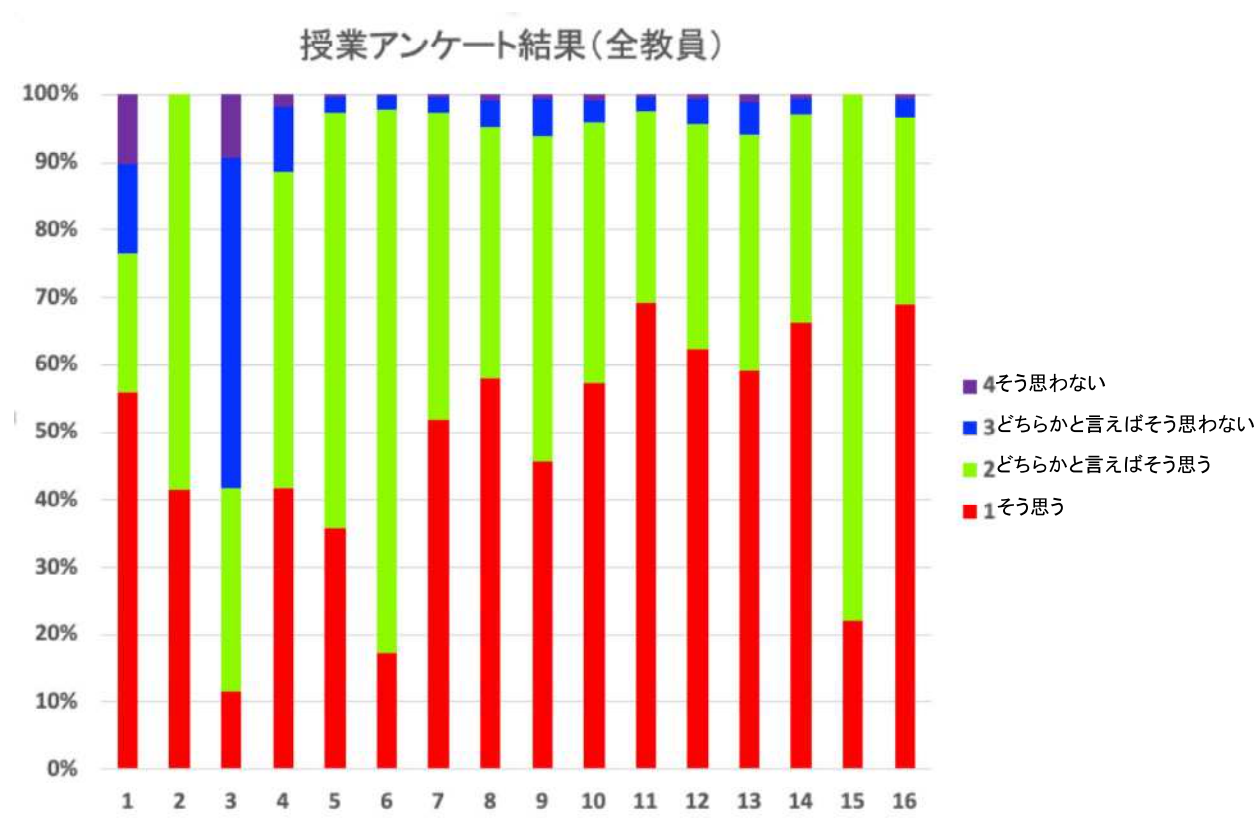


図1 全教員の授業評価アンケート結果

5. 令和5年度農学部ベストティーチャーの選考

農学部ベストティーチャーの選考にあたっては、下記の①から④の基準に従い、主に授業評価アンケートの結果を基に立体集計を行った。

① 授業評価アンケートでFD委員会として意味の大きいと思われる項目9～14を点数化した。

9. この授業の学習目標は達成できたと思いますか。(15点)
10. この授業は総合的にみて満足できるものでしたか。(15点)
11. この授業はシラバスに沿って進められましたか。(15点)

12. 板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか。(15点)
13. 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思えましたか。(15点)
14. 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。(15点)

具体的には、回答番号の1が最高、4が最低の4段階評価のため、1が15点、2が10点、3が-10点、4が-15点とし、その合計を点数化した。また、アンケート回答率については100%が10点になるよう比例配分した。

② 授業参観によるベストティーチャーの被推薦数を基に加点した。4人以上を4点、3人を3点、2人を2点、1人を1点とした。

③ 受講者数に応じた重みを付けるため、受講者数150人以上に係数1.05を、受講者数100人以上に係数1.00を、受講者数50人以上に係数0.95を、受講者数50人未満に係数0.90をそれぞれかけた。

④ 授業評価アンケートの回答率が低いと正当な評価が得られない危険性を考慮し、選考対象者を回答率50%以上の教員に限定した。

その結果、最高得点90.4点を獲得した坂巻祥孝先生が令和5年度の農学部ベストティーチャーに選ばれた。90点代は、坂巻先生がお一人であった。80点以上を獲得した教員(科目)の割合は、21.5%で、70点以上となると68.3%になったものの、昨年の25.8%と71.9%より低下する結果となった。令和5年度の平均点は、71.4点であり、最低点は、23.3点であった。教員別の評価点と順位のグラフを図2に示した。合わせてアンケートの回答率と順位のグラフも図3に示した。ベストティーチャー賞の対象となったアンケート回答率50%以上の科目割合は、36.0%であった。50%以下の科目の中には、評価点が高いものもあり、回答率を上げていくことが今後の課題である。

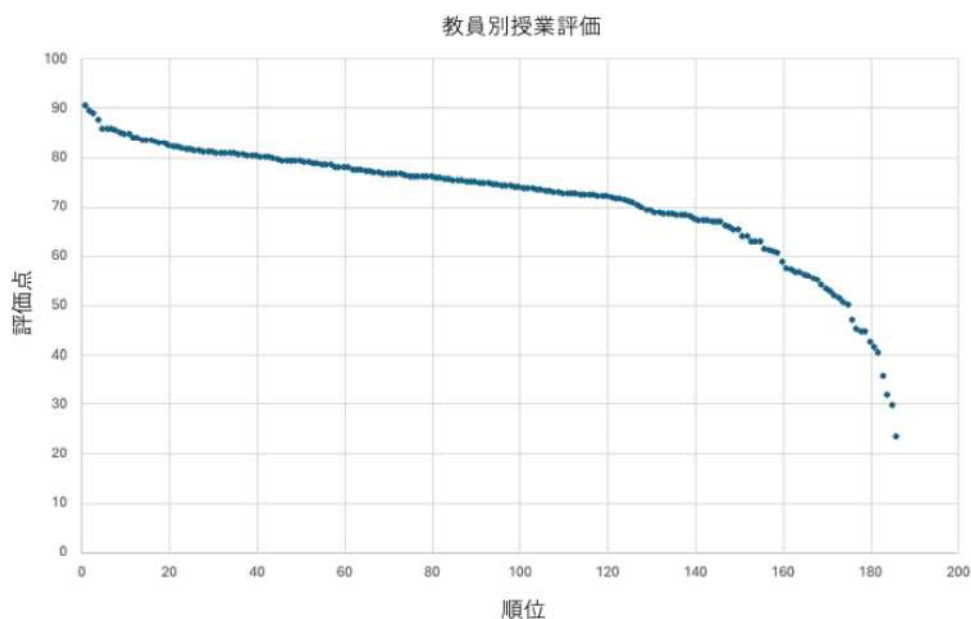


図2 令和5年度教員別授業評価

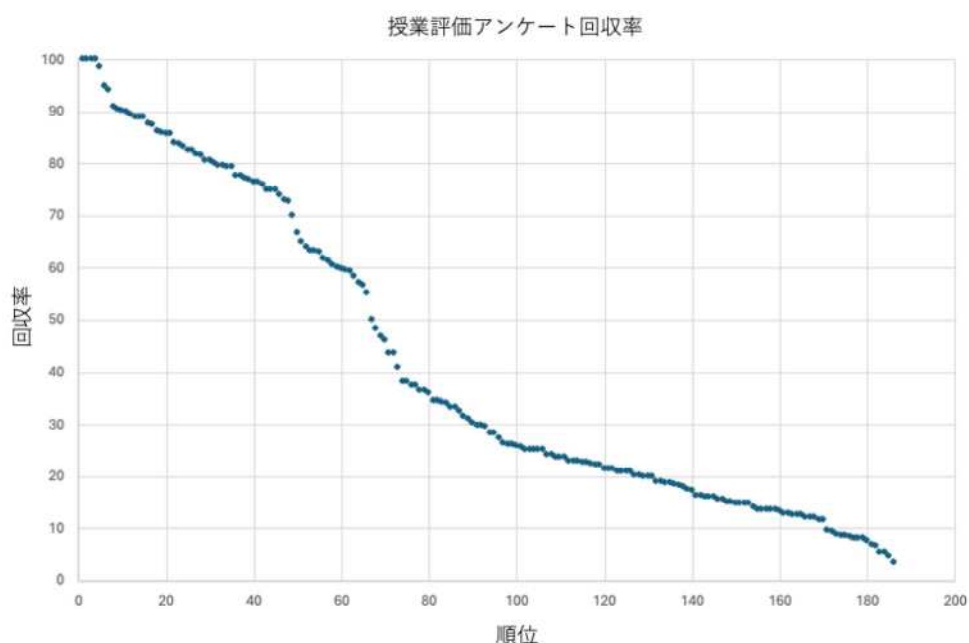


図 3 令和 4 年度教員別授業評価アンケート回答率

さらに、令和 4 年度と 5 年度の教員別の授業評価アンケートの推移を数値化したところ、教員別の授業評価の変化は、大きな変動は無く、70 点から 80 点付近でほとんどの教員が安定していることがわかる(図 4)。これは、学生からの評価が大きく変わっていないことを表している。一方で、教員別の授業評価アンケートの回答率の変化は、20%から 30%台が多いものの、大きく低下する教員と向上する教員、変化無い教員が混在していた(図 5)。

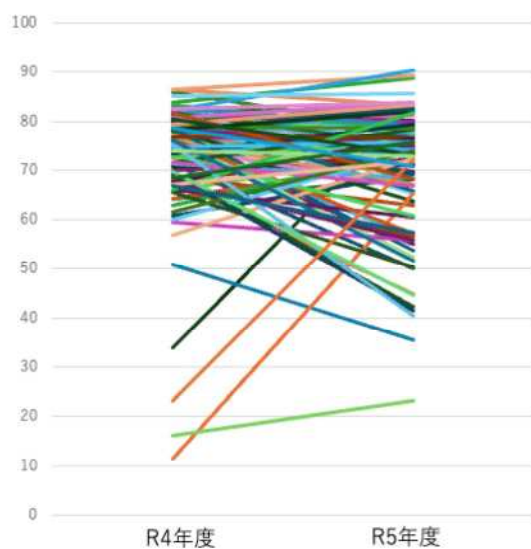


図 4 教員別授業評価の変化

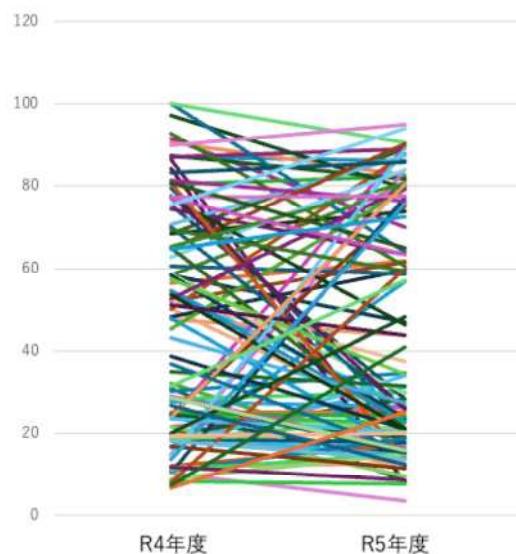


図 5 教員別アンケート回収率の変化

5. 令和5年度農学部FD講習会

農学部は、令和6年度から改組に伴い、従来の3学科から1学科とし、4つのプログラムからなる教育体制となる。新体制では、キャリア教育と農学DXを大きな柱とし、プログラム配属後も学生は、将来の目標に応じた科目を分野横断的に履修できるようにしている。そこで、令和5年度(7月19日実施)は、キャリア教育と農学DXに関して中心的に動いておられる本学部の伊藤祐二先生に主にキャリア教育についての講習会を開いていただいた(図6)。その中で、初年次において、我々教員の学生に対するキャリアプランへの適切な指導と指針がいかに大切か、その重要性についてお話いただいた。入学後、将来をイメージできない学生は多く、そのことが勉学への意欲低下にもつながっている。キャリア教育では、学生に農学に関わる職の情報と共に、それぞれの職に就く場合に必要な知識や技術をどの科目や実験・実習を履修すれば良いか各科目をモジュール化することで提示し、学生が自らキャリアカルテを作成することで高年次でも自主的に学修に取り組むことを狙っている。本講習会では、我々教員が、学生のキャリア形成に具体的にどう関わり、導いていくべきか、理解を深めることができた。令和6年度は、新体制の初年度ということで、今後色々と改善すべき点も見えてくると思われるが、学生からの要望も聞きながら、農学部では、新体制の目標である「俯瞰的な視点で課題を発見し解決できる能力を持つ人材」および「先端農学DX技術で課題を解決できる能力を持つ人材」の育成を目指していく。



図6 農学キャリア形成に関する講習会の様子 (R5.07.19)

6. 令和5年度自己点検評価

令和4年度に実施したキャリア形成に関するFD研修会(R4.12.21実施:図7)において、教育の中でいかに学生1人1人に社会的および職業的自立を図るための能力(コンピテンシー)を身に付けさせるか議論し、理解した【FD企画の結果】。各学科で研修内容を共有し、実践的な演習・実習だけでなく、通常の講義の中でも、一方的な知識伝達型講義ではなく、書く、話す、発表するなどの活動を取り入れることで、学生が自分自身で考え、判断する場を設けるように取り組んでいくこととした(根拠資料①)【組織全体での教育方法の改善】



図7 キャリア形成に関するFD研修会

根拠資料①

令和5年度 第1回農学部FD委員会議事要旨(案)メール会議 日 時：令和5年4月24日～28日 開催方法：メール会議 参加委員：中村正幸(委員長)、豊智行、高山耕二、二神泰基、肥山浩樹 学部議題 - 令和5年度の授業参観の進め方について(資料1) これまで、Agri-Fish web システムを利用して、参観の予約と報告書の作成を行ってきたが、本システムの廃止に伴い、代替の方法について審議した結果、Google スプレッドシートを利用して進めることが了承された。 - 令和4年度に実施したFD研修会「キャリア形成」に関する取り組みについて 学生にコンピテンシーを身に付けさせるため、書く、話す、発表するなどの活動を取り入れた学生参加型の講義を実習や演習だけでなく、通常の講義の中でも積極的に行っていくよう取り組んでいくことを全学科で共有した。 学部報告事項 - 令和4年度の学部教員FD活動への参加率について(資料2) 令和4年度の農学部FD活動(授業参観、FD講習会)に関する教員の参加率について報告があった。 - 授業評価アンケートの回答開始時期について これまで、アンケート開始時期を学期末にしていたが、集中講義などは、講義が回答開始時期前に終了するため、回答率が低かった。そこで、本年度より回答を4月から可能なように設定するとの報告があった。

7. 令和5年度農学部卒業生アンケートの分析

回答率は、約30%で目標にしていた50%を大きく下回った。教務係から全卒業生(4年生)への案内に加え、各教員に研究室の卒業生に案内してもらうように依頼したが、予想以上に低い結果となった。年度末は、教員、卒業生共に慌ただしい時期でもあるため、余裕がないことは容易に想像がつく。そう言った中で、いかに回答率を上げて行くかが今後の課題である。質問項目は、全部で57個あるが、その中で気になった回答をいくつか挙げる。「大学教育に何を求めますか」の問で、最も多かった回答は「専門知識を身につける」であり、その次が「広い教養を身につける」であった。専門性と広い教養のどちらも求められていることがうかがえる。新体制では、4ターム制を設けており、従来の1科目(2単位)を基礎(1単位)と応用(1単位)に分割して開講し、かつ、分野横断的に受講できるようにしたことから、専門性と広い教養のどちらも身につけたいという要求に答えることができると期待している。次に、「シラバスの内容をもっと充実する必要がありますか」の問に対し、70%以上が「ある」と回答し、また、「履修手続きがわかりにくい」に対しては、45%が「わかりにくい」と回答していた。これは、おそらく専門知識のまだ乏しい学生からすると、シラバスの内容が難しく感じるのではないかと思われる。また、英語併記もされており、おそらく、逆に情報量が多いことが原因になっているかもしれない。もっとわかりやすくシンプルな方が、学生には理解しやすいのかもしれない。履修手続きに関しては、どの科目を履修すべきかがわからないという意味と単純にウェブ上での手続きがわかりにくいという意味の2つが考えられるが、前者は、確かに履修の手引きに書かれていることが複雑で、内容を理解しきれていない場合があると思われる。実際、勘違いからコース分けに必要な科目を取っていなかった事例も生じた。新体制では、1学科になったこともあり、履修の手引きは以前の2/3のページ数に縮小され、内容も少しはわかりやすくなったのではないと思う。後者に関しては、学生は普段から携帯での簡単な操作性に慣れていることが1つの原因になっているかもしれない。システムを変更することは経費のかかることであり、そう簡単にできることではないが、操作性もシンプルにして行く方が良いのかもしれない。

8. 卒業後一定期間経過した卒業生へのアンケート分析

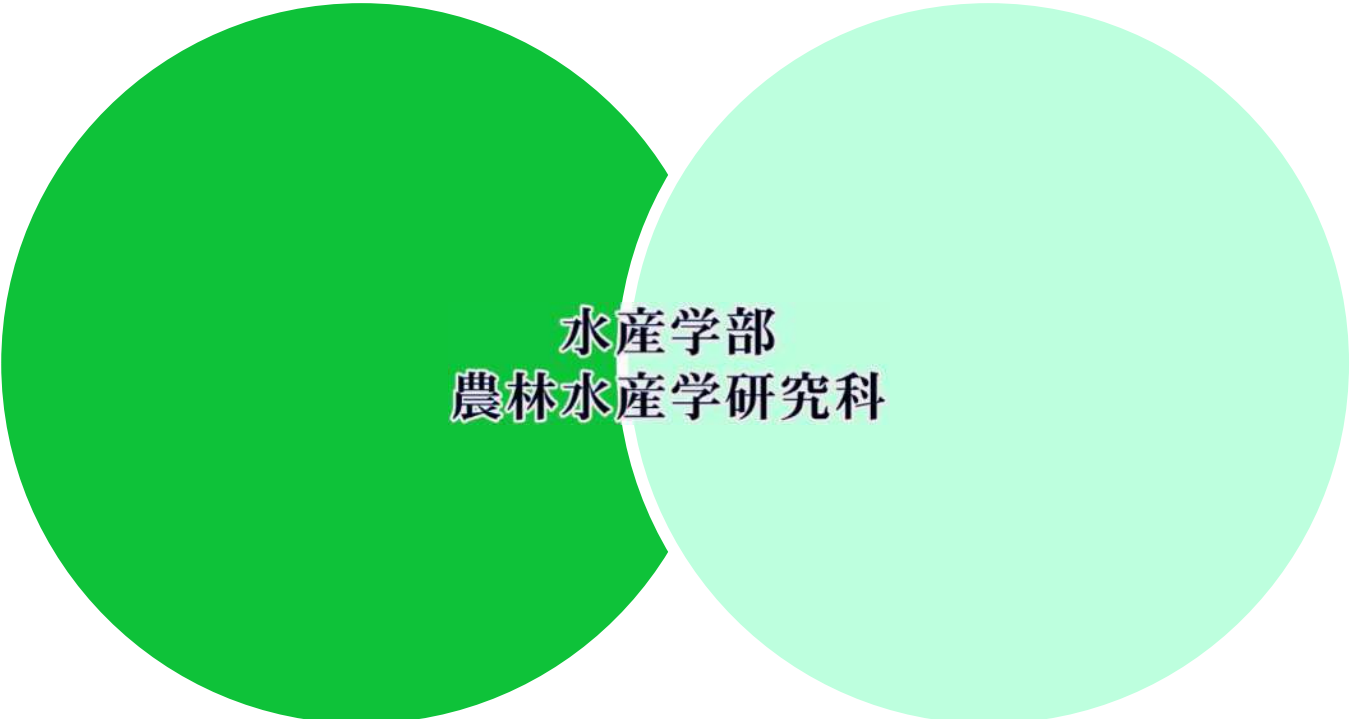
令和2年3月に卒業した学生を対象に行ったアンケート調査の解析を行った。回答率が非常に低かったため、信頼性に問題があるかと思われるが、いくつかの項目について解析結果を紹介したい。まず、「専門教育で受けた教育を評価する」としたら」の問に対し、「とても良かった」、「ある程度良かった」と回答した割合が、合わせて94%であり、概ね満足していることが分かった。また、「専門教育の勉強に一生懸命取り組んだか」の質問に対しても、「とても一生懸命だった」と「ある程度一生懸命だった」が87%で、こちらも相応に取り組んでいたことがうかがえる。ただ、回答してくれた卒業生は、おそらく真面目な学生であったと予想されるため、バイアスがかかっている可能性は考えられる。その中でも、「専門教育の中で最も有意義だったと思うものは」の問に対し、「講義」と回答したのは0%で、最も回答が高かったのは、「実験・実習」で、次いで、「海外研修」「卒業論文」であった。これは、学生が自ら体験して学びたいと思っ

ていることを強く現している。農学部では、R6 年度より 1 年生のうちから、実習を充実させたプログラムを実施するため、この学生のニーズに答えられるのではと期待している。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和 4 年度実施分）の分析について
（ 農 ） 学部

評価する点	・授業内容と社会や日常生活の関わりについて教員が説明できていると思う割合が、1 年生でも高かったが、特に 3 年生では平均より高かった。 ・教員が提出物に添削やコメントをつけて返却すると答えた割合が、3 年生で平均より高かった。 ・TA・SA などの授業補助者から補助を受ける項目で、3 年生が平均より高かった。 ・異文化の人々に関する能力と異文化の人々と協力する能力のそれぞれの項目で 1 年生が平均より高かった。 ・キャリアカウンセリングの項目で、3 年生が平均よりも高かった。
課題と考える点 （3 点以上）	・前年に続き、授業中に学生同士で議論する項目が、1 年生では高いが、3 年生では平均以下になっている。 ・どの学部でも同じ傾向であるが、英語の能力が 1 年次と比べ 3 年次で低下している。 ・1 年生において、実験、実習、フィールドワークを体験的に学んでいると感じている学生が少ない。 ・1 年生において、授業をつまらなく感じた学生が、R3 年度は平均以下であったのに対し、R4 年度はつまらなく感じた学生が大幅に増えた。
課題への 具体的な対応案	・講義内にアクティブラーニングを設け、より学生同士の議論を促す。 ・卒業論文のために論文(英語)を読む必要性を 1 年生のうちから伝え、英語への関心を高めさせる。翻訳ソフトを安易に使用しないように伝える。 ・R6 年度より農学部は、3 学科から 1 学科制になり、全 1 年生があらゆるフィールドワークを 1 年目に体験できるプログラムを既に作った。 ・疑似クォーター制を導入し、科目を基礎編と応用編に分け、選択肢を増やし、自分のキャリア形成に合わせて選択させることで、講義に対する興味を持たせるようにする。
昨年度挙げた 改善・対応策 による成果	・学生同士の議論は 1 年生では高いが、3 年生での改善は見られなかった。専門科目の中でどのようにアクティブラーニングを設けていくかが課題である。 ・提出期限までの課題提出については、僅かではあるが改善が見られた。

	・教員と話す機会は、1 年生では低いままであったが、3 年生において大きく改善した。
以前の結果や他の調査結果・データ等との比較を通じて明らかになった点や気付いた点	R4 年度は対面授業も増えたこともあり、他学生と一緒に勉強したり、授業内容を話し合ったりする機会が大幅に改善されている。



水産学部
農林水産学研究科

ファカルティ・ディベロップメント報告書

2023 年度
鹿児島大学水産学部 FD 委員会

1. 概要

鹿児島大学水産学部ファカルティディベロップメント(FD)委員会では、各教員の教育技術・能力の研鑽、学生の授業に対する理解力・満足度の向上、教育・研究現場が抱える問題点への対応などを課題とした活動に取り組んできた。2023 年度に水産学部および農林水産学研究科(水産学系)で企画・開催した FD 活動は、以下ようになる。

1. 授業アンケート(前期・後期)
2. 授業改善報告(前期・後期)
3. 授業公開(前期・後期)
4. 授業参観・報告(前期・後期)
5. 部局 FD ワークショップ(教育能力・技術に対する問題点の抽出および解決策のための議論)
6. 第 1 回 FD 講習会(新任教員に対する研修会)
7. 第 2 回 FD 講習会(ベストティーチャー賞推薦教員による講習会)

これら FD 活動に対する参加状況は、以下ようになる。

1. 授業アンケート(前期 69 科目・後期 54 科目)
2. 授業改善報告(前期 23 科目・後期 12 科目:参加率 56%)
3. 授業公開(学部前期 60 科目・学部後期 55 科目・研究科前期 2 科目・研究科後期 2 科目:参加率 100%)
4. 授業参観・報告(前期 8 人・後期 5 人:参加率 22%)
5. 部局 FD ワークショップ(44 人:参加率 98%)
6. 第 1 回 FD 講習会(6 人:参加率 13%)
7. 第 2 回 FD 講習会(33 人:参加率 73%)

各 FD 活動への参加状況を教員単位で集計すると、いずれの教員も何らかの FD 活動に参加しており、水産学部全体の参加率は 100%であった。

特筆すべき点としては、教育カリキュラム再編について教育ユニット・科目担当教員で活発な議論がなされ、初年次教育カリキュラム・カリキュラム計画書が改訂されたことが挙げられる。水産学部では令和 6 年度から大括り入学となることに加え、レイトスペシャライゼーション教育・CAP 制導入に対応すべく、教育委員会・カリキュラム企画委員会による案に対し、教育ユニット・科目担当教員・FD ワークショップでの議論がなされ、以下の成果が挙げられた。

1. 水産学部履修規則の新設・改訂
2. 早期卒業に関する内規の改訂
3. 上限単位緩和に関する要領の新設
4. 初年次教育科目の統合・履修期の改訂
5. 分野分属の決定方法の改訂
6. カリキュラム計画書の改訂

なお、農林水産学研究科 FD 活動は各教員が所属する学系(部局)の FD 活動において実施されることとなっている。このため、農林水産学研究科の水産学系に所属する教員は、水産学部 FD 活動のいずれかに参加した。

2. 授業アンケート(水産学部)

水産学部 FD 委員会では、各期の授業が終了する毎に受講した学生に対して授業アンケート(表 1)を行っている。アンケートは manaba を利用して行われ、受講生の授業を選択した動機や予習及び復習時間などの調査、授業に対する満足度を計ることを中心に据えた質問を設定し、回答の集計結果から各科目の評価を行った。ここでは、2023 年度前期と後期のアンケートを分析結果の概要について報告する。

2-1. 授業アンケート内容

2023 年度前期および後期の授業アンケートは manaba で行い、アンケートは 2022 年度後期までの内容を継続して実施した。manaba では表 1 の通り、受講生の満足度を「はい」か「いいえ」で回答した後、満足できた点あるいは満足できなかった点について具体的な記述ができる様式になっており、より学生の講義への期待や理解を把握する結果を得られるアンケートとなっている。

表 1. manaba を用いた水産学部授業アンケートの質問項目

	質問内容	選択肢
1	この授業を選んだ動機は何ですか？	授業内容に興味・関心を持ったから/ 専攻分野との関連性を考えて/履修しやすい曜日や時間帯だったから/必修科目だから/単位修得のため
2	この授業について、毎週平均でどのくらい自宅学習(予習、復習、宿題など)をしましたか。週あたりのおよその平均時間を記入してください。	
3	授業はシラバスどおりに進められましたか？	はい/いいえ
4	シラバスに示された学習目標を達成できましたか？	はい/いいえ
5	授業は分かりやすかったですか？	はい/いいえ
6	授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか？	はい/いいえ
7	授業の構成や進め方は適切だと思いましたか？	はい/いいえ
8	他の科目と重複あるいは類似している内容がありましたか？	はい/いいえ
9	授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか？	はい/いいえ
10	担当教員が次年度の授業改善に役立てますので、この授業に対する意見・要望などを自由に記述してください。	

2-2. 授業アンケート提出率と回答率

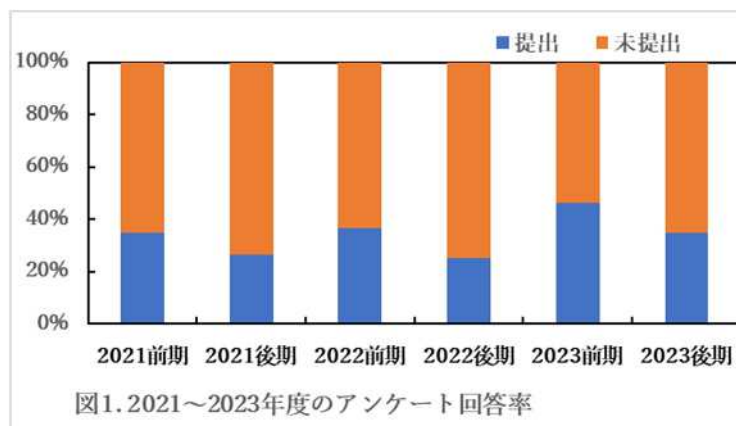


図 1 に 2021～2023 年度における前期および後期のアンケート回答率を示す。2023 年度前期のアンケート対象科目は 81 科目で、履修者延べ人数の回答率は 46%であった。後期のアンケート対象科目は 83 科目で、履修者延べ人数の回答率は 34.8%であった。回答率が 60%を超える科目は前期で 28%、後期で 20%だった。アンケートの回答率は、コロナ禍の 2021 年度以降上昇し、前期では 4 割超となったが、後期では 3 割台であることから、引き続き、授業中にアンケートの回答時間を設ける、アンケート回答を呼びかけるなどを行い、回答率の改善を目指す工夫が必要であることが示唆された。

2-3. アンケートの各項目集計結果および総評

表 2 に基づき、各アンケート項目の集計結果について概要を報告する。I 科目に対する予習・復習・宿題などを含めた 1 週間あたりの自宅学習時間の平均は、2023 年度前期は 1.5 時間、後期は 1.3 時間であった。2021 年度前期は 3.8 時間、後期は 4.1 時間であり、コロナ禍では遠隔授業で如何に学習させるかを主眼に置いたため自宅学習時間が増加したと考えられた。2022 年度前期には 1.0 時間、後期には 1.2 時間となり、2022 年度以降には自宅学習時間の平均はコロナ禍前の水準に戻ったと考えられる。

「シラバス通りの授業だったか」の質問に対しては、「はい」と答えた割合が前期では 96%、後期では 99%であり、前年度に引き続き教員が対面または遠隔の授業形態にあわせてシラバスを作成したためと考えられた。

「シラバスの学習目標は達成できたか」の問いに対しては、「はい」と答えた割合が前期では 98%、後期 99%といずれも高い満足度であり、肯定的な意見が多い結果となった。

「授業がわかりやすかったか」の質問に対しては、「はい」と答えた割合が前期では 94%、後期では 95%と肯定的であった。自由記述には、「スライドが理解しやすかった」「説明がわかりやすかった」「配付資料が良かった」「進み具合がよい」などの意見が多かった。一方、否定的な意見としては、「内容が難しかった」「進め方が速い」「スライドが見づらい(図のきれいさ、文字の大きさ)」などがあり、学生によって捉え方が異なり、正反対の意見が見受けられた。

「質問や発言がしやすい配慮があったか」の質問に関しては、「はい」と答えた割合が前期では 88%、後期では 87%であり、肯定的な意見は 2022 年度より低下した。

質問や発言がしやすい理由としては、「質問する時間を設けてくれた」「質問を促してくれた」以外に「manaba や respon などでも聞けた」など学習システムを教員が上手く利用している様子が伺える意見があった。一方、否定的意見には「質問をする機会がなかった」「質問しにくかった」「manaba や respon で質問を受け付けられない」などもあった。

「授業構成や進め方は最適だったか」の質問に関しては、「はい」と答えた割合は前期では 95%、後期で 96%となった。

自由記述欄には、「シラバス通りであった」「解りやすかった」という意見がある一方、「ゆっくりと進めてほしい」「シラバス通りでなかった」などの否定的意見もあった。

「他の科目との重複や類似」に関しては、前期では 28%、後期では 20%が重複や類似性があると答えているものの否定的な意見ではなく、「重複・類似項目は復習になった」「重複・類似していたことで理解が深まる」といった意見が多くを占めており、専門分野の内容の理解を深めることになっていると感じられた。

授業全体の満足度を問う質問に対しては、「はい」と答えた割合は前期では 96%、後期で 97%となり、満足度は 2022 年度よりやや低下しました。また、満足した理由として「〇〇について学べ、理解でき、興味を持ち、知識を得られた」や「解りやすかった」が多くを占めた。一方、否定的な意見は「おもしろくなかった・興味を持てなかった」または「スピードについていけない・難しかった」の両極に分かれていました。

表 2. 各アンケート項目の集計結果(2023 年度)

	前期	後期
1. 自宅学習時間(平均)	1.5h	1.3h
2. シラバスとおりの授業だったか。	96.0	98.6
3. シラバスの学習目標を達成できたか。	97.6	98.9
4. 授業はわかりやすかったか。	93.9	94.6
5. 質問や発言がしやすい配慮があったか。	87.9	86.5
6. 授業構成や進め方は適切だったか。	94.5	96.0
7. 授業に重複あるいは類似している内容があったか。	28.2	20.4
8. 全体的に内容に満足しているか。	95.6	96.7

※項目 2～8 の表中の数字はアンケートに「はい」と答えた割合(%)

3. 授業公開・参観と授業改善

3-1. 授業公開・参観

水産学部 FD 委員会は授業公開および授業参観について審議し、以下のように決定した。

- 水産学部専任教員が担当する学部専門教育科目は、いつでも・だれでも参観できるように原則として全て授業公開科目とする。
- 水産学部に着任して 3 年以内の新任教員は、年間 2 科目以上の授業参観および授業参観報告提出を推奨する。

2023 年度には下記に示す科目が授業公開となり、いつでも・だれでも授業参観が可能になった。

学部専門科目前期(計 60 科目)

水産概論, 水産学とキャリア, 水産海洋学, 水産生物学, 資源生産管理学, 基礎測位学, 水産統計学演習, 水産基礎数学, 生化学, 水産流通論, 日本水産業概論, 世界の食料問題と持続的開発, 魚類学, 海洋学, 水圏科学実験基礎, 水産動物行動学, 漁具漁法学, 基礎水産資源学, 電子工学基礎, 水産資源科学乗船実習 I, 栄養生理学, 食品化学, 食品生命科学演習, 水産経済調査実習 I, 微生物学, 環境微生物化学実習, 海洋測位学, 公海域水産乗船実習, 養殖水産食品加工実習, 水産業と倫理, Fisheries Production Science, 海洋物理環境学, 海洋観測学, 海洋生態学, プランクトン学, 水圏生物学実験 II, 海洋観測乗船実習 I, 水圏生物学野外調査実習, 応用藻類学, 水産資源生物学, 種苗生産学, 漁具設計学, 資源生産学実験, 増養殖学実験, 増養殖学実習, 漁業管理学, 水産食品加工, 保蔵学, 食品衛生学, 食品工学実験実習, 食品衛生学, 食品工学実験実習, 食品衛生学実験, 資源利用化学実験, 生物化学実験水産企業論, 養殖経済論, 水産経済調査実習 II, 水産政策論, 環境保全学実習, 応用微生物学, 環境分析化学実験

学部専門科目後期(計 55 科目)

水産増殖学, 食品生命科学, 水産経済学, 水圏環境保全科学, 分子生物学, 流体力学基礎, 水産物理学演習, 鹿児島水産学, Elements of Fisheries Science, 陸水学, 浮体工学, 沿岸海洋学, 水産基礎数学演習, 無脊椎動物学, 藻類学, 水圏生物学実験 I, 魚類生理学, 実験計測機器基礎, 資源生物学実験, 増養殖学実験基礎, 食品工学, 食品科学実験基礎, 食品工学, 食品科学基礎実験, 先進生命科学基礎実験, 水産制度論, 漁家経営論, 水産加工経済論, 水産マーケティング論, 水産商品学, 赤潮・アオコの科学, 水質保全学, 船舶運用学, 水産総合乗船実習, 亜熱帯域水産調査乗船実習, 微生物学実験, 水産科学英語, 水産総合分析演習, 水産地域論, Fisheries Production Utilization, プログラミング演習, 海洋観測乗船実習 II, 水産資源解析学, 水産資源科学乗船実習 II, 電波測機学, 漁具設計学演習, 魚病学, 生体防御学, 魚類栄養学, 食品生命科学情報演習, 公衆衛生学, 先進資源利用科学, 水産食品製造学実習, フードビジネス論, 水産総合演習

研究科専門科目後期(計 2 科目)

Aquatic Biology, 沿岸域乗船実習

研究科専門科目後期(計 2 科目)

外洋域乗船実習, 沿岸域乗船実習

授業公開対象科目が飛躍的に増えたため、前年度に比べて授業参観できる機会が多くなった。しかし、授業参観報告が提出されたのは以下の通りである。昨年度よりも微増したものの、ほとんどが新任教員からの提出であり全体的には低調だった。令和 6 年度の初年次では教育カリキュラムが改編されたため、統合・開講期移動した科目についての授業参観が求められる。

前期(7 科目)

Fisheries Production Science, 海洋観測乗船実習 I, 海洋物理環境学, 漁具漁法学, 食品衛生学, 水圏科学実験基礎, 水産食品加工保蔵学,

後期(7 科目)

水圏環境保全科学, 水産科学英語, 水質保全学, 流体力学基礎, 海洋観測乗船実習 II, 資源生物学実験, 無脊椎動物学

参観者が作成した授業参観報告は、FD 委員会を通じて担当教員へのフィードバックが行われた。授業参観者の意見には各教員の授業方法の工夫について参考になったとのコメントが多く、まだまだ参観科目数は低調だが、今後も授業公開・参観を継続することには大きな意義があると言える。

3-2. 授業改善報告書

授業内容・教授手法を向上させるため、学生アンケートに基づいた「授業改善報告書」を科目担当者が作成しており、2023 年度は下記に示す合計 33 科目で報告書の作成が行われた。それぞれの科目の担当教員（群）が授業アンケート結果を総括しつつ報告書を作成することで、授業における教授手法として継続すべき点、改善すべき点について振り返る機会となっている。水産学部では提出された授業改善報告書を HP に掲載し他教員にも閲覧可能としている。

学部専門科目前期（計 23 科目）

プランクトン学, 応用微生物学, 海洋学, 海洋生態学, 基礎水産資源学, 漁具漁法学, 魚類学, 資源生産管理学, 資源利用科学実験, 食品衛生学, 食品化学, 食品工学実験実習, 水圏科学実験基礎, 水圏生物科学野外調査実習, 水圏生物学実験Ⅱ, 水産海洋学, 水産企業論, 水産資源生物学, 水産生物学, 水産統計学演習, 生物化学実験, 日本水産業概論, 微生物学,

学部専門科目後期（計 9 科目）

海洋観測乗船実習Ⅱ, 食品工学, 水圏環境保全科学, 水圏生物学実験Ⅰ, 水産科学英語, 微生物学実験, 分子生物学, 無脊椎動物学, 流体力学基礎,

研究科専門科目後期（計 1 科目）

外洋域乗船実習,

4. FD ワークショップ

4-1. ワークショップの開催目的

近年、教員数減少に伴う業務負担の増加、組織とカリキュラム改編に伴う業務の複雑化、新たな若手教員の着任など、水産学部教員をめぐる状況が大きく変革した。また、令和 6 年度から、大括り入学（領域別入学廃止）・CAP 制厳密化・レイトスペシャライゼーションなどに対応するため、初年次教育を中心に教育カリキュラムおよびカリキュラム計画書を改訂する必要がある。そのため、各教員が水産学部教育カリキュラムに貢献するためには、これらの改訂に対する議論を深める他、各教員が有する能力・技術・情報の問題点や改善策を共有する仕組みが必要かもしれない。

そこで、様々な教育分野の教員が参加するワークショップを実施し、各教員が有する能力・技術・情報の問題点を共有し、これに対する改善策を多様な学術領域・業務形態から成る教員から様々なアイデアを頂く機会とすることにした。

4-2. 方法

- 教員を 4 作業班に区分し、各班で担当する項目についてコメント・アイデアを出す。
- 初回会議の実施は委員長から水産学部内への案内後（7 月上旬）、各班に配置された FD 委員が対面・メール会議・オンライン会議などを招集する。
- **は議論を調整し、最終的な結論（アイデア）をまとめる FD 委員とする。
- ワークショップでは議論・結論を出すものではなく、今後の議論や現状認識のための基礎資料とするものである。参加された多くの教員から、多様なアイデアを頂きたい。
- 議論を調整する FD 委員は、9 月末日までに FD 委員長へ電子メールの添付ファイルにて、①報告書、②アンケート結果、の 2 点を送付する。委員長は、ワークショップの成果を教授会にて報告する。

4-3. 作業班と論点

① 初年次教育班（初年次の教育科目）

メンバー：横山**・西・宇野・佐野・小谷・吉川・安樂・仁科・加藤・江幡・堤

- 論点：初年次の教育科目を担当する時に必要となる教育能力・技術・情報などとは何か？
- 現状の問題点（教育能力・技術・情報に分けて）の列举
- 現状の問題点を解決できるアイデアの列举
- 大括り入試対応の初年次教育改善についてアイデアの列举

② 専門教育科目班（2年～3年の講義科目）

メンバー：鈴木**・進藤**・大富・土井・内匠・久賀・田角・久米・鳥居・奥西・遠藤

- 論点：2年～3年の教育科目を担当する時に必要となる教育能力・技術・情報などとは何か？
- 現状の問題点（教育能力・技術・情報に分けて）の列举
- 現状の問題点を解決できるアイデアの列举
- 大括り入試対応の専門教育改善についてアイデアの列举

③ 実践的科目班（実験・実習・演習等）

メンバー：藤本**・小松**・中村・石川・ミゲル・石崎・塩崎・小玉・熊谷・国師・山崎

- 論点：実験・実習・演習等を担当する時に必要となる教育能力・技術・情報などとは何か？
- 現状の問題点（教育能力・技術・情報に分けて）の列举
- 現状の問題点を解決できるアイデアの列举

④ 資格取得科目班（教員・海技士・学芸員等）

班員：小針**・須本**・幅野・東・福田・牧野・有田・畑辺・山本・上西・佐久間・三橋

- 論点：教員・海技士・学芸員等の資格取得科目を担当する時に必要となる教育能力・技術・情報などとは何か？
- 現状の問題点（教育能力・技術・情報に分けて）の列举
- 現状の問題点を解決できるアイデアの列举

4-4. 各班の結果

① 初年次教育班(初年次の教育科目)

➤ 論点(議論における前提・条件など):

- 学部全体のカリキュラム体系を熟知した上で、各分野における人材養成目標や教育内容の違いに配慮した教育を実施する必要がある。
- 受講開始時点での個々の学生の教育水準と理解度を把握することが求められる。
- 水産学を全く理解していない高校生を専門技術者として育成して行くためには、専門的な深い知識ではなく、水産学や水産業、食品産業全体への理解、産業的・社会的視野、就職状況などについて浅く広く理解していることが重要。
- 教育水準と理解度の異なる学生に対応できる教科書が必要である。

➤ 現状の問題点:

- 水産分野では優れた教科書が少ない。より良い教科書があるかもしれないが、身近に教科書をじっくり選定する機会がない。
- 十数年間、同じ講義資料を使い続けたりするなど、講義内容がまったく更新されていない授業がある。
- 教員数の削減や事務作業の負担増に伴い、教育について議論する時間がほとんどない。
- 分野ごとに分かれた科目は、水産学部各分野の間の関連性の理解にはあまり適していないのかもしれない。水産学概論がその役割を担っていればよいが、必ずしもそうはなっていない。
- (主に滞在する)キャンパスは郡元で、下荒田キャンパスに来る機会が少ない。また、サークル活動やアルバイトなどが学生生活の中心となりがちなことから、初年次においては水産学部への求心力が弱い。

➤ 問題を解決するためのアイデア:

- (教育について)気軽に話し合える機会を増やすことが大切。ワークショップもぜひ対面でできると良い。
 - 科目担当表を再確認するとともに、新採用者も含めて、基礎教育科目の担当者などを年度ごとに確認し、新規採用者も割り振る。
 - 各教員のティーチングロードの平滑化に努める。
 - 分野については入学後にていねいに説明されるであろうと信じ入学してきた1年生対象の科目の内容の見直しと教員の共通認識を持つための企画を行う。
 - 使用テキストを共有する。現状で重複はあるようだが、他科目の内容を理解することで、良い重複にできる。
 - ミニレポート・アンケートを実施する。
 - 分野ごとの科目をどのように位置付け扱っていくのか、検討が必要。
 - 教員、特に若手教員に対して、現在の水産学部の全体的な教育体系や各分野の教育内容、相互関係、カリキュラムのポリシー、資格教育の概要などについて研修すべき。FDではまずこれがルーチン化されるべき。
 - 下荒田キャンパスに1年生のための常設スペースを設け、下荒田キャンパスに来やすい環境を作る。先輩らが交替で相談や質問に答えるような対応ができれば望ましい。関連して、1年生をキャンパスに呼び込むためのイベントを夏前と晩秋ぐらいにやれば良いのではないか。「1年生向けオープンキャンパス」のようなイメージで良い。
 - 1年生向けの授業の雰囲気や教える内容を学部教員全員が分野の枠を超えて共有・議論できる機会を作る。授業参観もこの活動に含まれる。
- ##### ➤ 大括り入試対応の初年時教育改善について:
- 大括り入試で入学した学生が分野分属までに習得する授業について、現状のカリキュラムの変更が必要かどうか検討する。この検討プロセスに学部構成員全員が何らかのかたちで参加する。
 - 本年度から始まったばかりで、どのような問題が出てくるのか、今年度末から来年度初めの学生の状況を見ながら検討できれば良い。
 - 水産学概論で分野+特別コースについて、学部の構造、教育体系などについて資料を添えて解説するとともに、現状のように分野から教員1名を担当者に割り振るのであれば、どのような内容を伝えるかなど、事前打ち合わせを行う機会を設ける。
 - 分野分属に強く関係するので、成績基準を再確認する。基礎数学入門など、1学年を複数クラスに分

け、複数人の教員で担当するような科目については、これまで以上にクラス間で厳正に公平な成績評価を行う必要がある。

- 2年次進級時の5分野への分属があることと推察すると、分野ごとの科目は、学生にとって分属先を検討する際の重要な情報源になる。分野ごとの科目をどのように位置付け扱っていくのか、検討が必要。
- 各分野で基礎科目は1科目とし、分野間のバランスや不公平を是正する。またそうすることで科目数を節約し、時間割の余裕を作るべき。
- 1年時修了時の分野分属において、成績順に5分野に配属されるという分属の仕組みを繰り返し説明し、十分に理解させる。ただし、急かせて高校生の知識しかない状態、偏見や先入観に支配された状態で進路を拙速に決めさせるのではなく、後期科目も受講した後の2月上旬に判断させることが望ましい。
- 初年次において就職ガイダンスを実施し、水産学部生の進路や実際の就職状況について理解させる。合わせて進路や資格取得に応じて必要となる2年生以降の学びの進め方を理解させる。

② 専門教育科目班(2年～3年の講義科目)

➤ 論点(議論における前提・条件など)：

- 専門科目に関する新旧の幅広い情報が必要。また、その情報の中で、学生にとって有益か否かを判断するための情報も必要。
- 専門科目に関する必須の知識と、興味喚起のための情報をバランスよく盛り込んだ資料が必要。また、その情報量を必要最低限にしつつ、大切な観点が網羅できるように設計することが必要である。
- 他の科目との関連を十分に理解し、自分の科目の位置づけを明確にしたうえで、講義内で取り扱う内容、重点的に指導すべき内容などの緩急をつけること。
- 学生に膨大な情報を理解してもらうためには、スライドや教材を用いて分かりやすく説明し、テスト出題範囲を明確に提示し、ときには雑談を交えて興味を持ってもらうための技術(能力)が必要。

➤ 現状の問題点：

- 専門科目に関する情報は近年の研究によって細分化され、年々更新されているため、その全容を把握するのは非常に困難になりつつある。
- 受講生のレベルも多様なので、全ての受講生に満足度の高い講義をすることが難しい。
- 科目に関する情報以外として、他の科目がどのような内容をカバーしているのか、難易度はどのくらいか、という点が教員間で共有されていない。
- 専門教育科目で受講生に教授すべき必要最低限の情報を網羅できていない可能性がある。
- 教育に関する予算が不十分であり、講義資料の更新が十分にできない。
- 担当している科目の特性上、どうしても一方的な講義形式のものになりがちである。
- パソコンやタブレットでの受講と、従来式のノート+紙レジュメへのメモ取とで、教育効果が異なるのではないかと感じている。特に、従来式の方が良いのではないかと考えているが、この点に関して答えが出せないでいる。
- 研究と教育はやはり別物で、教員の多くは教育に対する専門教育を受けていないため、教育能力・技術を欠いているかもしれない。
- 技術向上、情報収集について学部全体での取り組みがない。
- 学生によっては、どうしても興味関心の強さ、理解能力に濃淡が出る。学生全員の満足度を向上させることは難しいとしても、こういった学生にニーズに応え、そのニーズをどのように回収すべきかが分からない。

➤ 問題点を解決するためのアイデア：

- 専門科目に関連する教科書を読む。
- 授業ごと(主に実験・実習科目)に、試薬や器具の購入に必要な予算を配分する。
- FD活動の授業参観に参加して、講義の内容などを吸収する。
- 講義や実習を受講した学生、その後卒論や修論を行っている学生、さらに卒業・修了して社会で活躍している学生から、講義や実習に関する生の声を聞き、良い所は維持し、悪い所は修正するという作業を続ける。
- 毎講義の課題の一部に、レスポンスなどを通じた意見聴取の項目を入れて、学生のニーズ回収、学生と

の対話ができる場を設ける。

- 教育関連の専門家を招聘して、デジタル・紙の双方での学習効果の違いについて講演する。
- FD 活動をさらに充実させる。
- 講義内容に関連する自身の経験に基づく写真や、関連するネット上の動画リンクに掲載して、学生が復習、ビジュアルで理解できるようにする。
- その他コメント（大括り入試実施に伴う教育カリキュラム変更へのコメントも含む）：
 - 不本意な分野分属もありうると思うが、学部教育ではそれほど専門性の高いことを教授するわけではない。学生には、社会人になったその日から必要となる、聞き取り術やプレゼンテーション技術、持続的に努力する姿勢などを身につけてほしいと思う。そのような話を授業中にすると興味深く聴いてくれ、ミニッツペーパーにもいろいろと書いてくれる。しかし、週が明けると持続できない感がある。社会人になって初めてわかるときが来るというのでもいいかもしれないが…。分野によって、個々の教員によって考え方はちがうと思うが、当学部は「〇〇業界に就職させるための」ではなく「就職した際に術を持っている学生を送り出す」ための教育をすべきではないかと思う。
 - カリキュラム変更が必要かどうかについては、個人的にはよく分からない。ただ、本学で教えている内容についていると、水産学の世界からの流れからは遅れていると感じられる部分も多々ある。自分の専門分野であると、有用形質をもつ系統の開発、その基盤となる遺伝学に関する講義は存在していない。また、遺伝子編集も、社会的には賛否あるが、学問領域としてはきちんと取り扱い、教育・研究してゆくべきだと思われる（こちらに関しては扱われている授業があるかもしれない）。
 - 大括り入試実施に伴う教育カリキュラムの変更については、学部がどのような方向に向かおうとしているのか、見えてこないことが問題と感じている。執行部には早めに方針を示していただき、リーダーシップを発揮して、方向性を示してほしい。
 - 教育能力・技術を向上させる上で、現行の授業参観は非常に効果的であると感じる。
 - 教育に関する予算が不十分であり、講義資料の更新が十分にできない

③ 実践的科目班（実験・実習・演習等）

➤ 論点（議論における前提・条件など）：

教育能力・技術

- 担当する科目の意義や受講する学生の達成目標を明確に提示し実行するといった指導力が必要であり、そのためには受講する学生の能力や理解度を把握するためのコミュニケーション能力も必要となる。
- 教師に必要な資質は、主題に対する深い知識と理解、そして関連する事例を使用して、その情報を明確かつ簡単な方法で生徒に実際に伝える能力の両方です。
- 実践的科目は講義よりも危険を伴う可能性が高くなるため、安全に関する管理能力が講義よりも必要となる。その他、学生の能力（作業にかかる時間などを考慮した）に合わせた実験計画をたてることや、実験や実習で扱う機械類の操作などを熟知している必要がある。
- 実験等の手技実践の経験、最新情報・最新技術の更新と修得、学生とのコミュニケーションの取り方の工夫と努力など。
- 実習、演習を行う上では、事前の基礎情報・背景知識の学習と、座学による目的の明確化が必須であり、座学と実習をリンクさせるコミュニケーション能力・指導能力が教員に求められると考える。

情報

- 受講する学生の基礎学力や知識などの情報は限られた時間で実践的科目を行うために必要となる。また、学生の興味やモチベーションを高めるためには基礎だけではなく実践する実習の分野での最新の研究動向を調べ、学生へ提供することも望ましいと考える。

➤ 現状の問題点

教育能力・技術

- 関連する学問分野に関する研究経験・実績を持っている必要がある。つまり、教材に沿ってマニュアル化された授業ができるだけではだめで、学問的な観点で何が重要なのかを伝える能力を持ち合わせ

ている必要がある。

- 最新の教育方法（学生の積極的参加を促す方法やモチベーションを上げる方法、技術を定着させる方法など）や実習における評価方法を学び、学生により質の高い実践的教育を提供する研修の機会が不足している。またここ数年のコロナ禍では実習の中止や縮小化が行われ、指導や安全管理などの経験も不足していることが考えられる。
- 地方国立大学では予算が厳しい制約があるという現状があり、実験設備や最新の実験機器などの整備や更新は不足している場合があるため、指導する教員の最新機器に対する経験や知識の不十分さが受講する学生の経験の差に繋がる可能性がある。
- 教育目標を適切に設定し、それが達成できるような内容を計画し、実行する能力
- 学生のモチベーションを上昇させるスキル
- 学生と効果的に対話しながら学生が持っている疑問点を聞き出したり、学生が積極的に実験に取り組むように促したりする技術。
- 素質不足（自転車操業となっている現状を踏まえると）
- 途中段階でどの程度目標が達成されているのかが把握できない。
- 学生のモチベーションを上昇させられない場合が見受けられる。

情報

- 個々の技術指導はマニュアル的なので、研究経験（計画立案、解析、発表・執筆）や研究業績は必要なく、実験補助などの経験があればよい。その意味で、実験助手や TA が補佐したり肩代わりしたりできる。
- 学生の実験・実習・演習へのニーズ（どのようなことが学びたいかの情報）
- 学生の実験・実習・演習へのニーズが把握できていない。
- 自身の実習内容が定型化してしまう場合があることや、学生の理解度や満足度を確認する機会が少ない。さらにコロナ禍によるオンライン中心の学習が行われたことにより、学生自身の身体活動経験が少ないことに対する注意点や対処法などの情報を知る必要がある。

全般

- 数千円～数万円の必要経費の支払いに個人研究費を使用している。実験等科目を担当している教員と担当していない教員間で個人研究に使用できる予算額（配分額から実験等科目経費を差し引いた金額）の不公平が生じている。実験等科目に予算配分していただきたい。
- 新任教員にとっては、実習・演習科目（含卒業研究、卒業プロジェクト）の担当方法（担当の方法や可否）が不明で、研修や情報共有の場が欠けていると感じる。
- 特別コースの卒業プロジェクトについては、海外に行けることを謳って学生を募集しているにもかかわらず、教育予算が全く措置されておらず、一部の学生から不満の声がある。
- まず受講する学生たちは、教員が大学に在籍していた時と進学率、経済状況、大学の社会的意義が異なることを認識する必要がある、さらにここ数年はコロナ禍により身体活動が極端に制限され、コミュニケーションの取り方も変化していることを考慮していく必要があると強く感じる。また、講義とは異なり実践的科目は危険を伴い、時に重大な事故につながる可能性が高いため、可能であれば複数の指導者あるいは補助指導者の確保や、補助の技術スタッフあるいは十分や TA を用意することが必要であると感じる。
- 本来、「講義科目」と「実験・実習・演習科目」はペアで存在するものである。従来は、「講義科目」を担当する者には厳格に教育能力が要求されたが、「実験・実習・演習」を担当する者には、技術能力は要求されたが、厳格な意味での教育能力は要求されなかった。しかし、最近は、学生の学問志向の多様化への対応で、「講義科目」と「実験・実習・演習科目」がペアで存在するというスタイルが崩れてきたように思う。また、教員数の減少と助手という職階が助教に変わったことで、「講義科目」と「実験・実習・演習科目」の授業担当者の区別も曖昧になった。この状況は、カリキュラム体系のアラカルト化や授業数の増加にも繋がったと思う。
- 上述した状況は、大学独法化後の小講座制度廃止に伴う教員組織のフラット化の結果なので、意図してこうなったといえる。しかし、現実的には、教員数が減少しており、アラカルト的な多数の授業科目を維持することは難しくなってきた。現在は、もう一度、カリキュラムを見直し、それに沿って科目数を減らすこ

とを考える状況だと思う。その際、研究能力と技術能力の違いを意識して、教授・准教授・助教・技術職員・TAの教育における分業体制も見直し、教育の効率化を図る必要もあると思う。

➤ 問題点を解決するためのアイデア

教育能力・技術

- 分野内、コース内における情報共有や新任教員へのカリキュラム説明の場があれば良い
- 鍛錬や勉強にかける時間の確保、その時間を確保するために他の業務のさらなる効率化、或いは選択的な破棄
- 受講対象となる学生の学力や実習を受講した目的などを理解し、実習中も理解度を確認することで学生とのコミュニケーションを図り、実習への満足感だけでなく、実習中に感じた疑問などから学ぶことへの意欲を促し、講義へのモチベーションへとつなげていくことを意識していく。
- 共通機器のセミナーの機会を増やすことや、実習に関連した測定機器などの企業主催の講習会（オンラインも含む）などの情報を積極的に収集し技術習得するなどの工夫を行う。

情報

- 実習内容を改善するための情報収集が必要である。例えば、実習に関して講義とは異なった方法で学生へのアンケートをとることや、他大学や他学部で評価の高い実践的科目を拝見する機会があると、良いアイデアや手法に関して自身の担当科目へ取り入れることで現状の問題点や改善点を把握できる可能性がある。

全般

- 現在、私が参照できる唯一の基準は、私自身の経験です。おそらく、他のより経験豊富な教師によるデモンストレーションやワークショップは、実践的な教育テクニックを向上させる方法や生徒の興味を引く方法を学ぶ素晴らしい機会となるでしょう。
- 分野内、コース内における情報共有や新任教員へのカリキュラム説明の場があれば良い
- 特別コースの教育にも、一定の予算措置があっても良いのではないかと
その他コメント
- カリキュラムの見直しでは、水産学部で学ぶことができる主要分野を、現在より絞る必要があると思う。ここを必要以上に多様化させると、カリキュラムがアラカルトになる。教員数だけ研究室があるという発想から、教授を中心とした教員のグループ化が求められている。水産学部内の主要分野を絞り、主要な専門科目の選別ができれば、その主要科目からブレイクダウンするように「基礎科目」や「実験・実習・演習科目」を教員数に見合うだけ揃えるという発想にも立てる

④ 資格取得科目班（教員・海技士・学芸員等）

➤ 論点（議論における前提・条件など）：

全般

- 資格取得科目に関連する専門知識と技術を深く理解していることが不可欠。正確な情報提供、実践的な指導・アドバイスが求められる。
- 学生との円滑なコミュニケーション能力が不可欠。わかりやすく説明し、質問に適切に対応することで、学生の学習意欲を高めることができる。
- 資格取得科目では、制度・内容改変に伴って最新の情報や試験内容の変更に迅速に対応し、適切な指導を行うことが重要。
- 講義・実習は多様な内容であり、各科目で求められる教育能力・技術・情報等が異なる。

学芸員

- 受験生の取得希望者や早期の科目履修者は多いが、資格を取得して就業する卒業生は少ない。
- 他部局と合同で科目を行ない、共通教育の部会で議論するなど、水産学部で問題が完結しない。

海技士

- 水産学部において、これまで陸上教育では国家試験対策的教育、洋上教育では実務的・実践的教育が重視されてきている。この状況が、学部内で共有されているかあるいは議論されているか疑問。
- 技術発展による実務・法律の改変は避けられないが、これらに伴う情報収集・教育対策を部局内で議論する必要がある。

- 免許取得では一定の身体的要件をクリアすることが必要になるため、このような条件の情報を共有する必要がある。
- 実習担当教員は、学生に対して十分かつ適切な情報を提供するための資格取得が重要。

教職

- 各教科の主旨を理解し、その上で教職科目担当者が何をすべきかを理解することが重要。従って、学生への動機付け能力も重要な要素として議論すべき。
- 教職科目には、1) 教職経験者にしか教授できない「教職に関する科目」と2) 教える内容に関わる「教科に関する科目」がある。水産学部教員は、1) の非常勤担当教員か2) の担当教員として関わっている。教員免許を持っているからと行って1) を教えられるわけではない。2) については、水産学部の専門授業を教授する際に必要な知識や技術が必要である。1) については、非常勤講師と学生の間に立ち、講師に水産学部生を指導する上で必要な情報を提供するとともに、継続して学生を指導していかななくてはならない。技術や資格を必要とするわけではないが、この役割を意識した働きが必要であり、ノウハウの蓄積も必要である。

食品衛生

- 任用資格に必要な科目とそれの根拠となる制度について理解し、学外との対応能力を持つ必要がある。

➤ 現状の問題点

全般

- 資格取得科目に関する業務は、部局教育業務として明示されにくく、その成否を測る基準もない。個人の経験と技量に大きく依存してしまう。
- 科目担当者は当該資格を有するか、その資格取得に必要な専門的知識・技術に詳しいことがのぞましいが、組織運営においてこれらに対する配慮がない

海技士

- 例えば自動化などの技術発展・制度改定に伴う実務・業務の変化に対して、最新情報を得る方法がかなり限定されている。
- 海技士プログラム生には1級海技士筆記試験に合格者もいるため、担当者は最上級の海技資格を有する若しくは筆記試験合格者であることが必要となっている。実習担当者のスキルアップをどのようにすべきか。
- 法令改正が頻繁に行われるものの、関係機関の情報発信も少ないため、情報収集が困難。
- 工学系科目を担当できる陸上教員が限定的あるいは不在であるため、業界から必要とされる知識・技術については独学する状況となっている。

教職

- 非常勤講師の高齢化等、資格取得に関わる人材を継続的に確保することが難しい。
- 実習科目が一部の教員により行なわれ、学生や他部局・他機関との調整も含め負担になっている。
- 履修カルテ等による資格取得希望者の管理が行なわれておらず、共通教育で行なわれる座学の時間割との関係で資格取得が難しいコースがある。

食品衛生

- 省庁の定める科目が現状の開講科目名と対応しておらず、学生あるいは学外対応において担当者の裁量に任せられる。

➤ 問題点を解決するためのアイデア

全般

- 部局カリキュラムの資格取得科目を担当できるよう、教員採用の公募要領に教員資格・学芸員資格・海技士資格・食品衛生関係資格を有することが望ましいという内容を盛り込む。
- 資格取得が可能なコース等を学生に明示し、履修カルテ等で取得科目の管理を行なう。
- 資格取得科目の担当教員数を増やし、定例会議を行う。
- 各教員の教務負担度を学部執行部が管理する。

海技士

- 東京海洋大学専攻科教員と継続的な連携を構築し、最新の制度・法令・試験情報を共有・収集する。

- 未取得者は上級海技資格取得を目指す。
- 海事職教員採用の公募要領にⅠ級海技士取得済みもしくは筆記試験合格済みという条件を付す。
- 海事代理士等とコンサルタント契約もしくは自らが海事代理士資格取得を目指す。
- 非正課のゼミを実施する。

学芸員

- 科目に関係する教員の協力を依頼する。

教職

- 対応科目一覧表を再作成する必要がある。
- 異動・退職を伴うため、業務マニュアルを作成し、引継体制を構築する。

➤ その他コメント

- 陸上教員（海プロ担当）がⅠ名となり養成施設として教員不足と言えるのではないか。
- 大学や学部が海事や海技士養成において船舶所有者としての自覚に欠けているように感じる。
- 部局として、資格取得のためのプログラムをどのように維持していくか議論する機会が必要かもしれない。

5. FD 講習会

5-1. 第 1 回 FD 講習会

5-1-1. 開催趣旨

水産学部では、この 20 年間で大規模な教育組織の改編を繰り返し、社会が必要とする人材育成のための教育カリキュラムを体系化してきた。しかし、第 3 期～第 4 期にかけて教育組織の改編と共に退職者が急激に増加したため、複数教員で担当する授業科目が増加し教育カリキュラムを維持している。従って、体系化された教育カリキュラムを学部全体で共通理解しつつ、個々の科目がこのカリキュラムに果たす役割も担当教員が理解する必要がある。特に、新規採用教員が急増したこの時期これらを理解する機会が必要かもしれない。

そこで、採用されて 3 年以内の教員に対して講習会を実施し、多様な学術領域を融合した水産学部の教育カリキュラムを理解する。

5-1-2. 開催時期・場所

日時：令和 5 年 6 月 28 日（水曜日） 13 時～15 時

場所：水産学部中会議室

講師：山本智子（前教育委員長）・小針統（FD 委員長）

5-1-3. 方法

1. 採用されて 3 年以内の教員が対象。
2. 山本教授からは、教育体系・カリキュラム・単位についての説明。
3. 小針教授からは、水圏科学分野におけるシラバス・授業の進め方・成績評価の例について説明。
4. 講習会参加者は、履修の手引きを持参する。
5. 講習会前・後にアンケートを実施し、効果を確かめる。

5-1-4. 結果

講習会には 5 名の参加者があった。講習会終了後、新任教員のみを対象に以下のアンケートを実施した。

- ①水産学部の教育体系（分野・コース）は理解していますか？
- ②水産学部の分野およびコース分属は理解していますか？
- ③水産学部の教育プログラムは理解していますか？
- ④水産学部における単位数の計算は理解していますか？
- ⑤水産学部の 1～2 期に開講される専門必修科目は理解していますか？
- ⑥卒業に必要な取得単位数は理解していますか？
- ⑦水産学部で取得できる資格・免許は理解していますか？
- ⑧成績評価の標語に対する点数の基準は理解していますか？
- ⑨シラバスの作成方法は理解していますか？
- ⑩講習会で理解したいこと、教えてほしいことなどありましたら記述してください。

※①～⑨までは、4 段階評点（4：理解している，3：部分的に理解していない，2：理解していない部分が多い，1：理解していない）として記載を求める。

アンケート結果を解析すると、以下ようになった。いずれに質問についても、講習会前よりも講習会後のほうが高くなっており、教務内容に対してより理解が深まったことが認められた。近年の水産学部では新任教員に対して明確なメンター制度がないため、新任教員は教務に関する情報を的確に得ることが難しい場合がある。退職者が頻出し続ける今後も、このような新任教員向けの講習会は必要と考えており、来年度以降も継続する予定である。

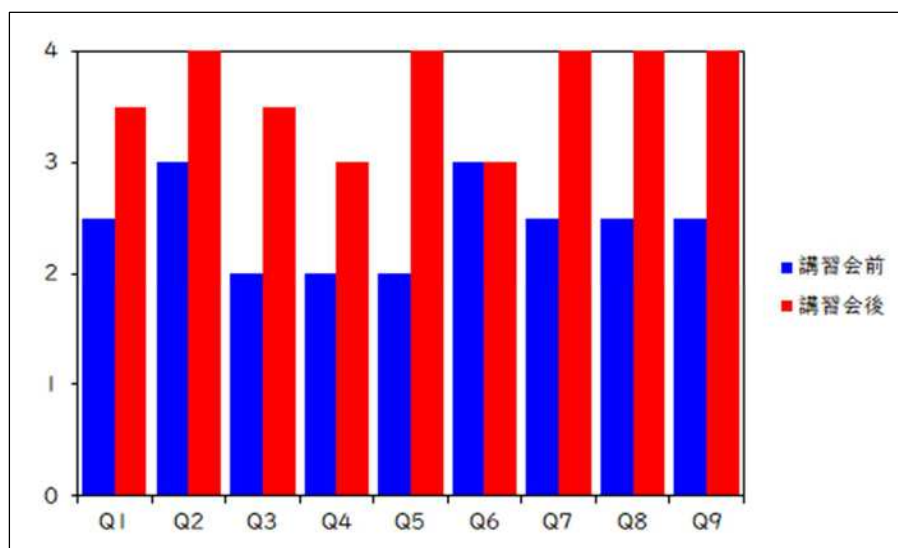


図 2. 新任教員講習会のアンケート回答結果。値が高くなるほど、理解していることを示す。

5-2. 第 2 回 FD 講習会

5-2-1. 開催趣旨

水産学部では、第 3 期～第 4 期にかけて大規模な教育組織の改編を繰り返しながら、社会が必要とする人材育成のための教育カリキュラムを体系化してきた。一方で、退職者の急激な増加に対して教員数削減により、授業内容や科目数を統合しつつ、複数教員あるいは新任教員で担当する授業科目が増加した。このような現状においては、教育カリキュラムを維持するための議論が優先されてしまい、教員の教育能力向上や授業理解度・満足度向上について議論する機会が少なくなっている。

そこで、水産学部からベストティーチャー賞として推薦される科目担当者による講習会を実施し、教育能力向上や授業理解度・満足度向上に資する。

5-2-2. 開催時期・場所

日時: 令和 6 年 2 月 21 日 (水曜日) 13 時～13 時 30 分 (教授会開催前)

場所: 水産学部大会議室

講師: 佐野雅昭教授 (水産流通論科目担当者)

5-2-3. 方法

1. 水産学部ベストティーチャー賞選考に提出された資料を使って、当該科目担当者から説明を受ける。
2. 講習会参加者は、履修の手引きおよび manaba を操作できる PC を持参する。
3. 講習会後にアンケートを実施し、講習会に対する需要と効果を確認する。

5-2-4. 結果

講習会には 33 名の参加者があった。講習会終了後、全員に以下のアンケートを実施した。

- ① 担当する授業においては、次のどのようなところに問題を抱えていますか? (複数回答可)
- ② 講習会ではどのようなことに対する情報提供に期待しますか? (複数回答可)
- ③ 講習会前に比べて、ご自分の教育能力や学生の授業理解度・満足度の向上に資する情報が得られましたか?
- ④ 講習会ではどのようなことに対する情報提供に満足しましたか? (複数回答可)
- ⑤ このような講習会で提供して欲しい情報などがありましたら自由に記述してください。

※①・②・④の選択肢は以下の通り。

- ☐ 理解度を向上させる説明能力 ☐ 満足度を向上させる話術 ☐ 能動的に学習させる方法
☐ 知識・技術を定着させる方法 ☐ 知識・技術を体系化させる方法 ☐ その他 (自由記載)

※③の選択肢は以下の通り。

1)なし 2)わずかにあった 3)いくつかあった 4)ぜひ使ってみたい

アンケートによると、参加した教員は能動的な学習および知識・技術の定着について問題を抱えていることが多く、これらに対する情報提供が期待された。また、満足度向上のための話術に関する情報提供についても期待が高かった。講習会では、多くの参加者にとって有益な情報が得られたことが分かった。特に、満足感のあった話題としては、能動的な学習についての情報が最も高く、満足度向上の話術と理解度向上の説明能力についての情報がこれに次いだ。従って、講習会では参加者のニーズにあった情報提供がなされたものと考えらる。他方、自由記入コメントとして、教育カリキュラム設計やこれに対する科目構成・授業内容開発がいかに重要であるかという感想も複数得られた。新しく着任する教員も多くなっていることから、このような講習会での情報提供は来年度以降も継続する予定である。

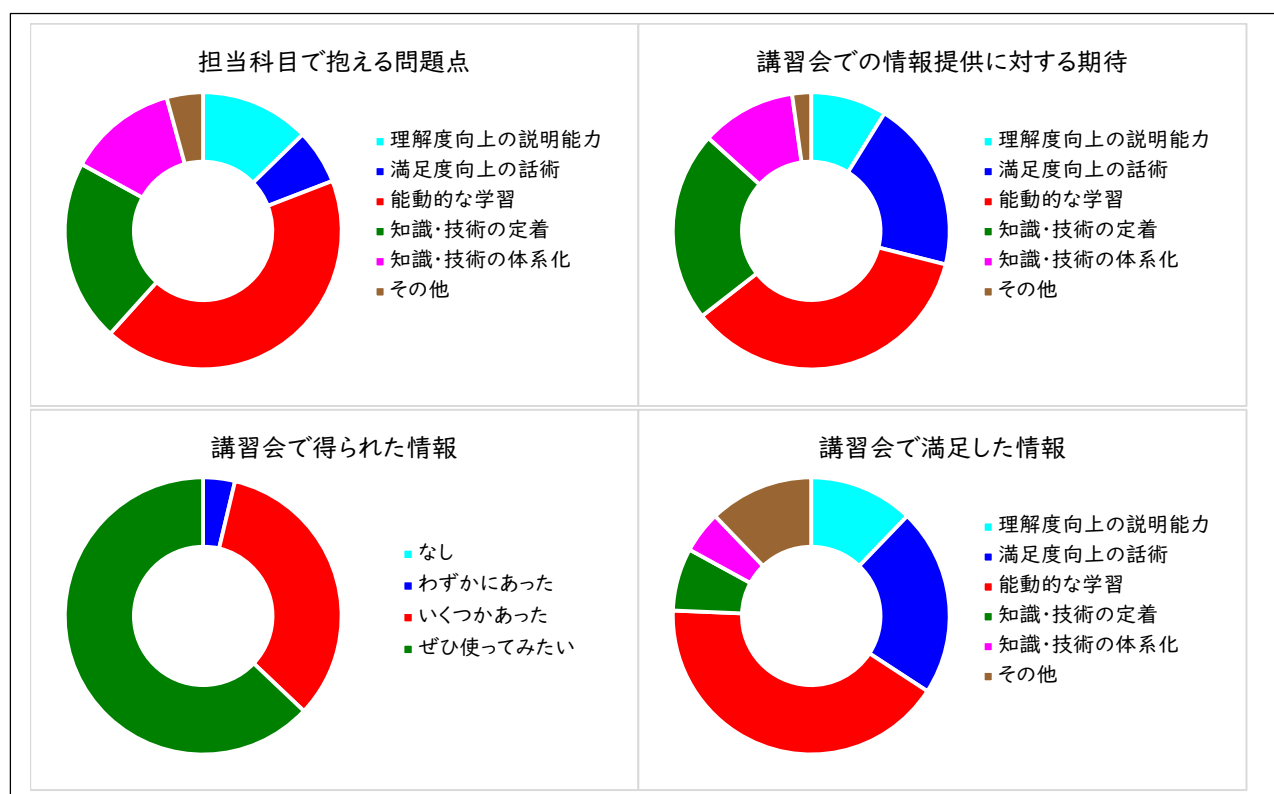


図 3. FD 講習会のアンケート回答結果。

6. 卒業時アンケート

水産学部では、教育 PDM の中で掲げられている学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に対する達成度の調査として、卒業時アンケートを卒業式直前に実施してきた。アンケートでは、学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に基づく質問、および卒業後の進路決定に関する質問を設定した。ここでは、2022 年度（令和 5 年度）の卒業時アンケートについてまとめる。回答率は、31%（155 名中 48 名）であった。

卒業時アンケートの設問項目を下記に示す。各質問は「①十分にそう思う」「②ある程度思う」「③少し思う」「④全く思わない」の 4 段階、または「①はい」「②いいえ」の 2 段階で評価してもらった。項目 A では学部の教育目標に対する満足度を測るための質問、項目 B では国際化に関する質問、項目 C では就職・進学に関する質問に答えてもらった。卒業時アンケートの分析結果を図 2 に示す。

教育目標に関する質問（項目 A）については、「①十分にそう思う」「②ある程度思う」と回答した卒業生は昨年度からほぼ同じ割合となっており、教育目標にかかげた各能力を習得できたと考える学生がほとんどであった。一方、A5（水産技術者として実務に必要な情報処理能力が身に付いた。）の項目については、「①十分にそう思う」および「②ある程度思う」の占める割合が増加しており、各種実験能力やデータ分析能力等に関する教育への満足度は高くなった。また、A4（水産技術者として必要な英語能力が向上した）の項目について「④全く思わない」と回答した卒業生の割合は、昨年度に引き続き多いようだが、「②十分にそう思う」と回答した卒業生の割合は増えているため、個人により英語に関する教育への満足度は異なるのかもしれない。A8（水産技術者として適切な協働（チームワーク）能力や倫理観、判断力及び職業観が身に付いた）の項目については「①十分にそう思う」および「②ある程度思う」の占める割合が増加しており、協働（チームワーク）能力や倫理観、職業観に関する教育への満足度は高くなった。

国際化に関する質問（項目 B）については、卒業生では「①十分にそう思う」「②ある程度思う」「③少し思う」の割合が高く、学部教育の目標を達成できたと考えられる。B13～B20 の項目については前年度と似たような傾向となったが、B12（在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか？）、B15（入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか？）については、「①十分にそう思う」「②ある程度思う」の割合が増加しており、コロナ禍でできなかった各種の国際交流活動が再開されたことが要因と考えられる。B19（これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか？）、B20（これから、国際的に活躍していきたいと思いますか？）の項目については、前年度と比較して「①十分にそう思う」「②ある程度思う」と回答した卒業生の割合が高くなっており、国際的な取り組みに積極的な学生が増えている。これも、コロナ禍が終息し、海外との往来が再開したことで国際的な場での活躍が期待できる環境になったことが反映していると考えられる。特に、B19 および B20 で「全く思わない」と回答した卒業生の割合が大幅に減少しており、学部における国際化に関する教育が活かせる社会環境が整いつつあり、学部が目指してきた国際化の教育効果がある程度達成できていることがうかがえる。

就職・進学に関する質問（項目 C）については、卒業生では、「①十分にそう思う」「②ある程度思う」の割合が 60% 強となっており、昨年度と比較して 20% 近く減少しており、希望する職種がそれに近い職種に就くことができなかった学生が多かったと考えられる。また、未決定という回答が昨年より 10% 以上増加しています。これは、コロナ禍において学生生活における制限が大きく、十分に納得のいくキャンパスライフを送れなかった学生が、進路に迷いを生じていることが一因ではないかと考えられる。これらの学生に対しては、引き続き就職支援を行っていく必要があると考えられる。

水産学部に対する意見（項目 D）については、昨年度に引き続き乗船実習に対して好評であった。また、「機材を用いた実学的な実習の機会が多数用意されていた」といった実験・実習等の教育面での取り組みについては好評な意見が見られた。また、「国際食料資源学特別コースの農業、漁業どちらも学べる点が自分の職業選択の選択肢の広がり大きな影響があった」や、「国際コースは水産だけでなく農学であったり、国際的な講義や英語での講義、実習等も多く受講可能であり、また同期にも留学生が多いことから自然と選択肢が多く、勉学に対する意識も高まった」といった、国際化教育面で好評な意見が見られた。一方で、「他学部との関わりが無さすぎるため、総合大学における多様性という点では欠けていると感じた」という回答もあり、学生によっては他学部とのつながりが持ちにくいと感じる部分があった。また、「夏の間、研究室が暑すぎたので冷房を完備してほしかったです。」との回答があり、電気料金の高騰による省エネ活動の推進が、一部学生の学修面に負の影響を及ぼした可能性があることがうかがえる。省エネと夏季の良好な学習環

境の整備は、今後も検討すべき課題であると考えられる。

以上、全体としてみると肯定的な回答の割合が高い項目が多く、学部教育目標は概ね達成できたと考えられる。しかし、今年度のアンケートの回答率は前年度に引き続きあまり芳しくなく、学生の回答を促す取り組みを継続していく必要があると考えられる。

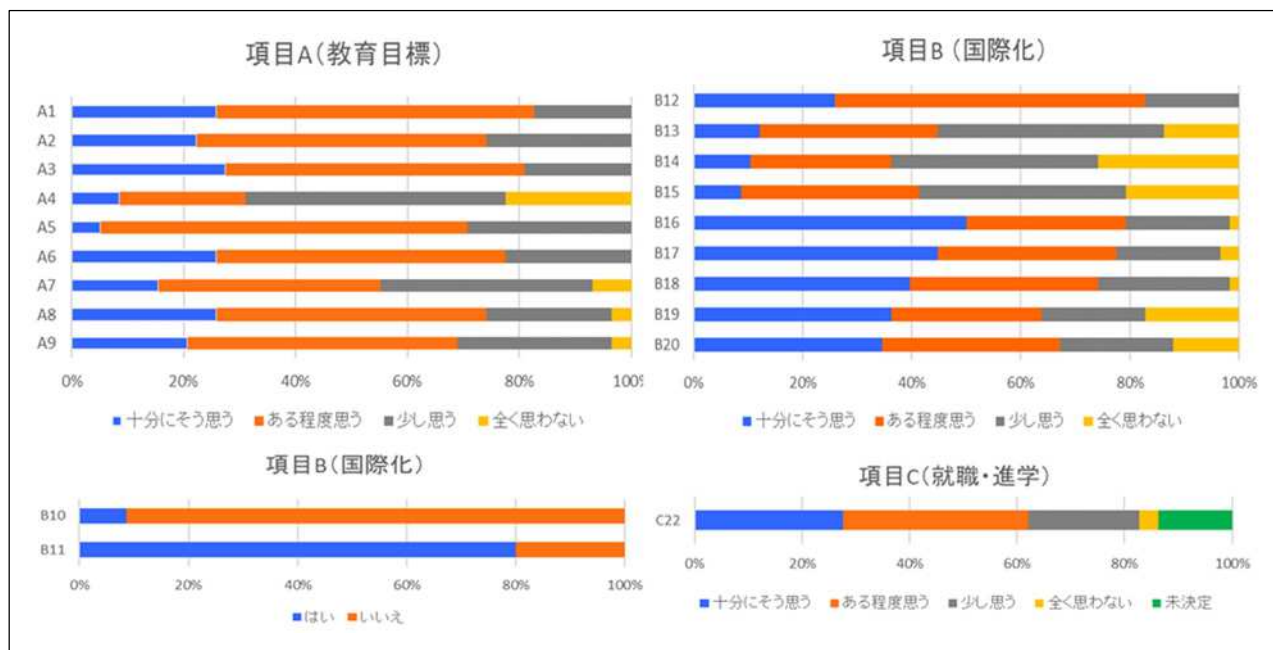


図 4. 2023 年度卒業生に関する集計結果。

令和 5 年度 卒業時アンケート(学部生用)

A. 水産学部が掲げる下記の教育目標について、あなた自身が修得できたかどうかを総合的な観点から評価してください。

1. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に強い水産技術者に必要な教養と基本的な知識を体系的に修得した
2. 水産学の各専門分野で、実践的で高いレベルの知識・技術を修得した
3. 水産技術者として十分な基礎学力が身につき、生涯学べる能力を習得した
4. 水産技術者として必要な英語能力が向上した
5. 水産技術者として実務に必要な情報処理能力が身に付いた
6. 水産技術者として必要な報告書作成、プレゼンテーション能力、問題解決型の能力が身に付いた
7. 水産技術者として必要なレベルの現場対応能力が備わった
8. 水産技術者として適切な協働(チームワーク)能力や倫理観、判断力及び職業観が身に付いた
9. 水産技術者として国際社会や地域社会の課題に果敢に取り組む意識と思考力が身についた

B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。

10. 在学中に海外研修に参加しましたか？
11. その海外研修は共通教育や学部など大学として開講されているものですか？
12. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか？
13. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか？
14. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか？
15. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか？
16. これから、英語の力(語学力)を伸ばしていこうと思いますか？
17. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか？
18. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか？

19. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか？
20. これから、国際的に活躍していきたいと思えますか？
21. 在学中に取得した英語資格の種類及びスコア等をお教えてください。
- C. 就職・進学について、ご回答ください。
22. あなたが修得した知識や技術が活かして、希望する職種等に就職・進学できた（必須）
- D. 水産学部の教育について評価できる点、改善すべき点がありましたら、ご回答ください（任意）
-

7. ベストティーチャー賞

7-1. 選考方法・基準

水産学部FD委員会では、ベストティーチャー賞を推薦するにあたって以下の選考方法・基準を定め、これらに従って選考を開始した。

- ① 水産学部で開講している科目から、以下の項目を満たす科目を選定する。
 - ☐ 教員による授業参観が可能な授業公開をしていること
 - ☐ 授業アンケートを実施していること
 - ☐ 授業アンケート回答率が50パーセントを超えている（受講者数の半分以上が回答している）こと
- ② 授業アンケート回答率の上位10科目を選定する。
- ③ ②に該当する科目において、授業満足度（授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか？）の上位5科目を選定する。
- ④ ①～③の条件で候補者・候補チームがすべて辞退した場合には、ベストティーチャー賞担当委員から各分野に1名推薦を依頼する。
- ⑤ ③もしくは④の科目担当者・担当チームに対し、以下の内容を含む資料作成を依頼する。
 - ☐ 部局の教育カリキュラムにおける当該科目の役割
 - ☐ 授業アンケート解析結果
 - ☐ 授業アンケート回答率
 - ☐ 課外学習時間
 - ☐ 授業の分かりやすさ
 - ☐ 授業満足度
 - ☐ 学修効果やアクティブラーニングを高めるために工夫している点
 - ☐ 授業改善策とその効果
 - ☐ 学生アンケート・コメントのフィードバック例
 - ☐ 学生アンケートにおけるコメント例
- ⑥ ⑤の提出資料に基づき、FD委員会において以下の項目について優れている科目を1科目決定し、水産学部から推薦する。
 - ☐ 当該授業が十分な学修成果を挙げている授業であると判断できる資料があること
 - ☐ 満足度・学生コメント・回答率なども含め、十分な教育成果を挙げたと判断できる資料があること
 - ☐ 授業改善の変化などが具体的に示された資料があること
 - ☐ 教員群での授業においては、チームとして教育している意義・必然性を理解できる資料があること
- ⑦ 部局から推薦された科目担当者には、⑤の提出資料に基づき水産学部FD講習会を依頼する。

7-2. 選考過程・結果

第一選考として、水産学部カリキュラムで指定されている全ての専門科目について、①～③の基準を満たした科目（水産企業論，Fishery Production Science，生化学実験，水産流通論，水圏科学実験基礎）が選定された。第二選考として、これら科目の担当者・担当チームに⑤の資料作成を依頼したところ、4科目（Fishery Production Science，生化学実験，水産流通論，水圏科学実験基礎）から資料提出があった。第三選考として、水産学部FD委員会は提出された資料に基づき慎重に審議した結果、水産流通論を担当する佐野雅昭教授を、令和5年度ベストティーチャー賞に推薦することを決定した。

7-3. 推薦理由

選考会議において、ベストティーチャー賞候補に相応しいとして高く評価された点は、次の通りである（下記資料参照）。

- ① 教育カリキュラムにおける役割
食品業界へ就職を希望する学生に対して、キャリア育成・ビジョン形成を意識させる導入科目として明確に位置付けられており、分野のカリキュラムを構成する科目群との関係も明確にデザインされていること。
- ② 授業アンケート解析結果

授業アンケートから得られた学生が学びたい内容を講義に含めるだけでなく、食品業界企業に対するアンケート調査から得られた社会ニーズも講義に含め、授業内容をデザイン・開発していること。

③ 授業アンケート回答率

水産学科必修科目（大人数受講科目）であるにもかかわらず、授業アンケート回答率が85パーセントを上回ること。

④ 課外学習時間

大学近隣の小売店を訪問し、毎回指定された生鮮水産物を店頭で探し、それに関する情報を整理するレポートを頻繁に課しており、多くの受講生が真摯に回答・提出していることから、相当量の課外学習が伺えること。

⑤ 授業の分かりやすさ・授業満足度

食品業界における最先端・最新情報を具体的な事例として授業にフィードバックすることで、より実践的な授業内容になるように努めており、これによって受講生の満足度が高くなっていることが授業アンケートから伺えること。

⑥ 学修効果やアクティブラーニングを高めるために工夫している点

課外学習と連携した講義内容であるため、講義で得た知識が生活している現実社会と密接かつ具体的に関係しているかを実感できていること。

学生が学びたいと思う内容、食品業界から必要とされる内容が含まれるため、キャリア形成・就職活動に有益と感じ、主体的に学ぶ意欲が醸成されていること。

⑦ 授業改善策とその効果

行政機関・食品業界との活動から得られた情報を常に授業内容に反映させており、学生がこれらの情報に対して有益と感じていることが授業アンケートから伺えること。

「水産流通論」の開講ポリシーとその特徴 「どう教えるか」ではなく「何を教えるか」

水産学部2年生対象（3期）水産学部必修科目・全15回対面授業
授業担当者：佐野雅昭（教授）

1. 講義の概要（シラバスより抜粋）

日本における生鮮水産物流通の構造や機能について、専門的内容を講義する。特に伝統的で最も高機能な流通機構である**卸売市場流通**と、新しく効率性は高いが低機能な**量販店**など**組織型小売業**に焦点を当てて講義を進める。また食品産業での業務に必要な**最先端の知識**、食品産業への就活で必要となる**基礎的知識**を教授するので、**食品産業への就職を希望する学生には必須の講義**である。講師は水産だけでなく果菜も含めた中央卸売市場の運営協議会会長や卸売会社の顧問、SMや大手GMSチェーンのアドバイザーも務めており、**現場の実感を踏まえた最先端の講義**を行うことが可能である。

社会のどこに自分が力を十分に発揮できるポジションがあるのか？
水産学を学んだ将来、どんな業種や職種で社会に貢献したいのか？

水産学部卒業生・大学院修了生の進路・業界別実績（2011～2021年度卒）

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	合計	割合(%)
食品・畜産系	3	6	9	3	5	3	4	3	5	3	2	46	4
水産・水産加工系	1	3	12	1	4	5	3	9	4	2	4	48	4
水産・水産加工系（卸売市場）	0	2	3	4	4	1	3	2	2	2	0	23	2
水産・水産加工系（卸売市場）	49	35	47	47	45	53	47	42	51	37	24	477	43
水産・水産加工系（卸売市場）	4	2	3	7	9	8	3	8	9	8	4	65	6
水産・水産加工系（卸売市場）	0	1	1	1	1	1	1	1	4	3	2	16	1
水産・水産加工系（卸売市場）	5	11	6	9	6	10	7	10	12	4	11	91	8
水産・水産加工系（卸売市場）	3	2	3	3	7	2	1	5	2	2	2	32	3
水産・水産加工系（卸売市場）	2	8	7	7	7	2	0	5	7	3	5	53	5
水産・水産加工系（卸売市場）	27	15	16	24	19	12	18	19	26	17	16	209	19
水産・水産加工系（卸売市場）	6	3	5	4	7	4	11	6	1	9	5	61	5
合計	100	87	109	109	113	101	98	110	123	90	77	1117	100

食品産業は水産学部生・修士学生の就職先のうち43%を占め、専門分野にかかわらず最も重要な就職先となっている。そのため当講義は2年次における唯一の分野必修科目に指定されている。

2. 学修目標（シラバスより抜粋）

- 卸売市場を中心とする**生鮮水産物流通の基礎的及び現代の特徴**を理解すること
- 水産物小売および水産物消費の現代的特点**を理解すること
- 水産物供給の全体構造とその課題、**将来展望に対するビジョン**を獲得すること

◆当講義は水産流通学コースのカリキュラムを構成する下記の他講義とも連携し、内容を分担しながら**カリキュラム全体として食品産業を総合的に学べるようデザイン**されている。

①食料問題と持続的開発（3期）：世界経済と食料問題、世界の水産物供給
 ②水産加工経済論（4期）：水産加工食品に関する商品知識とその産業的展開
 ③水産マーケティング論（4期）：マーケティング理論、具体的な食品開発・販売戦略
 ④水産商品学（4期）：生鮮水産物の商品知識、品目別の需給と流通・消費状況
 ⑤フードビジネス論（6期）：食品産業すなわち現代のフードビジネスの実感把握

参考資料 1

3. 講義のシラバス～目標に到達するための2つの重点課題と展望

<1. 卸売市場流通の構造、機能、課題>

- 第1回 オリエンテーション・水産物の商品特性と水産物流通の特徴
- 第2回 市場流通の全体構造とその機能や課題
- 第3回 卸売卸売市場の仕組みと機能
- 第4回 消費地卸売市場の仕組みと機能 (1) ～生鮮食品の流通を担う重要な公共インフラ
- 第5回 消費地卸売市場の仕組みと機能 (2) ～生鮮食品の流通を担う重要な公共インフラ
- 第6回 卸売市場法の法的改正と影響 (1) ～卸売会社の役割と公益性の放棄
- 第7回 卸売市場法の法的改正と影響 (2) ～卸売会社の役割と公益性の放棄

<2. 現代的な水産物小売と消費の実態と課題>

- 第8回 水産物小売市場の変化 (1) ～量販店の基本原理と発展
- 第9回 水産物小売市場の変化 (2) ～量販店の発展と分化：GMSの登場
- 第10回 水産物小売市場の変化 (3) ～量販店の問題点とその克服：EC・カルスマの登場
- 第11回 変化する多様な海外流通～成長する専門問屋とベンチャー系販路・ネット通販
- 第12回 中食（惣菜・給食等）・外食産業の動向と輸入水産物の流通
- 第13回 水産物消費の変化～都市化の影響による水産物個人消費の需要と集約化の円形
- 第14回 水産物消費における食文化と画一性～伝統と効率の衝突

<3. 生鮮水産物流通の今後の展望>

- 第15回 講義のまとめ～水産物流通の将来展望と可能性

4. シラバスの決定～顧客志向に立ち、学生が学びたいことを講義する

- 1) 水産学部生の就職先としては加工・流通を包含した**食品産業が圧倒的に重要**である。
- 2) 水産学部ではこうした食品産業企業に対し、水産学部で教授して欲しい内容について**アンケート調査**を実施してきた。その結果、上位項目は以下の通りである。

①**食品業界の動向** ②**食品衛生学** ③**水産物の流通** ④**水産経営学**
⑤**水産物の商品知識・食品工学・食品化学・国際水産事情**

- 3) 水産経済学分野ではこうした**社会ニーズをカリキュラム及びシラバスに反映**させており、当科目のシラバスやコンテンツも、こうした**インプット情報から構築**されている。つまり**教員が教えたいことではなく、学生が学びたいこと**、企業が学びたいことを教授している。
- 4) 学生が学びたいこと・キャリア形成に役立つことを語れば、**学生は自ら主体的に学ぶ意欲を持つ**。逆に教員が教えたいことだけを語れば、学生は学ぶ意欲を失ってしまう。**講義の目的、主人公は学生であり、教員ではない**。この講義を受講することで学生自身のキャリア構築に具体的にどのように役立つのか、を理解させ納得させることが自発的な学びを促進する。大学教育においては、講義内容に興味関心のない学生は学ぶ必要はないだろう。教員主体の**プッシュ型**ではなく**学生主体のプル型**の講義を目指している。

5. 講義コンテンツ作成時の留意点：現代的、具体的、実践的であること

- 1) 現実の食品産業は日々進歩で進化している。講師自身が**食品産業の最先端**で研究活動を積極的に行い、**最新の情報を正しく理解**した上で、**研究成果を即座に、具体的に、わかりやすい形に落とし込んで学生に提供**することが求められる。そのために講師自身のこの分野における研究活動の成果は講義の基盤として非常に重要である。加えて講師は国レベルや県レベルでの**行政活動**（政策立案など）に参画し、**民間企業**でも現実の食品産業において顧問・アドバイザー、研修会講師として活発に活動している。こうした大学外での活動において得られる具体的な産業関連情報も適宜講義内容にフィードバックさせ、より**実践的な内容**となるよう努めている。ただし基礎となる経済理論をきちんと踏まえ、現代的で唐突な社会変化も**普遍的な資本主義原理**の下に生じていることが説明できるように心がけている。
- 2) 実在する**具体的事例**を用いながら、原理・原則を理解させるよう努めている。また画像や動画、図表を多く用い**直観的理解**を進めた上で、言語情報により抽象的概念を操作しながら現実の理解を深化させるようにしている。
- 3) 奇をてらわず、**学生に有益だと確信**できる内容を、**自信と情熱**をもって語るようにしている。

6. 講義時の具体的な留意点

- 1) PPTで用いる文字は**最低でも24ポイント**とし、見やすいように配慮している。
- 2) 一番速くに着座している学生に**伝える意識**を持ち、顔を見ながら**大きな声**で語りかける。
- 3) **書いたものを読まない**。書いてあることを読むなら教員は不要である。レジュメに書かれていない、自分の頭の中に蓄積された知見、その場で語るべきことを語る。
- 4) その場の学生の様子を観察し、状況に応じた**臨機応変なアドリブ**を大切にしている。
- 5) **現代社会の俯瞰的理解**を常に意識している。直近の事件やニュース、経済状況を講義に取り込み、**いかに講義内容が自分たちが生活している現実社会と密接かつ具体的に連関しているか**を学生に理解させるようにしている。

7. レポート

毎回レポートの提出を義務づけている。**小売店の鮮魚売り場を訪問**し、毎回指定された生鮮水産物を店頭で探し、それに関する情報を整理する内容である。大学周辺のSMや鮮魚店には協力を依頼しており、学生訪問時には対応していただいている。大学から離れた**現実社会**そして**学生の生活圏内での学びの機会**を与え、講義内容についての理解を深めさせるようにしている。同時に水産学生として知っていて当たり前の、**生鮮水産物に対する感覚や商品知識、消費者としての視点を自然に身につけさせる**ことも目的としている。

8. まとめ

- 1) 講義はどう語るかではなく、**何を語るかが本質的に重要**である。それが学生のニーズに合わせていれば学生は受講することに価値を感じ、自ら主体的に学ぶ。逆に、ニーズに合わせていなければただ上手に語ったところで価値を感じないだろう。**学生の主体性を引き出すのは講義内容であり、講義手法ではない**。
- 2) 個々の講義内容ではなく、**カリキュラム全体がどのようにデザインされているか、が重要**である。水産学部では人材養成目標ごとにカリキュラムが構築されているが、それが上手に機能すれば、学生の**キャリア形成にとって有益な教育**が実現できるだろう。一つの講義がいかに面白くても、それらが連関し相乗効果をもたらさなければ、教育全体の目的を達成し得ないだろう。
- 3) 教員が誰であらうと、どのように語ろうと、一定の教育目的が実現できるようにカリキュラムとシラバスが設計されるべきである。その観点でいえば、良いカリキュラムは存在するが、**ベストな教員は存在しない**のではないかな。

参考資料 2

8. 大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和 4 年度実施分）の分析について

令和 5 年度 10 月に開催された全学 FD 委員会において、大学 IR コンソーシアム学生調査結果が示され、これに対する分析評価を提出要請された。分析評価を提出するにあたり、予備的な分析を行ったところ、以下のようなことが明らかとなった。

他部局と比較した時の弱点（問題点）

- ① 体験的に学ぶ機会が少ないと感じている（1 年生・3 年生）。
- ② 授業において、学生間での対話・議論・プレゼンテーションの機会が少ないが（1 年生）、学年が進行すると、欠席・遅刻・提出物未完成・課外学習希薄が多い（1 年生・3 年生）。
- ③ 入学後の能力変化において、協働・コミュニケーション能力開発が低い（1 年生）、学年進行すると、一般的教養・問題解決能力・プレゼンテーション能力・数理解析能力が低い（3 年生）。
- ④ 大学への適応感として、効果的に学習する技能、求められる水準に対する学習、友情を深めるということが低い（1 年生）。
- ⑤ 大学教育の満足度において、学生同士の一体感や多様な考え方を認め合う雰囲気が高い（3 年生）。

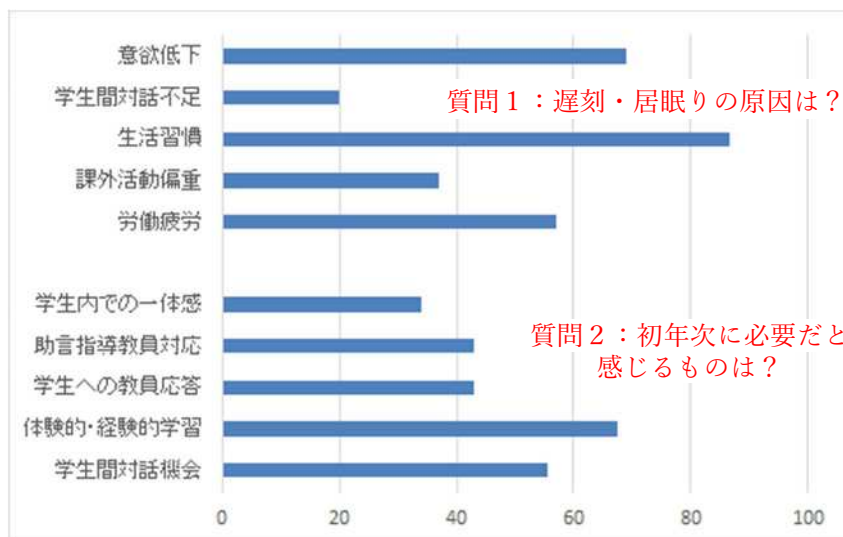
このような弱点について、水産学部 FD 委員会で議論がなされ、以下のような中期的な FD 活動方針が必要であることが確認された。

- ① 初年次において、学生間での対話・コミュニケーション機会を深める教育内容について、授業参観・教育内容紹介を増やす。
- ② コロナ禍で実施できなかった体験型・実践型教育コンテンツを復活するよう依頼すると共に、専門科目でも多く取り入れるように依頼する。
- ③ IR コンソーシアムの集計結果について、継続的に議論する機会を増やす。

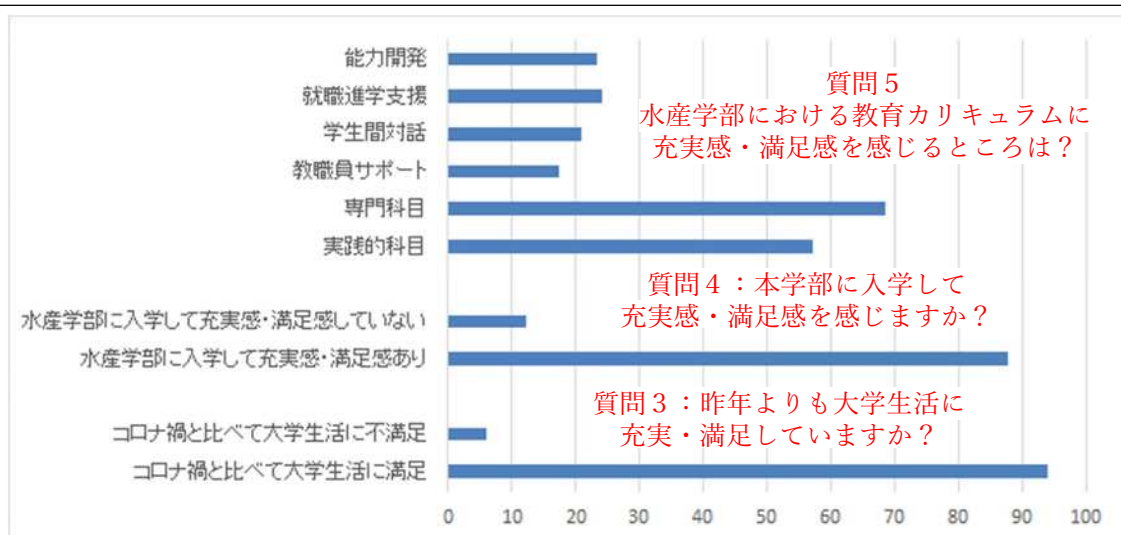
これらの議論に基づき、提出した分析評価は以下ようになった。

評価する点	近年、実践的教育を重視する水産学部では、コロナ禍の制限された授業環境・内容によって、多様な問題が顕在化している。実際、水産学部生の学修に対する意欲・努力・時間、授業での対話・議論・コミュニケーションに関する設問では、近年、常に他学部よりも低い傾向にある。IR コンソーシアム調査結果から、想定されるこれらの原因を解明し、問題解決策について提案する。
課題と考える点 (3 点以上)	他学部と異なる水産学部の特徴は、①一人暮らし（県外からの入学者）が多数を占める、②生活費確保のために労働収入を要する学生が多い、という点にある。このため、初年次の大学教育・大学生活への馴化が重視され、初年次～二年次の教育カリキュラムでは実践的科目を多く設定し、学生間でのコミュニケーション機会を多くすることで大学教育・大学生活に馴化する教育効果が機能していた。しかし、コロナ禍の制限された授業環境・内容では、これらの効果が十分機能しなくなったと想定される。実際、IR コンソーシアム調査結果ではそれが顕著に表れている。また、水産学部独自に実施した 2 年生対象のアンケート（資料 1）の質問 1 回答からも初年次の大学生活への馴化に問題があることが想定される。従って、これらの問題を克服するには、以下を優先的に解決すべき課題と考える。 課題①：コロナ禍の制限された授業環境・内容による問題点について教員間で議論すること 課題②：在学初期に学生間での対話・議論の機会を多く設定し、大学生活への適応感・満足感を高めること 課題③：就業・能力開発に対する意識を高め、能動的な学習を促すこと 課題④：学修した知識・技術を体系化させ、これらを駆使して問題を解決する能力を育成すること

課題への 具体的な対応案	資料1の質問2回答を重視すると、昨年度に継続して以下の対応策を実施することが望ましい。 課題①への対策:FD ワークショップにおける問題点共有と、これに対する議論を通じた対応案の設定 課題②への対策:教育効果が高いと評定される教員による FD 講習会を開催し、初年次～二年次における学生間コミュニケーション機会の増強や醸成を図る これに加えて、学年が進行した学生に認められる課題③および課題④について、以下の対応策を実施する。 課題③への対策:授業改善報告の提出・回覧による、実践的科目(実験・演習・実習)での就業・能力開発に対する授業の工夫や学生意識の醸成 課題④への対策:教育ユニット単位 FD ワークショップにおける、総合演習・卒論を通じた知識・技術の体系化と問題解決の能力育成に関する議論の活性化
昨年度挙げた 改善・対応策 による成果	昨年度より、課題①および課題②への対策を継続的に実施しており、この効果を確かめるために2年生対象の追加アンケートを実施した(資料1・資料2)。その結果、昨年度に大学生活に対して充実感・満足感が希薄と回答した水産学部2年生は、現在では向上したことが明瞭になった(資料2・質問3回答)。また、大部分の水産学部2年生が水産学部に入学したことの充実感・満足感を感じていることも分かった(資料2・質問4回答)。従って、課題①および課題②への対策には一定の効果があったと判断できる。 他方、資料2・質問5回答を考慮すると、水産学部2年生は専門科目・実践的科目に対する充実感・満足感を感じていることから、課題③および課題④への対策を継続すれば、来年度には一定の効果を想定できる。
以前の結果や他の調査結果・データ等との比較を通じて明らかになった点や気付いた点	IR コンソーシアム調査結果から、様々な問題点が明確になった。今年度の解析・評価・議論から、コロナ禍における制限された教育環境・内容に伴う問題点は、他学部と異なる水産学部の特徴だからこそ顕在化あるいは増幅したと、水産学部 FD 委員会は考える。これらの問題点に弾力的に対応し、一定の効果が得られれば、全学的な問題点を克服する糸口になるかもしれない。



資料1. 水産学部2年生に対するアンケート結果. 横軸は回答人数.



資料2. 水産学部2年生に対するアンケート結果. 横軸は回答人数.

共同獣医学部・
共同獣医学研究科

令和5年度共同獣医学部、共同獣医学研究科 FD 活動の記録

I. 共同獣医学部 FD 活動組織 (FD 委員会の構成と活動状況)

委員長 高橋 雅 准教授
委員 内藤 清惟 准教授
委員 小澤 真 准教授
委員 乙丸 孝之介 准教授

第1回共同獣医学部 FD 委員会 (メール会議)

日時：令和5年4月28日(木)～4月29日(水)

議題1. 卒業生への調査の実施

議題2. 山口大学との合同FD研修会

議題3. 授業参観報告書

第2回共同獣医学部 FD 委員会 (メール会議)

日時：令和5年5月10日

議題1. 令和5年度予算案に関して

第3回共同獣医学部 FD 委員会 (メール会議)

日時：令和5年6月26日

議題1. 令和4年度鹿児島大学ベストティーチャー賞選考結果に関して

第4回共同獣医学部 FD 委員会 (メール会議)

日時：令和5年9月5日～9月26日

議題1. 山口大学との合同FD研修会 に関して

第5回共同獣医学部 FD 委員会 (メール会議)

日時：令和5年10月3日～10月16日

議題1. 山口大学との合同FD研修会の議事録に関して

II. 授業公開と授業参観の取り組み

共同獣医学部では、農学部所属の平成 15 年度後期より授業公開・授業参観を実施しており、平成 28 年度後期より山口大学共同獣医学部も本取り組みに一部参画している。両大学の教員が互いに参観できる仕組みとしており、参加者拡大を図ると共に、本取り組みの内容をより一層充実させている。

具体的な実施方法としては、あらかじめ 1 名につき 2 名の参観者を専門分野、職位に関係なく割り振り、年間通して任意の時期に参観を行うことができるようにしている。参観者には「授業参観報告書」書式を配布し、参観を実施した授業にかかる報告書を作成・提出してもらっている。平成 26 年度からは授業担当者に参観者からの報告書に対する対策書を作成・提出してもらい、本取り組みの PDCA サイクルを確立している。また、令和 3 年度より、参観者には授業担当者の授業について、運営方法や授業の魅力度等に関する 2 つの観点により数値的に評価してもらい、当年度のベストティーチャーを選出する際の一つの材料としている。

本年度の獣医学科専任教員の授業参観参加者数は、年間通して 31 名の参加があり、参加率は 79.5%となっている。

III. 学生による授業評価

前後期にそれぞれ学生による授業評価のアンケートを manaba によって実施した。共同獣医学部では、山口大学と共通の授業評価アンケートを作成し、実施している。質問項目は下記のとおりである。

●										◆									
授業評価アンケート(講義・演習用)																			
授業科目番号: 9999										受講者氏名 (氏名の記載は任意です。)									
授業科目名: ●●●●										(☑) 遠隔授業システム 教員名: ●●●●									
* このアンケートは、授業をより良くするために行うもので、回答者の成績には一切影響ありません。考えを率直に記入してください。 * この回答用紙は機械(OCR)で読み取り集計しますので、該当する番号の前の○印を塗りつぶしてください。																			
1 あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか?(括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)																			
○1. 90%以上(14回以上)				○2. 80~90%(12~13回)				○3. 60~80%(9~11回)				○4. 40~60%(6~8回)				○5. 40%未満(6回未満)			
2 あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか? 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。																			
○1. 3時間程度または以上				○2. 2時間程度				○3. 1時間程度				○4. 30~50分程度				○5. 30分未満			
3 この授業内容の水準はどうでしたか?																			
○1. 高かった				○2. やや高かった				○3. 妥当だった				○4. やや低かった				○5. 低かった			
4 この授業の分量はどうでしたか?																			
○1. 多かった				○2. やや多かった				○3. 妥当だった				○4. やや少なかった				○5. 少なかった			
5 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いませんか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
6 板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
○6. この授業は該当しない																			
7 授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
8 この授業はシラバスに沿って進められましたか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
9 あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
○6. 答えられない																			
10 あなたは、この授業の内容を理解できましたか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
11 この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
* 以下は、遠隔授業システムに関する質問です。該当する場合(授業科目名の横にチェックあり)、送信・受信に関わらず回答してください。																			
12 教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
13 教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
14 教員の授業の進め方はスムーズでしたか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
15 授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
16 対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか?																			
○1. そう思う				○2. ややそう思う				○3. どちらとも言えない				○4. あまりそう思わない				○5. そう思わない			
* 以下は、授業担当教員の各自設定質問です。教員によって異なりますので、指示があれば回答してください。																			
17 (自由質問①)																			
○1. 選択肢 1				○2. 選択肢 2				○3. 選択肢 3				○4. 選択肢 4				○5. 選択肢 5			
18 (自由質問②)																			
○1. 選択肢 1				○2. 選択肢 2				○3. 選択肢 3				○4. 選択肢 4				○5. 選択肢 5			
自由記述																			
この授業についての意見・要望・感想などを自由にご記入下さい。スペースが足りない場合、適宜裏面にご記入下さい。																			
ご協力ありがとうございました。										共同獣医学部ファカルティ・ディベロップメント委員会									
■																			

様式に記載している「遠隔授業」とは、遠隔授業システムを使って、教員の映像や音声、授業の資料等をリアルタイムで送信あるいは受信して行う授業である。共同獣医学部では、この「遠隔授業」に関する設問を用意し、学生の授業環境に対する満足度を測っている。共同獣医学部所属の学生に対して実施し、専門教育科目について、前期 60 科目(講義・演習:46 科目、実験・実習:14 科目)、後期 23 科目(講義・演習:19 科目、実験・実習:4 科目)の回答を回収した。次のページより、令和 5 年度のアンケート集計結果を紹介する。

●アンケート集計結果(全科目集計)

【講義・演習科目】

授業評価アンケート集計(講義・演習)

No.	質問項目	回答	R5 前期	% (R5 前)	R5 後期	% (R5 後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	149	85.6%	38	92.7%
		80～90%	24	13.8%	3	7.3%
		60～80%	1	0.6%	0	0.0%
		40～60%	0	0.0%	0	0.0%
		40%未満	0	0.0%	0	0.0%
		計	174	100.0%	41	100.0%
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。(授業1回あたりの時間)	3時間程度または以上	40	23.0%	9	22.0%
		2時間程度	41	23.6%	11	26.8%
		1時間程度	28	16.1%	9	22.0%
		30～50分程度	31	17.8%	7	17.1%
		30分未満	34	19.5%	5	12.2%
		計	174	100.0%	41	100.0%
3	この授業内容の水準はどうでしたか？	高かった	68	39.1%	16	39.0%
		やや高かった	29	16.7%	22	53.7%
		妥当だった	69	39.7%	3	7.3%
		やや低かった	7	4.0%	0	0.0%
		低かった	1	0.6%	0	0.0%
		計	174	100.0%	41	100.0%
4	この授業の分量はどうでしたか？	多かった	50	28.7%	27	65.9%
		やや多かった	39	22.4%	12	29.3%
		妥当だった	84	48.3%	2	4.9%
		やや少なかった	1	0.6%	0	0.0%
		少なかった	0	0.0%	0	0.0%
		計	174	100.0%	41	100.0%
5	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いましたか？	そう思う	88	50.6%	28	68.3%
		ややそう思う	45	25.9%	11	26.8%
		どちらとも言えない	22	12.6%	2	4.9%
		あまりそう思わない	17	9.8%	0	0.0%
		そう思わない	2	1.1%	0	0.0%
		計	174	100.0%	41	100.0%

6	板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていたか？	そう思う	93	53.4%	27	65.9%
		ややそう思う	46	26.4%	10	24.4%
		どちらとも言えない	20	11.5%	3	7.3%
		あまりそう思わない	10	5.7%	0	0.0%
		そう思わない	5	2.9%	1	2.4%
		この授業は該当しない	0	0.0%	0	0.0%
		計	174	100.0%	41	100.0%
7	授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う	93	53.4%	28	68.3%
		ややそう思う	29	16.7%	6	14.6%
		どちらとも言えない	51	29.3%	1	2.4%
		あまりそう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		そう思わない	1	0.6%	1	2.4%
		この授業は該当しない	0	0.0%	5	12.2%
		計	174	100.0%	41	100.0%
8	この授業はシラバスに沿って進められましたか？	そう思う	108	62.1%	36	87.8%
		ややそう思う	42	24.1%	4	9.8%
		どちらとも言えない	22	12.6%	1	2.4%
		あまりそう思わない	1	0.6%	0	0.0%
		そう思わない	1	0.6%	0	0.0%
		計	174	100.0%	41	100.0%
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	85	48.9%	29	70.7%
		ややそう思う	54	31.0%	8	19.5%
		どちらとも言えない	24	13.8%	4	9.8%
		あまりそう思わない	6	3.4%	0	0.0%
		そう思わない	5	2.9%	0	0.0%
		答えられない	0	0.0%	0	0.0%
		計	174	100.0%	41	100.0%
10		そう思う	89	51.1%	30	73.2%
		ややそう思う	57	32.8%	11	26.8%

	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	どちらとも言えない	14	8.0%	0	0.0%
		あまりそう思わない	9	5.2%	0	0.0%
		そう思わない	5	2.9%	0	0.0%
		計	174	100.0%	41	100.0%
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	93	53.4%	32	78.0%
		ややそう思う	50	28.7%	6	14.6%
		どちらとも言えない	21	12.1%	3	7.3%
		あまりそう思わない	7	4.0%	0	0.0%
		そう思わない	3	1.7%	0	0.0%
		計	174	100.0%	41	100.0%
※12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	71	61.2%	12	100.0%
		ややそう思う	23	19.8%	0	0.0%
		どちらとも言えない	14	12.1%	0	0.0%
		あまりそう思わない	5	4.3%	0	0.0%
		そう思わない	3	2.6%	0	0.0%
		計	116	100.0%	12	100.0%
※13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	68	60.7%	10	83.3%
		ややそう思う	24	21.4%	2	16.7%
		どちらとも言えない	12	10.7%	0	0.0%
		あまりそう思わない	6	5.4%	0	0.0%
		そう思わない	2	1.8%	0	0.0%
		計	112	100.0%	12	100.0%
※14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	59	52.7%	10	83.3%
		ややそう思う	36	32.1%	1	8.3%
		どちらとも言えない	12	10.7%	1	8.3%
		あまりそう思わない	3	2.7%	0	0.0%
		そう思わない	2	1.8%	0	0.0%
		計	112	100.0%	12	100.0%
		そう思う	62	55.4%	10	83.3%

※ 15	授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であつたと思いますか？	ややそう思う	27	24.1%	2	16.7%
		どちらとも言えない	17	15.2%	0	0.0%
		あまりそう思わない	2	1.8%	0	0.0%
		そう思わない	4	3.6%	0	0.0%
		計	112	100.0%	12	100.0%
※ 16	対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	56	50.0%	9	75.0%
		ややそう思う	27	24.1%	3	25.0%
		どちらとも言えない	16	14.3%	0	0.0%
		あまりそう思わない	7	6.3%	0	0.0%
		そう思わない	6	5.4%	0	0.0%
		計	112	100.0%	12	100.0%

※No.12～16 は、遠隔授業システムを利用した科目のみ対象の設問

授業評価アンケート集計(実験・実習)

No.	質問項目	回答	R5 前期	%(R5 前)	R5 後期	%(R5 後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	56	94.9%	4	100.0%
		80～90%	2	3.4%	0	0.0%
		60～80%	1	1.7%	0	0.0%
		40～60%	0	0.0%	0	0.0%
		40%未満	0	0.0%	0	0.0%
		計	59	100.0%	4	100.0%
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。(授業1回あたりの時間)	3時間程度または以上	20	24.2%	4	100.0%
		2時間程度	11	26.7%	0	0.0%
		1時間程度	12	29.6%	0	0.0%
		30～50分程度	5	13.3%	0	0.0%
		30分未満	11	6.3%	0	0.0%
		計	59	100.0%	4	100.0%
3	この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか？	そう思う	20	29.2%	3	75.0%
		ややそう思う	10	48.8%	1	25.0%
		どちらとも言えない	27	17.1%	0	0.0%
		あまりそう思わない	2	4.2%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.8%	0	0.0%
		計	59	100.0%	4	100.0%
4	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、実験・実習の方法などの説明はわかりやすいと思いましたか？	そう思う	13	57.9%	3	75.0%
		ややそう思う	10	32.5%	1	25.0%
		どちらとも言えない	34	5.4%	0	0.0%
		あまりそう思わない	1	2.9%	0	0.0%
		そう思わない	1	1.3%	0	0.0%
		計	59	100.0%	4	100.0%
5	板書や配布資料、実験マニュアルなどは、実験・実習の内容理解と	そう思う	28	65.8%	4	100.0%
		ややそう思う	17	23.8%	0	0.0%
		どちらとも言えない	7	6.7%	0	0.0%

	実施に役立ちましたか？	あまりそう思わない	7	2.1%	0	0.0%
		そう思わない	0	1.7%	0	0.0%
		計	59	100.0%	4	100.0%
6	実験・実習中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う	33	64.2%	3	75.0%
		ややそう思う	17	26.3%	1	25.0%
		どちらとも言えない	6	4.6%	0	0.0%
		あまりそう思わない	3	3.3%	0	0.0%
		そう思わない	0	1.7%	0	0.0%
		計	59	100.0%	4	100.0%
7	動物を扱う実験・実習は、安全性に重点が置かれていましたか？	そう思う	26	66.7%	4	100.0%
		ややそう思う	15	26.3%	0	0.0%
		どちらとも言えない	18	2.5%	0	0.0%
		あまりそう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	2.9%	0	0.0%
		この授業は該当しない	0	1.7%	0	0.0%
		計	59	100.0%	4	100.0%
8	この実験・実習は、シラバスに沿って進められましたか？	そう思う	37	47.1%	4	100.0%
		ややそう思う	18	27.5%	0	0.0%
		どちらとも言えない	3	22.9%	0	0.0%
		あまりそう思わない	1	2.1%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.4%	0	0.0%
		計	59	100.0%	4	100.0%
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	18	31.0%	4	100.0%
		ややそう思う	21	36.2%	0	0.0%
		どちらとも言えない	9	15.5%	0	0.0%
		あまりそう思わない	7	12.1%	0	0.0%
		そう思わない	3	5.2%	0	0.0%
		計	58	100.0%	4	0.0%
10		そう思う	20	49.2%	4	100.0%

		ややそう思う	28	45.8%	0	0.0%
		どちらとも言えない	4	2.9%	0	0.0%
		あまりそう思わない	4	1.3%	0	0.0%
		そう思わない	3	0.8%	0	0.0%
		計	59	100.0%	4	100.0%
11	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	29	56.3%	4	100.0%
		ややそう思う	25	32.9%	0	0.0%
		どちらとも言えない	3	7.1%	0	0.0%
		あまりそう思わない	2	2.1%	0	0.0%
		そう思わない	0	1.7%	0	0.0%
		計	59	100.0%	4	100.0%
※12	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	21	31.0%	1	100.0%
		ややそう思う	4	20.7%	0	0.0%
		どちらとも言えない	2	41.4%	0	0.0%
		あまりそう思わない	2	6.9%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	29	100.0%	1	100.0%
※13	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	18	31.0%	0	0.0%
		ややそう思う	3	24.1%	0	0.0%
		どちらとも言えない	3	41.4%	0	0.0%
		あまりそう思わない	3	3.4%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	27	100.0%	0	0.0%
※14	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	14	17.9%	0	0.0%
		ややそう思う	7	32.1%	0	0.0%
		どちらとも言えない	5	42.9%	0	0.0%
		あまりそう思わない	0	3.6%	0	0.0%
		そう思わない	0	3.6%	0	0.0%
		計	26	100.0%	0	0.0%

※ 15	授業中は、実験・実習に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	12	20.7%	0	0.0%
		ややそう思う	7	31.0%	0	0.0%
		どちらとも言えない	3	44.8%	0	0.0%
		あまりそう思わない	4	0.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	3.4%	0	0.0%
		計	26	100.0%	0	0.0%
※ 16	対面式の実験・実習と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	11	27.6%	0	0.0%
		ややそう思う	6	20.7%	0	0.0%
		どちらとも言えない	5	48.3%	0	0.0%
		あまりそう思わない	4	0.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	3.4%	0	0.0%
		計	26	100.0%	0	0.0%

※No.12～16 は、遠隔授業システムを利用した科目のみ対象の設問

IV. 令和5年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同FD研修会 報告書

1. はじめに

令和5年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同FD研修会が、本年度は鹿児島大学共同獣医学部の主催により、令和5年9月25日(月)に開催された。昨年度と同様にZOOMを用いたオンライン形式で実施され、山口大学共同獣医学部教員および鹿児島大学共同獣医学部教員が参加した。以下に、本年度の合同FD研修会の詳細を報告する。

2. 研修会次第

日時：9月25日(水) 13:00～15:40

形式：ZOOMを用いたオンライン形式

13:00 開会の挨拶(鹿児島大学 三角一浩学部長)

13:10-14:20 基調講演

「適切な成績評価について考える」

伊藤 奈賀子先生(鹿児島大学 学術研究院 総合科学域 総合教育学系 准教授鹿児島大学 総合教育機構 高等教育研究開発センター)

14:20-15:20 教育ワークショップ

(①基礎 ②病態予防 ③産業動物臨床 ④伴侶動物臨床)

15:30-15:40 閉会の挨拶(山口大学 度会雅久学部長)

3. 各部の内容. 基調講演

3.1. 基調講演

基調講演として、鹿児島大学総合教育機構高等教育研究開発センター長の伊藤奈賀子先生に、適切な成績評価に関して解説していただいた。成績評価の概要、成績評価と学習評価の違い、そして文章生成 AI に対する対応を含めた現実的な提案をいただいた。また、成績評価は適切に行うだけでなく、学生に対してフィードバックをすることの重要性に関しても認識することができた。適切な成績評価を実施することに関しては、JUAA(公益財団法人大学基準協会)による山口鹿児島共同獣医学部の評価の結果においても検討課題とされていた点であり、今回の基調講演により両大学の多くの教員が理解し改善することへつながったと考えられた。

3.2. 教育ワークショップ

教育ワークショップ参加者(敬称略)

山口大学: 日下部、日暮、羽原、佐藤(晃)、大濱、木村、岩田、櫻井、佐藤(宏)、清水、高野、三宅、森本、柳田、吉寄、谷口、角川、小野、谷、根本、中市、馬場、上林、水野、伊賀瀬

鹿児島大学: 辻尾、藤田、白石、内藤、宮本、浅野、ヘンリー、安藤(匡)、小尾、田仲、一二三、平野、藤本、松尾、小澤、乙丸、帆保、安藤、畠添、森脇、井尻、山下、有村、三浦、藤木、矢吹、大和、高橋(雅)、十川、高橋(香)、斎藤、蔵元、古澤、野口、三角、遠藤、三好

教育ワークショップ(基礎系)議事録

文責:内藤清惟(鹿児島大学)

日時: 2023 年 9 月 25 日(月) 14:20~15:20

教育ワークショップ参加者(敬称略)

山口大学: 日下部、日暮、羽原、佐藤(晃)、大濱、木村

鹿児島大学: 辻尾、藤田、白石、内藤(世話役)、宮本、浅野、ヘンリー

議題:

1) 教員紹介(新しく着任された先生方の紹介)(情報共有)

山口大学より獣医生化学・生理学分野助教に着任された羽原先生の挨拶と、鹿児島大学より解剖学分野助教に着任された松屋先生の紹介が行われた。

2) コロナ後の実習の状況について(情報共有)

実習担当の先生から、実習の現状についてお話いただき、情報共有を行った。概ね、コロナ前とコロナ中の実習の良いところを取り入れたハイブリッドな形式での実習を実施していることが確認された。また、動物使用数の削減について、努力を続けていることも確認された。

3) 今後の基礎系講座について(情報共有)

教員の異動について報告され、今後の方針について情報共有された。

4) ポリクリと卒研の両立について

参加教員より、鹿児島大学ではポリクリによって卒業論文研究の実施が困難である状況について問題提起され、鹿児島大学と山口大学のポリクリと卒業研究の状況について情報共有を行った。山口大学では4年生から研究室配属されており、鹿児島大学でも4年生からの研究室配属について議論していく必要がある旨、確認された。

5) 実習の統合について(協議事項)

昨年度から継続の協議事項で、今後の方針について確認された。今後は、WG等を作り、協議していく必要がある旨、確認された。

6) その他

特になし。

教育ワークショップ(病態予防)議事録案

文責:小澤真(鹿児島大学)

日時: 2023 年 9 月 25 日(月) 14 時 20 分～15 時 30 分

出席者:

山口大学: 岩田、櫻井、佐藤(宏)、清水、高野、三宅、森本、柳田、吉寄

鹿児島大学: 安藤(匡)、小尾、田仲、一二三、平野、藤本、松尾、小澤(世話役)

議題:

1. 教育ワークショップに対する事前の議題提案

事前の議題提案は、いずれの大学からもなかった。そのため今回の教育ワークショップでは、出席者より議題を随時募集し、意見交換などを行うこととした。

2. 実習経費の減額に対する対応について

(質問)三宅先生: 山口大学では、財政上の理由などにより学部から支給される実習経費が削減されている。鹿児島大学の状況および具体的な対応策について知りたい。

(回答)一二三先生: 鹿児島大学でも実習経費は減少傾向にある。支給額に応じて実習内容を調整しながら対応している。

(回答)藤本先生: 学部の実習経費を申請したことはない。実習に必要な消耗品などは、研究室の常備品を活用している。

3. 学外施設における実習にかかる交通手段やその経費について

(質問)清水先生: 山口大学では、学外施設における実習に利用可能なバスが1台しかなく、手配に苦労している。鹿児島大学の状況について知りたい。

(回答)小澤: 鹿児島大学には大小あわせて3台の公用バスがあるが、運転手は2名のみで、附属小中学校とも共用しているため、予約が取りにくい。高速道路の利用料金は学部の実習経費から支出されているはず。

(回答)安藤先生: 運転手の勤務時間に制限があるため、水産養殖場の見学実習では民間バスを利用している。これまでその経費は学部の実習経費から支給されていたが、今年度は満額支給が得られなかったため、不足分は教員個人が管理する研究費から補填した。

4. 病態予防におけるデータサイエンス教育について

(回答)清水先生: 山口大学では、データサイエンス教育に力を入れる方針が示されている。鹿児島大学の教員の姿勢や取り組み内容について知りたい。

(回答)鹿児島大学の各教員: データサイエンス教育の重要性については、概ね理解している。しかし、自分で教えることは難しい。

(回答)小澤：自分が担当している動物衛生学実習の一環として、養豚 IT ベンチャーの方を特別講師としてお招きし、養豚農場で収集された生産性に関連する膨大な実データを活用したデータ処理、解析、および考察に取り組む授業を実施している。

(回答)高野先生：両大学の4年生を対象に、獣医疫学の授業の一環として統計解析ソフトの使用方法を指導している。ただし、山口大学の学生が対面講義を受講する一方、遠隔講義となる鹿児島大学の学生は、学習内容の理解において劣っている可能性があることを懸念している。

5. 感染症関係の講義について

(質問)小澤：鹿児島大学では、微生物学や感染症学など、多くの講義科目を複数の教員が担当してオムニバス形式で実施している。山口大学の状況について知りたい。

(回答)三宅先生：山口大学では、オムニバス形式の講義科目は人獣共通感染症学など一部に限られ、基本的に各科目名に対応した研究室の教員が講義および実習を担当している。

(質問)三宅先生：データサイエンス教育の充実などにより、今後は教員も学生も授業負担の増加が見込まれる。感染症関連の講義では同じキーワードが繰り返し登場することが多いため、縮小や一本化を検討できないか。

(回答)清水先生：同様のアイデアは、数年前に EAEVE 認証への申請を控えて授業内容を整理していた際にも提案された。しかし、当時の学生から「重要なキーワードは繰り返し学習したい」との意見が寄せられたため、その提案は立ち消えになった。

(回答)小澤：同じキーワードであっても、授業科目によって理解すべき事柄が異なることから、縮小や一本化は難しいと思う。

6. 教育ワークショップの必要性について

(質問)小澤：共同獣医学部の立ち上げ直後や EAEVE 認証の取得前後と比べ、教育ワークショップで議論すべき事項が減っているように感じる。今回の開催に際しても、事前の議題提案がなかったことから、来年度以降の開催の必要性について各教員の意見をお聞きたい。

(回答)両大学の各教員：教育ワークショップは、両大学の類似分野を担当する教員同士が情報交換できる貴重な機会なので、今後も継続すべき。また次回以降は、オンライン形式ではなく対面形式での開催が望ましい。

(回答)柳田先生：事前の議題提案がなかった場合は、事前に各研究室・教員の活動報告を依頼するなど、別の形で話題作りを準備する方法もある。

教育ワークショップ(産業動物臨床)議事録

文責: 乙丸孝之介(鹿児島大学)

参加者

鹿児島大学: 乙丸(世話役)、帆保、安藤、畠添、森脇、井尻、山下

山口大学: 谷口、角川、小野

日時: 2023 年 9 月 25 日(水) 14:20~15:20

ワークショップ内容

コロナ明けの教育(講義、実習)、診療等に関して現状を順次報告し意見交換を行う

議題

1. 両大学の教員配置について

馬、牛、鶏、豚等の各大学の現在の教員配置(産業動物臨床系)について確認を行った。

2. 講義、実習(実習場所、期間、内容等)について

鹿児島大学においては、牛の実習(診療)では、オーナーさんの前ではマスクは着用。学内での施設内での実習については任意ではあるがほとんどマスクをしていることを報告した。また、NOSAI 実習においては、昨年はコロナの PCR 検査を行い実習 1 週間前の体温の記録などをもって実習を行っていたが、本年度の実習ではそれらが無いことを報告した。馬の実習に関しては、マスク着用は任意であること。毎週、馬の健康診断に農場に行っていることを報告した。また、入院馬については、きちんと馬の扱いが実施できるのが教員しかいないために、学生に保定等を任せることが難しく治療等に苦慮していることが報告された。豚の実習に関しては、鹿児島県下における豚熱の発生により現段階では、学外実習は微妙な状況であることが報告された。鶏の実習に関しては、コロナ後、通常通りの実習となっていることが報告された。山口大学においては、牛の実習ではマスク着用は任意であることが報告された。馬の実習に関しては、担当の佐々木先生がご欠席のため、不明であると報告された。なお、牛および馬の学外実習(診療)において、コロナ前は 1 教員で学生 4~5 名の引率を行って実習を行い、コロナ下では、1 教員あたり学生 1~2 名の引率を行っていた。1 教員あたり学生 1~2 名の引率における学外実習(診療)の方が、学生は積極的に参加し、教育効果も高いと判断されるため、コロナ後もそのように対応していることが報告された。また、山口大学より車で 1 時間程度の場所に、新規に酪農場が開設され、農場と協定を結び実習(診療)等が新規に行えるようになったことが報告された。

豚の実習に関しては、学内においてはひね豚などを学内で取り扱うことにより実習を行っているが、学外については豚熱の影響などもあり、2022 年度以降の実施はなく、再開の目途がたっていないことから、今後の大きな課題であることが報告された。

3. 動物看護師、技能補佐員の診療補助および実習補助の体制について

鹿児島大学では、馬も牛も頻繁に入院、馬においては時に週末をまたぐ入院、牛においてはほとんどの例で週末をまたぐ入院があること。また、牛や馬のお世話は動物看護師、技能補佐員が補

助して行っていること。それらの動物看護師、技能補佐員はゲスト講師として、臨床実習の教育においても、動物の飼養管理法や保定法などのご教育に参加いただいていることが報告された。また、治療などの処置はポリクリ学生が中心であること。研究室所属の学生は治療にはほとんど関与していないことが報告された。一方、山口大学では、学内における馬や牛の検査および手術を含む処置を実施するが基本的に日帰りであること。入院があったとしても1晩程度の入院であることが報告された。このことは、入院動物のお世話をを行うのが実質的には、教員および任意の産業動物の各教員所属の学生であることから、長期の入院のお世話をするマンパワー不足によることが大きいとのことが報告された。なお、山口大学には、産業動物系の技能補佐員は2名いるが、道具の準備や事務作業等の裏方的なことが、基本的な業務であり動物のお世話や保定等の業務にはほとんど関わっていないことが報告された。

4, その他議題

畠添先生の方から、馬に関しては、5年生時において、ポリクリで教育するには基礎知識及び技術が乏しいことが指摘された。というのも馬の扱い方についても基本的に知識及び技術が乏しい学生に、扱い方を教え、さらには獣医学医療を教育することは実際に難しいと報告された。また、低学年のうちに、馬の扱い方についても基本的に知識及び技術について学ぶ機会を作れないかとの提案があった。さらに、帆保先生からは、学生教育における義務ではなく、任意の学生、希望の学生においては低学年から馬や牛を扱うことのできる機会を与えることが必要ではないかとの提案がされた。角川先生から、以前は低学年より動物を扱う実習があったが、近年少なくなっているとのご報告があった。また、谷口先生から、山口大学においては附属農場のポニー(馬)のお世話に関しては、1年生の時期より、学生は手分けして実施していることが報告された。いずれにしても、動物を使わない代替実習が進む現代の獣医学教育ではあるが、実際の臨床現場に取り組む教員としては、代替動物のみでは、学生は習熟しきれていないこと。具体的には、実際に臨床実習になり、代替動物でなく診療対象動物を扱うには、そもそも動物に慣れていない、扱い方がわからないなど、そのギャップの大きさを感じることもあり、その上で獣医療を実学として教育するには大変難しい状況があるという意見が出された。また、まずは、低学年のうちから、動物の扱い方などを、動物のお世話を通して習熟してもらうなどして、実際に動物を扱う上での基本的な知識及び技術を得る機会を増やしてもらいたいとの意見が出され、大きな動物である産業動物に関しては、学生が怪我なく実習が行える上でも、対象動物に対して、基本的な扱い方を週術する重要性が確認された。

教育ワークショップ(伴侶動物臨床)議事録

文責:高橋 雅(鹿児島大学)

参加者

山口大学: 谷、根本、中市、馬場、上林、水野、伊賀瀬

鹿児島大学: 有村、三浦、藤木、矢吹、大和、高橋(雅)、十川、高橋(香)、斎藤、蔵元、古澤、野口

日時: 2023 年 9 月 25 日 14:20-15:20 オンライン (zoom)

討論内容

事前にメールにより議題を集め、それらに対して時間内でディスカッションをおこなった。

1. 各大学で行っている講義(双方向でないもの)の、習熟度の到達度を共通化する必要、方法はないのか?

習熟度を一致させるための良案はでなかった。しかし、カリキュラムの変更に伴い双方向授業が減少していることに対して、担当教員を大学の垣根を超えてそれぞれの教員が得意な分野の授業を担当するように変更する案が提案された。賛成する意見もあったが、実現は難しいのではないかという意見もあった。まずはどの程度双方向ではない授業があるか確認することと、どの程度の教員が変更を希望しているか調査する必要があることが指摘された。試験だけでも共通にするなどの意見も提案されたが、試験の実施時期が異なると問題の漏洩等を考慮すると現実的には困難であると結論づけられた。

2. 各大学の夜間診療の状況の確認

コロナウイルス感染が5類に移行したことから、現時点での各大学の夜間診療体制の確認が行われた。鹿児島大学では昨年度からの変更点として、昨年度のこの教育ワークショップで提案されていた深夜の電話対応の外部委託を取り入れたこと、さらにそれを取り入れたタイミングから夜間診療を朝6時までの対応とすることになった点が挙げられていた。山口大学では、昨年度と大きな変更点はないとのことであった。また、実際の夜間診療件数、さらには教員の勤務体制、夜間診療当番の頻度に関しての情報も共有された。

(追記)山口大学の夜間診療はFD研修会の時点では夜は23時(24時かもしれません)までの対応で、それ以降は電話案内のみ、夜間受付終了後には教員は帰宅してよい。診察もあまり多くはない。当番の頻度は2週間に一度程度。鹿児島大学の夜間診療では、教員は病院に宿泊する。翌日も診療業務を行なっている。当番の頻度は山口大学と同様2週間に一度程度。診療は平均2、3件/日来院している。

3. VTの資格取得後の給与や仕事内容の変更に関して

鹿児島大学では、仕事内容も大きくは変更していない。給与も現時点では変更していないが、現在検討中である。山口大学では、(迅速に給与に反映する方法として)資格を得た看護師に対して手当をつけることとした。業務に関して変更はほとんどない。

4. (印象として)EAEVE 認証前後で学生の臨床力に変化はあったのか？

鹿児島大学からは、以前よりもひとつの分野において突出して優れた能力をもつ学生を排出できていないかもしれないが、伴侶、産業動物などすべての分野を含めた幅広い教育をできており全体の平均としての臨床力はあがっているという印象があると述べられた。山口大学においても、ほぼ同様の印象がある。

また、デイワシットによる評価は、スタンプ集めのようになってしまう、幅広い分野を学ぶきっかけになっていればよいのだが、スキルを身につけるというより、ノルマを達成することが目的となってしまう学生が存在している点が問題点であるという意見も寄せられた。

V. 令和5年度専任教員のFD参加率

部局名(共同獣医学部・共同獣医学研究科)

合計参加率		97.5 % (専任教員 40 名中 39 名 参加)
企画別 参加率	合同 FD 研修会	85.0 % (専任教員 40 名中 34 名 参加)
	授業評価アンケート	82.1 % (専任教員 39 名中 32 名 参加)
	授業参観	79.5 % (専任教員 39 名中 31 名 参加)
備考		
40 名のうち 1 名は令和 5 年 9 月 1 日付け採用職員		

VI. 共同獣医学部における特筆すべき取り組みや改善事例など

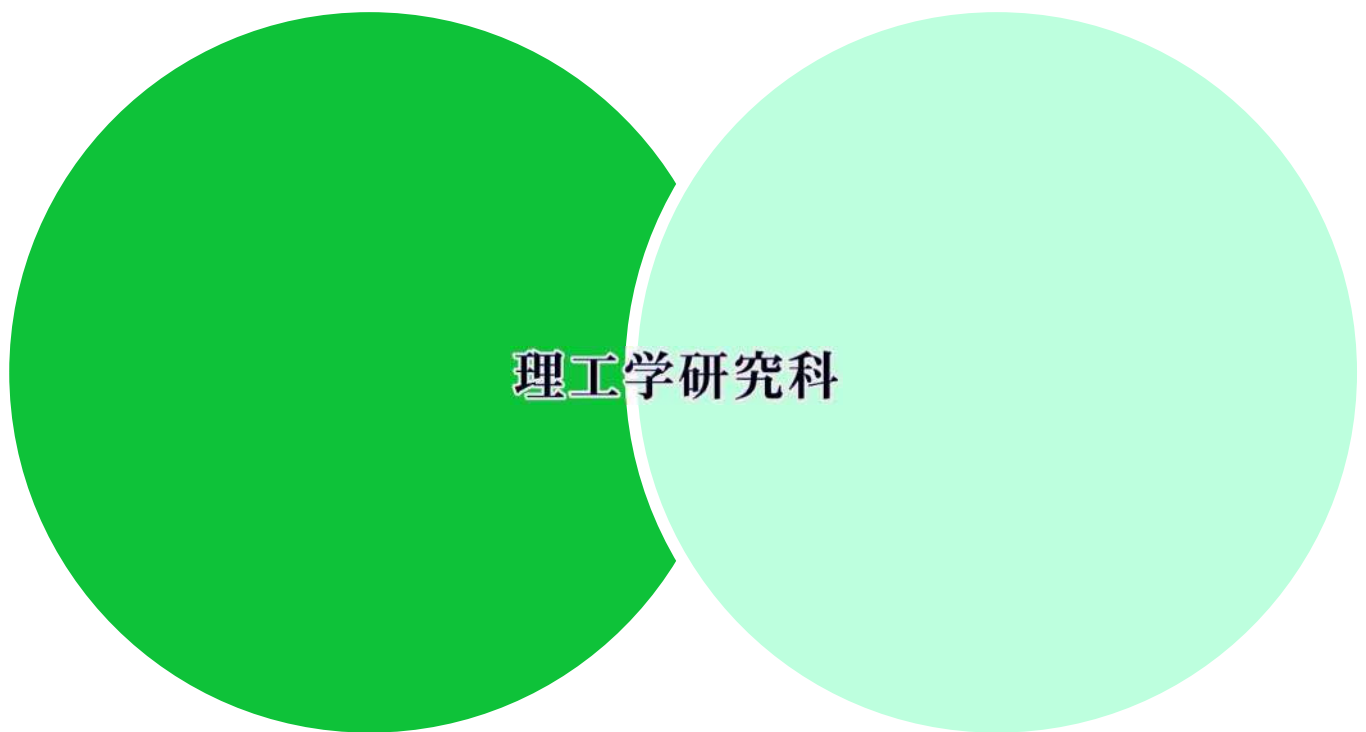
自己点検評価の分析

令和 3 年度までに参加型臨床実習において実施した授業アンケートを分析した結果、動物病院での実習に対する満足度が高いことが示されていた。さらに、卒業生のアンケートでは、より専門的な学習を希望する意見も認められていた【FD 企画の結果】。これを受けて学部で対応を検討し、欧州教育認証のために、教育カリキュラムが半期前倒しになった変更に併せて、最終学年の 6 年前期に新たに自由単位選択型の臨床実習(例、伴侶動物総合臨床アドバンス実習 A)を開講することとした。【組織全体での教育方法の改善】。その結果、さらに専門的な教育を希望する学生に対して、より実践的な教育を実施できるようになった。【改善によって得られた成果】

VII. 大学 IR コンソーシアム学生調査結果(令和4年度)の分析について

評価する点	本学部への第一希望の入学者は 79%と非常に高い。一昨年(65.4%)、昨年(84%)と継続的に高い数値を維持できている。昨年同様に、ただ獣医学部が全国的に少ないだけでなく、欧州の教育認証など他大学と違う特色を打ち出せていることもその背景としてあると考えている。
課題と考える点 (3点以上)	● “授業の進め方に学生の意見が取り入れられる”“授業で検討するテーマを学生が設定する”といった点において、他学部と比較しても学生の満足度が低い。 ● 昨年度の課題として“将来の展望に関して「見通しなし」”の割合が3年次になると増えていることを挙げていたが、今年度も同様の結果であった。 ● 大学への適応感が1年生と3年生で大きく異なる。
課題への 具体的な対応案	“授業の進め方へ学生の意見を取り入れる”ことに関しては、授業アンケートをもとに実施していることを伝え、依然として高くない学生の授業アンケートの回答率をあげることが必要である。“将来の展望の見通しが低いこと”に関しては、R5年度から授業のカリキュラムがこれまでより半年前倒しになったことにより、6年時には十分に将来の展望を考慮する時間が取れるようになり、対応できていると考える。
昨年度挙げた 改善・対応策 による成果	昨年度、“教員との話をする機会の満足度は低い”ことに対する改善案として、「獣医学研究基礎実習(2年次)」および「生物学実験(1年次)」など、これまで高学年で入室する研究室への体験入室のような内容を追加していた。その結果、教員と話す機会の満足度はわずかな上昇にとどまったが、大学教育への満足度は全体的に高水準の結果であった。ただし、こういった低学年で獣医師としての仕事が多岐にわたることを理解することで、獣医師として将来の選択肢が増え、その結果将来の展望の見通しが低くなるのかもしれない。

以前の結果や他の調査結果・データ等との比較を通じて明らかになった点や気付いた点	前年度3年生の本アンケートの回答状況(30%)より大幅に改善した(70%)。もともと学部 of 学生数が少なく、回答数が少なすぎると結果が大きく変動してしまうため、この数値を維持できるようにしたい。大学への適応感の結果が、1年生と比較して3年生で多くの項目で低下しているので、これが継続するのかコロナなどの影響なのか注視する必要がある。
--	---



令和5年度鹿児島大学大学院理工学研究科FD委員会活動報告

はじめに

理工学研究科のファカルティ・ディベロップメント委員会（以下、FD委員会）は、当研究科の教育目標である「今日の諸課題に対応できる倫理的判断力及び人間生活を取り巻く自然についての総合的な知識をもち、自然科学に関する学問の高度化と多様化に幅広く柔軟に対応できる、次世代を担う技術者、研究者、さらには高度専門職業人を養成する」ことを達成すべく、教育内容と方法の改善を図るために設置されている。令和5年度には（1）学生による授業アンケートとそれに基づいた各教員による授業改善計画書の提出、（2）FD講演会の実施、（3）他機関主催FD研修会参加、（4）理工学研究科構成員の活動等の自己点検、（5）学生の研究活動と教育成果の点検を実施したので、概要を報告する。

なお、計画の実施および本報告書作成に当たり、委員はもとより担当事務職員の方々の多大なご協力をいただいた。ここに深く感謝申し上げます。

令和5年度鹿児島大学大学院理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 宮本 旬子（全学FD委員会委員）

令和5年度鹿児島大学大学院理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員

委員長 宮本 旬子（全学FD委員会委員，理学部FD委員長，第1号・第3号委員）
委員 吉田 拓真（数理工学プログラム，第2号委員）
委員 秦 重史（物理・宇宙プログラム，第2号委員）
委員 神長 暁子（化学プログラム，第2号委員）
委員 池永 隆徳（生物学プログラム，第2号委員）
委員 北村 有迅（地球科学プログラム，第2号委員）
委員 中尾 光博（機械工学プログラム，第2号委員）
委員 渡邊 俊夫（電気電子工学プログラム，第2号委員）
委員 齋藤 倫範（海洋土木工学プログラム，第2号委員）
委員 二井 晋（化学工学プログラム，工学部FD委員長，第2号・第3号委員）
委員 高梨 啓和（化学生命工学プログラム，第2号委員）
委員 鹿嶋 雅之（情報・生体工学プログラム，第2号委員）
委員 小山 雄資（建築学プログラム，第2号委員）
委員 永松 巖（理工学研究科等事務部長，第4号委員）

第1章 令和5年度の鹿児島大学大学院理工学研究科のFD活動

1.1 鹿児島大学の中期計画・年次計画と理工学研究科のFD活動（宮本 句子）

理工学研究科のFD活動は、令和4～9年度の鹿児島大学の第4期中期目標のうち「I 教育研究の質の向上に関する事項」に関する中期計画である「I 教育研究の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置」の「2 教育に関する目標を達成するための措置」の実現に直接的・間接的に関わり、合理的かつ具体的に教育の質的向上を目指す。理工学研究科後期課程はもとより前期課程の大学院生は研究活動の担い手であり、中期計画の「3 研究に関する目標を達成するための措置」において謳われている国際水準の研究拠点形成、国際レベルの研究の実現、地域との連繋や地域の活性化、知的財産の創出や社会実装の実現などに不可欠である。中期計画達成のため、急速に変化する社会の影響を受けて変容していく大学院生の意識を的確に捉え、それに応じて教育の内容や方法の改善を続けることが求められている。

FD委員会の任務は「本研究科で実施するFDに関すること、本研究科で実施する教育課程および教育活動に関する自己点検・評価に関すること、それに基づく教育の改善および質的向上に関すること、本学FD委員会から付託された事項に関することなどを審議し実施することである」とされている。特に、教育活動に関する自己点検・評価の実施による教育改善はFD活動の中核である。例えば、学生による授業アンケートに基づいて、教員側と学生側の意識の相違点を把握し、講演会や研修会への参加により改善のヒントを得て、教育力を向上させることが推奨される。そして、学生の研究活動と教育成果の点検により改善の効果を検証する。

1.2 理工学研究科FD委員会（宮本 句子）

令和5年度理工学研究科FD委員会を7回（オンライン会議4回、メール会議3回）開催した。令和5年5月8日の第1回委員会（オンライン会議）では、前年度後期授業科目の成績評価分布点検結果、修了時アンケート調査について確認し、令和5年度のFD活動経費要求、活動分担及びFD報告書原稿作成分担について議論した。同年7月10日～18日の第2回委員会（メール会議）では、理工学研究科・理学部・工学部合同FD講演会の実施計画について報告した。同年9月11日～15日の第3回委員会（メール会議）では、後期の委員会日程を確認した。同年10月27日の第4回委員会（オンライン会議）では、授業アンケート実施科目、成績評価分布の確認方法について議論した。同年11月24日の第5回委員会（オンライン会議）では、前期授業科目の成績評価分布点検結果、修了時アンケートの設問を確認した。令和6年1月26日～2月1日の第6回委員会（メール会議）では全学FD委員会の内容を報告した。同年3月1日の第7回委員会（オンライン会議）では、次年度活動計画を審議した。なお、第6回以外においても全学のFD委員会の内容を報告した。

第2章 理工学研究科 FD 講演会とFD 活動

2.1 理工学研究科 FD 講演会(二井 晋)

大学院理工学研究科・理学部・工学部 合同 FD 講演会

10月18日(水) 13:00 から 14:15

プレゼンテーションルームと遠隔

「大学院課程における創造性教育が目指すものは何か？」

講師：名古屋大学名誉教授，未来社会想像機構・特任教授 栗本英和 氏

出席者：137 名

本講演の主題は，創造性教育のありかたを，学生の資質・能力の醸成の視点から考えることである。名古屋大学での大学院共通科目として，異なる専門の学生によるプロジェクト型体験講義を設計する上での考え方と実践が示された。このプロジェクト型講義の目的は，受講生によるリーダーの意識を，従来のステレオタイプである上意下達から変えることであり，リーダー個人の統率力や管理能力に頼ることなく，思考力を鍛え想像力を働



かせることで，目的を達成するように講義が設計されている。近年，大学および大学院教育における教育目標は，学生が知識・技能を身に着けることから，自ら持つ資質・能力を育む方向に転換している。プロジェクト型の講義はグループで行われるが，リーダーがグループ内から自然に現れることが理想的であり，議論を活性化するためには方策がある。統率力に頼らないリーダーシップとは，「伝える」のではなく「伝わる」ことを重視するものである。

グループワークが停滞したとき，活性化には，ファシリテーターと呼ばれる人物の動き，グループワークへの刺激を与えることが有効である。ファシリテーターは教員でも TA でも良く，ファシリテーターはグループに参入してアドバイスを与えたり，メンバーを組み替えたりする。刺激を与えるには適切なタイミングがあり，そのタイミングをはかる指標が，議論の活発度であることを実験から確かめた。また，新メンバーを追加することが活発度を高めるきっかけとなることも示された。

創造的なグループワークを行うために有効な手法は，共通の基盤をもった多様性のあるグループをつくること，日常思考から飛び出せる環境をつくること，個人で考案する機会をつくること，である。創造の原点は個であり，かたちにするのが集団の役割と心得る。

多様なメンバーから成るグループで、有効な議論をするには、言葉の定義を明確にして共有するとよい。また、議論においてリーダーが心掛けるルールは、結論厳禁、自由（心理的安全性）、質より量、結合拡張に心がけることである。

PDCA サイクルの誤解についても言及され、PDCA は、まず Plan があることが前提ととらえられているが、必ずしもそうではない。研究の PDCA サイクルとは、まず Do があり、つぎに Check して仮説を立て実践（Act）することではじめて次の Plan が立つ、つまり PDCA サイクルは目標達成の手段で、それを回すことが目的ではない、とのことである。

これからの学びは、知識を増やすことや教えを授かることから脱却し、学生自身が、自らが持つ資質と能力を自分で育む力を与えることである、という視点は新鮮であり、多様なメンバーからなるグループワークでのリーダーの在り方や、どのように創造性を生み出すか、について具体的な方策とともに示され、非常に有意義な講演であった。



2.2 海外実習報告(秦 重史, 齋田 倫範)

理工学研究科では、「グローバルに活躍できる理工系人材」を育成することを目標に、グローバル人材育成支援室を設置し、平成27年度から、大学院共通科目として「理工系国際コミュニケーション海外研修」、令和4年度から「STEMのための国際コミュニケーション海外研修」（いずれも英名は”Graduate Overseas Engineering and Science Studies for Innovation: GOES”）を開講し、その中で、海外での語学研修と、大学、企業などでのインターンシップ等を行っている。令和5年度は7名が参加した。その概要を以下に示した。

研修期間	研修先国・地域	参加人数	研修内容	地域貢献活動
2023/7/15-9/24	オーストラリア	M1: 5名 M2: 2名	西オーストラリア大学附属語学学校での英語研修に加え、西オーストラリア大学工学部の学生とのづくり体験（4回）、日本語専攻学生との交流（8回）、国際電波天文学研究センターの活動報告会に参加等。	学生文集の配布、肝付町の訪問等（今後の地域貢献活動のため）。
webサイト	https://globaljinzai.eng.kagoshima-u.ac.jp/			

2.3 他機関主催 FD 研修会参加報告

(1) 2023 ACSA/EAAE Teachers Conference 参加報告(ボウ・コーザー)

現在、建築における構造環境は気候変動の影響により多種多様な問題を抱えている。高等教育の観点から、次世代のために実践的な教育の発展を遂げることが求められている。この目的を果たすために、北米の Association of Collegiate Schools of Architecture (ACSA) と欧州の European Association for Architectural Education (EAAE) は 2 年ごとに合同建築教育研究会を開催している。この会議において鹿児島大学の建築学科の教員 2 名と共同研究先のフロリダ A&M 大学の建築教員 1 名が論文発表を行う機会を得た。発表の他にも本会議において、グローバルな立場からの高等構造環境教育の近況を知る機会を得た。

研究会名：2023 ACSA/EAAE Teachers Conference: Educating the Cosmopolitan Architect

開催日：令和 5 年 6 月 22 日～6 月 24 日

開催地：ハルパコンサートホールと会館、レイキャヴィーク・アイスランド

主催：Association of Collegiate Schools of Architecture (ACSA) ・European Association for Architectural Education (EAAE)

対象者：建築・構造環境教員・研究者

登録参加者：166 名（北米・127 名 2 国，欧州・30 名 15 国，その他・9 名 8 国）

研究テーマ：Dissident Intellectuals（建築とアクティビズム）発表 15 件／Caregivers of the World（健康と構造環境）発表 8 件／Ethical Professionals（倫理的プロフェッショナル）発表 17 件／Engaged Storytellers（物語での問題理解）発表 20 件／Co-Creative Partners（共創的パートナー）発表 26 件（鹿児島大学からの参加教員は 1 名で発表 1 件を行うとともに発表 27 件を聴講した。以下に基調講演をまとめた。）

基調講演（閉会）：Jenni Reuter, Aalto 大学「建築能力と社会的構造」

まとめ：環境問題に対して、頑丈な小規模建築はレジリエンスがある。Reuter 氏はアフリカの様々な国で、貧困女子の住宅を地域にある材料で安全かつ安心して建築した。将来の建築能力は貧困地域のために応用すべきである。

基調講演（閉会）：Anupama Kundoo, Kundoo 建築事務所「建築材料と持続可能的構造」

まとめ：伝統的構造方法は、長い歴史の中でノウハウが蓄積される。例えば、インドのレンガ職人は技術能力により生計を立てることができる。職人がつくるレンガは現代の建物に対して十分な強度は持たないが、建物がその地域で利用しやすい材料で造られると安価であることに加えて環境に優しい。建築家は地域の特性を考慮して建物を考えるべきである。単に図面だけではなく、職人の教育や、地域にある材料・人材の最適化を計画する方が望ましい。

聴講した研究発表を以下にまとめる。

- カリキュラムを実践して反映するためには、新しいスキル（例、ドローン、デジタル・リテラシーなど）を取り入れる方法が必要である。さらに、具現化されたエンジニアリングやデザイン・ビルド プロジェクトによって、学生が素材に直接触れることにより、それらの特性を深く理解できる。しかし、特に高等教育の初期段階では、このようなプロジェクトを通常のカリキュラムに組み込むことは難しい。課題は柔軟なカリキュラムを設計できるようにすることである。
- 大学と地域社会との協力による様々な共同プロジェクトが発表された。このようなプロジェクトは学生が新規開発や改修を計画する際に考慮すべき多様な要素を学べる重要な機会である。同様に、学部や学科間の連携によって、学生は幅広い視野と多様なスキルを身につけることができる。このような共同プロジェクトを支援するため、計画的なワークフローは重要なツールである。ワークフローは対面でもプログラミングのどちらを用いても管理できるが、対面、デジタルいずれの場合も重要なのはワークフロー計画を立てることである。
- 学生は、デザイン問題や解決可能問題についての理解を深めるために、自身の経験を語るとともに、他の人の経験談を聞く必要がある。学習やプロジェクトを行うことは大切だが、物語を作るによって内省するは学生にとって大切な向上の機会である。

第3章 学生による授業評価

3.1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

3.1.1 理学専攻の授業評価アンケートの結果報告(池永 隆徳)

平成30年度から令和5年度の授業評価アンケート結果を図3.1.1に示す。この6年間に於いて、11項目中10項目が4.0以上の評価であり、概ね学生の授業に対する満足度は高いと思われる。令和5年度の結果と、それ以前までの年度の評価を比較すると、ほとんどの項目で大きな変化はみられないが、「①出席」の評価が令和2年度から4年度までの評価に比べて令和5年度で下がっており、令和元年度と同程度となった。令和5年度ではそれまでの3年間に比べると遠隔授業の数が減り、令和元年度までと同様に対面授業が中心となったことが、出席数が低下した原因となっている可能性がある。評価の数値自体は低いわけではないが、今後の推移を観察していく必要がある。全体としては、これまで同様の授業に対しての取り組みを維持していけばよいと思われる。

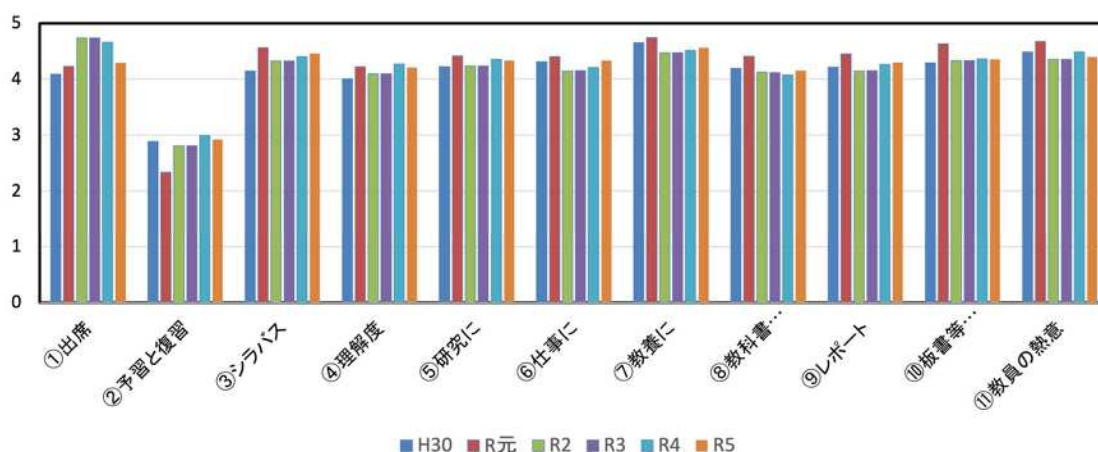


図 3.1.1 博士前期課程（理学専攻）の授業評価アンケート結果の推移

3.1.2 工学専攻の授業評価アンケートの結果報告(鹿嶋 雅之)

平成30年度から令和5年度までの工学系専攻の授業評価アンケート結果を比較したものを図3.1.2に示す。この6年間における授業アンケートでは、11項目中10項目が4.0以上の高い水準を維持している。令和5年度は「①出席」と「②予習と復習」で評価値の低下がみられたものの、他の項目ではほぼ現状維持か改善傾向がみられた。昨年度後期から授業計画改善書に、前年度の改善書に沿った改善内容とその成果を分析する項目が追加されたことが少なからず影響しているものと推測される。一方で、新型コロナウイルス感染症の5類への移行により、令和5年度の講義形態は対面授業の割合が高くなっていることが予想され、出席が昨年度に続き低下している。「②予習と復習」は、昨年度に続き低下し、この6年間でもっとも評点が低い結果となった。レポート課題の内容を検討し、学生が自

ら予習・復習を行うような改善が必要と思われる。

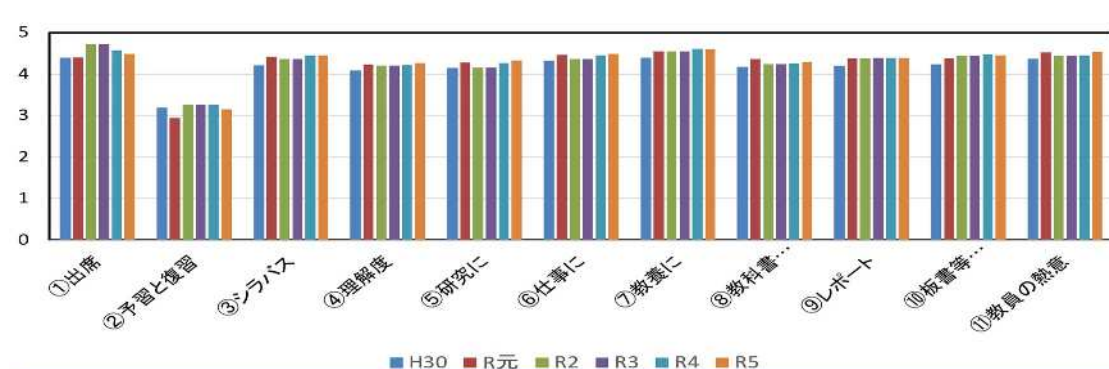


図 3.1.2 博士前期課程（工学専攻）の授業評価アンケート結果の推移

3.2 博士前期課程の各プログラムにおける授業評価アンケート分析結果

3.2.1 数理情報科学プログラムの授業評価アンケートの結果報告(吉田 拓真)

直近6年の授業評価アンケートの結果を図 3.2.1 に示す。まず、各講義の受講人数が少なく、授業アンケートの実施が十分に行われていないこと、また回収率も低いことは従来通りで改善が見られない。前年度からの数値の上下は多少見られるが、直ちに問題視すべきものは見当たらない。どの項目も概ね平均的であり、特徴的な推移は見られない。「①出席」については、令和2～4年度はオンデマンドで実施された授業もあるため、安易な考察は避けるべきである。他項目と比べると「②予習と復習」が低い。ただし、これは”数学”を学ぶプログラムの特性上、予習は難しく専ら復習のみの対応（勉強）になるのは理解できなくもなく、予習とセットになっている②のスコアを上げるのは困難かもしれない。③～⑪はおよそ4を基準に安定しており、高水準の授業を提供できていることがうかがえる。なお、グラフには現れていないがアンケートの実施率の低さは改善の余地がある。

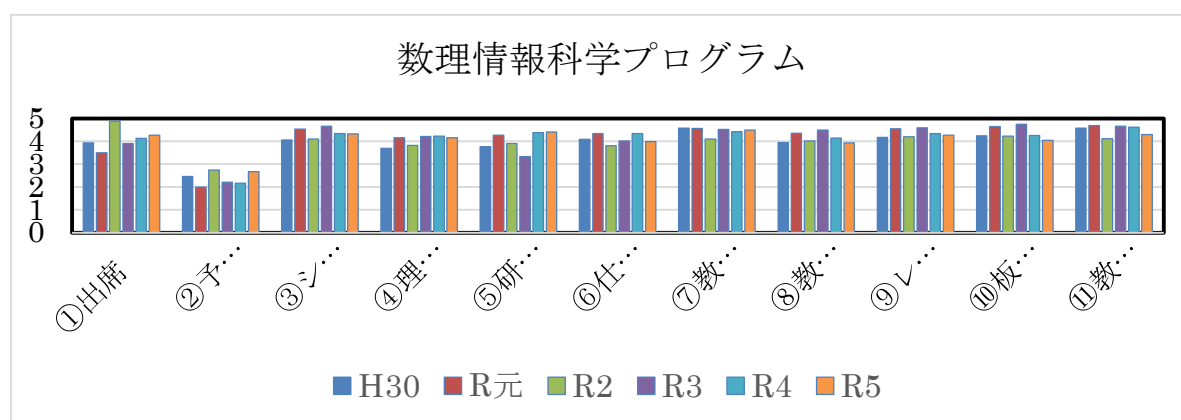


図 3.2.1 数理情報科学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.2 物理・宇宙プログラムの授業評価アンケートの結果報告(秦 重史)

平成30年度から令和5年度までの6年間のアンケート結果を図3.2.2に示す。令和5年度のアンケート回収率は前期28.5%，後期68.2%，通年46.6%であった。前年度から改善されたが（前年度：前期16.4%，後期33.3%，通年24.9%）未だ高い数値とは言い難く、各教員にアンケートの実施を促すなど、引き続き改善に努める必要がある。各評価項目の結果は年ごとに多少の上下はあるものの、受講生の数とアンケートの回収率を考慮すると、年間推移に優位な変化が生じていると結論づけることは難しいため、今年度の結果は例年と同程度であると判断する。また、その評価は項目②を除いて4程度の高いものであり、早急な改善を要する項目はないと判断する。一方で、6年間を通して評価が伸び悩んでいるという見方もあり、これを打開するためには、これまでの授業の運用に加えて更なる工夫を検討する必要があると考えられる。

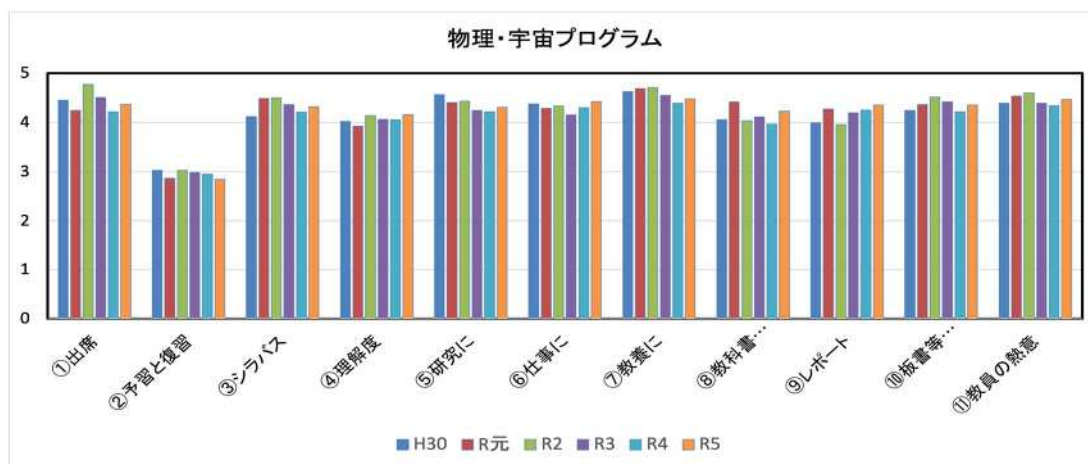


図 3.2.2 物理・宇宙プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.3 化学プログラムの授業評価アンケートの結果報告(神長 暁子)

平成30年度～令和5年度の授業評価アンケートの結果を図3.2.3に示す。ほとんどの項目で評価は4を上回ったが、「①出席」と「②予習と復習」のスコアが低かった。コロナ禍で遠隔授業が主であった令和元年～4年の間は上昇傾向が見られた「①出席」は、対面実施となった令和5年度にはコロナ禍前と同程度に下がってしまった。インターンシップと講義日程が重なってしまう場合もあり、オンデマンド配信も併用する方が、学生にとっては受講しやすいようである。一方で、先取り履修制度も加わって受講者の専攻分野やレベルがさらに多様化し、教員は授業レベルや予習課題の設定に苦慮しており、「②予習と復習」のスコアが伸びないようである。その中でも各教員が、教材をわかりやすく工夫したり、少人数であることを活かしてグループワークや討論等のアクティブラーニングの手法を取り入れたり、授業内容に基礎や応用例を組み込むことにより、「⑤研究に」、「⑥仕事に」、「⑦

教養に」のスコアを向上させることができた。今後も、継続的に推移を観察していきたい。

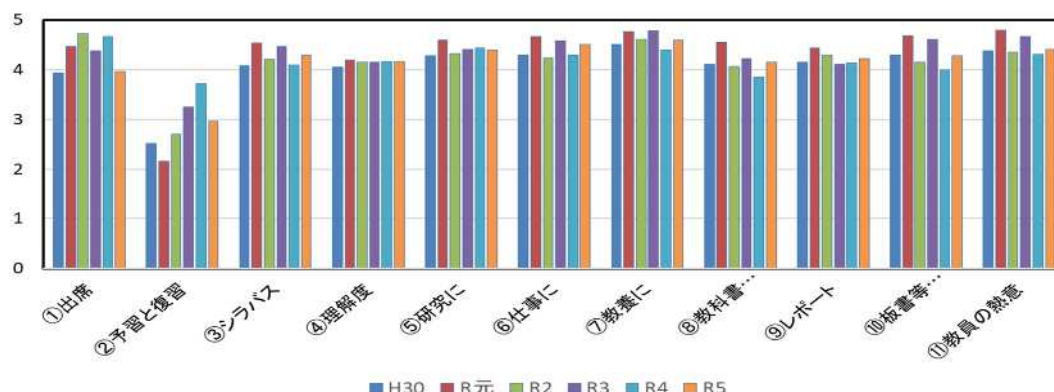


図 3. 2. 3 化学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3. 2. 4 生物学プログラムの授業評価アンケートの結果報告(池永 隆徳)

平成 30 年度～令和 5 年度のアンケート結果を図 3. 2. 4 に示す。平成 30 年度と令和元年の 2 年間は生命化学専攻の集計値が、改組後の令和 2 年度から 5 年度までの 4 年間は生物学プログラムとしての集計値が示されている。従って、ここでは令和 2 年度から 5 年度までのアンケート結果について分析する。令和 5 年度のアンケートにおいて、全 11 項目中 7 項目で 4.0 以上の評価となっており、昨年度と同じであった。昨年度までと比べ、「②予習と復習」と、「⑨レポート」の 2 つの項目で評価が上昇している。これは、各教員がレポート課題などを改善した結果であると考えられ、今後も引き続き同様の取組を維持していきたい。昨年度と比べ、「⑤研究に」と「⑪教員の熱意」の項目が、昨年度まで 4 以上であったものがそれぞれ 4 未満となった。どちらも令和元年度以降継続して低下しているが、特に「⑪教員の熱意」の項目の評価の低下が顕著であり、研究科や理学専攻全体の評価と比べても大分低くなっている。教員それぞれが、授業への取り組みについて見直す必要がある。

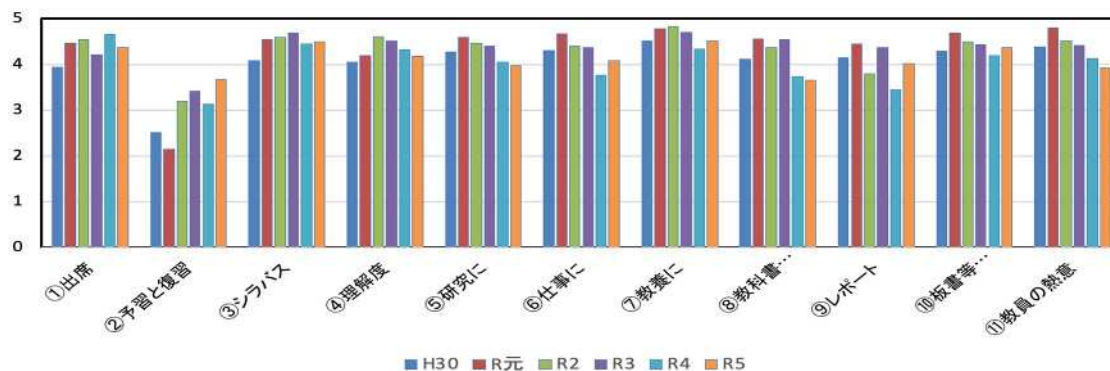


図 3. 2. 4 生物学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3. 2. 5 地球環境科学プログラムの授業評価アンケートの結果報告(北村 有迅)

平成 30 年度～令和 5 年度の 6 年分のアンケート結果を図 3. 2. 5 に示す。改組前の令和元年度までは地球環境科学専攻の集計値を用いている。

地球科学プログラムの令和 4 年度のアンケート項目全 11 項目中、②を除く 10 項目において、理学系の平均よりも高い結果となった。全ての項目で令和 4 年度に比べ微減していることは理学系全体で見られる傾向である。「① 出席」の変動の傾向と、他の項目の変動の傾向が似ている。アンケート回収率が低いため、1 人 1 人の出席状況が他の項目にも大きく影響している可能性も考えられる。

「②予習と復習」については、例年と変わりはないが、全体的に低いままである。プログラムの特性上、予習がしにくいこと、実習科目の復習がしにくいことも一因であると思われる。各科目でレポート課題等を検討したり、学生へ予習復習の指導をしたりするなどの改善策を講ずる必要がある。②を除く項目は非常に高く、授業の効果的な実施が行われていると考えられる。「⑪教員の熱意」は、4. 88 と項目中で最も高く、他プログラムと比較しても著しく高い。このことは学生からの評価としては特筆すべきことであると言える。

アンケート回収率が低いため、年度ごとの変動が大きく、分析には限界がある。今後も調査を継続し、長い期間での変動に着目して分析する必要があるだろう。

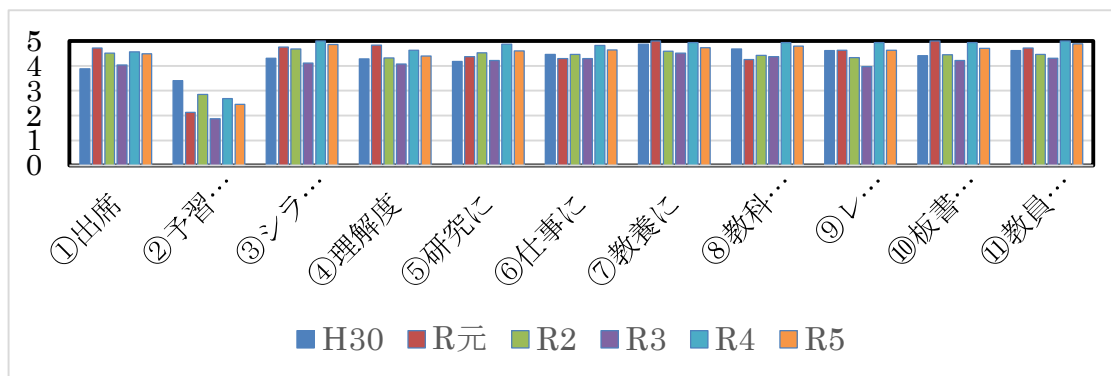


図 3. 2. 5 地球科学プログラムの授業評価アンケート結果の推移
(令和元年度までは地球環境科学専攻として集計)

3. 2. 6 機械工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告(中尾 光博)

図 3. 2. 6 に、機械工学プログラムの講義科目に対して実施された授業評価アンケートの結果を示す。図 3. 2. 6 の結果は、主なアンケート項目の評価点において、1 年間に開講された科目で平均した値の過去 6 年間における推移を示している。

図 3. 2. 6 から、評点は 1 項目を除き 4 以上で推移しており、学生の授業に対する評価は概ね良好である。項目「①出席」は例年よりもやや低いが、これはほとんどの授業が対面

で実施されるようになったためであると考えられる。唯一評点が 4 に満たない項目「②予習と復習」は、例年最も評点が低い。研究科全体の平均より高い値であるため大きな問題ではないが、改善策として、予習・復習に連動するような授業およびレポート課題の内容を検討する等、学生が予習・復習を行うことに繋がるようなさらなる取り組みが必要と思われる。今後も授業評価アンケートの実施と分析および活用により、教員と学生の授業に対する取り組みの改善を継続的に実施することが重要である。

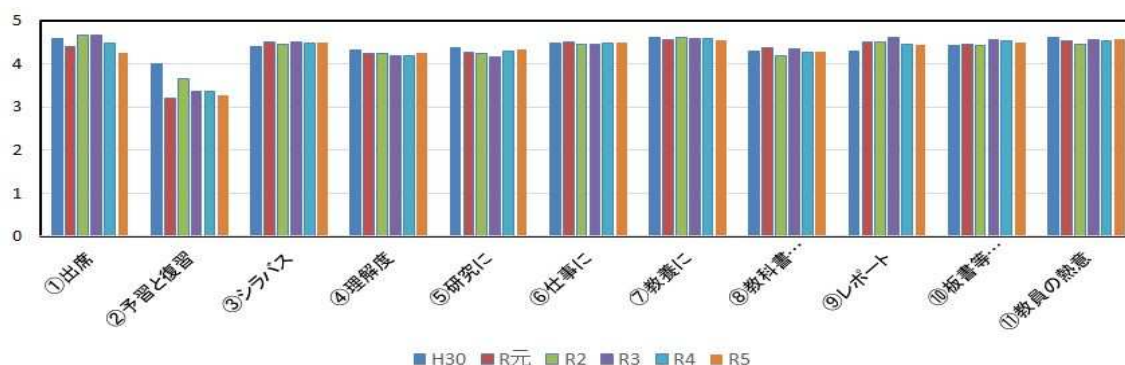


図 3.2.6 機械工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.7 電気電子工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告(渡邊 俊夫)

図 3.2.7 に、電気電子工学プログラムの過去 6 年分（平成 30 年度から令和 5 年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。①出席および②予習と復習の 2 項目は、昨年度とほぼ同じで、ここ数年の減少傾向に歯止めが掛かった。一方で、④理解度、⑥仕事に役立つ、⑦教養に役立つ、⑧教科書・教材、⑩板書等の明確さの 5 項目の評点には上昇が見られた。また、③シラバス、⑤研究に役立つ、⑨レポート、⑪教員の熱意の 4 項目は、ほぼ横ばいであるが、いずれも評点 4 以上を保っている。これらは教員の授業改善への尽力によるものであり、今後も継続的な取り組みが期待される。

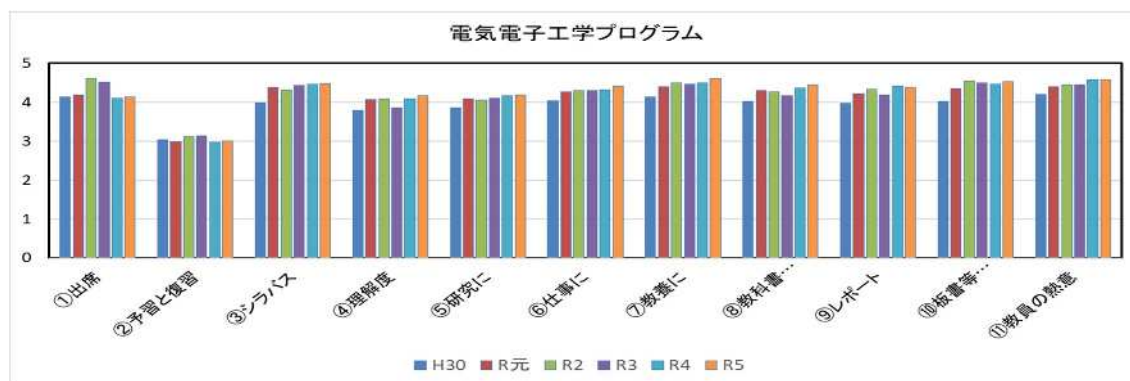


図 3.2.7 電気電子工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.8 海洋土木工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告(齋田 倫範)

海洋土木工学プログラムにおいて、平成30年度～令和5年度の6年間に実施した授業評価アンケート結果を図3.2.8に示す。この結果は、授業評価アンケートの主要項目に対する評価について、その年度のアンケート実施科目全体の平均評価である。この6年間にける評価は、「②予習と復習」を除いて4ポイント以上であり高い水準を維持している。大学院の講義に対して学生は所定の満足を得ているものと判断され、授業改善の継続的な効果が表れている結果であると考えられる。評価項目の中で最も評価が低い「②予習と復習」に関しては、令和元年度から評価が上昇傾向にあり、各教員がレポートを課すなどの改善を実施した結果と考える。大学院の講義は科目によって受講生が大きく異なり、分析しがたい面もあるため、授業評価アンケートに一喜一憂せず、継続した授業改善に努めたい。

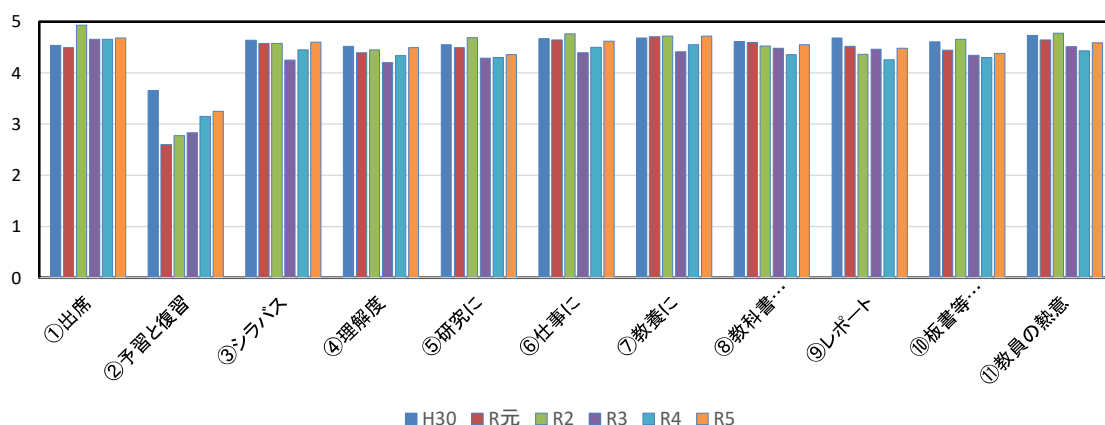


図 3.2.8 海洋土木工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.9 化学工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告(二井 晋)

化学工学プログラムの最近6年間(平成29～令和5年度)の授業アンケート結果を図3.2.9に示す。ただし、令和元年度までは化学生命・化学工学専攻での集計結果である。項目「②予習と復習」の評価を除き、ほとんどの項目で4を超えており総じて高い評価を得ている。「②予習と復習」はこの4年間で比較的高く、遠隔講義が正に作用したことも考えられるが、COVIDの影響がなくなった令和5年度も高いのは良好である。令和5年度の各項目を理工学研究科(工学系)の平均と比較すると多くの項目で上回っている。「④理解度」は0.2ポイント高いが「②予習と復習」は0.3ポイント低い。この点は今後の課題である。教員数の減少、財政の劣悪化や諸業務の肥大化が教育活動を侵食していることが危惧されるが、このような状況においても最大限の改善に努めたい。

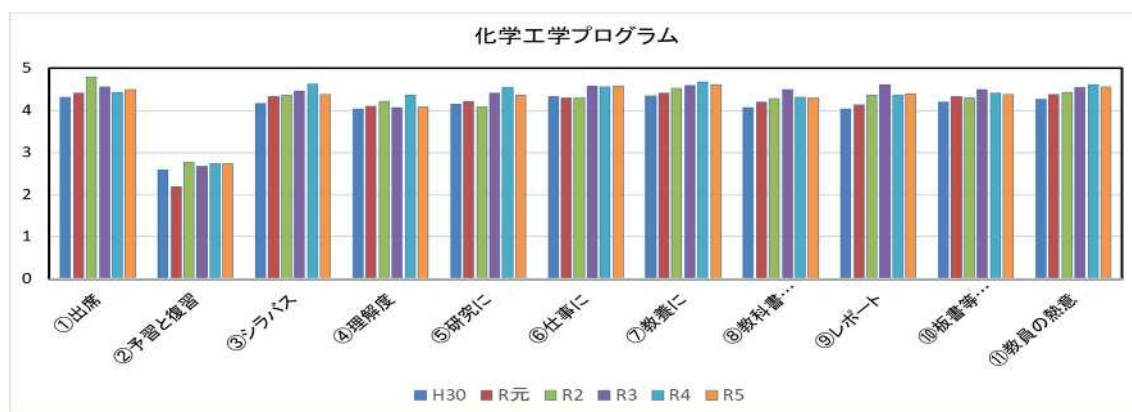


図 3.2.9 化学工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移
(令和元年度までは化学生命・化学工学専攻として集計)

3.2.10 化学生命工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告(高梨 啓和)

化学生命工学プログラムは、令和2年度の改組によって化学生命・化学工学専攻から工学専攻化学生命工学プログラムとなった。これに伴い授業評価アンケートについても化学生命工学プログラム独自で集計することになった。図3.2.10に最近6年間の（平成30～令和元年度に旧専攻で実施した授業アンケート結果と令和2～5年度に改組後のプログラムで実施したアンケート結果を併せた）アンケート結果を示す。項目②予習と復習が2.59-3.04と低い、その他の項目では4.01-4.72であり、総じて高い評価を得ている。改組前の令和元年度と改組後の令和5年度を比較すると、同程度で推移している。しかし、②予習と復習、⑤研究などの評価が昨年度よりも低下している。これは、長引いたコロナ禍の影響で、教員・学生の双方で一種の気の緩みが生じた結果と予想する。今後も、継続的なFD活動を実施し、改善することが重要である。すなわち、プログラム会議の場で授業評価アンケートの分析結果および考察をフィードバックすることが必要であろう。

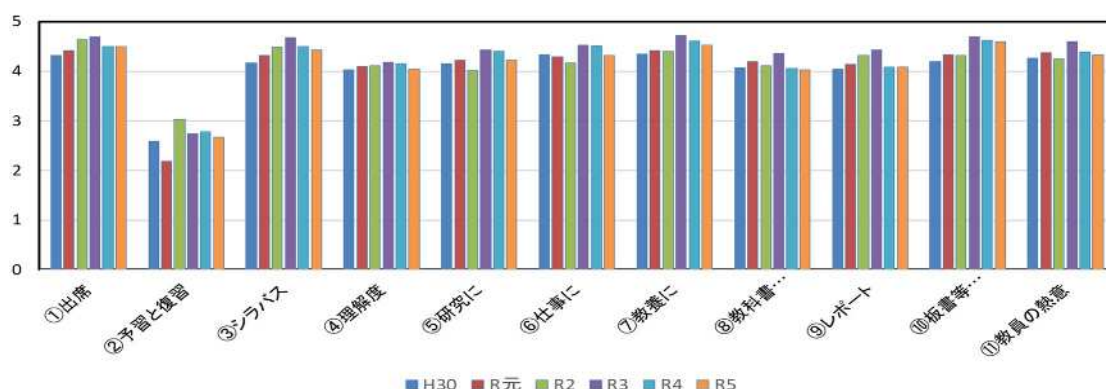


図 3.2.10 化学生命工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移
(令和元年度までは化学生命・化学工学専攻として集計)

3. 2. 11 情報生体工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告(鹿嶋 雅之)

平成 21 年度に改組が行われ、情報工学専攻と生体工学専攻生体電子工学講座が統合して情報生体システム工学専攻が立ち上がり 13 年が経過し、令和 2 年度から情報・生体工学プログラムが立ち上がった。情報生体システム工学専攻を含めた情報・生体プログラムの FD 授業評価アンケートについては、平成 21 年度から令和 5 年度分の 14 年間のデータが蓄積されている。ここではその 13 年間のうち直近の 6 年間の変化を見ることにする。今年度の FD 活動報告書では、情報生体システム工学専攻のデータと令和 2 年度の工学系専攻の平均値及び令和元年度の理工学研究科全専攻の平均値と比較することによって評価と論評を加えたい。比較対象となった 11 項目について情報生体システム工学専攻、情報・生体工学プログラムの集計結果を図 3.2.11 に示す。平成 30 年度～令和 5 年度の期間において、授業形態は対面授業、遠隔授業、対面・遠隔のハイブリッド型と変化してきた。また、新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行後、対面授業の割合もコロナ禍以前に戻りつつある。令和 5 年度では、「①出席」を除くすべての項目において評価値が上昇した。「①出席」の低下については、今年度は自由度の高い遠隔形式の授業が減少し、対面授業に戻ったためだと推測できる。また、昨年度一旦低下した「②予習と復習」については、今年度は大きく上昇したが、他の項目と比較すると低い水準である。これら 2 項目については、今後改善していく必要がある。

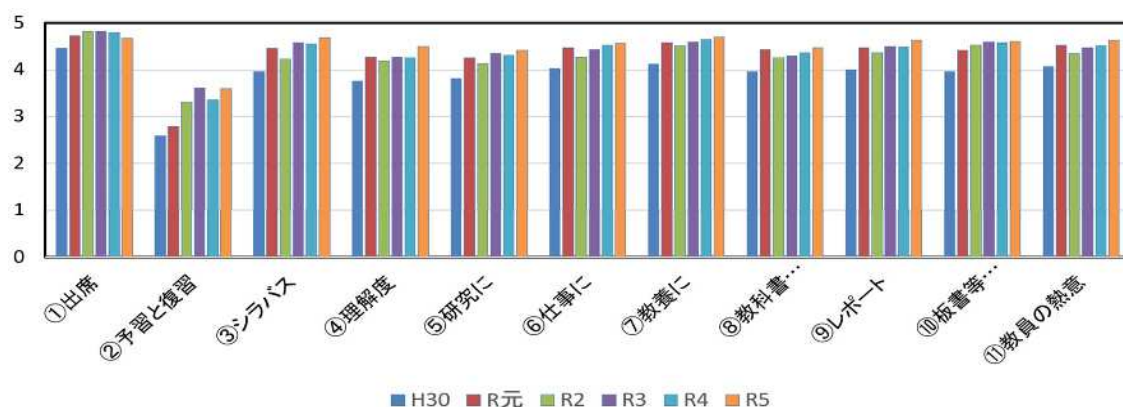


図 3.2.11 情報・生体工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3. 2. 12 建築学プログラムの授業評価アンケートの結果報告(小山 雄資)

平成 30 年度から令和 5 年度までの 6 年間の授業評価アンケートの項目別平均値を図 3.2.12 に示す。11 項目中 9 項目が 4.0 を上回る良好な結果だが、前年度を下回る項目が多い点には留意したい。なかでも「③シラバス」「⑧教科書・教材」「⑩板書等の明瞭さ」が前年度から大きく下回っている。隔年での開講科目があるため解釈は難しいが、シラバ

スや用いる教材については不断の見直しが必要である。一方、「②予習と復習」が今年度は上昇した。工学専攻全体の平均値と比較すると、「①出席」、「②予習と復習」、「④理解度」、「⑤研究に」の項目において建築学プログラムの値が相対的に高いことから、大学院の教育および研究として一定の効果を上げていると判断できる。ただし全体的な減少傾向が今後継続しないように、教員による改善の努力は必要である。

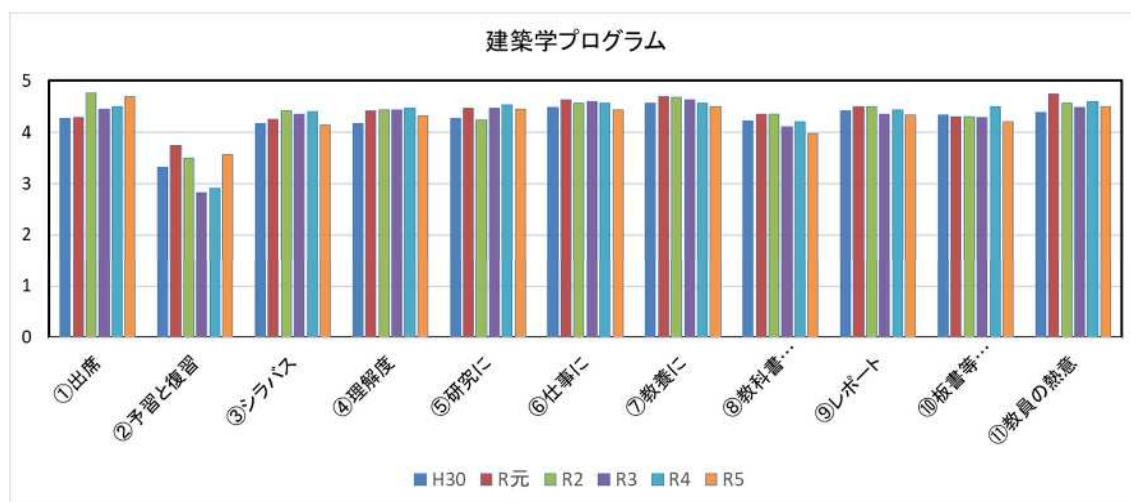


図 3. 2. 12 建築学プログラムの授業評価アンケートの結果の推移

3. 3 授業計画改善書の活用

(1) 数理情報科学プログラム

各教員が授業アンケート結果を基に授業計画改善書を作成した。今年度は受講者数が5名前後の講義が大半であることもあり、授業アンケートの実施率があまり高くなかった。授業計画改善書における昨年や一昨年の評点と比較することで評点の推移を確認することができ、継続的かつ効率的な授業改善につながっている。授業アンケートおよび授業計画改善書をプログラム内の他の教員に公開する仕組みはないが、プログラム会議ですべての科目も授業状況に関する情報交換を行っている。

(2) 物理・宇宙プログラム

令和5年度の授業計画改善書の提出は14件であった。「授業アンケートの結果」に記したように、プログラム全体として伸び悩みの傾向が強いが、多くの項目が最高評価に迫っていることを考慮すると、早急な授業改善は必要ないと判断できる。ただし、個々の科目で見ればその評価は必ずしも正しくない。このため、今後もプログラム内で授業改善書の作成を積極的に促し、各教員が担当授業を振り返る機会を作る予定である。

(3)化学プログラム

令和5年度は5件の授業計画改善書が提出された。各教員にとって自己点検のよい機会となっているが、受講人数が少なく、さらにアンケート回答率が低い場合は詳細な分析は難しく、実施形態の再考も必要ではないかと思われる。現在は、提出後は委員が保管しており、公開はしていないが、プログラム会議において成績分布の確認とともに各教員の取り組みを紹介する等、情報共有を行っていく予定である。

(4)生物学プログラム

令和5年度は生物学プログラムで8科目の授業が開講され、そのうち7科目の授業について授業計画改善書が提出された。非常に高い提出率であり、ほとんどの教員がそれぞれの授業の改善に向けて取り組んでいることを示す。提出された授業計画改善書はFD委員が確認して保管している。現在の時点では、提出された授業計画改善書を各教員が自由に確認できるような仕組みではないが、必要に応じてFD委員が提示することとしている。

(5)地球環境科学プログラム

令和5年度は地球科学プログラムでは7科目の授業の開講があり、そのうち、4名の担当教員から授業計画改善書が提出された。それぞれの授業担当教員がアンケート結果に基づき、授業計画改善書を作成によって、授業改善に向けての取り組みは継続的であり、さらに、成績分布の確認からも、評価方法の自己点検の役割を果たしている。

(6)機械工学プログラム

学部と同様に、プログラムのFD委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともにプログラム教育評価委員会が整理して分析を行っている。プログラム教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「プログラム教育評価委員会報告書」としてまとめている。この報告書は電子ファイルとして保管されており、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

(7)電気電子工学プログラム

授業計画改善書は、学部と同様に、各科目の授業評価アンケート結果（評点とそのレーダーチャート、および自由記述）と共にプログラム事務室にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。プログラムFD委員会での検討をはじめ、授業改善に取り組むための資料として活用されている。

(8)海洋土木工学プログラム

各教員は、シラバスに記載した評価基準との整合性を自己評価した上で、FD 委員が所属するプログラム教育システム評価委員会に授業計画改善書を提出している。提出された評価資料に基づき、プログラム教育システム評価委員会では成績評価分布や受講生の合格率などの分析を行い、その結果をプログラム会議で報告している。プログラム教育システム評価委員会では成績評価の偏りなどに問題点が発見された場合には、担当教員に成績評価法の詳細な説明を求め、プログラム会議において成績評価法に問題が無いかを審議している。このように、授業計画改善書を活用した教育の点検および改善を継続的に実施している。

(9)化学工学プログラム

各教員は授業計画改善書の作成により授業内容や進め方および成績評価を確認するとともに、改善への取り組みを継続的に行ってきた。FD 委員は、各教員より提出された授業計画改善書を確認して保管している。不備がある場合は、FD 委員が差し戻しを行い、指摘して再提出してもらっている。それでも問題が解決されない場合にはプログラム長と協議して対応を検討する。また、令和2年度後期から授業計画改善書に成績評価についての記載がなされ、この結果を基に成績評価がシラバスに示された基準に従って行われたことをプログラム会議で確認した。

(10)化学生命工学プログラム

各教員は、授業評価アンケートの結果を受け取り、授業内容や進め方、評価方法に問題がなかったかなどを検証して授業計画改善書を作成し、次年度以降の授業改善に取り組むことを継続的に実施している。FD 委員は、各教員より提出された授業計画改善書を確認・保管している。また、授業計画改善書を基にして、単位認定に極端な偏りがないかの状況分析を行っており、受験生全体に占める A 評価の受講生の割合が 90%以上の科目、受験生全体に占める A または B 評価の受講生の割合が 10%未満の科目、受験生全体に占める F 評価の受講生の割合が 40%以上の科目が認められた場合は、担当教員に事情を確認することになっている。本年度は、該当する科目が 1 科目確認されたので当該科目の担当教員に事情をヒヤリング調査したところ、例年と同じ内容を丁寧に指導したが、近年の学生の学力低下に起因すると考えられる理解不足が顕著に表れたと自己評価していた。学生の学力の現状を踏まえ、指導内容をより適切な内容に見直すとのことであっ

た．同科目の次年度の推移を確認することがプログラム会議で了承された．また，授業の進め方や評価法について問題点が発見された場合には，プログラム長を中心としたプログラム検討委員会にて対応を検討することになっている．

(11)情報生体工学プログラム

情報生体システム工学専攻を含めた情報・生体工学プログラムでは平成 22 年度より，授業計画改善書を学科事務室に保管し，全ての教員が閲覧可能となるように管理している．各教員による授業改善への取組み及び結果を教員全員で共有することで，情報・生体工学プログラム全体の教育内容への継続的な改善が試みられている．

(12)建築学プログラム

授業改善計画書に関しては，全科目の評点をプログラム内で確認して問題点を共有することになっている．建築学プログラムでは複数教員で担当する科目も多いため，それらの科目では，授業アンケートの結果を複数教員で確認し，また，定期的に授業方針等の打合せを行い，検討した結果を授業改善に反映させている．

第4章 GPA制度の現状と学習成果

4.1 工学専攻の GPA 制度の現状と学習成果報告(高梨 啓和)

工学専攻の M2 学生の令和 3～5 年度までの 3 年間の累積 GPA の分布の推移と、総修得単位数の分布の推移を図 4.1 に示す。累積 GPA3.4 以上の学生の割合については、令和 5 年度は前年度と同様の傾向が続いていた。一方、累積 GPA3.2～3.4 および累積 GPA～3.0 の学生の割合については、前年度と比較して変化しているように見える。これらの変化の程度は、令和 3 年度（47.2%）と令和 4 年度以降（平均で 25.0%）の累積 GPA3.8～4.0 の学生の割合の変化の程度と比較すると小さいことがわかる。累積 GPA3.6～4.0 の成績上位者の割合が減少した時期（令和 4 年度）と、成績分布の評価が本格的に機能し始めた時期（令和 4 年度）は符合する。新型コロナウイルス感染症の影響については、5 類感染症に移行したのが令和 5 年 5 月 8 日であり、令和 5 年度の移行後の期間が占める割合が大きい一方で、令和 4 年度との成績分布に大きな差は認められない。

総修得単位数に関しては、修了要件の 30 単位の割合が増加しており、必要最低限の単位だけを修得する学生が増加しているようである。30 単位未満の学生については、令和 3 年度から継続して増加していることから、令和 6 年度の状況を含めたより詳細な分析が必要である。

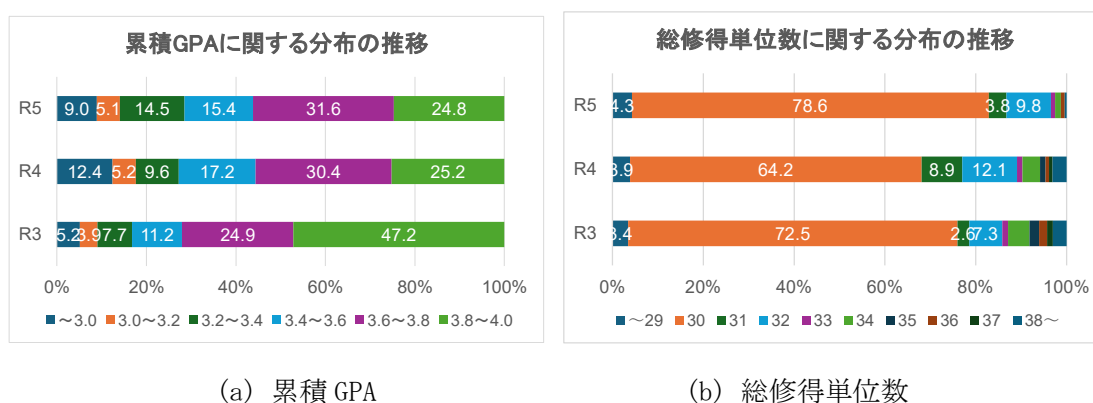
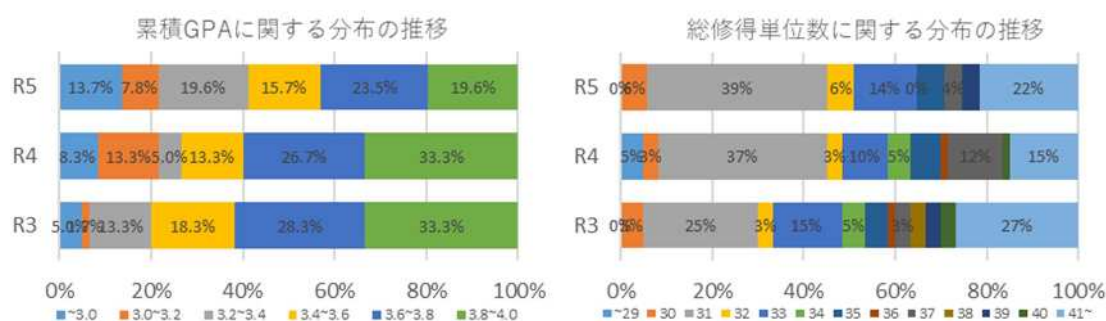


図 4.1 令和 3～5 年度の工学専攻 M2 学生の累積 GPA と総修得単位数の推移

4.2 理学専攻の GPA 制度の現状と学習成果報告(神長 暁子)

理学専攻の M2 学生の令和 3～5 年度までの 3 年間の累積 GPA の分布の推移と、総修得単位数の推移を図 4.2 に示す。GPA については、令和 3～4 年は 3.8 以上の割合が 30%を上回っていたのに対し、令和 5 年度は 20%を下回った。一方で、3.2 以下の割合が約 20%から 40%まで増加した。総修得単位数については、修了要件である 30 単位と 31 単位の合計が 45%

で最も多く、全体に必要最低限の単位だけを修得する学生が増加しているようである。この傾向の原因として、コロナ禍後に研究室活動の制限が解除され、研究活動により多くの時間を割くようになり、授業に関わる勉強時間が十分に取れなくなったためではないかと考えられる。また、遠隔やオンデマンド配信から対面形式への変化に、学生が対応しきれなかった可能性もある。教員には、成績評価の際に分布が偏ることがないように相互確認を継続して依頼しているため、GPA の分布には教員の成績分布に対する意識向上も反映されていると思われる。学生、教員とも置かれている環境が変化しているため、因果関係を明確にすることは困難であるが、大学院生の修了時アンケートの回答とも照らし合わせつつ、今後の動向を注視していきたい。



(a) 累積 GPA

(b) 総修得単位数

図 4.2 令和 3～5 年度の理学専攻 M2 学生の累積 GPA と総修得単位数の推移

第5章 学生の研究活動と教育成果(吉田 拓真, 中尾 光博)

FD 活動の目的の一つに、大学院生の研究発表支援がある。平成 29 年度から令和 4 年度までの研究発表件数を表 5.1 に示す。ここ数年はコロナ禍の影響を受け、口頭発表、論文共に件数が減少したが、令和 5 年度は口頭発表件数が若干増加し、査読付き論文数が大きく増加した。これは、コロナの規制が令和 5 年 5 月に完全に撤廃されたことにより、大学院生が学会へ参加しやすくなったためであると思われる。また、コロナの規制緩和は令和 4 年度から徐々に始まり、このころには特段の不自由なく研究生活が行われたことだろう。このときの活動成果が論文数として令和 5 年度分にカウントされたものと思われる。次年度はさらなる論文の増加が期待できる。続いて、平成 29 年度から令和 5 年度までの各年度の在籍者数を表 5.2 に、令和 5 年度の学会等での受賞実績を表 5.3 に示す。令和 5 年度の受賞件数は 48 件であり、令和 3 年度の 37 件、令和 4 年度の 26 件よりも上回っている。次年度もこの勢いを継続させたい。

表 5.1 大学院生の研究成果の発表数

年度	分類		機械	電気	海洋	化生・ 化工	化工	化生	情報	建築	数理	物理	生命	地環	化学	生物	地球	合計
平成 29 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	11	15	10	66	—	—	12	0	0	7	10	3	—	—	—	134
		国際会議以外	60	67	19	138	—	—	35	37	6	20	54	8	—	—	—	444
	論文	査読あり	4	9	12	25	—	—	16	4	0	9	11	1	—	—	—	91
		査読なし	3	2	0	2	—	—	18	3	0	0	1	2	—	—	—	31
平成 30 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	20	16	4	17	—	—	5	6	0	15	15	0	—	—	—	158
		国際会議以外	47	81	8	88	—	—	30	35	14	19	38	12	—	—	—	452
	論文	査読あり	7	13	11	31	—	—	5	2	0	10	9	0	—	—	—	88
		査読なし	0	1	17	2	—	—	7	0	0	1	0	0	—	—	—	28
令和 元 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	11	18	8	0	—	—	7	79	0	18	8	0	—	—	—	149
		国際会議以外	43	73	13	53	—	—	18	135	4	34	19	8	—	—	—	400
	論文	査読あり	7	8	8	4	—	—	14	26	0	13	14	3	—	—	—	97
		査読なし	0	0	8	9	—	—	9	2	0	0	1	11	—	—	—	40
令和 2 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	1	11	1	—	0	1	6	3	0	5	—	—	0	0	0	28
		国際会議以外	41	67	33	—	25	71	29	36	4	48	—	—	7	4	1	334
	論文	査読あり	14	17	12	—	3	15	11	4	0	13	—	—	6	3	1	65
		査読なし	2	2	0	—	0	0	5	1	0	2	—	—	0	0	0	31
令和 3 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	1	11	0	—	1	14	4	5	1	7	—	—	0	0	0	44
		国際会議以外	41	67	33	—	25	71	29	36	4	48	—	—	7	4	1	366
	論文	査読あり	14	17	12	—	3	15	11	4	0	13	—	—	6	3	1	99
		査読なし	2	2	0	—	0	0	5	1	0	2	—	—	0	0	0	12
令和 4 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	3	14	2	—	3	17	3	2	0	23	—	—	2	1	0	70
		国際会議以外	51	64	29	—	36	58	29	40	0	35	—	—	9	5	0	356
	論文	査読あり	1	10	14	—	1	12	1	1	0	11	—	—	4	0	0	55
		査読なし	0	4	10	—	0	0	10	0	0	0	—	—	0	0	0	24
令和 5 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	4	5	10	—	3	27	4	10	1	11	—	—	3	0	0	78
		国際会議以外	39	67	34	—	43	67	23	38	5	19	—	—	18	20	9	382
	論文	査読あり	1	8	13	—	2	8	3	9	1	3	—	—	6	3	4	61
		査読なし	0	7	0	—	0	0	16	2	0	0	—	—	0	0	2	27

※令和 2 年度の化学生命・化学工学専攻、生命化学専攻及び地球環境科学専攻の M2 については、それぞれのコースの学生はそれぞれのプログラムの学生に加えた。

表 5.2 在籍者数（博士前期課程）

専攻名	機械	電気	海洋	化生・ 化工	化工	化生	情報	建築	数理	物理	生命	地環	化学	生物	地球	合計
平成29年度	112	85	27	97	—	—	84	62	19	32	35	23	—	—	—	576
平成30年度	105	93	24	101	—	—	88	61	20	33	43	26	—	—	—	594
令和元年度	96	108	22	98	—	—	85	54	22	34	47	16	—	—	—	582
令和2年度	108	93	26	48	17	26	83	68	27	32	17	4	17	9	4	579
令和3年度	102	96	32	—	36	55	89	73	27	38	—	—	29	19	8	604
令和4年度	103	93	36	—	36	64	88	66	13	34	—	—	29	20	11	593
令和5年度	103	92	36	—	36	64	88	64	13	34	—	—	29	20	11	590

第6章 博士前期・後期課程修了予定者アンケートの分析結果報告 (宮本 句子・二井 晋)

博士前期・博士後期修了予定者アンケートでは、教育プログラムについて5段階で評価してもらい、評価理由として「授業内容、研究環境、教員の指導・熱意、施設・設備、その他」から複数回答を求めた。また、学習に一生懸命取り組んだか、研究活動が有意義であったか評価してもらい、有意義だったものとして「講義、演習（ゼミナール）、実験・実習（インターンシップ・海外研究を含む）、その他」から、入学時と比較して特に身についた能力として「多面的・俯瞰的思考力や倫理的判断力、情報収集・分析力や課題発見力、専門学修力、創造的発想力や課題解決力、コミュニケーション力」からそれぞれ複数回答を求めた。その結果、前期課程・後期課程とも、大多数が学習に一生懸命に取り組み、研究活動は有意義で、教育プログラムは概ね好評価だったが、研究施設や設備、コミュニケーション力の向上に不満足感があることが示唆された。具体的には次の通りである。

令和4年度前期課程修了生より201件の回答があった。教育プログラムは「とても良かった46%、ある程度良かった39%、普通13%、あまり良くなかった1%、良くなかった1%」となり、理由としては「研究環境、教員の指導や熱意、授業内容、研究施設・設備」の順に回答が多かった。学習への取組については「とても一生懸命だった41%、ある程度一生懸命だった43%、普通13%、あまり一生懸命でなかった1%、まったく一生懸命でなかった0.5%」、研究活動については「非常に有意義だった50%、有意義だった35%、普通14%、あまり有意義ではなかった0.5%、有意義ではなかった0%」となり、有意義だったものとしては「講義28%、演習32%、実験・実習38%、その他2%」となった。特に身についた能力としては「情報収集・分析力や課題発見力、多面的・俯瞰的思考力や倫理的判断力、専門学修力、創造的発想力や課題解決力、コミュニケーション力」の順に回答が多かった。

令和4年度後期課程修了生より4件の回答があった。教育プログラムは「とても良かった50%、ある程度良かった25%、普通25%、あまり良くなかった0%、良くなかった0%」となり、理由としては「研究環境、教員の指導や熱意、授業内容、研究施設・設備」の順に回答が多かった。学習への取組については「とても一生懸命だった50%、ある程度一生懸命だった50%、普通0%、あまり一生懸命でなかった0%、まったく一生懸命でなかった0%」、研究活動は「非常に有意義だった75%、有意義だった25%、普通0%、あまり有意義ではなかった0%、有意義ではなかった0%」となり、演習、実験・実習が有意義だったようだ。特に身についた能力は「多面的・俯瞰的思考力や倫理的判断力3件、情報収集・分析力や課題発見力2件、創造的発想力や課題解決力2件、専門的学修力1件、コミュニケーション力1件」となった。

第7章 特筆すべき取組や改善事例（宮本 旬子）

各教員が作成する授業計画改善書に該当科目の成績評価分布を記載することとし、厳格かつ客観的に成績評価できているか点検した。各プログラムにおいて、FD 委員が授業計画改善書をまとめ、成績評価分布一覧表に基づいて点検を実施した。点検結果を理工学研究科 FD 委員会にて確認し、教授会で報告した。

「授業の内容および方法の改善を図るための FD の組織的な実施とその成果の把握」の項目についての改善策として、令和 4 年度に授業計画改善書の様式に「前年度の授業計画改善書に沿って実施した改善内容と成果」や「前年度の改善書に沿った授業実施に対する自己評価」の記入欄を追加した。これらは「第 3 章 学生による授業評価」の報告をまとめるにあたり参考情報として活用できるようになった。また、「修了時学生からの意見聴取の結果による学生の学習成果に対する認識の把握」に関する改善策として令和 4 年度修了予定者からアンケート調査を実施し、令和 5 年度に分析を開始した。詳細は「第 6 章 博士前期・後期課程修了予定者アンケートの分析結果報告」を参照いただきたい。

第8章 今後の理工学研究科FD活動への期待（宮本 句子）

令和5年度に理工学研究科で実施されたFD企画のいずれかに参加した教員は154名中141名で、91.6%となり、前年度より高くなった。内訳は、FD講演会参加数124名（80.5%）、前期授業評価アンケート参加者67名（43.5%）、後期授業評価アンケート参加者58名（37.7%）、他機関主催FD研修会参加者1名（0.5%）である。また、パンデミック対策として利用が拡大した遠隔授業については、その長所を生かす形で令和5年度も部分的に行われた。今後もFDの研修等を通して新しい教育技術を取り入れ、適切に活用していくことにより、教育サービスのさらなる向上が見込まれる。

理工学研究科では、改組に伴って令和2年度以降の入学者に対して多数の科目を新設し、知の探求科目群・知の探索科目群・実践力養成科目群・大学院横断科目群・語学関連科目群の5群に整理した。改組の完成年度を経て、理学専攻・工学専攻の各プログラムに新カリキュラムが定着したが、さらに時代の変化に即応するため、入試や教育システムの改革が進められつつある。今後、より効率的かつ効果的なFD活動により、理工学研究科の教育がますます充実していくことを期待する。

令和5年度第1回理工学研究科FD委員会（オンライン会議）議事要旨

日 時：令和5年5月8日(月) 15:33～16:15

場 所：Z o o m（オンライン）

委 員：1号委員：宮本(委員長)

2号委員：中尾、渡邊、齋田、二井、高梨、鹿嶋、小山、
吉田、秦、神長、池永、北村

3号委員：二井（再掲）、宮本（再掲）

4号委員：永松

陪 席：黒岩学務課長、久田総務係員、濱崎総務係員

議事に先立ち、令和5年3月9日開催の令和4年度第5回理工学研究科FD委員会の議事要旨が確認された。

議題

1 プログラムにおける成績評価分布の確認について

委員長から、議題1資料に基づき、プログラムにおける成績評価分布の確認内容について諮られ、審議の結果、承認された。

2 令和5年度理工学研究科FD活動経費の要求について

委員長から議題2資料に基づき、令和5年度FD経費予算要求について、委員長から説明があった後、令和5年度理工学研究科FD経費の予算要求について諮られ、審議の結果、承認された。

なお、今年度の要求額に関しては昨年度と同じであるとの説明がなされた。

3 委員の活動分担及びFD報告書原稿作成分担について

委員長から、令和5年度FD活動分担及びFD報告書原稿作成分担について、議題3資料に基づいて諮られ、承認された。

なお、今年度新たに追加された博士前期・後期課程修了予定者アンケートの分析結果報告に関しては、理工学研究科FD委員長と工学部FD委員長との共同執筆の形式で行うとの説明がなされた。

また、事務担当者から「活動②他大学主催のFD委員会参加及び調査」の内容に関して、修正の依頼があった。

※（正）参加者がいない場合は、今年度は理学系委員による参加

（誤）参加者がいない場合は、今年度は工学系委員による参加

4 卒業生・修了生調査の実施について

委員長から、卒業生・修了生の実施について、実施方法、対象者、スケジュール

ル等についての確認が行われた。

また、部局独自のアンケート項目についての検討が行われたが、審議の結果、全学共通の様式でアンケートを実施し、部局独自のアンケート項目は設けないことで承認された。

5 その他

今後の理工学研究科のFD委員会の開催日に関して、委員長から日程調整の方法について審議が諮られ、教授会や教務会の開催を考慮し、第一週の木曜日～第二週の火曜日の時間帯（〇時限）に開催予定日時を事前に設定することで合意が得られた。ただし、開催しない場合やメール会議とする場合は、全学委員会終了後に通知するとの旨が伝えられた。

また、委員長から、事務担当者より、日程調整のための空きコマのアンケートを後日行う旨が伝えられた。

報告事項

1 博士前期・後期課程修了予定者アンケートの分析結果報告

委員長から報告事項1資料に基づき、令和4年度に博士前期・後期課程の修了予定者を対象としたアンケート結果に関する報告があった。

委員長からは、「大学院専門教育を通して、特に身についたと思うもの」への回答において、コミュニケーション能力を選択した学生が少ないことへの言及が行われた。

2 令和5年度第1回（全学）FD委員会報告について

委員長から報告事項2資料に基づき、4月26日開催の令和5年度第1回ファカルティ・ディベロップメント委員会における議事の報告があった。

委員長からは、令和4年度の専任教員のFD参加率についての確認と併せて、専任教員のFD参加率75%以上であることが全学で必須とされているとの説明がなされた。

ベストティーチャー賞に関しては、5月～6月に全学で審査、7月～8月に授賞式があるとの説明があった。

卒業終了予定者アンケートに関しては、卒業時の能力として、「他人と協力して物事を遂行する」が高い傾向にあり、「外国語の運用能力」や「リーダーシップ」が低い傾向にあったという説明がなされた。

3 その他

なし

令和５年度第２回理工学研究科ＦＤ委員会（メール会議）議事要旨

日 時：令和５年７月１０日（月）～令和５年７月１８日（火）

報告事項

- １．令和５年度理工学研究科・理学部・工学部合同 FD 講演会について（報告資料１）
委員長から、報告資料１に基づき、令和５年度理工学研究科・理学部・工学部 FD 講演会（R5.10.18 開催予定）についての報告があった。
- ２．令和５年度全学 FD 委員会報告について（報告資料２）
委員長から、報告資料２に基づき、全学 FD 委員会（R5.6.28 開催）の報告があった。
- ３．その他
特になし

令和5年度第3回理工学研究科FD委員会（メール会議）議事要旨

日 時：令和5年9月11日（月）～令和5年9月15日（金）

議題

1. 後期の理工学研究科FD委員会について
会議後の日程調整の結果を踏まえ、委員長から、後期の理工学研究科FD委員会は月末の4限に開催するとの決定がなされた。

報告事項

1. 令和5年度全学FD委員会報告について（報告資料1）
委員長から、報告資料1に基づき、全学FD委員会（R5.7.26開催）の報告があった。
2. その他
なし

令和5年度第4回理工学研究科FD委員会（オンライン会議）議事要旨

日 時：令和5年10月27日（金）14：30～15：09

場 所：Zoom（オンライン）

出席者：宮本（委員長）、中尾（機械）、渡邊（電気）、齋田（海士）、田巻（化工（代理出席））、高梨（化生）、鹿嶋（情生）、横須賀（建築（代理出席））、吉田（数理）、秦（物理）、神長（化学）、池永（生物）、北村（地球）の各委員

欠席者：二井（化工）委員、小山（建築）委員

陪 席：久田総務係員

議事に先立ち、令和5年第1回～第3回の理工学研究科FD委員会の議事要旨が確認された。

議題

1 授業アンケート実施科目について

委員長から、議題1資料に基づき授業アンケートに関する説明があり、審議の結果、以下の科目についてはアンケートを実施しない科目とすることで承認された。

（1）複数教員が担当している科目

（2）受講生が少人数のため回答者が特定されてしまう科目

（3）e-ラーニングによる倫理教育、他研究科の学生が広く受講できる語学関連の科目

また、（2）について、委員から何人以下を少人数というかとの質問があり、委員長から、これまで概ね1～3名を少人数とみなして来たようだが、授業形態によって特定可能か否か異なるため基準を設けられないとの説明がなされた。なお、これまで実施の可否を委員長が個別に確認していたが、今後、毎期の受講生確定後に事務担当者から（2）に該当するか照会し確認することとした。

2 成績評価分布の確認方法について

委員長から、議題2資料に基づきプログラムにおける成績評価分布の確認の際、これまでは、事務担当者から大学院生のための成績分布表を配布し、シラバスでの表記に沿った評価をしていることを確認するという作業をしてもらっているが、学部4年生の先取履修が行われていることから今後は以下のとおりデータ（成績評価分布表）を配布することとしてよいか提案があった。

＜提案事項＞

- ・大学院生のためのデータ（成績評価分布表）と先取履修の4年生のデータ（成績評価分布表）を別々に作成し全プログラムに配布する。

このことについては、各プログラムにて確認のうえ、11月14日（火）までに反対意見がない場合は承認されたものとして取り扱うこととなった。

5 その他

なし

報告事項

1 令和5年度第5回全学FD委員会（R5.9.27）の報告について

委員長から報告事項1資料に基づき、第5回全学FD委員会における議事以下5点について報告があった。

- （1）ベストティーチャー賞の改善に向けた検討事項について
- （2）本学におけるSA等制度の検討について
- （3）2022年度大学IRコンソーシアムアンケート集計結果について
- （4）2023年度前期「授業・学生生活」アンケート集計結果について
- （5）学生調査結果を踏まえた学生へのケアについて

2 令和5年度第6回全学FD委員会（R5.10.25）の報告について

委員長から報告事項2資料に基づき、第5回全学FD委員会における議事以下6点について報告があった。

- （1）ベストティーチャー賞の改善に向けた検討事項について（継続審議）
- （2）FDガイド第28号・第29号の発行について
- （3）令和5年度卒業生・修了生調査集計結果について
- （4）令和5年度全学FD企画について
- （5）令和6年度「全国学生調査（第4回試行実施）」への参加について
- （6）2023年度大学IRコンソーシアムアンケートの開始について

3 その他

委員長から全教職員対象の令和5年度教学IR研修会（令和5年11月1日（水）開催）について案内があった。

令和5年度第5回理工学研究科FD委員会（オンライン会議）議事要旨

日 時：令和5年11月24日（金）14：38～15：02

場 所：Z o o m（オンライン）

出席者：宮本（委員長）、中尾（機械）、渡邊（電気）、齋田（海土）、鮫島（化工（代理出席））、高梨（化生）、鹿嶋（情生）、小山（建築）、吉田（数理）、秦（物理）、神長（化学）、池永（生物）、北村（地球）の各委員

欠席者：二井（化工）委員、永松事務部長

陪 席：濱崎総務係員

議事に先立ち、令和5年第4回の理工学研究科FD委員会の議事要旨が確認された。

議題

- 1 令和5年度前期開講科目に係る成績評価分布の確認について（議題1資料）
委員長から、プログラムにおける成績評価分布の確認について諮られ、議題1資料に基づき、各プログラムのFD委員から令和5年度前期の理工学研究科開講科目に対する成績評価分布の点検結果について説明があり、審議の結果承認された。
- 2 令和5年度修了時アンケートについて（議題2資料）
委員長から、令和5年度修了時アンケートについて諮られ、議題2資料に基づき、今年度も昨年度と同じ設問内容で引き続き実施されることが、審議の結果承認された。
- 3 その他
特になし。

報告事項

- 1 第7回全学FD委員会（R5.11.22）の報告について（報告事項1資料）
委員長から、報告事項1資料に基づき、第7回全学FD委員会における議事以下6点について報告があった。
 - （1）鹿児島大学教員の教育活動に関する調査実施計画（案）について
 - （2）大学IRコンソーシアム・アンケートの今後について（案）
 - （3）令和5年度全学FD企画について
 - （4）2023年度大学IRコンソーシアムアンケートの回答状況について
 - （5）鹿児島大学ベストティーチャー賞実施要項の改正について
 - （6）IRセミナーの開催について

2 その他

委員長から、令和5年度第4回理工学FD委員会において、令和5年度第5回全学FD委員会の議題2「本学におけるSA等制度の検討について」について委員から質問があった件に関して、教務課からの回答結果が次の通り得られたとの報告があった。

- ・全学FD委員会議題2資料2－1の「SA (Student Assistant)」の業務内容に関して、学部2～4年生が学部1～2年生に対する学習支援を行うとされているが、4年生が3年生に対しても学習支援を行えるか」という質問に対して、「4年生が3年生の支援を行うことに対応できるよう文言を検討して規則案等に反映させる」との回答があった。

令和5年度第6回理工学研究科FD委員会（メール会議）議事要旨

日 時：令和6年1月26日（金）～令和6年2月1日（木）

議題

なし

報告事項

1. 令和5年度第8回全学FD委員会報告について（報告資料1）

委員長から、報告資料1に基づき、全学FD委員会（R6.1.24開催）の報告があった。

令和５年度第７回理工学研究科FD委員会（オンライン会議）議事要旨

日 時：令和６年３月１日（金）１４：３０～１４：５６

場 所：Z o o m（オンライン）

出席者：宮本（委員長）、中尾（機械）、渡邊（電気）、齋田（海土）、二井（化工）、
高梨（化生）、鹿嶋（情生）、小山（建築）、吉田（数理）、秦（物理）、
神長（化学）、池永（生物）、北村（地球）の各委員

欠席者：永松事務部長

陪 席：久田総務係員

議事に先立ち、令和５年第５回、第６回の理工学研究科FD委員会の議事要旨が確認された。

議題

１ 令和６年度FD活動計画について（議題１資料）

委員長から、令和６年度FD活動計画について諮られ、議題１資料に基づき令和６年度FD活動計画書及び、令和６年度FD活動計画・経費要求書について説明があり、審議の結果原案どおり承認された。

２ その他

特になし。

報告事項

１ 令和５年度FD活動報告書の作成について（報告事項１資料）

委員長から、令和５年度FD活動報告書の作成について報告事項１資料に基づいた業務分担の担当者割振り及び提出期限等について、確認があった。

２ 令和５年度後期プログラムにおける成績評価分布の確認について（報告事項２資料）

委員長から、報告事項２資料に基づき、令和５年度後期プログラムにおける成績評価分布の確認について、実施時期、実施方法に関して、後日、事務担当者から連絡がある旨報告があった。

３ 令和５年度FD関係の予算執行について（報告事項３資料）

委員長から、報告事項３資料に基づき、令和５年度FD関係の予算執行について報告があった。

４ 令和５年度修了時アンケートの実施状況について（報告事項４資料）

委員長から、報告事項４資料に基づき、manabaで実施中の令和５年度修了時アンケートの回答状況について報告があり、各プログラムにおいて対象学生に対して改めてアンケートへの回答について周知いただくよう依頼があった。

5 令和5年度第9回全学FD委員会報告について（報告事項5資料）

委員長から、報告事項5資料に基づき、第9回全学FD委員会における議事以下5点について報告があった。

- （1）令和5年度鹿児島大学FD報告書の作成について
- （2）令和6年度FD活動計画(案)の作成について
- （3）令和6年度ティーチングフェロー（TF）対象研修（案）について
- （4）2022年度大学IRコンソーシアム学生調査の分析について
- （5）令和5年度専任教員FD参加率について

6 その他

特になし。



A3d001001

大学院理工学研究科授業評価アンケートコース

プレビュー

理工学研究科博士前期課程学生による授業評価アンケート（令和5年度）	
公開/非公開	非公開
受付期間	2024-01-24 00:00 ～ 2024-02-20 23:59

※アンケート集計シートに表示される問題番号を赤の太字で表示しています（例: **1.1**）。

A（受講態度等について）

設問1 授業にどれだけ出席しましたか。(選択必須)

1.1

- 1. ☐ 全て出席
- 2. ☐ 1回欠席
- 3. ☐ 2回欠席
- 4. ☐ 3回欠席
- 5. ☐ 4回以上欠席

設問2 予習と復習は1コマ(90分)の授業に対して、どれくらいしましたか。(レポート作成時間も含みます)(選択必須)

1.2

- 1. ☐ 3時間より多く
- 2. ☐ 2～3時間
- 3. ☐ 1～2時間
- 4. ☐ 30分～1時間
- 5. ☐ 30分未満

【自由記述A】

その他、受講態度等を含めて感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

1.3

B（授業内容等について）

設問3 この授業のシラバス記載内容は受講申請に役立ちましたか。(選択必須)

1.4

- 1. ☐ そう思う
- 2. ☐ どちらかと言えばそう思う
- 3. ☐ どちらとも言えない
- 4. ☐ どちらかと言えばそうは思わない
- 5. ☐ そうは思わない

設問4 授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそう。(選択必須)

1.5

- 1. ☐ そう思う
- 2. ☐ どちらかと言えばそう思う

- 3. ☐ どちらとも言えない
- 4. ☐ どちらかと言えばそうは思わない
- 5. ☐ そうは思わない

設問5 授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。(選択必須)

1.6

- 1. ☐ そう思う
- 2. ☐ どちらかと言えばそう思う
- 3. ☐ どちらとも言えない
- 4. ☐ どちらかと言えばそうは思わない
- 5. ☐ そうは思わない

設問6 授業の内容は目指す(職業上の)高度専門知識として役立つと思う。(選択必須)

1.7

- 1. ☐ そう思う
- 2. ☐ どちらかと言えばそう思う
- 3. ☐ どちらとも言えない
- 4. ☐ どちらかと言えばそうは思わない
- 5. ☐ そうは思わない

設問7 授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つと思う。(選択必須)

1.8

- 1. ☐ そう思う
- 2. ☐ どちらかと言えばそう思う
- 3. ☐ どちらとも言えない
- 4. ☐ どちらかと言えばそうは思わない
- 5. ☐ そうは思わない

【自由記述B】

授業内容全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。特に、理解できない場合にはどこに原因があると考えますか。授業の難易度はどうでしたか。

1.9

C(授業方法等について)

設問8 使用した教科書や教材は授業の理解に役立った。(教材等を使用しなかった場合には“3”を選択してください。)(選択必須)

1.10

- 1. ☐ そう思う
- 2. ☐ どちらかと言えばそう思う
- 3. ☐ どちらとも言えない
- 4. ☐ どちらかと言えばそうは思わない
- 5. ☐ そうは思わない

設問9 レポートなどは授業の理解に役立った。(無かった場合には“3”を選択してください。)

(選択必須)

1.11

- 1. ☐ そう思う
- 2. ☐ どちらかと言えばそう思う
- 3. ☐ どちらとも言えない
- 4. ☐ どちらかと言えばそうは思わない
- 5. ☐ そうは思わない

設問10 板書などは明瞭だった。(遠隔授業においては画面での視覚情報は明瞭であったか。)(選択必須)

1.12

- 1. ☐ そう思う
- 2. ☐ どちらかと言えばそう思う
- 3. ☐ どちらとも言えない
- 4. ☐ どちらかと言えばそうは思わない
- 5. ☐ そうは思わない

設問11 教員の熱意が感じられた。(選択必須)

1.13

- 1. ☐ そう思う
- 2. ☐ どちらかと言えばそう思う
- 3. ☐ どちらとも言えない
- 4. ☐ どちらかと言えばそうは思わない
- 5. ☐ そうは思わない

【自由記述C】

授業方法全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。(遠隔授業について、学習する上でよかったと思う工夫や逆に困ったことなどがあれば、この欄に簡潔に書いてください。)

1.14

閉じる

鹿児島大学大学院理工学研究科FD委員会

授業計画改善書(令和5年度 ○期 講義・演習用)

1. 授業アンケート結果に基づいて、授業科目ごとに記載して下さい。
2. 複数で担当されている科目は、アンケートに応じて代表者の方あるいは分担者が記載して下さい。
3. この文書を 月 日()までにプログラムのFD委員に添付ファイルで送付して下さい。
4. この文書は3年間保管して下さい。

記入年月日： 令和 年 月 日

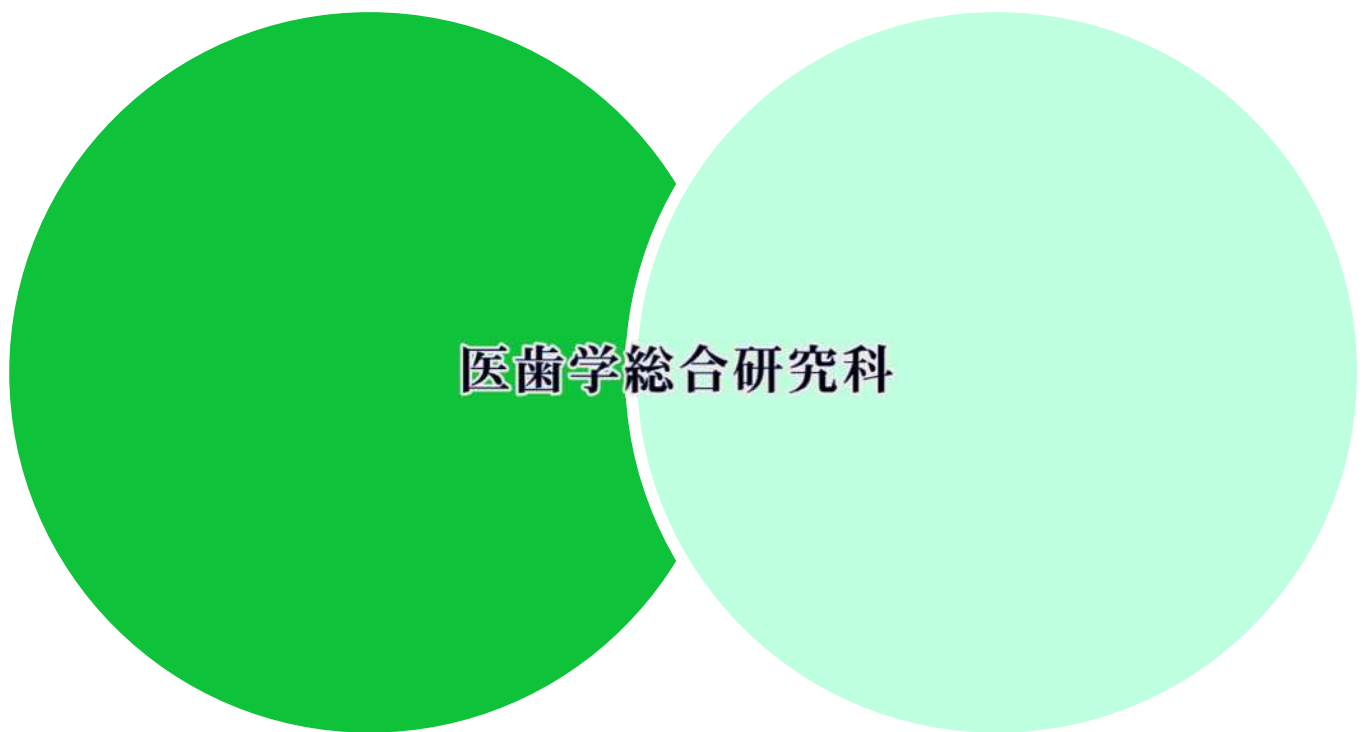
授業科目名： _____

授業担当者（代表者）名： _____

※ Pt. 8ゴシックで記入して下さい。

※ 自由記述欄については、授業評価アンケート実施の有無に関わらず記入してください。

評価項目		アンケートの評点			現時点での自己分析と改善の方策	
		今回	前回	前々回		
(A) 受講態度について	①出席					
	②予習と復習					
	※自由記述					
(B) 授業内容について	③シラバス					
	④理解度					
	⑤研究に					
	⑥仕事に					
	⑦学力・教養に					
	※自由記述					
(C) 授業方法について	⑧教科書・教材					
	⑨レポート等					
	⑩板書等の明瞭さ					
	⑪教員の熱意					
	※自由記述					
(D) 成績分布について	登録者数 [名]	受験者数X [名]		単位取得者数Y [名]	比率(Y/X) [%]	
	【成績分布】					
	A評価 [名]	B評価 [名]		C評価 [名]	D評価 [名]	F評価 [名]
総括	成績の評価基準					
	学習目標の達成					
	前年度の授業計画 改善書に沿って実施 した改善内容と成果	改善書に沿った授業実施に対する自己評価（三段階評価）				
		改善書に沿って実施した改善内容と成果				



医歯学総合研究科 FD 活動報告

1. はじめに

医歯学総合研究科 FD 委員会は、大学及び研究科が目指す大学院教育の質向上と研究環境の改善を目的として活動している。桜ヶ丘キャンパスの全ての教職員を対象とした効果的な FD とするために、医学部 FD 委員会、歯学部 FD 委員会と連携して活動を行った。

令和 5 年度は、新型コロナウイルス感染症の 5 類感染症移行の中で大学院教育、研究活動が進められた。FD 活動も授業（遠隔やハイブリッドも含む）、研究指導を含めた授業評価アンケート調査を行った。

令和 5 年度の FD 参加率は、医学部及び歯学部、全学での FD 活動等を含めて算出したところ、79.7%（専任教員 271 名中 216 名参加）であった。

2. 学生による授業評価アンケート

実施方法の概要 昨年度と同様に、講義等を主体とする授業科目の評価アンケートと、演習・実験科目の評価として研究環境と研究指導に関するアンケートを実施した。留学生は英語でのアンケートに回答した。医歯学大学院係がアンケートを作成、対象学生が鹿児島大学 manaba で回答したデータを集計した。令和 3 年度から manaba での実施に完全移行したが、研究指導に係る学生アンケートの回収率が特に低迷しているため、引き続き回収率の改善を図る必要がある。集計結果は科目責任者にフィードバックし、教育委員会への報告も予定している。

授業評価 アンケート	前期			後期			年度計		
	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率
令和3年度	233	55	23.6%	208	50	24.0%	441	105	23.8%
令和4年度	244	52	21.3%	222	28	12.6%	466	80	17.2%
令和5年度	192	63	32.8%	130	49	37.7%	322	112	34.8%

※ アンケートの「対象者数」は、アンケートを取っている受講者数が 3 名以上の科目の受講者数変更。（R5～）

研究指導に係る 学生アンケート	日本人			留学生			年度計		
	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率
令和3年度	246	42	17.1%	16	12	75.0%	262	54	20.6%
令和4年度	253	12	4.7%	14	3	21.4%	267	15	5.6%
令和5年度	272	22	8.1%	16	3	18.8%	288	25	8.7%

講義科目アンケート 修士課程及び博士課程における講義を主体とする科目アンケートは 3 名以上の受講生がいる科目を対象として授業評価 9 項目、学習に対する自己評価 2 項目、全体評価とし、無記名により各項目について 7 段階の評定尺度で回答し、自由な意見も記載してもらった。前期は対象 25 科目 63 件、後期は対象 19 科目 49 件の回答が得られた。

演習、実験科目のアンケート 博士課程における演習、実験科目についてのアンケートは 2024 年 3 月に実施し、医系歯系の別、入学年度、演習科目の授業形態、内容と指導 3 項目、実験科目（研究指導）6 項目、研究中断の有無、さらに正課、課外における英語によるコミュニケーション 3 項目について回答を求めた。選択項目以外は、5 段階の評定尺度で回答してもらった。

医系 22 名（内留学生 2 名）、歯系 3 名（内留学生 1 名）から回答が得られた。

(アンケート自由記述欄より)

- ・研究指導には、今のところ概ね不満はありません。もっと自分自身の頑張りが必要だと感じています。(医系)
- ・No need any changes...All are ok for me. (歯系)

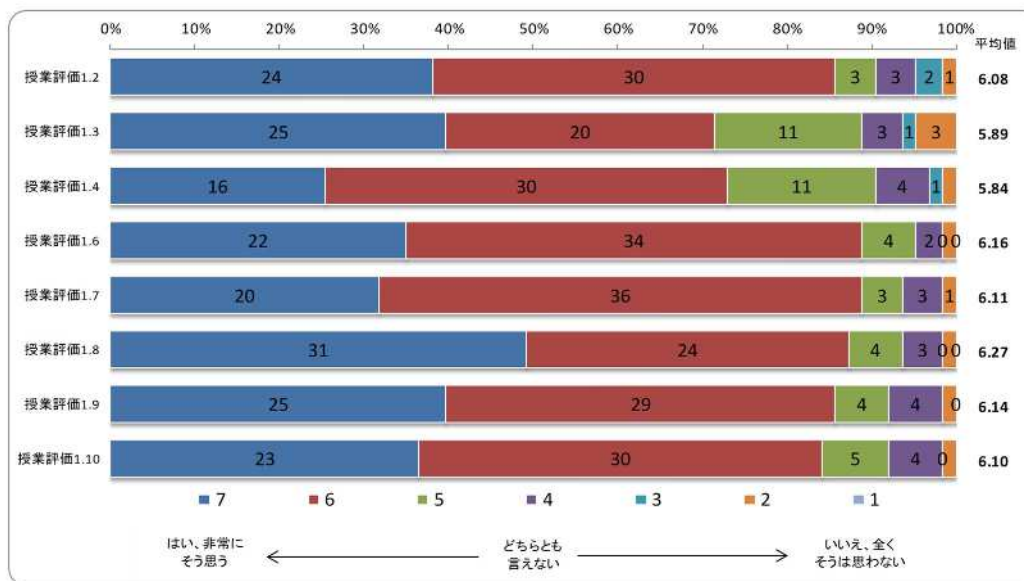
授業評価アンケート

医歯学総合研究科 授業評価アンケート科目別【全体】集計 (R5年度 前期)

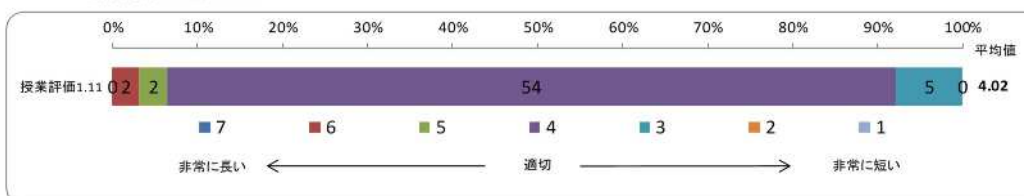
アンケート実施科目 25科目 アンケート回答数 63 枚

【授業評価】

- 1.2 この科目はあなたのニーズに合っていましたか
 1.3 この科目はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
 1.4 講義の内容はよく理解できましたか 理解できない、わかりにくいと思った点を具体的にお書きください
 1.6 この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか
 1.7 シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか？
 1.8 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
 1.9 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
 1.10 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

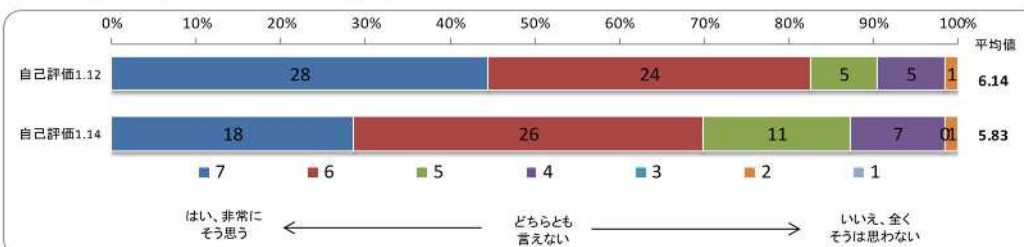


1.11 講義時間は適切でしたか



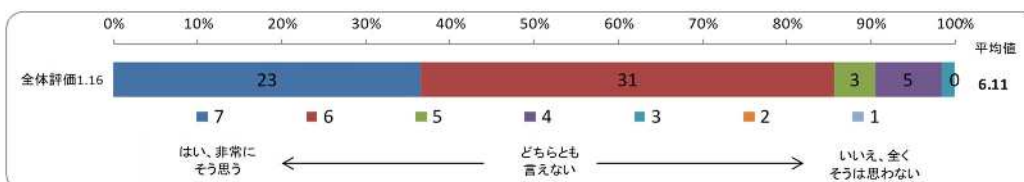
【自己評価】

- 1.12 この科目で新しい知識や考え方を習得しましたか
 1.14 授業には積極的に参加しましたか(質問、自習など)



【全体評価】

- 1.16 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか

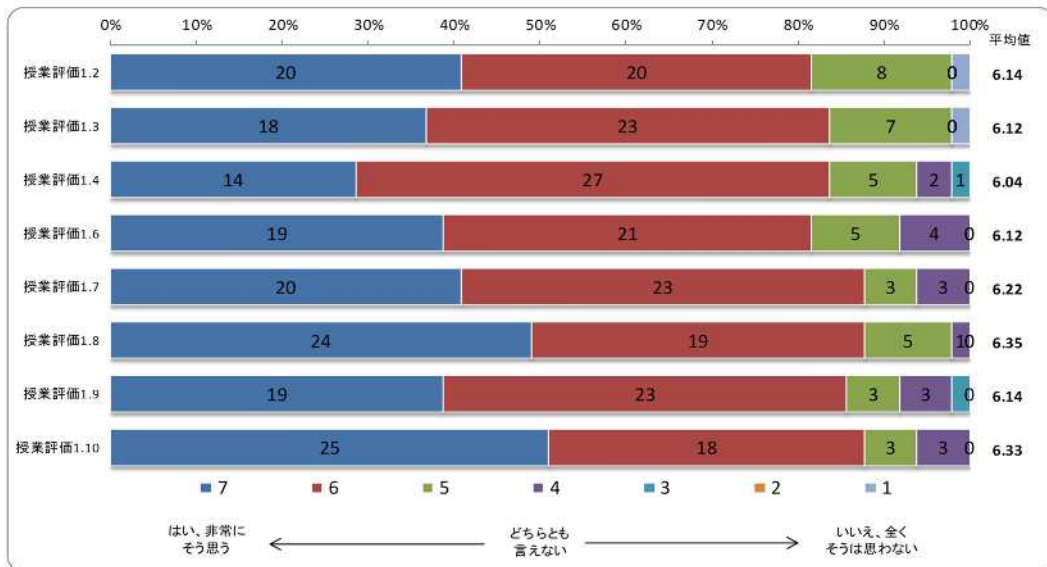


医歯学総合研究科 授業評価アンケート科目別集計（R5年度 後期）

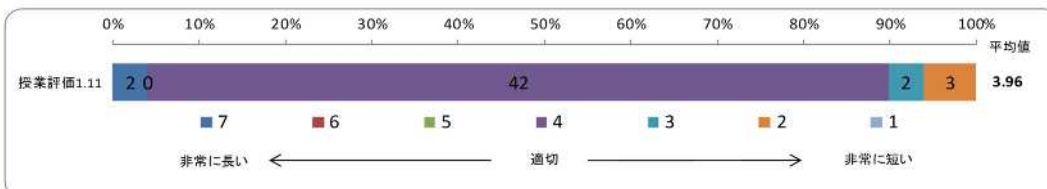
アンケート実施科目 19科目 アンケート回答数 49 枚

【授業評価】

- 1.2 この科目はあなたのニーズに合っていましたか
- 1.3 この科目はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 1.4 講義の内容はよく理解できましたか 理解できない、わかりにくいと思った点を具体的にお書きください
- 1.6 この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか
- 1.7 シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか？
- 1.8 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
- 1.9 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 1.10 教員は参考資料の提示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

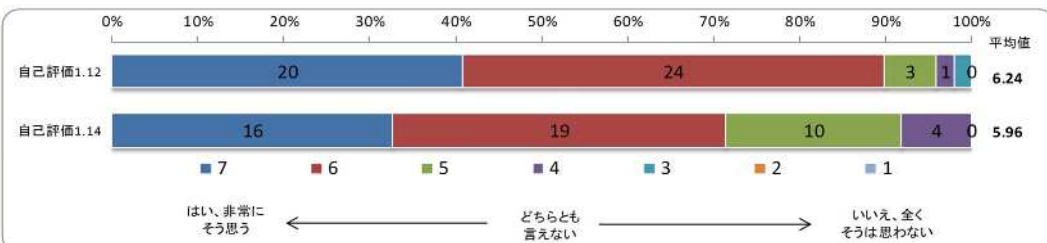


1.11 講義時間は適切でしたか



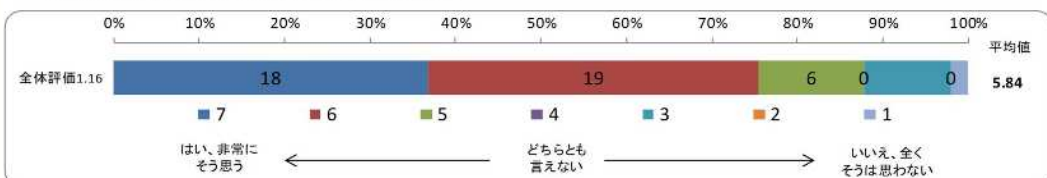
【自己評価】

- 1.12 この科目で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 1.14 授業には積極的に参加しましたか（質問、自習など）



【全体評価】

- 1.16 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか



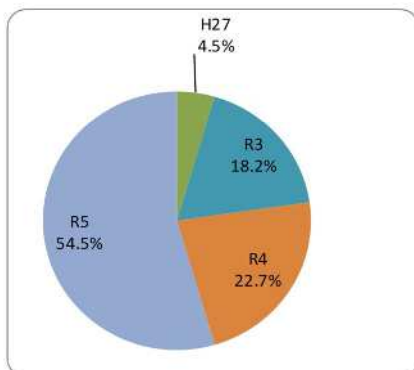
実験科目等アンケート

医 系

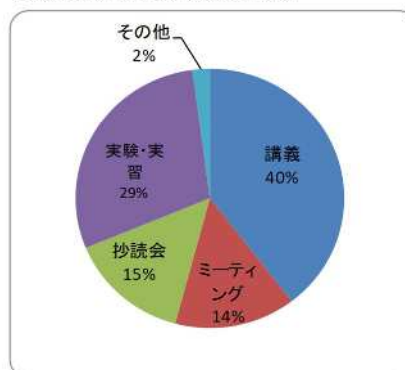
研究指導に係る学生アンケート(2024年 4月実施)

アンケート回答件数(医系) 22 件(内、留学生2名)

2 入学年度はいつですか



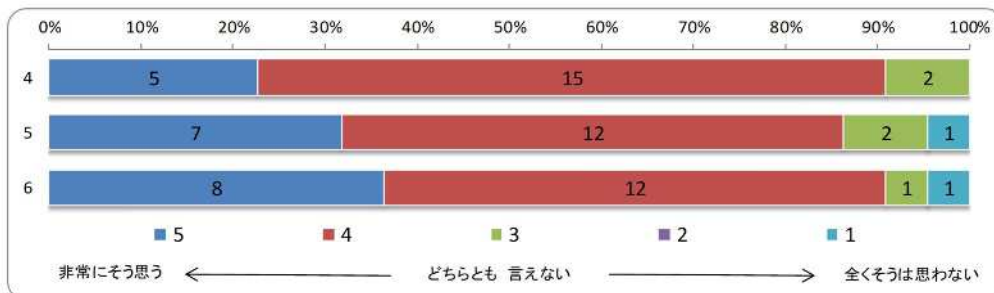
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか



実験科目(研究指導)

1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることはできましたか

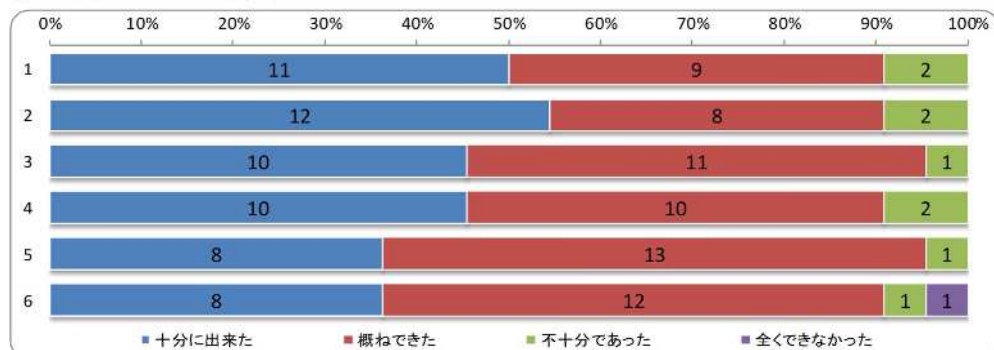
2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか

3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか

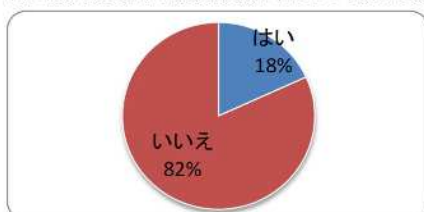
4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか

5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか

6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか

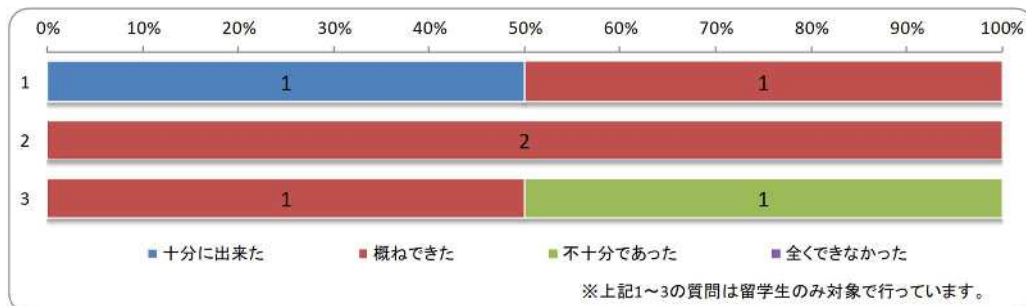


7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



以下は正課・課外における英語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問にお答えください。

- 1 あなたの指導を担当する教員や研究室のスタッフの英語能力に満足していますか。
- 2 英語もしくはあなたの母国語によって学習や研究、滞在に関する十分な情報を得ることができていますか？
- 3 英語で教えてもらう授業に満足していますか。



自由記載

1.15 特に良かった点をお聞かせください

- 実験の指導だけでなく、論文、発表、申請書の作成方法まで徹底的な指導を受けることができました。
- 自分だけでは考えが及ばなかった点について調べてみるようご指導いただき、研究の背景の理解や今後の研究を進める上で大変有益であった。

1.16 改善すべき点をお聞かせください

- 強いて言えば、英語力を身につける機会がもう少し欲しいです。

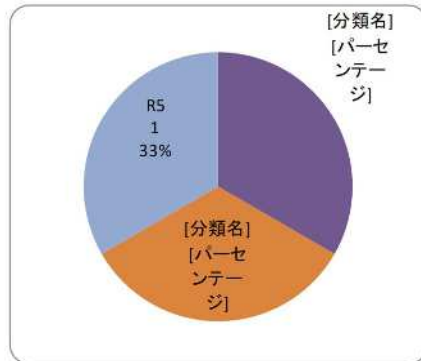
医歯学総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。

※この質問は留学生のみ対象で行っています。

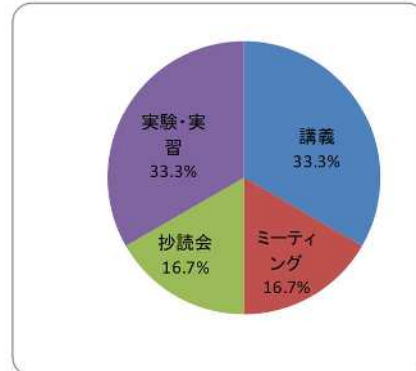
1.17 その他、自由に感想をお書きください

- 研究指導には、今のところ概ね不満はありません。もっと自分自身の頑張りが必要だと感じています。
- 提出が締め切りギリギリになってしまうことが多く、先生との研究指導のタイミングも合わせにくくなってしまい、反省しました。今年度は早め早めに取り組みたいと思います。
- 所属先で研究テーマが与えられ、研究にかかる資金を使わせてもらいながら研究手法を学べるものと思っていました。ある程度は資金を使わせていただきましたが、途中からは「派遣元(医局)から資金を出してもらうように」と指示され、派遣元からは「所属先の資金を使わせてもらって」と言われるとどうしようもありません。自身の研究テーマが確立され、研究費を獲得して研究するのが理想ではありますが、大学院を卒業したその先にあっても良いと思います。

2 入学年度はいつですか



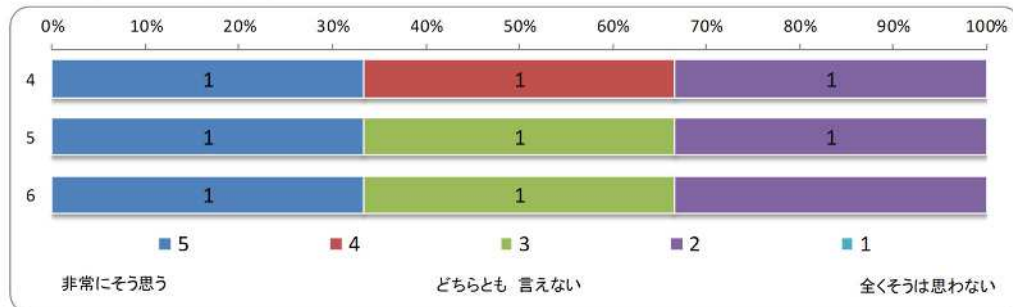
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか



実験科目(研究指導)

1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることはできましたか

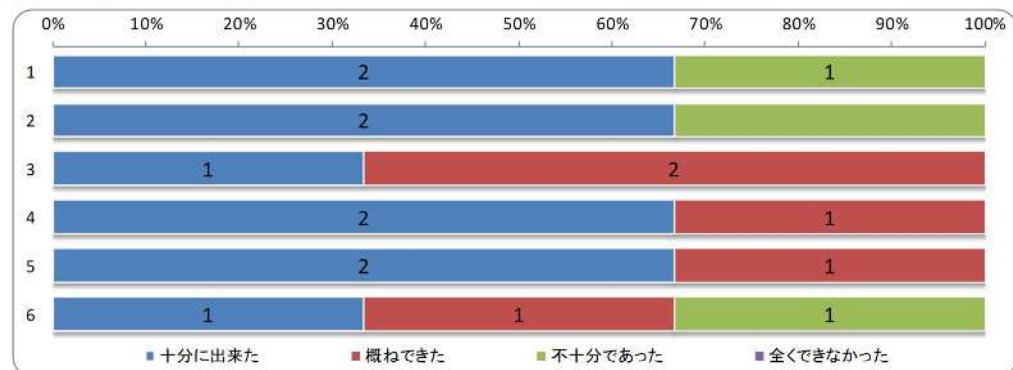
2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか

3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか

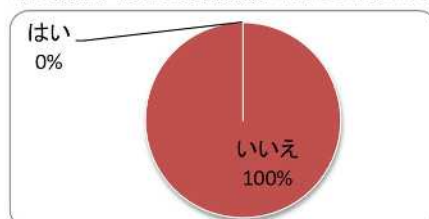
4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか

5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか

6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか

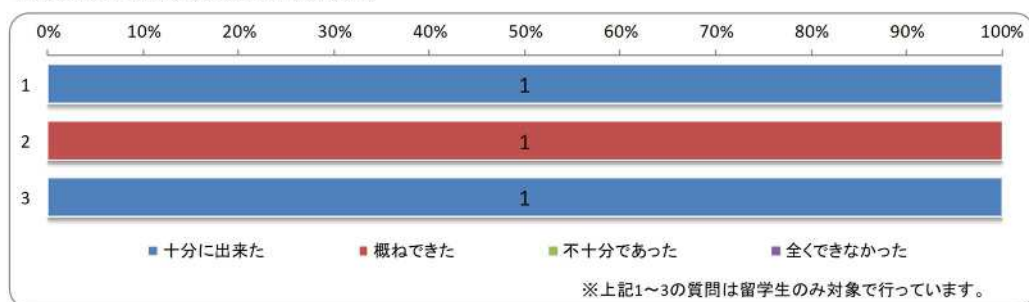


7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



以下は正課・課外における英語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問にお答えください。

- 1 あなたの指導を担当する教員や研究室のスタッフの英語能力に満足していますか。
- 2 英語もしくはあなたの母国語によって学習や研究、滞在に関する十分な情報を得ることができていますか？
- 3 英語で教えてもらう授業に満足していますか。



自由記載

1.15 特に良かった点をお聞かせください

● No need any changes...All are ok for me.

1.16 改善すべき点をお聞かせください

● No need ... improving anything...

医歯学総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。

※この質問は留学生のみ対象で行っています。

● It's satisfactory for me... They are helps me a lot... They are so kind, Enough for me...mm

1.17 その他、自由に感想をお書きください

3. 「FD 講演会「学修者評価について」—診療参加型臨床実習における形成的評価や学生の問題行動への対応を中心に—」の開催

日 時：令和6年9月7日（木）14:30 ～ 15:30

主 催：鹿児島大学医学部、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科

会 場：共通教育棟1階 保健学科会議室（対面とZoomによるハイブリッド講演）

講 師：伊藤 彰一（千葉大学大学院医学研究院医学教育学 教授）

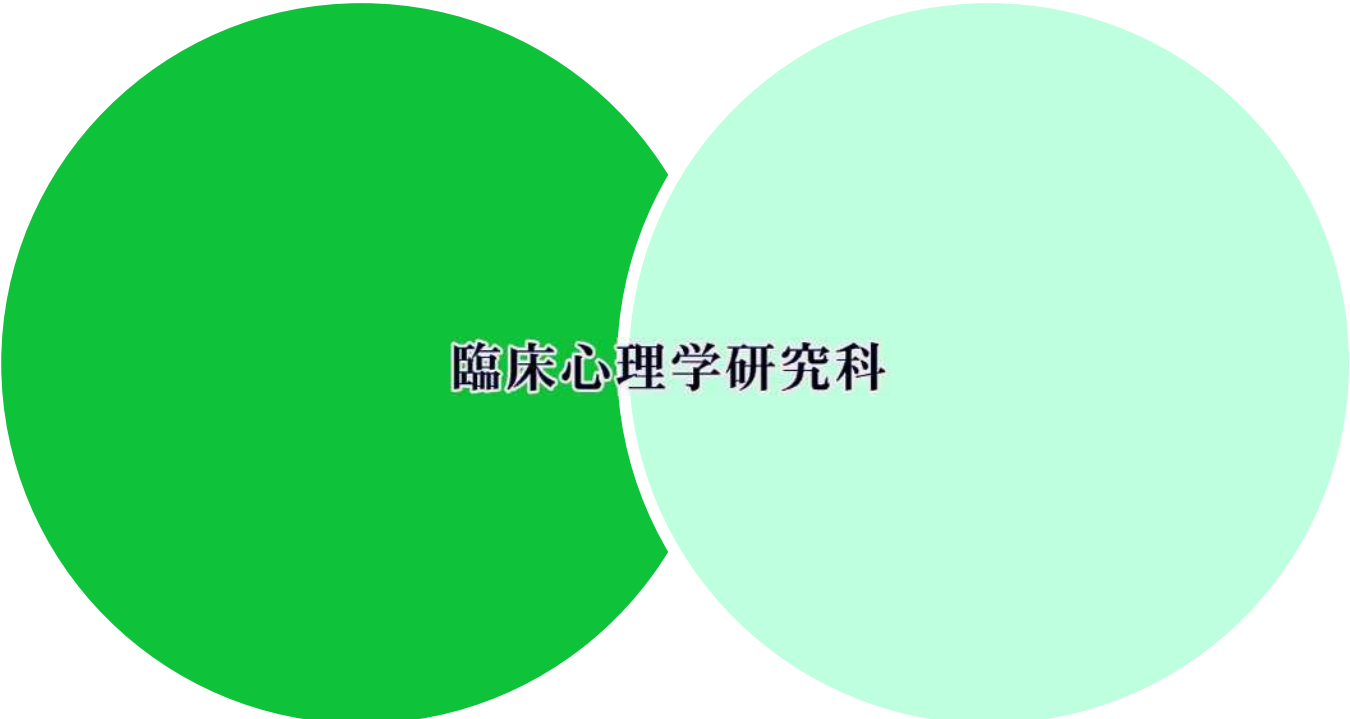
診療参加型臨床実習における形成的評価の充実を図ることを目的に、医学部との共催で「FD 講演会「学修者評価について」—診療参加型臨床実習における形成的評価や学生の問題行動への対応を中心に—」を開催した。当日は、医学部医学科の教員40名が参加し、学修者評価について、学修評価の方法や学生の問題行動に対しての対応など幅広く知見を得ることができる講演の後、意見交換を行った。

4. ベストティーチャーの選出

本研究科に所属する教員は大学院での教育実績に加え、医系教員は医学部医学科教育、歯系教員は歯学部教育での実績が評価対象となっている。本年度は、ベストティーチャーは学部FD委員会と共同で、学生、教員からの推薦に基づき医歯学総合研究科ベストティーチャーの選出を行い2名が候補となったが、当事者の辞退により選出には至らなかった。

5. 特筆すべき事項と改善例

令和5年度の特筆すべき事項として、3.に記載した「FD 講演会「学修者評価について」—診療参加型臨床実習における形成的評価や学生の問題行動への対応を中心に—」の実施が挙げられる。2017年に受審した医学教育分野別評価（1巡目）の際、診療参加型臨床実習における形成的評価の不足が改善事項として指摘されていた。また、令和5年度は共用試験臨床実習前OSCEとCBTの公的化が施行され、臨床実習中の医学生の実績の保証と医行為の実施が法的に認められた初めての年であった。そこで、医歯学総合研究科・医歯学教育開発センターの学外協力研究者である外部の医学教育専門家の講師（千葉大学・伊藤彰一教授・学習者評価が専門）を招聘してハイブリッド形式によるFD講演会を医学部医学科との共催により開催した。臨床実習教育の改善に資するために実施したものであるが、令和6年度には医学教育分野別評価（2巡目）の受審や歯学系共用試験の公的化も控えており、学部教育のみならず個別・少人数指導の頻度が高い大学院教育においても有意義なFD活動となった。



臨床心理学研究科

臨床心理学研究科 令和5年度 FD 活動報告

臨床心理学研究科 FD 委員長 廣瀬 幸市

臨床心理学研究科 FD 委員 清重 英矩

1. はじめに

臨床心理学研究科では、FD 活動の強化を目的に平成 27 年度から研究科 FD 会議（FD 研修会を含む）を教授会同日に設定し、ほぼ毎月開催する体制を整えている。令和 5 年度は、FD 委員長の急遽交替の中、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）は 5 類感染症移行へと全国的に大学を取り巻く感染対策状況が変動したが、昨年度通り、遠隔 Zoom 会議による年間 11 回の臨床心理学研究科 FD 会議を引き続き堅持することができた。また、全学 FD 委員会において教学 IR 体制への方向性が示される中、当研究科においては、令和 3 年度より定例化した「入学生アンケート」及び、同じく令和 4 年度より定例化した「修了予定者アンケート」を実施し、過年度から実施してきた各セメスター 2 回ずつの「授業評価アンケート」及び、8 月と 2 月の「フォローアップセッション・アンケート」、修了生に対して適宜実施してきた「修了生アンケート」を加えて、学生からの要望や意見を取り入れる体制を継続した。このように入学時から修了時までの全教育課程を通して、FD 活動の根幹となる授業内容や教育・指導法の点検を通して、さらに改善に向けて取り組むことができた。また、令和 2 年度から実施されているベスト・ティーチャー賞候補者推薦については、令和 4 年度選考委員会の見解を踏まえて、研究科 FD 会議において本部局の選定方法についての検討を重ねた結果、令和 5 年度は候補者推薦を見送った。

以下に、令和 5 年度の FD 活動全体の概要を具体的に報告する。

2. 臨床心理学研究科専任教員全員による研究科 FD 会議 （特筆すべき取り組み 1）

臨床心理学研究科の FD 会議は、原則、毎月第 3 水曜日の教授会同日に設定している。

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の感染流行下では授業そのものが大幅な変更を余儀なくされてきたが、令和 5 年 5 月、国全体で 5 類感染症移行へと変動する中で、本学においても全ての科目について概ね対面授業で実施することができた。一方、実習科目である学外実習（「臨床心理地域援助実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」）においては、一部の施設で実習時間や内容を変更した代替実習が行われたものの、概ね、通常の学外実習が実施できた。また、学内実習（「臨床心理査定・面接実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」）においては、従前の感染症対策を継続した上でコロナ以前のペースに回復させることができた。FD 活動の主軸となる学生による授業評価アンケートについても、例年通りに実施することができ、研究科 FD 会

議の当該回において、全教員で担当科目の振り返りを行い、その改善点の報告及びその結果の検証を行なうことができた。

以下、令和5年度の臨床心理学研究科 FD 活動実績について表 2-1 に示した。また、表 2-2 には、専任教員の参加率を示した。

表 2-1 令和5年度臨床心理学研究科 FD 活動実績 (Zoom による開催)

	年月日	内容
第1回 FD 会議	令和5年4月19日(水) 13:30～	1. 令和5年度 FD 会議日程 2. 令和5年度 FD 活動計画 3. 令和5年度 FD 活動予算要求 4. 入学生アンケートについて
第2回 FD 会議	令和5年5月17日(水) 13:30～	1. 入学生アンケートについて 2. 授業評価アンケート日程について
第3回 FD 会議	令和5年6月21日(水) 13:30～	1. 令和5年度前期第1回授業評価アンケート 結果報告と意見交換
第4回 FD 会議	令和5年7月19日(水) 13:30～	1. 修了予定者アンケートに関する検討
第5回 FD 会議	令和5年9月20日(水) 13:30～	1. 令和5年度前期第2回授業評価アンケート 結果報告と意見交換 2. 令和5年度前期フォローアップセッションの 振り返りと意見交換(実習委員会合同)
第6回 FD 会議	令和5年11月1日(水) 13:30～	1. 学外講師による実務家教員向け FD 研修 会 「臨床心理士養成課程における倫理教育の実 践について」講師:大山泰宏先生 放送大学教 授
第7回 FD 会議	令和5年11月22日(水) 13:30～	1. ベストティーチャー賞選出について
第8回 FD 会議	令和5年12月22日(水) 13:30～	1. 令和5年度後期第1回授業評価アンケート 結果報告と意見交換
第9回 FD 会議	令和6年1月17日(水) 13:30～	1. FD 研修参加の報告について
第10回 FD 会議	令和6年2月14日(水) 13:30～	1. 令和5年度後期第2回授業評価アンケート 結果報告と意見交換 2. 令和5年度後期フォローアップセッションの 振り返りと意見交換(実習委員会合同)

第11回FD会議	令和6年3月13日(水) 13:30～	1. 令和5年度FD活動の振り返りと次年度に向けての課題 2. 令和5年度修了予定者アンケートについて
----------	------------------------	--

表 2-2 令和5年度臨床心理学研究科専任教員のFD参加率

合計参加率		100.0 % (専任教員 9 名 中 9 名 参加)
企画別 参加率	FD 会議(審議関係)※1	100 % (専任教員 9 名 中 9 名 参加)
	FD 会議(授業評価アンケート結果に関する検討)	100 % (専任教員 9 名 中 9 名 参加)
	FD 研修会(学外講師)※2	100 % (専任教員 9 名 中 9 名 参加)
備考: ※1 フォローアップセッションの振り返り、修了予定者アンケートの再検討、ベストティーチャー賞の選定に関する検討等、を行った。※2 放送大学の大山泰宏教授を学外講師に招いて、臨床心理士養成課程における倫理教育に関する研修を行った。		

* FD 会議に複数の企画が重複する回もある。

令和5年度の臨床心理学研究科FD会議は、令和4年度同様、全て遠隔Zoom会議としたことで、当初予定通り、年間11回のFD会議を開催することができた。FD活動の主軸となる学生による授業評価アンケートは、前期・後期の授業7週目と14週目に実施したが、この結果を受け、第3回、第5回、第8回、第10回の研究科FD会議において、授業改善の検討とその改善結果の検証を行った。

また、第6回の研究科FD会議において、放送大学教養学部・大学院文化科学研究科臨床心理学プログラム教授である大山泰宏先生を講師に招き、臨床心理学研究科FD研修会「臨床心理士養成課程における倫理教育の実践について」を開催した。過年度に開催できずに先送りになっていた実務家教員対象の研修会は、本研修会によってようやく実現することができ、本研究科における長年の課題をクリアした。

令和5年度の研究科FD会議において、複数回に亘って議論されたのが「修了予定者アンケート」に関する再検討であった。本学において全学教学IR体制へアンケート調査一元化の方向性が示される中、本研究科においては、令和4年度から定例化した「入学生アンケート」に加えて、「修了生アンケート」を作成して適宜実施している。これらの取組みにより、入学から修了までの全教育課程において、学生からの意見を聞き取る体制が整い、FD活動の根幹である、学生への授業内容及び教育・指導の改善に系統立てて取り組むことができてきた。今後、アンケートを積み重ね、包括的なデータ分析を行うことで、専門職学位課程である高度専門職業人の教育方法に関する、より具体的な改善が可能となると期待している。

ベストティーチャー賞については、令和3年度に選定基準の検討を始め、令和4年度にベストティーチャー賞候補者の選定基準を設定し、部局内FD会議での議論を経て候補者を推薦してきた。しかしながら、令和5年度の全学FD委員会において、令和4年度ベストティーチャー賞選考委員会より最優秀賞受賞者の選考過程における一定の見解が示され、例えば授業アンケート結果や学生からのコメントに関して、候補者の卓越した指導力を発揮している根拠として学生の声だけでは不十分と言わざるを得ないとされている等、組織として被推薦者を選出するに当たって採用した根拠資料やその論理についても厳しく妥当性が問われた。この流れの下、本研究科において令和4年度に取り組んだ選考方法を再考する必要が出てきた。その結果、部局内FD会議の議論を経て、本部局からは令和5年度は候補者を選出しないこととした。

教員のFD参加率については、令和4年度に引き続き、定例会議として教授会後に梓づけしたことにより、引き続き出席率は高く、FD参加率は100%であった。なお、全学あるいは他部局企画のFD研修会・講演会・フォーラム等への参加は、研究科企画に比して限られており、部局内の研究科教員の業務多忙を勘案しながら、高度専門職業人の養成に益する自身の研究機会を探るより積極的な姿勢が求められる。

3. 授業評価アンケート及びフォローアップセッション実施に対する検討

(1) 授業評価アンケートの実施対象科目 (特筆すべき取り組み2)

学生による授業評価アンケートは、本研究科開講科目の全て（講義科目、演習科目、実習科目）を対象とし、通常は、前期は6月初旬と7月中旬の2回、後期は11月中旬と1月中旬の2回、毎年計4回の授業評価アンケートを実施している。また、受講生に対し、アンケート結果と、それをふまえての授業改善対策を報告できるよう、授業の7回目と14回目にアンケートを実施する仕組みを作っている。令和5年度は、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の5類感染症移行へと学習環境が改善しつつある中、実習科目を含め全ての授業において授業評価アンケートは予定通りに実施できた。

講義科目、演習科目、実習科目の評価項目は、それぞれ以下の枠内の通りである。回答形式は、評価5の「そう思う」から評価1の「そう思わない」までの5件法だが、令和4年度より評価1～2をつけた場合の理由記載を求めないでアンケートを実施した。

<講義科目>

1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか。
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか。
(テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください)。
3. 本講義科目の内容は理解できましたか。
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか。
5. 本講義科目の内容に満足していますか。
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください。
7. 本講義科目に対するご意見を自由にご書いてください。

< 演習科目 >

1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか。
2. 本演習科目の内容は理解できましたか。
3. 本演習科目の内容に満足していますか。
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか。
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか。
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください。
7. 本演習科目に対するご意見を自由に書いてください。

< 実習科目 >

1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか。
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか。
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか。
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください。
6. 本実習科目に対するご意見を自由に書いてください。

(2) 授業評価アンケートの結果

学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りであった。

表 3-1. 前期第 1 ～ 2 回目の講義科目における授業評価 (3 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5.0	4.0	4.5	4.7	4.0	4.4
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.7	4.6	5.0	4.3	4.7
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5.0	3.3	4.4	4.7	3.3	4.0
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.7	4.5	5.0	3.7	4.6
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5.0	3.7	4.4	4.7	3.7	4.3
6. 本講義科目を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	3.7	4.4	4.7	3.7	4.3

(科目名)臨床心理学原論／臨床心理学入門／コミュニティ心理学論

表 3-2. 前期第 1 ～ 2 回目の演習科目における授業評価 (7 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5.0	4.0	4.6	5.0	3.9	4.7
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5.0	3.6	4.6	5.0	3.7	4.6
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5.0	3.9	4.7	5.0	4.1	4.7
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	4.0	4.7	5.0	3.7	4.7
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.7	4.6	5.0	4.0	4.7
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	4.0	4.7	5.0	4.1	4.7

(科目名)臨床心理査定演習Ⅰ／臨床心理面接演習Ⅰ／臨床心理関連行政論／臨床心理事例研究演習Ⅰ／総合的事例研究演習Ⅰ／学校心理臨床論／福祉心理臨床論

表 3-3. 前期第 1 ～ 2 回目の学内実習科目における授業評価（4 科目平均評価点）

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5.0	4.0	4.8	5.0	4.3	4.8
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか	5.0	4.5	4.9	5.0	4.0	4.8
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	4.0	4.7	5.0	3.8	4.7
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5.0	3.2	4.7	5.0	4.2	4.7
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.8	4.7	5.0	4.2	4.8

(科目名)臨床心理査定・面接実習Ⅰ／臨床心理査定・面接実習Ⅲ／臨床心理実践研究Ⅰ／臨床心理実践研究Ⅲ

表 3-4. 前期第 1 ～ 2 回目の学外実習科目における授業評価（2 科目平均評価点）

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか				5.0	4.5	5.0
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか				5.0	4.5	5.0
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか		(実施なし)		5.0	4.0	4.9
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか				5.0	4.0	4.9
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください				5.0	4.0	4.9

(科目名)臨床心理地域援助実習Ⅰ／臨床心理地域援助実習Ⅲ

表 3-5. 後期第 1 ～ 2 回目の講義科目における授業評価（3 科目平均評価点）

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5.0	4.0	4.6	5.0	4.0	4.6
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	4.0	4.6	5.0	3.0	4.4
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5.0	3.7	4.4	5.0	2.3	4.2
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.7	4.6	5.0	2.7	4.5
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5.0	3.7	4.6	5.0	3.0	4.4
6. 本講義科目を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	3.7	4.6	5.0	3.3	4.5

(科目名)臨床心理面接学原論／集団心理臨床論／ストレスマネジメント論

表 3-6. 後期第 1 ～ 2 回目の演習科目における授業評価（5 科目平均評価点）

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.6	4.6	5.0	3.6	4.8
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5.0	3.6	4.6	5.0	3.4	4.6
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5.0	3.4	4.6	5.0	3.6	4.7
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.8	4.7	5.0	3.6	4.8
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.8	4.7	5.0	4.0	4.8
6. 本演習科目を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	4.0	4.7	5.0	3.4	4.7

(科目名)臨床心理査定演習Ⅱ／臨床心理面接演習Ⅱ／臨床心理事例研究演習Ⅱ／総合的事例研究演習Ⅱ／臨床心理査定特論

表 3-7. 後期第 1 ～ 2 回目の学内実習科目における授業評価（4 科目平均評価点）

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5.0	3.5	4.6	5.0	4.0	4.7
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか	5.0	4.0	4.8	5.0	4.0	4.8

3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	4.0	4.8	5.0	4.2	4.8
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5.0	3.8	4.6	5.0	3.8	4.7
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	4.0	4.7	5.0	4.0	4.7

(科目名)臨床心理査定・面接実習Ⅱ／臨床心理査定・面接実習Ⅳ／臨床心理実践研究Ⅱ／
臨床心理実践研究Ⅳ

表 3-8. 後期第1～2回目の学外実習科目における授業評価（2科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか				5.0	4.0	4.9
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか				5.0	4.5	4.9
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか		(実施なし)		5.0	4.0	4.9
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか				5.0	4.0	4.9
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください				5.0	4.0	4.9

(科目名)臨床心理地域援助実習Ⅱ／臨床心理地域援助実習Ⅳ

(3) 集計結果のフィードバックと授業評価報告書の提出及び授業改善に向けた組織的対応

(特筆すべき取り組み 3)

学生による授業評価アンケート結果は、研究科事務補佐員により回答者の匿名性が担保された状態で処理・集計がなされ、各担当教員に集計結果がフィードバックされる。各担当教員は、集計結果を確認し、授業に対する自己評価や自由記述欄に記載されている学生からの意見等も考慮した上で、「学生による授業評価を受けての報告書」を作成する。前期・後期それぞれ2回の授業評価アンケート結果については、該当月の教授会にてファカルティ・ディベロプメント委員長が報告を行い、加えて同日に開催される研究科FD会議においても学生による授業評価アンケート結果を改めて全教員で共有する。そして各担当教員がアンケート結果を受けて作成した「学生による授業評価を受けての報告書」をもとに、授業改善とその改善結果の検証を行っている。令和5年度は第3回、第5回、第8回、第10回の研究科FD会議において、授業評価アンケート結果について全教員で共有し、意見交換を行った。

授業改善とその改善結果の検証について、当研究科においては、学生による授業評価アンケートを1セメスターで2回実施し、1回目のアンケート結果を受けた授業改善の結果を2回目のアンケートで検証できるように設定している。さらに、授業担当教員は、授業毎に

作成する「学生による授業評価を受けての報告書」に授業改善、学生へのフィードバックや改善結果の検証についても記載している。これらのことから、令和3年度より研究科FD会議において、授業評価アンケートの結果報告と授業内容及び方法の改善についての意見交換を実施する際に、「学生による授業評価を受けての報告書」をもとに、各授業の担当教員から授業改善とその改善結果の検証についても報告を受け、全教員で共有し、意見交換を行ってきた。評価1～2をつけた場合にも理由記載を求めないことにより、実習科目だけでなく講義科目についても評価が下がる項目も見られ、授業のみを通した付き合いの浅い1年生では却って、改善を検討する手立てがなくなったとの担当教員の意見も見られた。令和4年度から実施している、項目評価の改善によって学生の率直な評価が反映されるようになった反面、教員側が担当科目の充実に向けた授業改善することのハードルが上がった面も見られた。令和5年度においても引き続き、前述の「学生による授業評価を受けての報告書」を積極的に活かし、研究科FD会議において学生のニーズに応じた授業科目の内容検討及び改善、さらに改善結果の検証についての意見交換を行うことを通して、ファカルティ・ディベロップメント活動に資することができた。

(4) 臨床心理学研究科独自の取組みとしてのフォローアップセッション

(特筆すべき取組み 4)

本研究科では、専門職大学院における臨床心理実習の評価方法として、平成20年度より九州大学との共同で、専門職GPとして「臨床心理実習における客観的評価の方法の構築」と題する臨床心理実習到達度チェックシステムを導入し、各セメスターにおいて臨床心理実習の客観的評価を実施していたが、これらの評価システムは学生や教職員の負担が大きかったため、平成23年度～平成25年度の間中断された。しかしながら、臨床心理実習において、学生が主体的に到達度評価を行い、かつ教員が学生に対して適切なフィードバックを行うという教育方法の実践が、実務実習教育上、重要であることが再確認されたことから、平成26年度より臨床心理実習到達度チェックシステムの中から、学生が学内及び学外実習体験を指導教員と共有することを目的としたフォローアップセッションの部分が再開された。令和4年度も、より充実した臨床心理実習の実現と教育方法の改善を目指して、フォローアップセッションの実施が継続された。なお、この試みは臨床心理実習科目のGPA導入を視野に入れた新たな評価方法の構築可能性を検討することを目的としていたこともあり、これまで、セルフモニタリングの機会として、学生自身による臨床心理実習到達度チェックシートにもとづくポートフォリオの作成を義務付けていた。しかし、この作業自体に負担を感じる学生もいたため、平成29年度からポートフォリオ作成については、各臨床ゼミの方針に委ねることとなった。そのため、令和5年度もチェックシートに設定された評価項目毎の統計的な数値化は行わず、心理臨床の本質である学生各自の学びを重視するフォローアップセッションを実施した。その内容は、第5回と第10回の研究科FD会議（実習委員会との合同会議）で報告され、フォローアップセッションの実施方法と内容について共有し、改

善すべき点を話し合った。

本研究科の学生たちは、学修の目標について、例えば、ポートフォリオの一部であるセルフモニタリングシートにおいて、「今期の目標」をセメスターの始めに設定し、セメスター終了後には、指導教員とのフォローアップセッションを通して、「成長した点」、「課題」、「フォローアップセッションでの気づき」等について話し合うなどして、セメスター毎に自身の学修や課題を振り返る作業を行っている。このような指導教員とのフォローアップセッションは、各学生と個別に実施される場合や学年毎に実施される場合など、様々な形態があり、どのような形態で実施するかは指導教員に任されている。指導教員はセメスター毎に、学生の学修状況や態度、関係性等から、その実施形態を検討・選択して実施している。個別に実施される場合は、臨床ゼミでは取り上げにくいような個人的な指導が可能となり、学年別や臨床ゼミ全体で実施される場合には、他学生の振り返りを知ることで、自身の学修をより相対的なものへと深化させることが可能になる。当研究科の学生たちは、このようなフォローアップセッションを通して、専門職業人としての臨床力を向上させていくことが期待されている。令和5年度も、ポートフォリオの一部であったセルフモニタリングシートを「自己評価シート」とし、項目を「今期の目標」「達成した点」「今後の課題」「フォローアップセッションでの気づき」と読み替えて、学生の実習に関する根拠資料である「実習記録ノート」の一部とすることにした。このことにより、学生各自が「自己評価シート」を用いて、「今期の目標」をセメスターの始めに設定し、学修の目標を意識できる。そしてセメスター終了後に実施される指導教員とのフォローアップセッションにおいて、「達成した点」「今後の課題」「フォローアップセッションでの気づき」の振り返りを深め、学修の深化が期待される。

また、令和3年度から再開されたフォローアップセッション・アンケートについても、継続して実施した。本アンケートは、学生が記入後、研究科専門職大学院支援室事務補佐員へ提出し、学年毎に取りまとめたアンケート結果については、同事務補佐員からFD委員長にフィードバックされた後、研究科FD会議において全教員に共有され、フォローアップセッションのあり方や実施方法等について検討された。令和5年度については、対面にて実施した臨床ゼミがほとんどで、アンケートの回答率は前期100%（28名）、後期100%（27名）だった。設問1つ目のフォローアップセッションの感想については、前期28件、後期27件寄せられ、「学習の振り返りや今後の課題が明確になった」「心構えができた」「不安や悩みを聞いてもらえた」「振り返りができた」「他の人の意見が聞けてより明確になった」等、肯定的な意見が多くを占めた。また、設問2つ目の実施方法や目的などについての要望に関しては、前期7件、後期7件の意見が寄せられ、指導教員との一対一での実施への感謝、学びの深化が促されたといった肯定的意見と、オンライン実施ではなく対面での希望、自己評価シートに基づく実施を窮屈に感じる等、実施方法への要望も見られた。フォローアップセッションのあり方については、今後もアンケートを積み重ねながら研究科FD会議で引き続き検討していきたい。

4. ベストティーチャー賞候補者の選定に関する検討

(改善事例 1)

本研究科のベストティーチャー賞候補者の選定基準としては、年度内に開講した全授業のうち履修生が10名以上である授業を対象とし、これまで各semesterで2回ずつ実施してきた「学生による授業評価アンケート」に加え、新たに、学生に対し、受講後に「受講してよかった」と思う授業を3つ以内で推薦してもらう形式の「学生による授業評価アンケート2」を実施し、これら2種のアンケートによる授業評価の最も高かった授業を担当した教員もしくはチームを候補者(案)とした。その上で部局内FD会議において、全教員で総合的に検討し、ベストティーチャー賞候補者を決定することとしてきた。

しかしながら、令和5年度の全学FD委員会において、令和4年度ベストティーチャー賞選考委員会より最優秀賞受賞者の選考過程における一定の見解が示され、例えば授業アンケート結果や学生からのコメントに関して、候補者の卓越した指導力を発揮している根拠として学生の声だけでは不十分と言わざるを得ないとされている等、組織として被推薦者を選出するに当たって採用した根拠資料やその論理についても厳しく妥当性が問われた。本研究科においては、授業科目の特質からアンケート以上の根拠資料を提出するためには、全授業科目に関して担当教員相互の審査機会を設けるなどの工夫が必要であり、現行のカリキュラム運営をこなす上では相当の負担をクリアしなければならない。

そのような部局独自の教授システムを他部局にも具体的に示さなければならないというハードルを意識せざるを得なくなり、令和5年度のベストティーチャー賞について、上記の流れを受けて第10回研究科FD会議において検討した結果、令和5年度のベストティーチャー賞候補者の推薦を見送ることに決定した。

5. 入学生アンケートの定例化

(特筆すべき取り組み 5)

過年度には断続的に実施していた入学生へのアンケート調査であったが、入学後、高度専門職業人を養成する学習へとスムーズに導入する教育のあり方を検討すること、及び今後の入試広報等に活かすことを目的とし、令和3年度から定例化して実施している。

令和5年度の入学生アンケートの結果は、以下の通りであった。

回答期間: 2023年4月20日(木)～4月28日(金) / 回答数: 10件(回答率 67%)

項目1 本研究科を志望・受験した理由をご記入ください。複数、理由を記入して構いません(回答 10)

- * 実習及び学修環境が充実している 4名
- * 教員や専門領域 4名
- * 実践力をつけたい 3名
- * 資格取得その他 2名

項目2 本研究科をどうやって知りましたか。(回答 10)

* HP(ネット含む) 4名 * 大学での案内(学部教員を含む) 3名
* オンライン研究室訪問 1名 * オープンキャンパス 1名 * その他 1名

項目3-1 入学前に本研究科のホームページは見たか。(回答 10)

* はい 10名

項目3-2 HP には知りたい、役に立つ情報がありましたか。それはどんな項目ですか。また不足している内容があれば記述してください。(回答 10)

<役に立った>

* 教員情報 5名 * カリキュラム 1名 * 大学院の特徴・魅力 1名 * 学習内容 1名
* 進路状況 2名 * 入試情報 1名 * 国家試験合格率 1名

<欲しい情報>

リクエストは特になかった

項目4 本研究科の資料請求等の内容や事務手続き (回答 10)

* 肯定的(スムーズだったなど) 9名
* 特になし 1名

項目5 本研究科以外に大学院を受験されましたか。どこか差しさわりがなければ具体名を教えてください。また、合格通知後、本研究科を選択するにあたって、何が決めてとなりましたか。(回答 10)

* 受験していない 7名
* 九州圏内大学 2名 不明 1名

項目6 入学前、臨床心理士としてどのような職域に就きたいと考えていましたか(複数回答可)

* 医療領域 3名 * 福祉領域 7名 * 教育領域 4名 * 司法矯正領域 2名

項目7-1 入学前、本研究科のカリキュラムは魅力あるものでしたか。(回答 10)

※ 1: 魅力ある ~ 5: 魅力ない

項目7-1：入学前、本研究科のカリキュラムは魅力あるものでしたか。
10件の回答



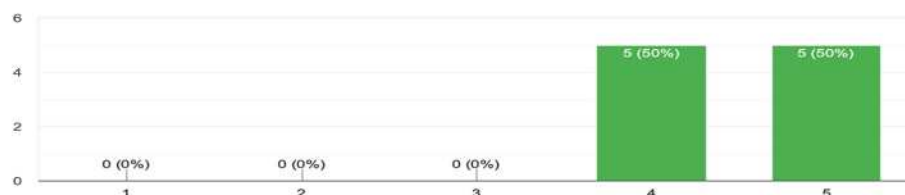
項目7-2 特に、魅力があると思われた点をご記入ください。(回答 7)

* 実習時間の多さ * 実践的知識・技能 * 領域の幅広さ * アクティブラーニング授業

項目8-1 入学前、本研究科の実習(学内実習・学外実習)は魅力あるものでしたか。(回答 10)

※ 1: 魅力ある ～ 5: 魅力ない

項目8-1：入学前、本研究科の実習(学内実習・学外実習)は魅力あるものでしたか。
10件の回答



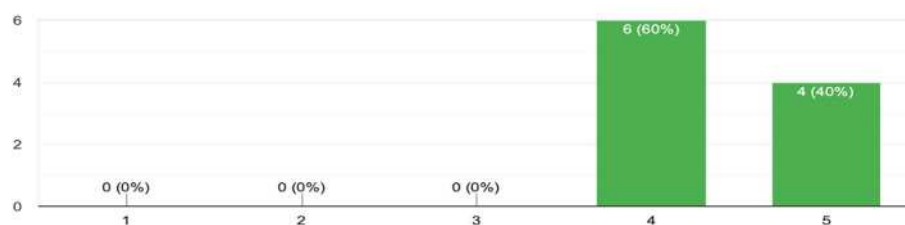
項目8-2 特に、魅力があると思われた点をご記入ください。(回答 7)

* 時間・領域が多い * 学外実習 * ケースカンファレンス

項目9-1 入学前、本研究科の教員(その研究領域)は魅力あるものでしたか。(回答 10)

※ 1: 魅力ある ～ 5: 魅力ない

項目9-1：入学前、本研究科の教員(その研究領域)は魅力あるものでしたか。
10件の回答



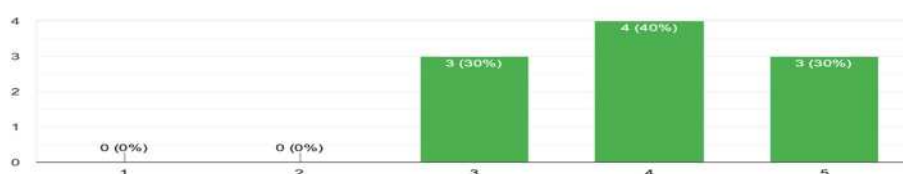
項目9-2 特に、魅力があると思われた点をご記入ください。(回答 6)

* 多領域の教員 3名 * 研究内容(司法矯正, 非言語表現, その他) 3名

項目10 入学前、鹿児島大学のキャンパスはどのくらい魅力を感じましたか(駅からのアクセスの利便性など含む)。(回答 10)

※ 1: 魅力ある ～ 5: 魅力ない

項目10：入学前、鹿児島大学のキャンパスはどのくらい... (駅からのアクセスの利便性等含む)。
10 件の回答



専門職学位課程という本研究科の特色あるカリキュラムや豊富な実習等については、令和4年度同様の高い評価を得ており、実践力をつけたいという入学生のニーズともマッチしていると言える。また、昨年度に課題になった情報内容の提示や事務手続き等に関しては、アンケート記入もなくなり、一定の改善がなされたものと評価することが出来る。

6. 修了予定者アンケートの再検討

(改善事例 2)

鹿児島大学では、本学の教育の内部質保障に関する推進要項（令和3年6月24日学長決裁）第5条及び第6条に基づき、実施単位（各部局）ごとに自己点検・評価を行う必要がある。そのうち、毎年度実施するモニタリングの「卒業（修了）時の学生からの意見聴取の結果により、大学等の目的及び学位授与方針に即した学習成果が得られていることを確認しているか」という観点に基づき、当研究科においても修了予定者アンケートを設定し、令和4年度より実施している。

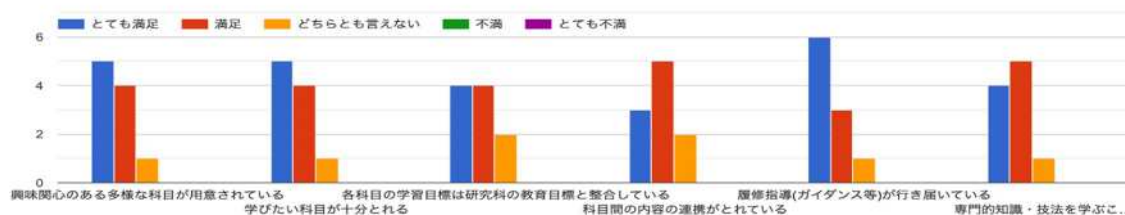
令和5年度には教学IR体制の下、卒業及び修了後3年を経過した卒業・修了生へのアンケートが実施され、初回においては、本学が過去に修了生アンケートとして実施した学年の修了生からの別立て項目のフィードバックも得られた。高度専門職業人である臨床心理士、公認心理師を養成する専門職大学院として、社会からのニーズに対応できるよう、今後もFD活動の継続により、計画的かつ柔軟性のある授業改善への取り組みが期待される。

令和5年度の修了予定者アンケートの結果は、以下の通りであった。

回答期間: 2023年2月28日(水)～3月12日(火) / 回答数: 10件(回答率 77%)

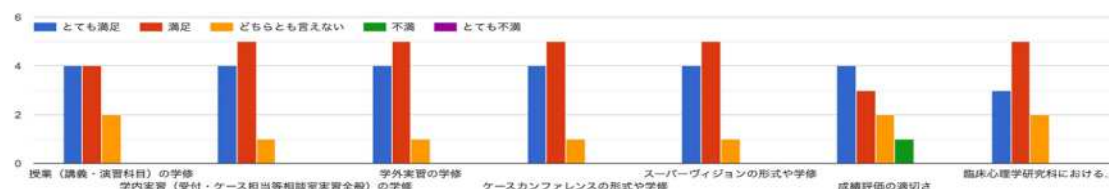
問1 本研究科のカリキュラム(履修科目の数や構成、学年配当、時間割等)に対して、総じてどれくらい満足していますか。それぞれについてお答えください。

問1 本研究科のカリキュラム（履修科目の数や構成、学年配当、時...れくらい満足していますか。それぞれについてお答えください。



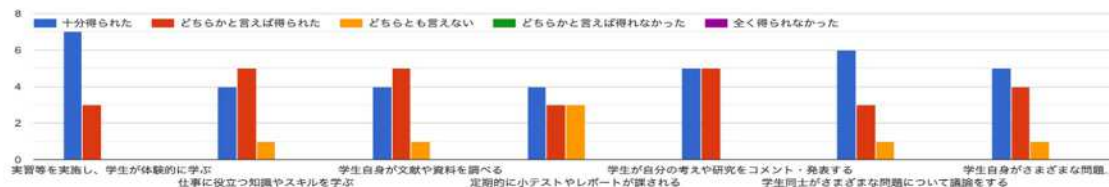
問2 本研究科の教育内容に対して、総じてどれくらい満足していますか。それぞれにお答えください。

問2 本研究科の教育内容に対して、総じてどれくらい満足していますか。それぞれにお答えください。



問3 あなたは、次のような授業経験を通して、十分な学びが得られましたか。それぞれお答えください。

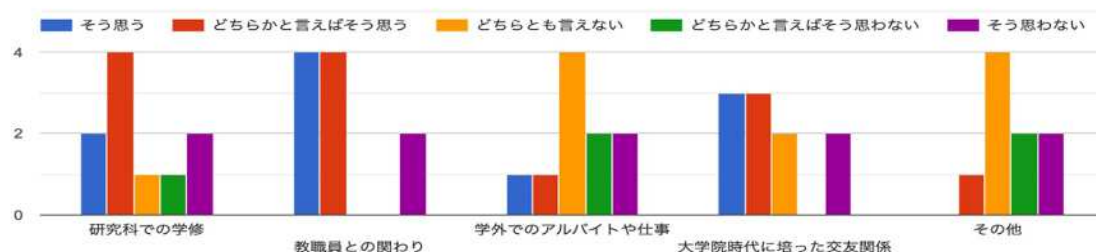
問3 あなたは、次のような授業経験を通して、十分な学びが得られましたか。それぞれにお答えください。



問4 これまでの学生生活について教えてください。

4-1 令和4年度修了予定の皆さんにとって、学生生活は「新型コロナウイルス感染症(covid-19)に大きく影響を受けたものと思います。以下の活動は、コロナ流行下の学生生活を乗り切る「原動力」にどの程度なったと思いますか。それぞれについてお答えください。

問4 これまでの学生生活について教えてください。 4-...たと思いますか。それぞれについてお答えください。



4-2 上記4-1で「その他」に「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した方のみ、可能な範囲でその具体的な内容についてお答えください。

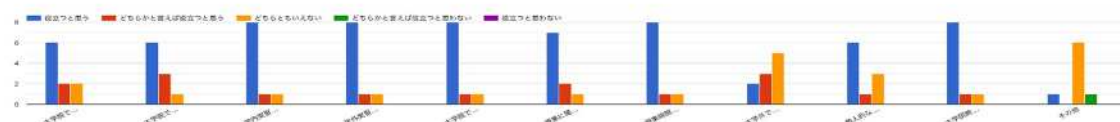
(回答なし)

4-3 本研究科のより良い教育に向けた改善があれば教えてください。

公認心理師試験の日程がズれることを入学した時点でわかっていたのに、実習開始する日が遅く、ケースを多く持てなかった。わかっているなら早めに対応したほうが良いのではと思った。

問5 最後に、大学院生活での以下の活動や経験は、今後のあなたの成長（職場での臨床実践など）にどれくらい役立つと思いますか。それぞれお答えください。

問5 最後に、大学院生活での以下の活動や経験は、今後のあなたの成長（職場での臨床実践など）にどれくらい役立つと思いますか。それぞれお答えください。



『教育内容』『カリキュラム』『授業を通しての学び』について、概ね満足しているという回答が得られた。『授業を通しての学び』にある「学生間で議論する」「学生自身がコメント・発表する」「学生自身が取り組む」において、学びが得られたという意見の一方で、研究科教育の改善へ向けられた「相談室の担当ケースを多く持つようにしてほしい」という趣旨の意見からは、教員から提供される学修だけでなく、臨床実践を通したより主体的な学修を求める学生がいるように思われる。少人数であるが故に個別性に開かれ、より主体的な学びを想定した教育が求められている、と考えられる。今後もデータを積み重ね、丁寧な検討が必要と思われる。

7. 臨床心理学研究科 FD 研修会の開催

(特筆すべき取り組み 6)

本研究科では、全学FD委員会によるFD研修に加え、臨床心理学研究科FD委員が全学・学外で研修した内容をFD会議で共有することが定例化している。令和5年度の途中から、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）による出張見合わせが解除されて、学外のFD関連研修会への参加を再開した。参加期日の関係で開催地への参加は困難であったが、オンライン研修に参加した内容を部局内FD会議で配布資料を用いて共有した。また、表7-1に示すように、COVID-19による学外講師を招いたFD研修会が開催できずに来ていたが、ようやく本学に招いて対面での研修会を実施することができた。倫理とエトスという根本原理のところから我々の専門職を捉え直す作業を始めて、大学院における臨床心

理実践家の養成について、より根本的な課題や対策に触れる講話をいただいた。質疑応答の時間には本部署の教員から積極的に質問がなされ、講師からの応答を通して場全体に活発な交流の雰囲気が生まれた。また、レクチャー後には、本研究科教員のみでなく、養成中の大学院生にも質疑の時間を設け、活発な交流が行われた。

表 7-1 臨床心理学研究科内で開催された研修会

月 日	テーマ	講師
11 月 1 日	「臨床心理士養成課程における倫理教育の実践について」	大山泰宏 先生(放送大学大学院文化科学研究科臨床心理学プログラム教授)

8. 授業公開・参観の取組み

当研究科では、専任教員が心理臨床相談室で相談ケースを担当することに加え、学生が担当するケースのスーパーヴィジョンを行う等の実習指導に時間をかけるため、授業時間割をスライドして編成せざるを得ず、また、守秘義務の観点からは、研究科内のみの公開とせざるを得ないため、授業参観が困難であった。実際、平成 30 年度まで実績がないままとなっていたが、令和 3 年度 FD 活動報告にあるように、他教員の授業参観を希望する声が挙がったことを契機に、授業公開・参観が再開されることになり、授業期間全体を実施期間と設定し、適宜、参観を希望する教員が直接、授業担当教員と調整して実施することとした。具体的には、授業参観が実施された場合には、参観教員が「鹿児島大学大学院臨床心理学研究科授業参観報告書」を作成し、FD 委員会に提出し、ファカルティ・ディベロプメント委員長が研究科 FD 会議にて全教員へ報告するという体制を整えている。令和 5 年度は、授業参観希望者がいなかったため授業公開・参観が実施されなかった。次年度以降は、より積極的に授業公開・参観が実施されて授業改善に繋げることを研究科内の教員間に醸成する必要性が考えられる。

9. 臨床心理学研究科 FD 活動の特筆すべき取り組みや改善事例

令和 5 年度の臨床心理学研究科 FD 活動における特筆すべき取り組みや改善事例については、上記、2～6 に詳細に記載しているが、以下にそれぞれに並べ直して要点を示すことにする。

【特筆すべき取り組み】

(2) 臨床心理学研究科専任教員全員による研究科 FD 会議 (特筆すべき取り組み 1)

本研究科では、研究科 FD 会議を教授会同日に設定し、毎月開催する体制を整えている。令和 4 年度も、COVID-19(新型コロナウイルス感染症)の感染状況が変動する中、遠隔 Zoom

での会議形態をとることで、予定通り、年間 11 回の研究科 FD 会議を開催した。令和 5 年度は、修了時アンケートの再検討やベストティーチャー賞候補者選定に関する検討等、改めての再検討が重なったが、今年度内では十分な議論が尽くせず、令和 6 年度以降の FD 活動として引き続き検討していくことになった。

(3) 授業評価アンケート及びフォローアップセッション実施に対する検討

(3-1) 授業評価アンケートの実施 (特筆すべき取り組み 2)

本研究科では、「学生による授業評価アンケート」を授業改善に活かすために、各セメスターの第 1 回目アンケートを 7 回目授業、第 2 回目アンケートを 14 回目授業に実施し、その翌週の第 8 回目と第 15 回目授業で、各教員が受講生の意見や授業改善についてフィードバックすることを組織的に実施している。また、各セメスターで 2 回の授業評価アンケートを実施することで、1 回目の授業改善について、2 回目のアンケート結果から改善結果の検証ができるように設定されている。令和 4 年度も 2 セメスターで計 4 回の授業評価アンケートを実施し、結果は教授会で報告された。また、同日に開催される研究科 FD 会議にて、授業担当教員が担当授業について報告し、全教員で共有し、授業の改善について検討された。

(3-3) 集計結果のフィードバックと授業評価報告書の提出及び授業改善に向けた組織的対応

(特筆すべき取り組み 3)

学生による授業評価アンケート結果は、研究科事務補佐員により回答者の匿名性が担保された状態で処理・集計がなされ、各担当教員に集計結果がフィードバックされる。各担当教員は、集計結果を確認し、授業に対する自己評価や自由記述欄に記載されている学生からの意見等も考慮した上で、「学生による授業評価を受けての報告書」を作成する。当研究科では、1 回目のアンケート後になされた授業改善について、2 回目のアンケートで改善結果の検証を行うことができる仕組みを作っており、それらについても「学生による授業評価を受けての報告書」に記載される。令和 4 年度も第 3 回、第 5 回、第 7 回、第 10 回の研究科 FD 会議において、授業担当者がこの報告書をもとに授業改善や改善結果の検証について報告し、全教員で共有して意見交換を行った。

(3-4) 臨床心理学研究科独自の取り組みとしてのフォローアップセッション (特筆すべき取り組み 4)

本研究科では、各セメスター終了後に臨床ゼミ担当教員によるフォローアップセッションを実施している。そこでは、学生の臨床実習に伴う不安が軽減されたり、学生間で振り返りを共有したりすることで自身の学びが相対化される等、より充実した学修がなされている。令和 4 年度 of フォローアップセッションから、それまでその使用が任意であった「セルフモニタリングシート」を「自己評価シート」と改め、学生の実習に関する根拠資料である「実習記録ノート」の一部に組み込んで、学生各自が各セメスターの始めに「今期の目標」を意識し、セメスター終了後に実施される指導教員とのフォローアップセッションにおい

て、「達成した点」「今後の課題」「フォローアップセッションでの気づき」の振り返りができるように改善されている。令和5年度のアンケート結果については、研究科FD会議において全教員に共有され、フォローアップセッションのあり方や実施方法等について検討された。

(5)入学生アンケートの定例化

(特筆すべき取り組み 5)

入学生を対象にした入学生アンケートは、令和3年度から定例化し、令和5年度も継続して実施した。専門職学位課程としての本研究科の特色あるカリキュラムや豊富な実習などは、昨年度と同様、入学生から高い評価を得ており、実践力をつけたいという入学生のニーズともマッチしている。一方、入試前に「学生生活についての情報が欲しかった」という内容の意見もあったことから、今後、入試委員会とも連携し、学生の具体的なスケジュールや生活についての情報開示や、入試に係る事務手続きのスムーズさをよりスムーズにする等の課題について検討する必要があると思われる。

(7)臨床心理学研究科FD研修会の開催

(特筆すべき取り組み 6)

本研究科では、全学FD委員会によるFD研修に加え、FD委員が全学・学外で研修した内容をFD会議で共有することが定例化している。令和5年度の途中から、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）による出張見合わせが解除されて、学外のFD関連研修会への参加を再開した。また、ようやく学外講師を本学に招いて対面での研修会を実施することができた。倫理とエトスという根本原理のところから我々の専門職を捉え直す作業を始めて、大学院における臨床心理実践家の養成について、より根本的な課題や対策に触れる講話をいただいた。質疑応答の時間には本部局の教員から積極的に質問がなされ、講師からの応答を通して場全体に活発な交流の雰囲気が生まれた。

【改善事例】

(4) ベストティーチャー賞候補者の選定に関する検討

(改善事例 1)

鹿児島大学では、令和2年度より教員の意欲向上と大学教育の活性化を図るために、教育実践に顕著な成果をあげた教員をベストティーチャー賞として表彰する取り組みが始まっている。本研究科においては、令和3年度に選定基準の検討を始め、令和4年度にベストティーチャー賞候補者の選定基準を設定し、実際に候補者を推薦することができた。その選定基準は、年度内に開講した全授業のうち履修生が10名以上の授業を対象とし、各セメスターで2回ずつ実施してきた「学生による授業評価アンケート」に加えて、受講後に「受講してよかった」と思う授業を3つ以内で推薦してもらう形式の「学生による授業評価アンケート2」を実施し、これら2種のアンケートによる授業評価の最も高かった授業を担当した教員もしくはチームを候補者（案）とするものだった。しかしながら、令和5年度の全学FD委員会において、各部局としてベストティーチャー賞候補者の被推薦者を選出するに当た

って採用した根拠資料及びその論理に関する妥当性が問われることとなり、前年度に取り組んだ選考方法を再考する必要が出てきた。その結果、部局内 FD 会議の議論を経て、本局からは令和 5 年度は候補者を立てないこととした。今後、ベストティーチャー賞候補者を選定するに当たって、根拠資料を提示できるような本局の授業形態に即した具体的手順を再度検討する必要があると思われる。

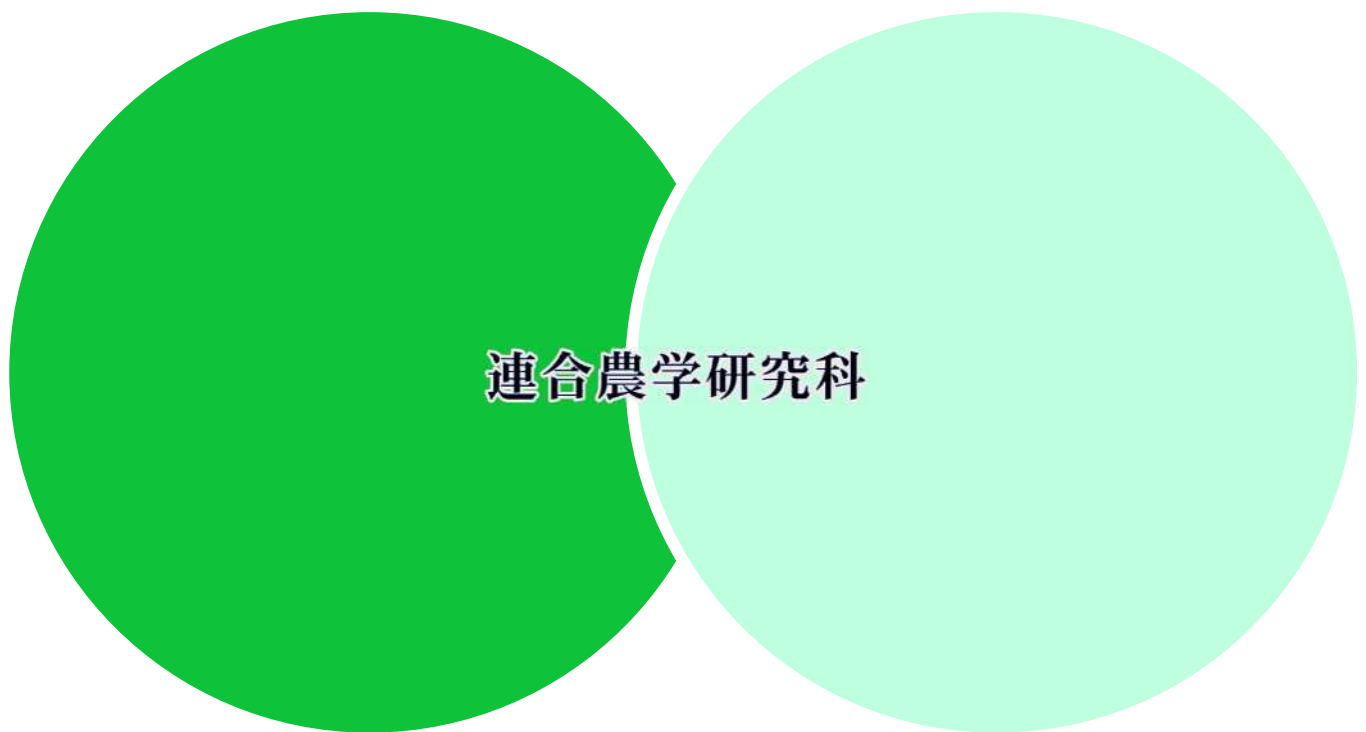
(6) 修了予定者アンケートの再検討

(改善事例 2)

本研究科においては、「国立大学法人鹿児島大学における教育の内部質保障に関する推進要項」に定めのある「卒業（修了）時の学生からの意見聴取の結果により、大学等の目的及び学位授与方針に即した学習成果が得られていることを確認しているか」という観点に基づき、当研究科独自に修了時アンケートを設定し、令和 4 年度より実施してきた。本研究科における FD 活動は、臨床心理分野専門職大学院として、高度専門職業人である臨床心理士養成を主眼とする上でも重要な活動である。これまでの「入学生アンケート」と「授業評価アンケート」に続き、令和 4 年度からは「修了予定者アンケート」が作成・実施されたが、これにより、入学時から修了時までの全教育課程を通して、学生からの要望や意見を取り入れる体制を整えてきた。

令和 5 年度のデータ分析からは、「教育内容」「カリキュラム」「授業を通しての学び」について、概ね満足しているという回答が得られている。さらに、大学院教育の改善に向けた意見等からは、教員から提供される学修だけでない、より主体的な学修を求める学生がいることが窺われる。また、令和 5 年度には全学教学 IR 体制の下、卒業及び修了後 3 年を経過した卒業・修了生へのアンケートが実施されて、本局が過去に修了生アンケートとして実施した修了生から別立て項目のフィードバックも得られた。今後も、修了予定者アンケートのデータを積み重ねて丁寧な分析を行うことと併せて、臨床心理学研究科 FD 活動の根幹としても、授業内容や教育に対する改善に資するより優れた検討資料が得られると期待される。高度専門職業人である臨床心理士、公認心理師を養成する専門職大学院として、社会からのニーズに対応できるよう、引き続き臨床心理学研究科 FD 活動の一環としての取り組みが期待される。

以上



F D活動報告書

(令和 5 年度)



鹿児島大学大学院連合農学研究科

令和 6 年 3 月

大学院連合農学研究科FD活動報告

1. はじめに

大学院連合農学研究科（連大）は、佐賀大学、琉球大学と鹿児島大学の3大学が相互に協力して教育を行う農林水産学系の博士課程大学院である。連大では、農学に関連する幅広い学問と高度な専門知識・技能を修得し、諸課題を探索・解決する能力を有する人材を育成すると共に、確かな分析力・俯瞰力・説明能力を身につけ、困難な課題に挑むチャレンジ精神やグローバルな視野を備え、地域社会と国際社会に貢献できる人材を育成することを目的としている。また、社会人並びに留学生を積極的に受け入れており、九州・沖縄からアジア、アフリカを見据えた農林水産学の教育研究の中核となるとともに、農林水産業及び地域の発展に寄与することを目的としている。

本研究科は、昭和63年（1988年）に設立され、約1,400名（内、留学生約700名）の学生を受け入れてきた。設立時は4専攻11連合講座だったが、平成21年（2009年）に3専攻9連合講座に改組し、単位制導入の改革を行った。令和5年4月1日現在、日本人学生52名、外国人留学生48名、計100名が在籍している。

博士の学位論文は、カリキュラムに基づいて12単位以上を修得の上、学位論文提出の基準を満たした者が提出する。学位論文を提出した学位申請者には、学位論文の公開審査及び最終試験を行い、合格した者に対して博士（農学、水産学、学術）の学位が授与される。連大では、学位取得後のキャリアパスを考えることを意図した人材養成学生支援セミナーや、国際感覚を養うことを意図した国際農学特別講義など、学士課程や修士課程では見られない特色ある科目を設け、大学院教育の実質化を目指している。さらに、年に一度、地理的に離れた3構成大学の学生が一堂に会して行う農学特別講義（一般セミナー）の実施や、多地点制御遠隔講義システム（SINET）を用いた授業を行うことで教育方法等の工夫を行っている。特に、SINETによる「農学共通講義（英語）」では、全国6連大から選出された教員（鹿児島連大からは2名選出）による先端研究に関する講義を英語で実施している。このセミナーでは、全国6連大の様々な地域の学生と同一の講義を共有することで、専門知識に加えて農林水産学における諸課題を俯瞰することが可能となっており、他に類を見ないユニークな教育システムとして高く評価されている。このような連大ならではの教育連携をさらに強固にするために、全国6連合農学研究科の博士課程学生の教育・研究指導委託に関する覚書を平成29年（2017年）10月に取り交わした。

本研究科では、学生1人に対し主指導教員1名、副指導教員2名の計3名による指導体制を取り入れているが、副指導教員には他の構成大学・研究科の教員を原則含めており、学生の研究指導においても構成大学の連携と指導の透明性を確保している。また、1年次の学生には「中間報告会」、2年次の学生には「中間発表会」を課すことで、学位取得へ向けた研究の進捗状況の検証を実施している。

FD活動に関しては、平成19年度に代議委員会の傘下としてFD委員会が設けられ、農学特別講義（一般セミナー）を中心とした授業アンケートの集計・解析評価を行い、改善に向けて取り組んでいる。令和5年度は合計2回のFD委員会を開催した。

令和5年度の活動報告では主に、農学特別講義（一般セミナー）、人材養成学生支援セミナーⅠ、分野別セミナー、修了生アンケート、連大指導教員資格取得者研修会等について取りまとめている。

2. 農学特別講義（一般セミナー）

令和5年度鹿児島大学大学院連合農学研究科（博士課程）「農学特別講義（一般セミナー）」が、令和5年11月6日（月）から11月8日（水）の3日間で開講された。開講趣旨は、本連合農学研究科に在籍する学生に本学の教育理念に基づき、幅広い専門領域の先端知識に触れるとともに、各学生によるプレゼンテーション、専攻セミナーなどを通じて発表能力、課題探求能力、創造性を養うことにある。令和2年度・3年度は、新型コロナウイルス感染症対策によりオンラインで実施したが、令和4年度より対面で実施し、令和5年度もグランドはがくれ佐賀（佐賀市）にて対面で実施した。内容は、外部から招聘した講師による講義4コマと、学生による「専攻セミナー（1年生プレゼンテーション）」と「情報交換セミナー（2年生ポスターセッション）」で、参加学生数は59名だった。

初日は13時から受講受付ののち、13時30分から開講式が行われた。総合司会と進行は、当番大学である佐賀大学の後藤文之教授、宗伸明教授、弓削こずえ教授により執り行われた。開講式では、寺田竜太連合農学研究科長による挨拶と、後藤文之教授から日程と注意事項が説明された。

○講義4コマについて

セミナーA：長崎大学のGregory N. Nishihara氏による講義「帰無仮説有意性検定を本当に理解していますか？」が行われた。講義では、聴講生のほとんどが関わる帰無仮説有意性検定について、現在の検定法の成立に関する歴史的背景や誤解等を説明され、P値の性質や正しい意味等についてご講義いただいた。近年、P値の誤用の蔓延が世界的に問題とされている中、学生にとっては貴重な情報に触れる機会となった。コーディネーターは鹿児島大学水産学部 石川学代議委員。

セミナーB：九州大学の田中充氏による講義「食品機能・品質の評価のための分析技術」が行われた。講義では、講師が研究されているMALDI MS イメージングなどの先端の分析化学的手法を使った食品成分の吸収性評価について、例えば、ジペプチドの並びが入れ替わるだけでもラット小腸の吸収性能が違ったり、経口摂取した特定のジペプチドが脳まで届くことを発見したりなど最新の成果を説明された後、最後に、引用数の多い論文は分析化学系（Lowry法やLaemmliバッファーなど）が多いことを示されて、分析化学の技術開発が熱いことをご紹介いただいた。学生にとって、食品分析化学の重要性や最先端に触れる貴重な機会となった。コーディネーターは、琉球大学農学部 高良健作代議委員。

セミナーC：龍谷大学の岩堀英晶氏による講義「植物寄生性線虫—その生態と農業とのかかわり—」が行われた。初めに線虫についての初歩的な説明がされ、ほとんどの線虫は文献未記載の種であることが紹介された。農業の被害におけるネコブセンチュウを主とする被害額は世界で約18兆円にもなるとされ、化学農薬で用いられる殺線虫剤に代わり、環境や人にやさしい防除法について紹介して頂いた。コーディネーターは琉球大学農学部 田場聡代議委員。

セミナーD：北海道大学の後藤貴文氏による「地域の豊かな自然や農資源を持続的に利用するデザイン型の牛肉生産システムへの革新」と題した講演が行われた。先端の生物科学技術を取り入れ、和牛の生産にエピジェネティックの代謝プログラミングを施し、太りやすい体質を有した和牛肉質の生産の実証例や、一方でIoTと宇宙技術を用いた管理システムを構築し、放牧地のモニタリング、ウシの行動把握、など農家の効率化・省力化の技術についてご紹介して頂いた。コーディネーターは鹿児島大学農学部 下桐 猛代議委員。

○情報交換セミナーについて

2 年生の情報交換セミナー(ポスターセッション)は初日の 16:20~17:50 および 2 日目 15:20~16:50 の 2 回に分けて行われた。29 名の学生を 2 つのグループに分け、学会のポスター発表形式で実施したことで、活発な意見交換と学生同士の交流が随所に見られた。参加した学生からは、自分の専門分野のみならず多様な研究分野の研究内容に触れることができ、意義深かったという声が多く聞かれた。また、他の学年や異分野の学生との親睦を深めることができたことは貴重な経験であったという意見が寄せられた。また、英語による発表や議論の良いトレーニングとなったという意見もあった。ただし、自分自身のポスター発表のコアタイムには他者の発表を見ることができずに残念であったという意見もあったことから、今後はグループ分けや時間配分などを再検討する必要があると思われる。

○専攻セミナーについて

2 日目の 9:00~10:30 ならびに 13:20~15:10 の計 3 時間にわたって、1 年生の専攻セミナー(プレゼンテーション)が行われた。1 人ずつ全員の前で自身の研究についてプレゼンテーションを行った。1 年生にとって、多くの聴衆の前で発表を行い、しかも、母国語が英語ではない学生にとっては英語で発表すると云った初めての貴重なプレゼンテーションであった。この経験は、今後、国際学会等で発表する上での良いきっかけになるものと思われ、アンケート結果から見ても教育効果は高かったと認められる。しかし、昨年度と同様に、時間の都合で発表後の質疑応答の時間が確保できなかった点を改善すべきとの意見が出ており、今後検討すべき問題である。また、英語でのプレゼンテーションに意識が偏ってしまうためか、日本人学生には英語に囚われて研究内容の発表が不十分に終わる場合があり、逆に、英語が流暢な留学生には相手の理解力を無視するような発表を行う場合もあり、両者共に、このセミナーにおけるプレゼンテーションの本来の目的を逸脱していると思える状況が度々見受けられたのは残念である。

2023年度 農学特別講義(一般セミナー)時間割(日程表)⁴⁾

会 場：グランデはがくれ (TEL: 0952-25-2212) (<https://www.grande-hagakure.com/>)⁴⁾

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	
11/6(月)	参考 那覇空港(7:20 発)→福岡空港(9:00 着) 高橋バス 福岡空港国内線ビル(9:20 発)→佐賀県バスセンター(10:33 着) 佐賀県バスセンターより徒歩 8 分				受付 ⁴⁾ 13:00~ 13:30	開講式 ⁴⁾ 13:30~ 14:00	セミナーA ⁴⁾ 「産物の産地・産地性を決定 を本場に理解していま すか?」 ⁴⁾ Gregory N. Nishihara ⁴⁾ 長崎大学 ⁴⁾ 14:00~15:30	ポ ス タ ー 準 備 ⁴⁾ 休憩 ⁴⁾	情報交換セミナー ⁴⁾ (2 年生ポスターセッション) ⁴⁾ 16:20~17:50	休憩 ⁴⁾	交流会 ⁴⁾ (はがくれ 会費当 日徴収) ⁴⁾
11/7(火)	受付 ⁴⁾ 8:30~9:00	専攻セミナー ⁴⁾ (1 年生プレゼンテーション) ⁴⁾ 9:00~10:30	休憩 ⁴⁾	セミナーB ⁴⁾ 「食品機能・品質の評価の ための分析技術」 ⁴⁾ 田中 充 ⁴⁾ 九州大学 ⁴⁾ 10:40~12:10	昼 食 ⁴⁾ 12:10~13:20	専攻セミナー ⁴⁾ (1 年生プレゼンテーション) ⁴⁾ 13:20~15:10	休憩 ⁴⁾	情報交換セミナー ⁴⁾ (2 年生ポスターセッション) ⁴⁾ 15:20~16:50	休憩 ⁴⁾	専攻セミナー ⁴⁾ (1 年生プレゼンテーション) ⁴⁾ 17:00~18:10	
11/8(水)	受付 ⁴⁾ 8:30~9:00	セミナーC ⁴⁾ 「植物寄生性線虫—その 生態と農業とのかかわり —」 ⁴⁾ 岩堀 英典 ⁴⁾ 鹿児島大学 ⁴⁾ 9:00~10:30	休憩 ⁴⁾	セミナーD ⁴⁾ 「地域の豊かな自然や農 産物を積極的に利用する デザイン・イン型」の牛肉生 産システムへの革新」 ⁴⁾ 徳藤 貴文 ⁴⁾ 北海道大学 ⁴⁾ 10:40~12:10	休憩 ⁴⁾	開講式 ⁴⁾ 写真撮影 ⁴⁾	参加予定人数 ⁴⁾ 2 年以上(ポスターセッション必須) 29 名 ⁴⁾ 1 年 RS.4 入学+RS.10 入学 31 名 ⁴⁾ 参考 福岡空港(20:50 発)→那覇空港(22:30 着) ⁴⁾				

令和5年度「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」参加学生へのアンケートの集計結果は次表のとおりである。〔参加学生：59名 アンケート提出者：55名 アンケート回収率：93%〕

令和5年度農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）アンケート調査結果

・セミナーの理解度について

〔回答項目〕	セミナーA	セミナーB	セミナーC	セミナーD
ほぼ理解できた	23名 (42%)	37名 (67%)	42名 (76%)	38名 (69%)
半分程度理解できた	24名 (44%)	17名 (31%)	12名 (22%)	17名 (31%)
理解できなかった	8名 (14%)	1名 (2%)	1名 (2%)	0名 (0%)

・専攻セミナー等について

〔回答項目〕	1年次 プレゼンテーション	2年次 ポスターセッション
意義がある	40名 (73%)	46名 (84%)
少しは意義がある	14名 (25%)	8名 (14%)
その他	1名 (2%)	1名 (2%)

・セミナーの企画・運営等について

〔回答項目〕	日程（時期）	日程（日数）
良い	43名 (78%)	46名 (84%)
悪い	7名 (13%)	7名 (13%)
その他	5名 (9%)	2名 (3%)

①セミナーの理解度について

本年度の4つのセミナーの内容は、A 仮説検定の統計学、B 機能性食品成分の分析化学、C 線虫と農業、D 代謝プログラミングやIoT放牧肥育に基づく先端畜産学であり、参加者からは「ほぼ理解できた」の回答が42%～76%であった。統計学の内容がやや難解であったようであるが、「統計学の概念を理解することは重要」との意見は多く、企画者の意図が伝わったと思われる。一方、他のセミナーは、研究事例の紹介等を含んでおり、スライドと解説の主旨が捉え易かったようである。概して、英語を中心としたセミナーであったが、例年の意見として一部の日本人学生からは日英併用の希望が挙げられた。

②専攻セミナー等について

1年次プレゼンテーションは、「意義がある」の回答が73%であった。発表の研究分野が多岐に渡っていることに対して肯定的と否定的な意見があり、「幅広いテーマを聞けて有意義であった」や「分野により十分に理解できなかった」等の意見があった。また、質疑応答の時間を望む意見があった。

2年次のポスターセッションは、「意義がある」の回答が84%であった。上述のプレゼンテーションと同様に多岐に渡る研究分野に対する感想が散見されたが、概ね「十分な議論が出来た」や「他人のポスター発表から多くを学んだ」、「自身の研究の進捗状況を自覚出来た」等、満足度の高い意見が多かった。

た。一部の学生から、ポスター発表時間が長すぎたことや、発表方法、掲示日数に関する改善の要望があった。また、優秀発表者に対する表彰制度の導入の意見もあった。

③セミナーの運営・企画等について

セミナーの開催時期については 78%の学生から「良い」との評価が得られ、日数については 84%の学生から「良い」との評価が得られた。

④セミナー全般について（学生の意見・感想）

- ・日本の新しい地域（佐賀）を訪れることが出来た。
- ・科学コミュニティ内でのネットワーキングと知識交換のための貴重なプラットフォームが得られ、アイデアを共有し、多様な視点からの洞察力を養うことが出来た。
- ・他の学生の研究から刺激を受け、彼らと一緒に卒業する意欲が湧いた。
- ・社会人博士の方々と交流をすることで、今自分が置かれている価値や立場などが分かった。
- ・博士課程は英語能力がとても重要であると実感出来たセミナーであった。

<特筆すべき取組・改善事例>

本年度の講義は、佐賀大学がコーディネーターとなり、佐賀市内のホテルにて開催した。コロナ禍の収束に伴い、昨年の対面実施に続き、今年は懇親会も再開したことにより、コロナ禍前の実施要領に概ね戻ったことになる。立派なホテルであり、講義会場は非常に快適であった。参加学生にとっては、会場参集後から3日間にわたる講義イベントでハードスケジュールとなったかもしれないが、合宿の雰囲気もあり、3大学連大生の連帯感が高まったと思われる。また、昨年度の本セミナー後アンケートの結果を踏まえ、今年度は講義を3日間それぞれに分散させ、専攻セミナー・情報交換セミナーも続けて実施するのではなく、分散して実施することで、学生の集中力が切れない時間割組みを行った。

次年度に向けた検討事項としては、1年生による専攻セミナーの口頭発表において、昨年同様に質疑応答時間を設けることが出来なかったことである。全員が一堂に会して1年生全員の発表を聞くことは非常に有意義である一方、約30名の発表は時間に余裕が無く、質疑応答時間の省略または発表時間の短縮はやむを得ない。その他の方法として、分野別の分科会スタイルにして時間の効率化を図る方策もあるが、会場施設や経費の問題もあるため総合的に検討して改善を図りたい。

3. 人材養成学生支援セミナー I

令和5年7月26日（水）に鹿児島大学、佐賀大学、琉球大学を遠隔講義システム（SINET）で結び、「人材養成学生支援セミナーI」が開催された。本講義は、大学・研究所・企業等で活躍中の方々を講師として招き、企業や社会でどのような人材が求められているか等、今後の研究者・指導者としての道を開くための講義であり、連大生の受講者に加え、学部及び修士の学生にもオープンにしている。

セミナーは4つの講演と質疑応答からなり、その概要は以下のとおりである。

講義1：小山 秀美 氏（(国研) 農研機構 畜産研究部門）

題目：公的な立場での研究職について～畜産分野の実例と私の経験から～

本講義では、鹿児島連大を令和2年3月に社会人早期修了課程で修了された小山氏から現在勤務されている農研機構の概要や公的機関の研究職について紹介された後、携わってこられた肉用牛の育種改良

に関する研究の実例と現在の仕事の内容を分かりやすく紹介して頂いた。また、小山氏から、同氏がキャリアアップを目指して学位を取得し現在の研究職に転じたように、専門性を磨いて自分の道を開いてほしいという助言を頂いた。

講義2：庄子和博氏（(一財)電力中央研究所グリッドイノベーション研究本部 ENIC 研究部門）

題目：私の研究者としての歩み ～植物工場の社会実装を目指して～

本講義では、学部時代の電力中央研究所での見学から植物工場に憧れて研究職を目指した庄司氏が、植物工場の社会実装を目指して取り組まれた野菜工場の開発といった応用研究から分子生物学や理化学分析の基礎研究を使った機能性成分の増量技術の開発等の幅広いご研究内容をご講演いただいた。同氏の不断努力と様々な出会い等を通じて研究力を磨いて植物工場の社会実装に関する有益な技術を多数開発されてこられたお話は学生に大変良い刺激になった。

講義3：玉城磨氏（沖縄県農業研究センター）

題目：研究者として我々は何をすべきか ～公設試での経験を通して～

本講義では、所属機関（農業システム開発班）の紹介の後、玉城氏の主な仕事内容である1）台風対策・施設設計、2）施設内環境制御技術開発、3）農業機械・器具の開発改良に関する研究紹介がなされた。そして、公共研究所では、即戦力として地域貢献できる力量のある人材が必要とされているという説明があり、地域貢献は基礎研究がなければ達成できないので、その人材として博士号取得者が期待されているという説明があった。この講義では、地域貢献に資する即戦力として、博士人材の必要性が強調されていた。

講義4：瀬岡学氏（Seoka Aquaculture Consulting）

題目：されど、空の青さを知る

本講義は、現在滞在中のイスラエルにある養殖関連研究所からのオンライン講義であった。講義前半では、現職業である水産養殖分野のコンサルティングに関する仕事内容が紹介された後、近畿大学教員から海外養魚飼料メーカー社員を経て自営コンサルタント会社起業に至る研究・職業キャリアが紹介された。講義後半は、スマホを利用して研究所の施設を巡るオンライン・ツアーという構成であった。講義のタイトルは、「井の中の蛙大海を知らず。されど、空の青さを知る。」の省略形であり、後段の意味は「一つのことを突き詰めることによって、より深い知識を得ることができ、その人だけが知っている世界を深めることができる」である。瀬岡氏は、これを引いて、自分の基礎となる分野を深く追求し、博士課程学生の空が青く深いものになるように願うというメッセージを本講義で送られた。

人材養成学生支援セミナーⅠ 2023 日程表
Human Resource Development Seminar I 2023

8:50	9:00	10:30	10:40	12:10	13:30	15:00	15:10	16:40
7月26日（水）	開講挨拶	講義1 講義タイトル 公的な立場での研究職について ～畜産分野の実例と私の経験から～ オヤマ ヒデミ 講師名 小山 秀美 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 畜産研究部門	休憩	講義2 講義タイトル 私の研究者としての歩み ～植物工場の社会実装を目指して～ ショウジ カズヒロ 講師名 庄子 和博 一般財団法人 電力中央研究所	昼食	講義3 講義タイトル 研究者として我々は何をすべきか ～公設試での経験を通して～ タマキ マロ 講師名 玉城 磨 沖縄県農業研究センター 農業システム開発班 減災・復興デザイン教育研究センター	休憩	講義4 講義タイトル されど、空の青さを知る セオカ マナブ 講師名 瀬岡 学 Seoka Aquaculture Consulting
鹿児島大学	鹿児島大学	鹿児島大学（農）	佐賀大学	琉球大学	琉球大学	鹿児島大学（水）		

※ 出発先よりB'lue Jeansで講義

4. 分野別セミナー

平成 24 年度から、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的とした「分野別セミナー」を開催している。令和 5 年度は、1 件の分野別セミナーが開催された。

(1) セミナー名称：応用生命科学専攻 分野別セミナー（農芸化学）

開催日時：令和 6 年 2 月 29 日～令和 6 年 3 月 1 日

会 場：鹿児島大学 農・獣医共通棟 101 講義室

令和 5 年度の分野別セミナー（農芸化学分野）を令和 6 年 2 月 29 日～3 月 1 日の日程で実施した。初日は鹿児島大学農学部において、13 時 35 分からセミナー講演 2 題、ポスター発表 13 題、交流会を実施した。セミナー講師と教員 19 名、学生 17 名の計 36 名の参加があった。セミナーでは、糸状菌・糖鎖・形態分化といったキーワードに基づいて、糸状菌の糖転移酵素の専門家、形態分化の専門家の講演を実施した。各演題は開催案内の通りであり、各分野の専門家による基礎および最先端の研究成果が紹介され、活発な質疑応答がなされた。ポスター発表会では、4 名の連大生の他に 5 名の修士課程学生（連大進学予定者 2 名を含む）と 4 名の学部生から発表があり、活発な質疑応答を通じた研究交流がなされた。2 日目は工場見学を行い、鹿児島県枕崎市の的場水産株式会社と薩摩酒造株式会社・明治蔵を訪問し、それぞれ鰹節と焼酎の製造現場を視察した。

初日のセミナーでは、糸状菌における糖鎖の生合成・局在化機構、および形態分化の制御等に関する基礎ならびに最新の研究成果を 2 名の講師に紹介いただいた。連合農学研究科の各構成大学では微生物や糖鎖に関する研究教育活動が行われており、参加者一同は関連する最先端の情報を得ることができた。また、学生によるポスター発表と交流会を行った。2 日目は工場見学を行い、鰹節と焼酎の製造方法に関する知識を習得した。これらの過程で、参加した学生は講師、教員、学生との交流を深め、また研究に関する議論を行うことができた。

5. 修了生アンケート

例年、修了生を対象としたアンケートを実施している。これは、自己点検・評価の参考とするため、平成 18 年 4 月に、平成 11～17 年度修了者を対象に郵送により実施したのが始まりで、以後は修了時に学生から回答してもらう形を取っており、平成 24 年度からは、Web による入力方式で行っている。

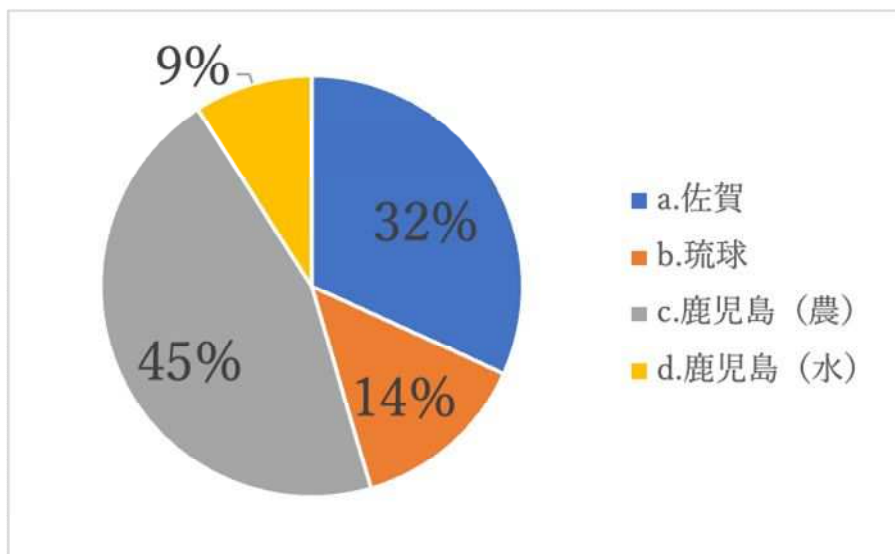
令和 5 年度修了生へのアンケート集計結果

令和 5 年 9 月修了生 5 名中、回答学生 5 名（回答率 100%）

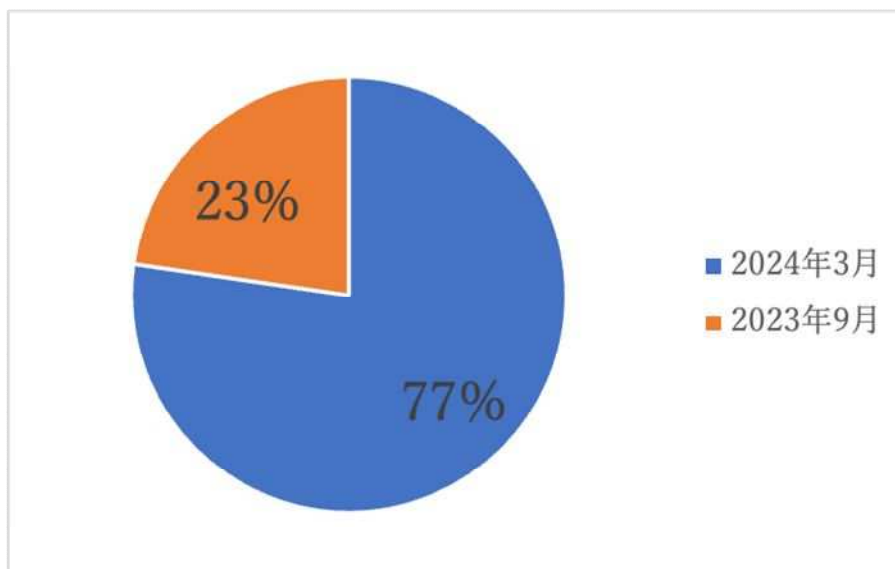
令和 6 年 3 月修了生 18 名中、回答学生 17 名（回答率 94%）

※単位取得退学後の学位取得者を含む

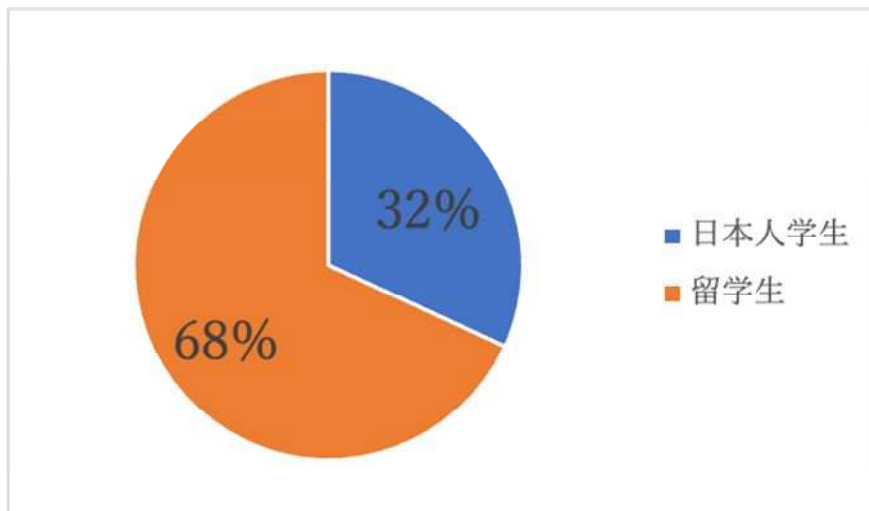
1. 所属構成大学



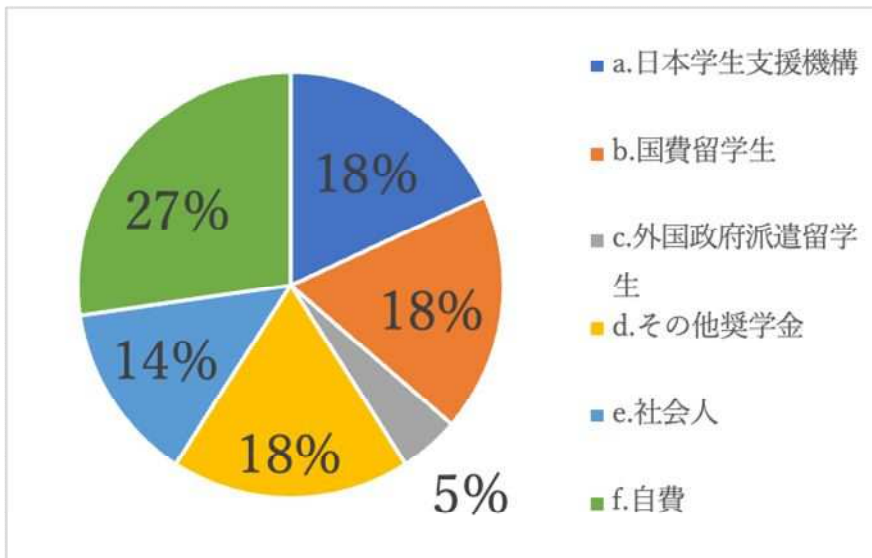
2. 修了年月



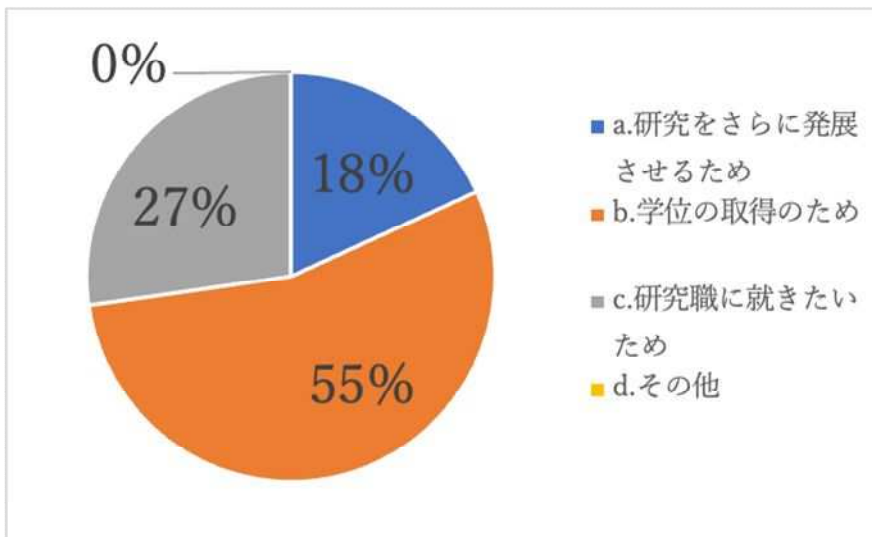
3. 日本人学生あるいは外国人留学生



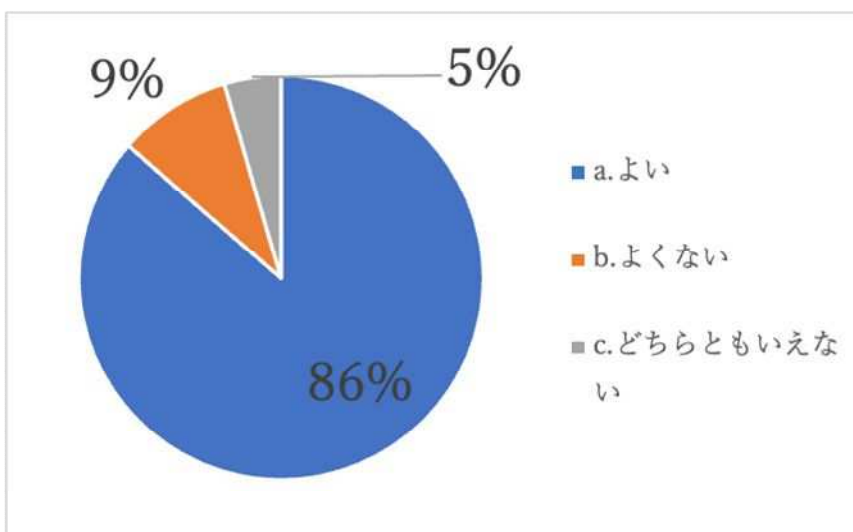
4. 奨学金受給状況



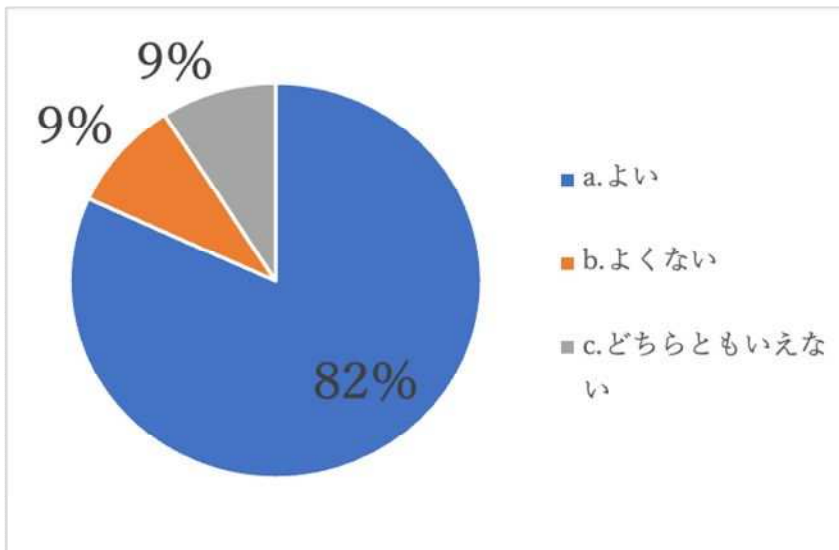
5. 連大への入学目的



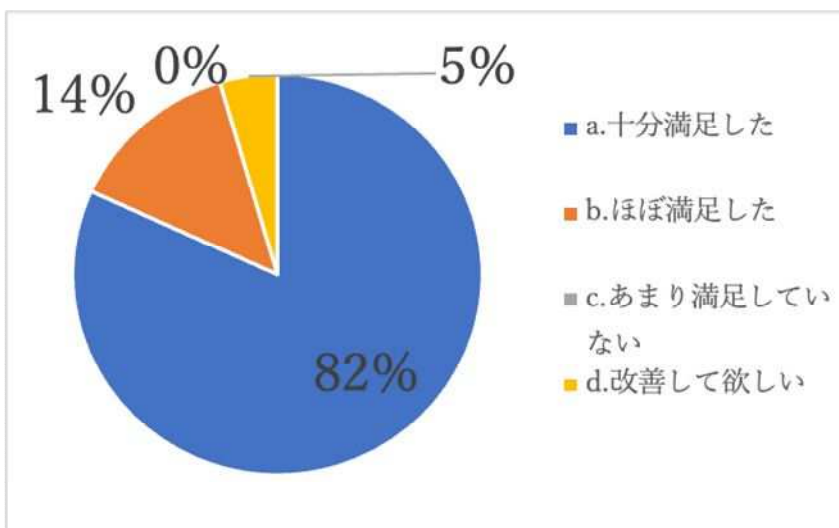
6. 農学特別講義（一般セミナー）の内容・方法について



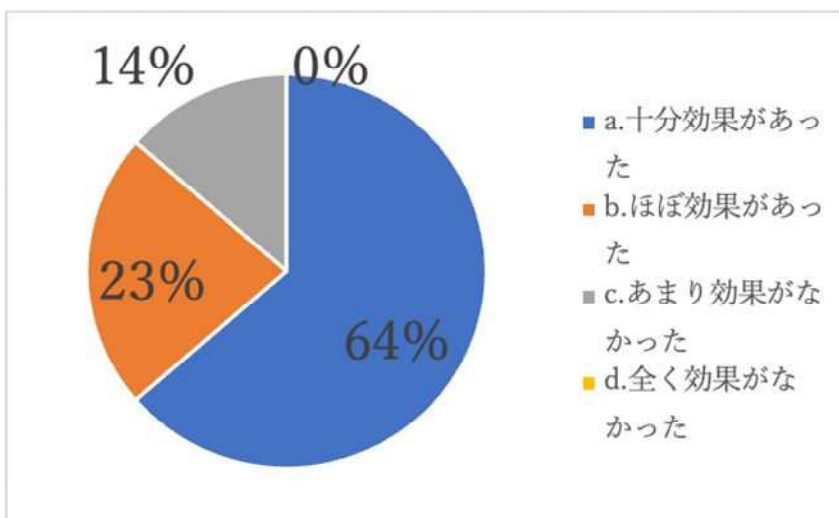
7. 専攻別講義・特論の内容・方法について



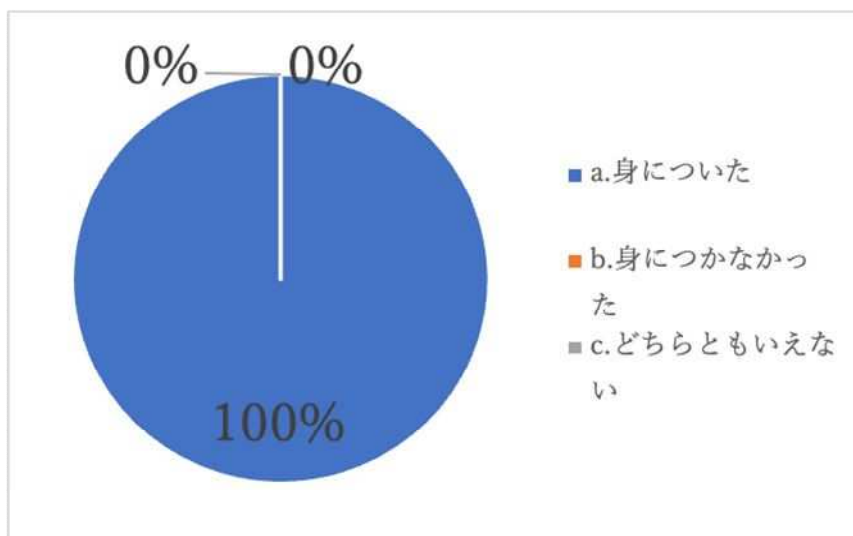
8. 全体的に見て教員の指導に満足しましたか？



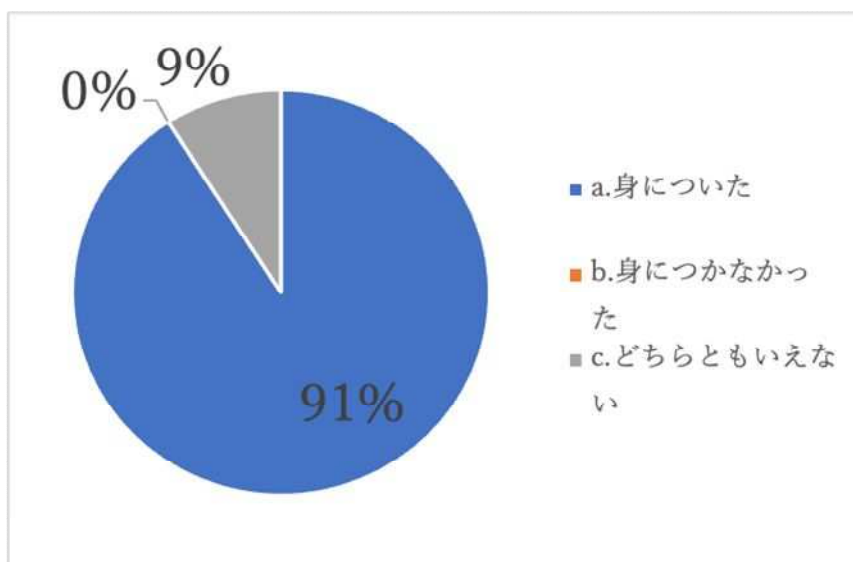
9. 中間発表はあなたの研究を進める上で効果がありましたか？



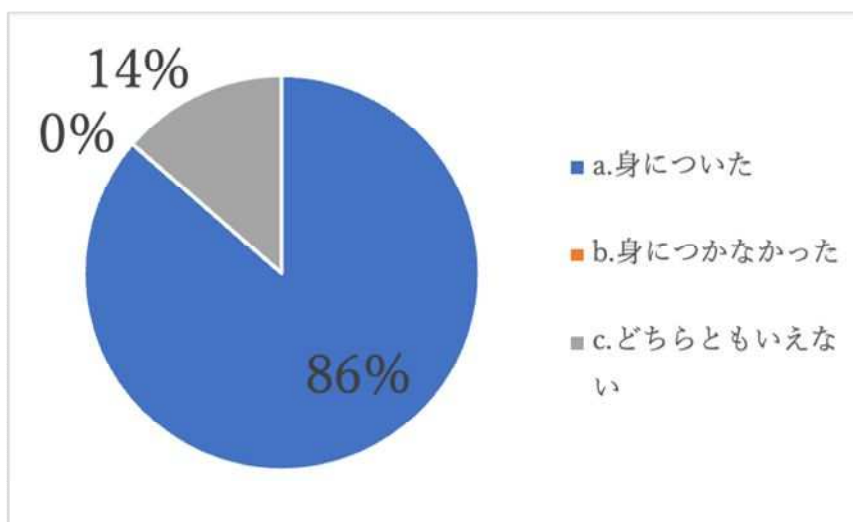
10. 実験又は調査を計画・遂行しデータを正確に解析・考察し、かつ説明する能力が身につきましたか？



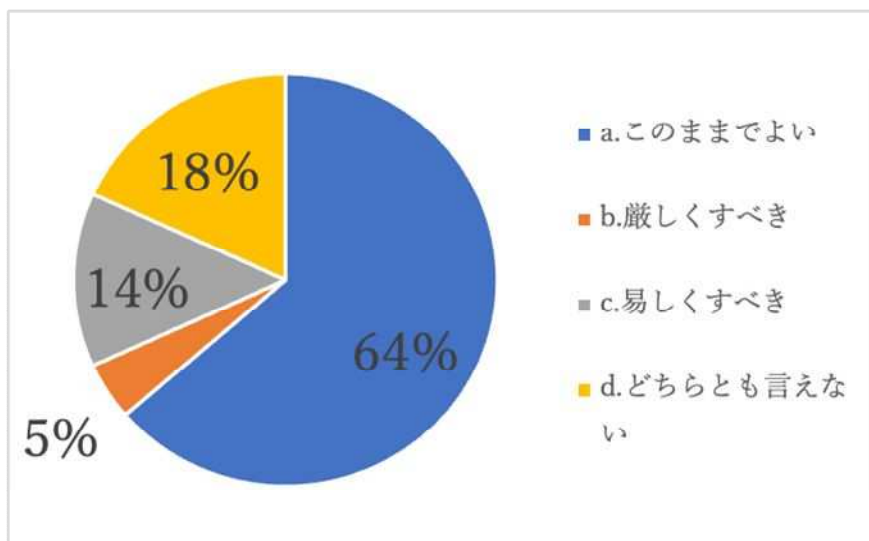
11. 専門的な知識及び技術を駆使して、課題を探究し、解決する能力が身につきましたか？



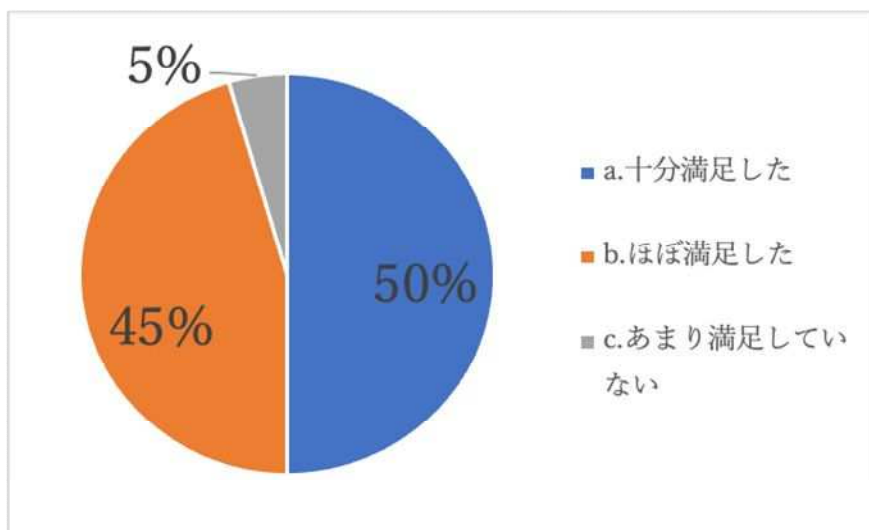
12. 社会の要求に対して様々な情報を収集・分析し、問題点と課題を理解し、適切に対応する能力が身につきましたか？



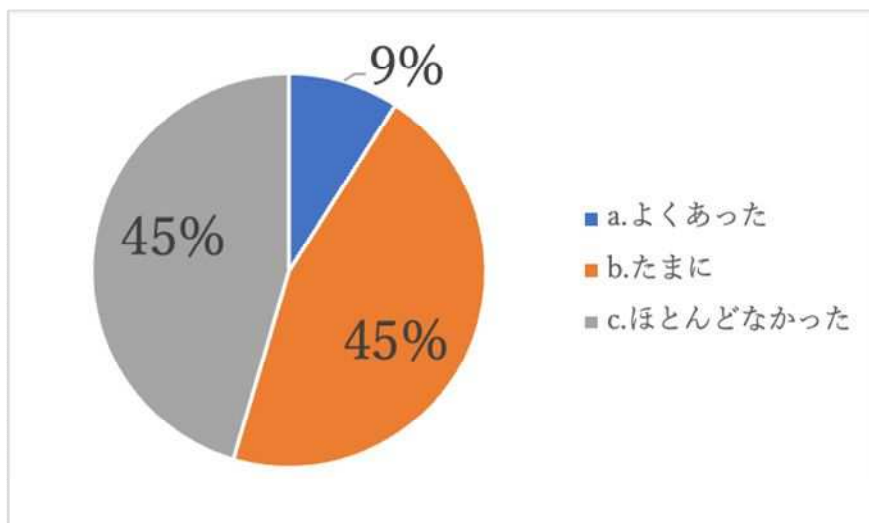
13. 学位申請条件のレフリー付き学会誌2編の要求はこのままでよいでしょうか？



14. あなたの研究成果に満足していますか？また、得られたものがありましたか？



15. 他の構成大学とは情報交換や交流がありましたか？



アンケートの回答率は、令和5年9月修了生が100%、令和5年3月修了生が94%であり、高い回答率を得られた。また、日本人学生と留学生の比率は、それぞれ32%と68%であった。

連合農学研究科への入学の目的は、「学位の取得のため」と「研究をさらに発展させるため」の合計で73%と向学心に基づく回答が多かったが、これに関しては、入学時においてどのような将来像（就職先等）を持っていたかについて興味を持たれた。

連合農学研究科の講義、セミナー、専攻別講義、特論の内容や方法については、肯定的な評価が農学特別講義（一般セミナー）で86%、専攻別講義・特論で82%となっており、満足度が高いと評価できる。また、中間発表は87%の修了生が研究推進上で効果的であったと回答し、全体的に見た教員の指導についても肯定的な評価が96%と高かった。修得した能力では、実験又は調査を計画・遂行しデータを正確に解析・考察しかつ説明する能力、専門的な知識及び技術を駆使して課題を探索し解決する能力、社会の要求に対して様々な情報を収集・分析し問題点と課題を理解し適切に対応する能力について86～100%が肯定的であり、学位授与方針（ディプロマポリシー）に即した学修成果がおおむね得られていると評価できる。一方、構成大学間の学生交流については、「交流があった」と回答した学生が54%と昨年（46%）を上回り、コロナ禍の収束に伴い活動が回復しつつあることが窺えた。

総じて、修了生自身による研究成果の満足度は95%に達し、今後も同水準で維持するために、令和6年度におけるFD活動の一環として反映させるようにしたい。

6. 連大指導教員資格取得者研修会

令和5年12月21日に、連大指導教員資格研修会をZoomで実施した。3大学で構成される本研究科について理解を図るための研修会であり、今年度に連大指導教員資格を取得した全教員が参加した。連大教員としての責務、各種会議、入試、研究費・支援制度、カリキュラム・学位論文等について、研究科長が説明を行った。

7. FD活動参加状況とモニタリング項目について

令和5年度の専任教員のFD活動参加状況は以下のとおりである。

合計参加率		100.0 %（専任教員 1 名中 1 名 参加）
企画別参加率	農学特別講義（一般セミナー）	100.0 %（専任教員 1 名中 1 名 参加）
	連大指導教員資格取得者研修会	100.0 %（専任教員 1 名中 1 名 参加）
備考		
令和6年3月1日付けで専任教員1名着任し、令和5年度末の専任教員数は2名となったが、3月以降に参加可能なFD企画はなかったため、合計参加率上の専任教員は1名として計上している。		

また、モニタリング項目については以下のとおりである。

①卒業（修了）時の学生からの意見聴取の結果により、大学等の目的及び学位授与方針に即した学修成果が得られていることを確認しているか。	令和5年9月修了生及び令和6年3月修了生に「修了生アンケート」を実施し、学生の学修成果に対する認識を把握した。
②授業の内容及び方法の改善を図るためのファカルティ・ディベロップメント（FD）を組織的に実施し、その成果を把握しているか。	3 構成大学の学生が一堂に会する「農学特別講義（一般セミナー）」の学生アンケート結果を基に授業の内容及び方法の改善を図った。

8. おわりに

本報告書では、農学特別講義（一般セミナー）、人材養成学生支援セミナーⅠ、分野別セミナー、修了生アンケート、連大指導教員資格取得者研修会等について取りまとめた。農学特別講義（一般セミナー）は、令和4年度より従来の対面スタイルに戻し、令和5年度も対面で佐賀市内のホテルを会場に実施した。講師の講義を会場で直接聴講する教育効果は高く、学生からは対面方式の実施について高い評価が得られた。

人材育成学生支援セミナーⅠでは、社会で幅広く活躍する学位取得者の方を招聘し、これまでの経験やフィロソフィーに関する講義を行っている。本セミナーは、学生が学位取得後のキャリアパスを考える上で教育効果が高く、豊かな学識を備えた研究者や高度技術者の養成に寄与しており、民間企業も含めた幅広い職種への就職の動機づけとしても有意義である。本セミナーはSINETで3構成大学を中継して実施したが、大きなトラブルもなく予定の内容を終了し、学生からも高い評価を得ることができた。特に、連大で学位を取得した講演者の講義は、受講生が描く将来像と重なる部分も多く、高い共感を得た。

以上、連大のファカルティ・ディベロップメント（FD）活動では、このようなセミナーや研修会、アンケートを通じて教員や学生の意見を吸い上げ、連大として改善できる部分については随時見直しを図っており、教育の質の向上に勤めている。今後もこのような考え方と方向性に沿って、FD活動を行っていく予定である。

令和5年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科FD委員会委員

委員長	寺 田 竜 太	研究科長
委 員	北 原 兼 文	副研究科長
委 員	下 桐 猛	(鹿児島大学)
委 員	高 良 健 作	(琉球大学)
委 員	建 本 秀 樹	(琉球大学)
委 員	中 村 啓 彦	(鹿児島大学)
委 員	弓 削 こ ず え	(佐賀大学)

